

Title	インド伝統医学文献における個体論 - yurvedaにおける r rsth naの研究(Dissertation_全文)
Author(s)	山下, 勤
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1998-03-23
URL	http://dx.doi.org/10.11501/3135233
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	author

インド伝統医学文献における個体論

—Śārīrasthānaの研究—

山下 勤

目次

【序】	1
【第1部】 Carakasamhitā, Śārīrasthāna の研究	3
第1章 Carakasamhitā, Śārīrasthāna の概要と意義	3
1.1 Carakasamhitā について	3
1.2 Carakasamhitā 全巻の構成	6
1.3 Carakasamhitā, Śārīrasthāna の概要	6
1.4 Carakasamhitā, Śārīrasthāna の意義	65
第2章 Carakasamhitā, Śārīrasthāna と Yājñavalkyasmṛti	67
2.1 アートマンの誕生	69
2.2 胎児の月毎の成長と出産	73
2.3 身体各部分の名称と数	83
2.4 アートマンの諸相	90
2.5 Carakasamhitā, Śārīrasthāna と Yājñavalkyasmṛti 3.67-205 について	100
第3章 Śārīrasthāna に見られる解剖学的知識	103
3.1 「身体の数」の章の概要	104
3.2 解剖学的知識の内容	109
3.3 まとめ	127
Carakasamhitā, Śārīrasthāna 和訳	129
第1章	129
第2章	162
第3章	169
第4章	178
第5章	190
第6章	197

第7章	208
第8章	214
【第2部】 Śārīrasthāna の展開	241
第1章 Bhelasamhitā, Śārīrasthāna	241
1.1 Bhelasamhitā について	241
1.2 Bhelasamhitā 全巻の構成	246
1.3 Bhelasamhitā, Śārīrasthāna の概要	247
第2章 Suśrutasamhitā, Śārīrasthāna	252
2.1 Suśrutasamhitā について	252
2.2 Suśrutasamhitā 全巻の構成	253
2.3 Suśrutasamhitā, Śārīrasthāna の概要	254
第3章 Aṣṭāṅgahr̥dayasamhitā, Śārīrasthāna	262
3.1 Aṣṭāṅgahr̥dayasamhitā について	262
3.2 Aṣṭāṅgahr̥dayasamhitā 全巻の構成	263
3.3 Aṣṭāṅgahr̥dayasamhitā, Śārīrasthāna の概要	263
第4章 Aṣṭāṅgasamgraha, Śārīrasthāna	269
4.1 Aṣṭāṅgasamgraha について	269
4.2 Aṣṭāṅgasamgraha 全巻の構成	269
4.3 Aṣṭāṅgasamgraha, Śārīrasthāna の概要	270
第5章 Kāśyapasamhitā, Śārīrasthāna	276
5.1 Kāśyapasamhitā について	276
5.2 Kāśyapasamhitā 全巻の構成	276
5.3 Kāśyapasamhitā, Śārīrasthāna の概要	277
第6章 Śārīrasthāna の変遷について	279
【参考文献】	281

略号

AHS: Aṣṭāṅgahr̥dayasamhitā
AP: Agnipurāṇa
AS: Aṣṭāṅgasamgraha
BhG: Bhagavadgītā
BhS: Bhelasamhitā
Ci: Cikitsāsthāna または Cikitsitasthāna
GP: Garuḍapurāṇa
In: Indriyasthāna
Ka: Kalpasthāna
KS: Kāśyapasamhitā
ManS: Manusmṛti
Ni: Nidānasthāna
NyāS: Nyāyasūtra
PDhS ¹ : Padārthadharmasamgraha (Praśastapādabhāṣya)
PP: Padmapurāṇa
Śā: Śārīrasthāna
S.H.T.: Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden
Si: Siddhisthāna
SS: Suśrutasamhitā
Sū: Sūtrasthāna
U: Uttarasthāna
Ut: Uttarat Tantra

¹本論文で、PDhSについて記す際には、PDhS *Ātmaprakaraṇa* (D.ed.pp.69-70.) というように、Bronkhorst & Ramseier 1994 による *prakaraṇa* 名と Vindhyesvari Prasad Dvivedin 版のページとを併記する。

VDhP: Viṣṇudharmottarapurāṇa

Vi: Vimānasthāna

VS: Vaiśeṣikasūtra

YājñS: Yājñavalkyasmṛti

YogS: Yogasūtra

【序】

アーユルヴェーダ (*Āyurveda*) と総称されるインド伝統医学の代表的な古典『チャラカ・サンヒター』 (*Carakasamhitā*) (CS) は、アーユルヴェーダの「身体治療」 (*Kāyacikitsā*) と呼ばれる内科的な部門に、特に重きを置く医学書である。CS は、全8巻120章からなるが、このうちの第4巻「シャーリーラスターナ」 (*Śārīrasthāna*) (Śā) では、人間の身体構造についての解剖学的な記述や、人の誕生・成長についての胎生学的な解説など、医学に関係する内容の論述だけではなく、アートマンについての哲学的な論議や、人間と世界との関係について、人間を形成する様々な要素・要因について、死について、さらには輪廻と解脱についてなど、人間存在に関する多面的な内容の教説が展開されている。

本論文は、このようなŚāの内容を考察することを通して、アーユルヴェーダの人間観を理解しようとする試みである。

本論文の第1部第1章では、まずCSの成立過程とその成立年代に関して、今日までに明らかにされた事実を紹介し、CSの全巻の構成を概観したあと、第4巻Śā全8章の内容を分析し、CS Śāの意義を考察する。

第1部第2章では、CS Śāの内容が、古代インドの法典『ヤージュニャヴァルキヤ・スムリティ』 (*Yājñavalkyasmṛti*) (YājñS) の一部に、かなり忠実に取り入れられていることを指摘し、CSの人間観がアーユルヴェーダ以外の領域に与えた影響の一例と見なし得ることを明らかにする。

第1部第3章では、Śāに見られる人間の身体構造についての記述を通して、アーユルヴェーダの解剖学的知識の内容を考察する。ここではCSと並んでアーユルヴェーダの重要な古典医学書であり、外科的な治療に重きを置く『スシュルタ・サンヒター』 (*Suśrutasaṃhitā*) (SS) の解剖学的な記述とCSのそれとを比較することによって、両文献の解剖学的領域での特徴を明

らかにする。第1部には、CS Śā全8章の和訳を付する。

本論文第2部では、CS以外の5つの古典的なアーユルヴェーダ文献に含まれる、Śāの内容を概観し、比較することによって、CS Śāに見られた人間（個体）論としてのŚāの内容の変遷を明らかにする。

【第1部】 Carakasamhitā, Śārīrasthāna の研究

第1章 Carakasamhitā, Śārīrasthāna の概要と意義

1.1 Carakasamhitā について

CSの冒頭の部分には、アーユルヴェーダ(*āyurveda*)の起源に関する神話的な記述がある。それは概ね次のような内容である。

アーユルヴェーダは、最初にブラフマー神によって語られ、プラジャーパティ神、アシュヴィン双神を経てインドラ神がこれを継承した。その後、さまざまな病がこの世に現われたとき、その鎮静のために諸聖仙を代表して、バラドヴァージャ(Bharadvāja)が、インドラ神のもとに赴いて教えを請い、アーユルヴェーダの教えの全てを会得した。バラドヴァージャは、この教えを持ち帰り、聖仙たちに伝えた。これらの聖仙たちのひとり、プナルヴァス アートレーヤ(Punarvasu Ātreya)は、彼の6名の弟子、すなわちアグニヴェーシャ(Agniveśa)、ベーラ(BhelaまたはBheda)、ジャトウーカルナ(Jatūkarna)、パラーシャラ(Parāśara)、ハーリータ(Hārīta)にアーユルヴェーダの教えを授けた。この6名の弟子のうち、最初にアグニヴェーシャが、師の教えを論書にまとめ、後に他の5名もそれぞれ論書を編纂した(CS Sū 1.4-33)。

この記述のなかのアグニヴェーシャが編纂した論書、すなわち *Agniveśatantra*¹が、CSの原型となるものである。これをもとにして、後に幾度か改編の手が加えられて、最終的に現存するような形のCSが成立することになる。

この *Agniveśatantra*の改編を行った人物としては、少なくともチャラカ(Caraka)とドリダバラ(Dṛḍhabala)という2人の名前が知られている。最初に改編を手掛けたのはチャラカである。

¹ *Agniveśatantra* という名称の文献は現存しない。

しかしおそらくは彼の死によって²、現存のCSの第6巻の途中までで、その改編作業は中断する。そして、その後を継いでCS全巻の改編を行い、CSをほぼ現在見られるようなものとして完成させたのがドリダバラという人物である³。

改編者チャラカ (Caraka) については、CSが彼の名前を冠する文献であるにもかかわらず、現存のCSの中ではその人物について、具体的には何も言及されていない。したがって、チャラカの生存年代、地方に関しては不明であり、Carakaという名が、実在の個人名であったかどうかさえ明かではない⁴。M.Sylvain Lévi は、サンスクリット原典の失われた2種の漢訳仏典、『雜寶藏經』巻第七（大正大蔵経第4巻、p.484）(A.D.472年頃漢訳)および『付法藏因縁傳』巻第五（大正大蔵経第50巻、p.316）(A.D.6世紀頃か)の記述中に見られるカニシカ (Kaniṣka) 王の侍医であるとされる「遮羅迦」または「遮勒」がCSに関わるチャラカであろうと推定した⁵。しかしこれについても、カニシカ王の侍医とCSの改編者とを結び付ける他の有力な史料は今のところ得られてはおらず、漢訳仏典の記述だけでは論拠に乏しいと言わざるを得ない⁶。

ドリダバラ (Dṛḍhabala) という人物については、CS Ci 30.289,290; CS Si 12.36cd-40abにか

²cf. Hoernle 1907 p.2.

³このような事情は、CS各章末の奥書によって明らかとなる。例えばCS Sū 第1章の奥書は、*ity agniveśakṛte tantre carakapratisaṃskṛte sūtrasthāne dīrghaṇḍivitiyo nāma prathamō 'dhyāyaḥ*. とあり、CS Ci 第9章の奥書は、*ity agniveśakṛte tantre carakapratisaṃskṛte 'prāpte dṛḍhabalapūrite cikitsāsthāne unmādacikitsitaṃ nāma navamo 'dhyāyaḥ*. となっている。

⁴Surendranath Dasgupta は、Carakaという名は、文字通りには‘wanderer’であり、各地を巡回する開業医としての職業に関連したものかも知れないとしている (Dasgupta 1922 II p.284)。Jean Filliozat は、ブラーフマナ文献などに現われる *Caraka-śākhā*との関係を重視している (Filliozat 1949 pp.15-17)。

8世紀の中観派のŚāntarakṣita は、認識手段 (*pramāṇa*) についての論議のなかで (*Tattvasaṃgraha* 1692ab)、‘Carakamuni’の説に言及している。それによると、‘Carakamuni’は、認識手段は、*pratyakṣa, anumāna, āgama*の3種だけではなく、これに第4のものとして道理 (*vyukti*) をも含めるとしている。これを裏付ける記述がCS Sū 11.17に見られることから、ここで言われる‘Carakamuni’とはCSの改編者としてのCarakaを示すものと考えられる。cf. Filliozat 1990 pp.38-45.

⁵Lévi 1896. cf. Takakusu 1896 p.lix.

⁶チャラカとカニシカ王の直接の関係を示すものではないが、本論文でも触れるように、カニシカ王と近い関係にあったとされるAśvaghoṣaの *Buddhacarita* (BC) 第12章とCS Śā 第5章の内容に親近性が認められること、またBC 1.43cdに *cikitsitaṃ yac ca cakāra nātrīḥ paścāt tad ātreya ṛṣir jagād*. 「また、アトリのなしとげなかった医学を、聖仙アートレーヤがのちに唱え（て世にひろめ）たのであります。」（原実訳）という表現があることには留意されるべきであろう。

なり詳しい記述が見られる。その内容は概ね次の通りである。

Dṛḍhabalaは、Kapilabalaの息子であり⁷、Pañcanadapura⁸で生まれた。彼は他の多くの論書の内容を取り入れて⁹、CSの第6巻 *Cikitsāsthāna*のうちの17の章と第7巻 *Siddhisthāna*および第8巻 *Kalpasthāna*とを完成させた。

ドリダバラが、CS第6巻Ciの約半分と、第7巻Siおよび第8巻Kaを完成させたことはそれぞれの巻の奥書によっても明らかである。しかし、実際にはドリダバラは、これらの部分だけを改編したのではなく、おそらくはCSの全巻にわたって、かなりの程度手を入れたものと推測される。このことは、CSでは、別の巻で説明された事柄を再び取り上げる際には、それがどの部分であらかじめ述べられたかを正確に指示している場合が多いこと、また、CS第1巻には、CS全巻全章の構成と内容の概略が記載されている (CS Sū 30.33-68) が、それは現存のCSの構成、内容と完全に一致することからも明らかである。

ドリダバラの生存年代についてはあまり明確ではないが、他の文献との引用関係から、G.Jan Meulenbeld は、A.D.500年頃あるいはそれよりもやや古い頃と推定した¹⁰。ドリダバラがCSの最終的な改編者であるとすれば、現存のCSもその頃に完成したものということになる。

⁷ここで彼の父とされているカピラバラ (Kapilabala) については、CSの注釈者であるCakrapāṇidatta (A.D.11世紀)(CP) が、CS Sū 7.45-50への注釈のなかでその著作を引用していることから、この人物もアーユルヴェーダの権威者の1人であったことを伺わせるが、その著作そのものは現存せず、カピラバラ自身についてもその生存年代等は不明である。

⁸Pañcanadapuraの所在については、Pañjab説とKaśmīr説がある。Pañjab説: Jolly 1901 p.11-12, Dutt 1922 p.ix.; Kaśmīr説: Hoernle 1907 p.2-3, Renou et Filliozat 1953 p.150.

⁹ドリダバラがCSの改編に際して取り入れたとされる他の論書について、CPは、CS Si 12.39cdへの注釈のなかで、これらの論書はSuśruta, Videhaなどであるとしている。

¹⁰G.Jan Meulenbeldの主な論拠は次の通り。

A.D.700年頃のMādhavakara (*Mādhavanidāna*の作者)は、DṛḍhabalaによるCSの改編部分の内容を知っていたこと、CSのA.D.600年頃の注釈者Jejjaṭaは、Dṛḍhabalaによる改編部分からの引用を行っていること、Dṛḍhabalaは、CSの注釈者Āṣāḍhavarman (Jejjaṭa以前の人)よりも以前の人であること、A.D.600年頃に成立したと見られる医学書 *Aṣṭāṅgaḥṛdayasaṃhitā*にDṛḍhabalaによる改編部分からの引用が見られることなど。Meulenbeld 1974 p.411.

1.2 Carakasamhitā 全巻の構成

CS は、次の全8巻120章からなる。

第1巻 *Sūtrasthāna*¹¹ 全30章

第2巻 *Nidānasthāna* 全8章

第3巻 *Vimānasthāna* 全8章

第4巻 *Śārīrasthāna* 全8章

第5巻 *Indriyasthāna* 全12章

第6巻 *Cikitsāsthāna* 全30章

第7巻 *Kalpasthāna* 全12章

第8巻 *Siddhisthāna* 全12章

このうち第1～5巻では、アーユルヴェーダの基礎的な理論、診断法、病気の分類、治療法の分類など、いわゆる基礎医学的なテーマが扱われ、第6～8巻では、病理、治療の実際、薬物の調合とその適用など、いわゆる臨床医学的なテーマが中心となっている。CS Sū 30.28 では、アーユルヴェーダには次の8つの部門 (*aṅga*) があると言われる。1. 身体治療 (*kāyacikitsā*) 2. 特殊外科 (*śālākya*) 3. 異物除去法 (*śalyāpahartṛka*) 4. 毒物・体毒・誤った食べ合わせの鎮静法 (*viṣa-gara-vairodhika-praśamana*) 5. 鬼神学 (*bhūtavidyā*) 6. 小児科 (*kaumārabhr̥tya*) 7. 不老長生法 (*rasāyana*) 8. 強精法 (*vājīkaraṇa*)。CS は、このうちの内科的な部門である1. 身体治療 (*kāyacikitsā*) に重きを置いた医学書である。

1.3 Carakasamhitā, Śārīrasthāna の概要

CS 第4巻Śā は、次の全8章からなる。

第1章 「プルシャはいくつの部分に」 (*katidhāpuruṣīya*) [という言葉で始まる] 章

第2章 「異なった親族の」 (*atulyagotrīya*) [という言葉で始まる] 章

¹¹ *Sūtrasthāna* については、CS の本文中では *Ślokasthāna* とも言われる。また、これらの巻が、*-sthāna* と呼ばれることについては、「[そこにおいて] 内容を確立することから、スターナである。」 (*sthānam arthapratīṣṭhayā*.) (CS Sū 30.70b) とされている。各巻を *-sthāna* とするのは、アーユルヴェーダおよびその関連文献 (例えば *Aśvāyurveda* など) に特有のものであろう。

第3章 「胎児の降下」 [についての] 小さい (*khuḍḍikā garbhāvakrānti*) 章

第4章 「胎児の降下」 [についての] 大きい (*mahatī garbhāvakrānti*) 章

第5章 「人間の考察」 (*puruṣavicaya*) の章

第6章 「身体 of 考察」 (*śarīravicaya*) の章

第7章 「身体の数」 (*śarīrasaṃkhyā*) の章

第8章 「誕生 of スートラの」 (*jātisūtrīya*) 章

CS Śā 全8章の論題は、人間の発生・誕生・成長に関するもの、人間の身体構造に関するもの、人間の精神に関するもの、人間と世界との関係に関するもの、輪廻と解脱に関するものなど多岐にわたっているが、各章はそれぞれに完結した内容をもつものである。以下、各章の構成と内容を概観する。

1.3.1 Carakasamhitā, Śārīrasthāna 第1章

CS Śā 第1章は、156の韻文からなる。この章は、アグニヴェーシャの23の質問 (第3-14節) に、彼のアーユルヴェーダの師匠であるアートレーヤが1つずつ答える (第15-155節) という形式をとっている。ただし、この章での問いとその答えの内容は、必ずしもうまく対応しているとはばかりは言えず、なかにはアートレーヤが、アグニヴェーシャの質問の範囲を逸脱して回答している例も見られる。

以下にその概略を示す。最初の数字は節の番号である。なお、ここでは便宜上、アグニヴェーシャの問いに、順に番号を付する。

CS Śā 第1章 (全156節)

「プルシャはいくつの部分に」 (*katidhāpuruṣīya*) [という言葉で始まる] 章
1-2 序

3-14 アグニヴェーシャの23の問い

3ab 問1 プルシャはいくつの部分に分けられるのか

3c 問2 プルシャはどうして原因 (*kāraṇa*) か

3d 問3 プルシャの起源 (*prabhava*) は何か

4a 問4 プルシャは知る主体でないもの (*ajñā*) か

4a 問5 プルシャは知る主体 (*jñā*) か

8		第1部第1章	Carakasamhitā, Śārīrasthānaの概要と意義	9
	4a 問6 プルシャは恒常 (<i>nitya</i>) か		39-41 プルシャが原因である理由	
	4b 問7 プルシャは恒常でない (<i>anitya</i>) のか		42 アートマンが原因である理由	
	4c 問8 質料因 (<i>prakṛti</i>) とは何か		43-44c 原因（行為者）がなくてもよいとする反論の紹介	
	4c 問9 派生物 (<i>vikāra</i>) とは何か		44c-45 論駁	
	4d 問10 プルシャの徴表 (<i>liṅga</i>) は何か		46-48 刹那滅論、無我論（仏教?）の紹介	
	5 アートマンの別称の列挙		49-52 論駁、結論	
	6ab 問11 アートマン=活動しないもの (<i>niṣkriya</i>) についての疑い		53 <u>問3の答え</u> : （最高のアートマン (<i>paramātmān</i>) の）起源は存在しない	
	6cd 問12 アートマン=独立したもの (<i>svatantra</i>) についての疑い		54-58 <u>問4,5の答</u>	
	7ab 問13 アートマン=自らを支配するもの (<i>vaśin</i>) についての疑い		54 アートマンは知る主体である。アートマンと行為手段の結合から認識が現れる	
	7cd 問14 アートマン=遍在するもの (<i>sarvagata</i>) についての疑い		55 曇った鏡の比喻	
	8ab 問15 アートマン=自在なもの (<i>vibhu</i>) についての疑い		56 行為手段、行為について	
	8cd-9 問16 アートマン=土地を知るもの (<i>kṣetrajña</i>) についての疑い		57-58 すべてのものは結合によって活動する	
	10ab 問17 アートマン=証人 (<i>sākṣin</i>) についての疑い		59-60 <u>問6,7の答</u> : プルシャは恒常である	
	10cd 問18 感覚に基づく特殊性について		61-69 <u>問8,9の答</u> : 未開展のもの（質料因）と開展したもの（派生物）の説明	
	11-12 問19 医師は過去・現在・未来の3つの苦痛のどれを癒すのか		61 アートマンは未開展のもの、これとは異なったものが開展したもの	
	13a 問20 苦痛の原因は何か		62 開展したものは感覚器官によって捉えられる。未開展のものは感覚器官を越えたもの	
	13b 問21 苦痛の拠り所は何か		63 8の質料因	
	13cd 問22 苦痛はどこで完全に消滅するのか		64 16の派生物	
	14 問23 個体のアートマン (<i>bhūtātman</i>) はどのような徴表によって知覚されるのか		65 「土地」とは開展したもの、「土地を知るもの」とは未開展のもの（ <u>問16に関連</u> ）	
15	以下はアグニヴェーシャの問いに対するプナルヴァス アートレーヤの答		66 開展の順序: 未開展→理性→自我意識→空など	
	16-38 <u>問1の答</u>		67 プルシャの出生と滅	
	16ab 6要素からなるプルシャ		68 未開展⇄開展、激質と翳質により輪のように回転	
	16cd 1要素 (<i>cetanādhātu</i>) だけのプルシャ		69 生起と消滅	
	17 24種のものからなるプルシャ		70-74 <u>問10の答</u> : アートマンの徴表	
	18-35 24種のものについての説明		70-72 最高のアートマンの徴表の列挙	
	18-24 思考器官（マナス）、理性について		73 これらの徴表は生きている者にのみ認められる	
	25-26 感覚器官、行為器官について			
	27-31 5大元素とその性質、徴表について			
	32-34 理性について			
	35 この24種のものから成る集合体は、プルシャと呼ばれる			
	36-38 プルシャに関して知るべきこと			
	39-52 <u>問2の答</u>			

- 74 アートマンの去った身体は「空き家」
- 75-76 問11の答: アートマンは行為者である
- 77 問12の答: アートマンを操るものは他には存在しない cf.81cd
- 78 問13の答: 自らを支配するものについて
- 79-80ab 問14の答: 遍在のものについて
- 80-81 問15の答
- 80 アートマンには自在力がある。思考器官の集中について (問14の答と共通)
- 81 あらゆる母胎にあるもの
- 82 問16の答: 「土地」と「土地を知るもの」について cf.65
- 83 問17の答: アートマンはすべての存在の証人である
- 84-85 問18の答: 感覚に基づく特殊性について (問23に関連)
- 86-97 問19の答
- 86 医師は、3つの時の苦痛すべてを治療する。その道理 (*yukti*) について
- 87-90 現在の苦痛と過去の苦痛、その治療について
- 91-92 未来の苦痛とその治療について
- 93 [身体諸要素の] 均衡・不均衡について
- 94 最終的な治療は欲望をなくすこと
- 95-97 欲望について
- 98-135 問20の答 苦痛の原因について
- 98 苦の原因の列举
- 99 理性の停止
- 100 堅固さの停止
- 101 真実の認識に対する記憶の停止
- 102ab 思考 (理性)・堅固さ・記憶の停止した者は、よくない行いをなす
- 102cd-109 病気の原因: 「知恵の過ち」 列举
- 110-115 病気の原因: 時間 [の経過] について
- 116-117 病気の原因: 前生の行いについて
- 118-131 病気の原因: 感覚器官と対象の3種 (過誤・過少・過剰) の結合について、
安楽の原因: 均衡のとれた結合について

- 132-135 楽・苦の知覚の原因について
- 136 問21の答 苦痛 (知覚) の拠り所について
- 137-154 問22の答 苦痛の消滅: ヨーガと解脱について
- 137 ヨーガ→解脱→知覚の消失
- 138-139 ヨーガについて
- 140-141 ヨーガ行者の8種の超自然的な力について
- 142-154 解脱について
- 142 解脱の意味
- 143-150 解脱のための行いと真理についての記憶について
- 151 ヨーガの道と解脱の道
- 152-154 「これは私のものではない」、知覚の停止、解脱
- 155 問23の答
- 155abcd プラフマンとなった個体のアートマンのしるし (*cihna*) は存在しない cf.84
- 155ef プラフマンについて
- 156 まとめの詩節

アグニヴェーシャの23の質問の内容を大別すると、1. プルシャに関するもの (問1-10)、2. アートマンに関するもの (問11-18, 問23)、3. 苦痛 (*vedanā*) に関するもの (問19-22) の3種となる。しかし、後述するように、この章ではプルシャとアートマンという語の区別は明確ではなく、しばしば同義のものとして用いられている。また苦痛に関しての問答についても、実際には苦痛そのものよりも、苦痛を感受する人間 (アートマン) とその解脱が中心的なテーマとなっている。以下各問いとその回答を対応させながらこの章の内容を見ていくことにする。() 内の数字は節番号である。

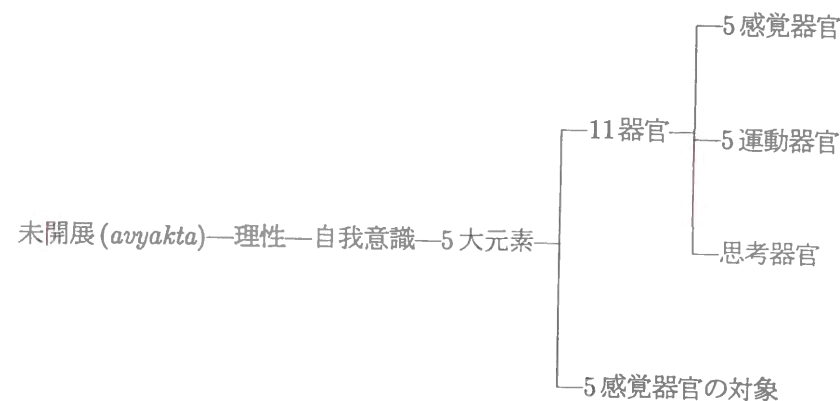
〈問1〉「プルシャはいくつの部分に、要素の区分 (*dhātubheda*) によって分けられるのか?」 (3ab)

この問いに対しては3種の説が示される。6要素 (地, 水, 火, 風, 空, *cetanā*) 説、1要素 (*cetanā-dhātu*) 説、そして24要素説である。CS Śā の他の章やCS Sū でも示されている通り¹²、アーユルヴェーダ本来の立場は、5大元素から派生するものとしての身体と、精神性 (*cetanā*) とを

¹²CS Sū 11.12, 23, 32; CS Śā 4.6; 5.7, 8.

同列のものとして扱う6要素説であると見られるが、本章では、特に24要素説について、アグニヴェーシャの他の質問、すなわち問8,9「質料因(*prakṛti*)、派生物(*vikāra*)とは何か」、および問16「アートマンすなわち土地を知るもの(*kṣetrajña*)についての疑い」への回答のなかでも詳細に説明が繰り返されている。したがって、少なくともこの章においては、この24要素説が、CSの人間観の基本となる原理であると見てよいであろう。

CSの24要素説は、語の用法などの点から見て、明らかにサーンキヤ哲学的な色彩の濃いものではあるが、古典サーンキヤ学派のいわゆる「2元25諦」説とは、重要な点において、大きな違いが認められる。CSの24要素説を図¹³に示すと次のようになる。



これらの要素のうち、*avyakta*から5大元素までは質料因(*prakṛti*)であり、11器官と5つの感覚器官の対象は、派生物(*vikāra*)であり、*avyakta*から順次、他の要素が展開していくとされている。しかし、「唯」「素粒子」(*tanmātra*)は挙げられていない。またここにはサーンキヤ学派の「物質原理」「原質」としての*prakṛti*が欠けている。さらにより重要なことは、「アートマンは未展開のものである」(61)とされている点である。すなわち、個体としての人間は、その人の存在の核とも言い得るような根源的な未展開の状態にあるアートマンから派生してくるものとされているのである。ここで言われる未展開のアートマンも、サーンキヤ学派の「精神原理」とは異なり、後に見るように、やがて個々の人間の認識と行為の主体となり得るアートマンである。またさらに、「なぜなら、この24のものからなる集合体は、プルシャと呼ばれるものであるか

らである。」(*caturviṃśatiko hy eṣa rāśiḥ puruṣasamjñakaḥ*)(35cd)と言われるように、ここで展開されている24要素説は、第65,82節で「土地を知るもの」(*kṣetrajña*)と「土地」(*kṣetra*)という2元の区別を説きはするものの、精神的な要素と身体的な要素とを区別することなく、個体としての人間存在を1元論的に理解しようとすることを目指したものであるとすることができよう。

CSは前述の通り、そのテキストの原型となった部分は、かなり古い時代のものであり、そこには古い段階の哲学説が保存されている可能性も否定できない、しかしそれはあくまでも6世紀頃の改編者によって選択され、おそらくある程度の変更を経た上で保存された説であるという点に留意すべきである。

〈問2〉「プルシャはどうして原因(*kāraṇa*)か?」(3c)

この問いに対しては、プルシャが人間の存在、行為とその果報の享受、および解脱の原因であることを、おそらくは仏教のものと考えられる刹那滅論、無我論に論駁するかたちで論証している(39-52)。

〈問3〉「プルシャの起源(*prabhava*)は何か?」(3d)

この問いの答え(53)では「最高のアートマン」(*paramātman*)と「プルシャ」という語が使い分けられている。その答えによると、「最高のアートマン」は始まりのないもの(*anādi*)であり、起源は存在しないが、[24要素の]集合体(*rāśi*)としてのプルシャは、迷妄・欲望・嫌悪・行為(あるいは迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為)から生じるもの(*moheccādvēṣakarmaja*)であるとされる。「最高のアートマン」については本章の他の節でも触れられており、アートマンにはいくつかの段階が想定されていたことを伺わせるが、この章ではあまり明確には説明されていない。

〈問4,5〉「プルシャは知る主体(*jñā*)か?」(4a)

アートマンと器官(*karaṇa*)との結合から、アートマンに認識、知覚が生じる。このことから、アートマンは知る主体であるとされる(54-58)。プルシャについての問いであるが、回答では、アートマン、および個体のアートマン(あるいは元素のアートマン)(*bhūtātman*)(57)が問題

¹³服部 1979 p.199の図、および高木 1991 p.124の図を参考にした。

にされている。

〈問6,7〉「プルシャは恒常(*nitya*)か?」(4ab)

始まりのない(*anādi*)、原因のないもの(*akāraṇavat*)であるプルシャは恒常のものとされる(59-60)。

〈問8,9〉「質料因(*prakṛti*)、派生物(*vikāra*)とは何か?」(4c)

これに対する回答では、先に触れた24要素説が詳説される(61-69)。

〈問10〉「プルシャの徴表(*liṅga*)は何か?」(4d)

この問いに対しては、呼気吸気(*prāṇāpāna*)、まばたき(*nimeṣa*)など VS 3.2.4 に見られるものにほぼ共通のアートマンの徴表を列挙する(70-72)。そしてこれらの徴表は、生きている者にのみ認められるものであると述べる(73)。ここでも、問いではプルシャと言うが、回答ではアートマン、あるいは最高のアートマン(*paramātmān*)としている。また、次の問11以降の問いでは主語が、アートマンに変わっている。

このあとの第5節では、

「アートマンを知る人々は、アートマンを活動しないもの、独立のもの、自らを支配するもの、遍在するもの、自在なもの、土地を知るもの、また証人であると言う。」¹⁴

として、アートマンの7つの別称を示し、以降これら個々のアートマンの別称についての質問が続く。

〈問11〉「その活動しないもの(*niṣkriya*)の活動はどうして存在するのか?」(6ab)

この問いに対する回答(75,76)では、思考器官(*manas*)には精神性(*cetanā*)はないが、活動を有する。一方、アートマンは精神性をもち、活動しないものではあるが、思考器官と結び付くことによって活動し、「行為者」(*karṭṛ*)と言われる、とされている¹⁵。

〈問12〉「[アートマンが] 独立のもの(*svatantra*)であるとするならば、どうして望ましくな

¹⁴CS Śā 1.5: *niṣkriyaṃ ca svatantraṃ ca vaśinaṃ sarvagatam vibhum /*

vadanty ātmānam ātmajñāḥ kṣetrajñāṃ sākṣinaṃ tathā //

¹⁵ ヴァイシュエシカ学派では(解脱していない状態の)アートマンは行為者であるとし、サーンキヤ学派ではアートマンは行為者ではないとしている。cf. PDhS *Ātmaprakaraṇa* (D.ed.pp.69-70.); SK 19-20. cf. Comba 1987 p.52.

い母胎(*aniṣṭa yoni*)に生まれるのか?」(6cd)

自在(あるいは遍在)(*vibhu*)であるアートマンは、ひとつの母胎に位置していても、あらゆる母胎において生まれることのできるものであり(81cd)、そして、独立のものであるから、自分で自分をあらゆる母胎に〔導くように〕生氣(*prāṇa*)によって操作する(77)、とされる。

〈問13〉「アートマンが自らを支配するもの(*vaśin*)であるならば、何によって快くない状態(*asukha bhāva*)に力づくで捕らわれるのか?」(7ab) この問いについては第78節で次のように回答される。

「自らを支配するものは、それを行って果報を得るところのその行いを為す。自らを支配するものは、精神を集中する。自らを支配するものはすべてを斥ける。」¹⁶

〈問14〉「アートマンは、遍在性(*sarvagatatva*)のものであるのに、どうしてすべての感覚(*vedanā*)を感じることはないのか?」(7cd) この問についての答は次の通り。

「身体を有するアートマンは、遍在のものではあっても、各自の接触器官のうちに〔あるものである〕。このことから、アートマンは、あらゆる拠り所にあるあらゆる感覚を感じることはないのである。」(79)¹⁷

〈問15〉「自在なもの(*vibhu*)であるアートマンがどうして岩や壁に隔てられたものを見ないのか?」(8ab) この問いに対する答(第80節)は次の通り。

「まさにこの〔アートマン〕には自在性がある。遍在する偉大なものであるから。そして思考器官を集中することによって、アートマンは隠されたものを見る。」¹⁸

¹⁶CS Śā 1.78: *vaśi tat kurute karma yat kṛtvā phalam aśnute /*

vaśi cetah samādhatte vaśi sarvaṃ nirasyati //

¹⁷CS Śā 1.79: *dehī sarvagato 'py ātmā sve sve saṃsparśanendriye /*

sarvāḥ sarvāśrayasthās tu nātmā 'to vetti vedanāḥ //

CP は、「あらゆる拠り所にある」(*sarvāśrayastha*)とは、「あらゆる他の人の身体にある」(*sarva-para-śarīragata*)という意味であるとする。

¹⁸CS Śā 1.80: *vibhutvam ata evāśya yasmāt sarvagato mahān /*

manasā ca samādhānāt paśyaty ātmā tiraskṛtam //

〈問16〉「アートマンが「土地を知るもの」(*kṣetrajña*)であるならば、「土地を知るもの」と「土地」とどちらが先に存在するのか?」(8cd,9)

前述の、24要素のうち未開展のもの(*avyakta*) (すなわちプルシャあるいはアートマン) が「土地を知るもの」であり、それ以外のものが「土地」である(65)、とされる。そして、アートマンが始まりのないものであることから、「土地」にも始まりはなく、どちらが先かということもない(82)、と回答される。

〈問17〉「アートマンのみが行為者(*kartṛ*)であるのならば、アートマンは何に対する証人(*sākṣin*)なのか?」(10ab) この問いに対する回答は次の通り。

「知る主体は、証人であると言われている。一方、アートマンは知る主体でないものではない。このことから〔アートマンは〕証人であると教えられている。実にすべての存在は、すべての存在物のアートマンを証人としている。」(83)¹⁹

〈問18〉「派生物ではないものにとって感覚に基づく特殊性がどうしてあるのか?」(10cd) これに対する回答は次の通り。

「唯一の個体のアートマンは、いかなる場合も証相によつては捉えられることはない。この唯一の捉えられないものの特殊性は存在しない。」(84)²⁰

「結合〔からなる〕プルシャには感覚に基づく特殊性が認められる。感覚が確定しているところ、そこではそれ(感覚)に基づく特殊性がある。」(85)²¹

ここで、唯一の「個体のアートマン」(あるいは元素のアートマン) (*bhūtātman*)と言われるものと、「結合〔からなる〕プルシャ」(*saṃyogapuruṣa*)との違いは明らかにされているのであるが、先に触れた*paramātman*と、この*bhūtātman*が同じものを指すのかどうかは明確ではな

い。また、*bhūtātman*そのものの語義も、個々人のアートマンを意味するのか、あるいは元素としてのアートマン(いわゆる「元素我」)を意味するのか明らかではない。

以上でプルシャ、アートマンに直接関わる問答が終り、これ以降は、苦痛(あるいは感覚) (*vedanā*) についての問答が続く。

〈問19〉「医師(*vaidya*)は過去・現在・未来の3つの苦痛(*vedanā*)のどれを癒すのか?」(11)

この問いに対しては、まず、医師は、過去・現在・未来の3つの苦痛のすべてを治療するものであると言われ(86)、そしてそれぞれの苦痛の治療が説明される(87-91)。そして、手当て(*upacāra*)によって苦(*duḥkha*)が停止し、楽(*sukha*)が生じることが述べられ(92)、治療とは身体要素(*dehadhātu*)の均衡をもたらすことであることが示唆される(93)。このあとに次のような記述が見られる。

「医師は、このような道理をもって、3つの時にわたる苦痛を、滅ぼすと言われている。しかし、最終的な治療、それは欲望をなくすことである。」(94)²²

「欲望は、苦と苦の抛り所を与える最高の原因であるからである。そして、あらゆる欲望を捨てることは、あらゆる苦の除去である。」(95)²³

「あたかも蚕が、〔自らに〕死を与えるものである繊維を受け取るように、同様に、常に苦しんでいる知る主体でないものは、欲望を諸対象から受け取る。」(96)²⁴

「しかし、火に等しい対象を知って、そこから逃れるものである知る主体、始まりがないことから、また結合がないことから、その〔知る主体〕に苦は近付かない。」(97)²⁵

医師による苦痛の治療についての問いへの回答から、さらに苦をもたらす原因としての欲望

²²CS Śā 1.94: *yuktim etāṃ puraskṛtya trikālāṃ vedanāṃ bhiṣak / hantīty uktaṃ cikitsā tu naiṣṭhikī yā vinopadhām //*

²³CS Śā 1.95: *upadhā hi paro hetur duḥkhaduḥkhāśrayapradāḥ / tyāgaḥ sarvopadhānāṃ ca sarvaduḥkhavyapohakaḥ //*

第94,95節の*upadhā*という語は、本来、「詐欺」「欺瞞」という意味であるが、第96節以降では、その同義語として*trṣṇā*という語が用いられていること、またCPも*upadhā*を*trṣṇā*と解釈していることから、ここでは*upadhā*という語を「欲望」と訳す。詳しくは、本論文CS Śā 和訳の訳注参照。

²⁴CS Śā 1.96: *koṣakāro yathā hy aṃśūn upādatte vadhāpradān / upādatte tathā 'rthebhyas trṣṇām ajñāḥ sadā "āturaḥ //*

²⁵CS Śā 1.97: *yas tv agnikalpān arthāñ jñō jñātvā tebhyo nivartate / anārambhād asaṃyogāt taṃ duḥkhaṃ nopatiṣṭhate //*

¹⁹CS Śā 1.83: *jñāḥ sākṣīty ucyate nājñāḥ sākṣi tv ātmā yataḥ smṛtaḥ / sarve bhāvā hi sarveṣāṃ bhūtānām ātmasākṣikāḥ //*

²⁰CS Śā 1.84ab: *naikaḥ kadācid bhūtātmā lakṣaṇair upalabhyate / viśeṣo 'nupalabhyasya tasya naikasya vidyate //*

²¹CS Śā 1.85: *saṃyogapuruṣasyeṣṭo viśeṣo vedanākṛtaḥ / vedanā yatra niyatā viśeṣas tatra tatkrtaḥ //*

について、そして再びアートマンについてへと論議が発展していくのである。

〈問20〉「苦痛 (*vedanā*) の原因 (*kāraṇa*) は何か?」 (13a)

問19への回答の中で、苦の原因としての欲望について触れられたが、ここで改めて、苦痛の原因が問われる。これに対する回答では、まず、次のようにその原因が列挙される。

「思考・堅固さ・記憶の停止、[不適當な] 時[に行われる不適當な] 行為[の結果] に達すること、また、[その人に] ふさわしくない対象に向かうこと、以上は苦しみの原因であると知るべきである。」 (98)²⁶

これに続く第99節から第102ab節では、ここで挙げられた一般的な「苦痛」 (*vedanā* あるいは *duḥkha*) の原因それぞれについて説明される。第102cd節から第131節にかけては、「苦痛」の1つとしての「病氣」 (*vyādhi* あるいは *roga*) の原因が詳述される。アーユルヴェーダでは、病気の直接的な原因は、3病素 (*doṣa*) の激発 (*prakopa*) であるとされる (110) が、ここではそれ以外の間接的な原因とされるもの、すなわち「時間の経過」 (*kālasya pariṇāma*) (110-115)、
「天命」 (*daiva*) (前生での行い) (116-117)、[感覚器官と対象との] 「過誤・過少・過剰な結合」 (*mithyātihīnaya*) (118-131) およびこれに関連して、「安楽」 (健康) (*sukha*) の原因としての [感覚器官と対象との] 「均衡のとれた結合」 (*samayoga*) (129cd) について詳細に説明される。
これに続いて第132～134節では、次のように言われる。

「アートマン、感覚器官、思考器官、理性、対象、あるいは行為がなければ、楽・苦はない。またそれがいかにして知られるべきか、それがそのように [以下で] 述べられる。」 (132)²⁷

「触覚器官の接触と、思考器官の接触こそは、楽・苦の感覚を引き起こす2種のものである。」 (133)²⁸

「願望と嫌悪を本質とする欲望というものは、楽・苦から現れる。また、さらに欲望は、楽・

苦の原因であるとも言われる。」 (134)²⁹

ここでは「楽・苦の感覚」 (*sukhaduḥkhānām vedanā*) (133cd) という表現が見られる。*vedanā* という語は、問19「医師は過去・現在・未来の3つの苦痛 (*vedanā*) のどれを癒すのか?」 (11) の問答では、病気を含む「苦痛」という限定的な意味で用いられていたのであるが、この第133節以降は、「楽」をも含む様々な人間の経験の「感受」「感覚」の意味で用いられる³⁰。また、第134節では、第95節でも触れられた「欲望」 (*tṛṣṇā*, 第95節では *upadhā*) が、ここでは「楽・苦の原因」 (*sukhaduḥkhānām kāraṇa*) として、再び言及されている。

〈問21〉「感覚 (*vedanā*) の拠り所 (*adhiṣṭhāna*) は何か?」 (13b)

この問いに対する回答は次の通り。

「感覚の拠り所は、感覚器官をとまなう思考器官と身体である。[ただし] 頭髮・体毛・爪の先・便・尿・[音声等の] 性質を除いて。」 (136)³¹

〈問22〉「また、これらあらゆる感覚 (*vedanā*) はどこで完全に消滅するのか?」 (13cd)³² この問いに対する回答として、まず次のように言われる。

「ヨーガと解脱においては、あらゆる感覚の現れはない。解脱における [感覚の] 消失は完全である。ヨーガは、解脱を引き起こすものである。」 (137)³³

すなわち、あらゆる *vedanā* を完全に消滅させるのは、解脱であり、その手段のひとつは、ヨーガであると言うのである。そして、この後に続く第138-141節ではヨーガについて解説³⁴され、その後、第142-154節は解脱についての詳説である。その冒頭、第142節では次のように言われる。

²⁹ CS Śā 1.134: *icchādveṣātmikā tṛṣṇā sukhaduḥkhāt pravartate /*

tṛṣṇā ca sukhaduḥkhānām kāraṇam punar ucyate //

³⁰ なお、問14,18の問答でも *vedanā* は、ここで言う「感覚」の意味で用いられている。

³¹ CS Śā 1.136: *vedanānām adhiṣṭhānam mano dehaś ca sendriyaḥ /*

keśa-loma-nakhāgrānnamala-drava-guṇair vinā //

³² CS Śā 1.13cd: *kva caitā vedanāḥ sarvā niṛttim yānty aśeṣataḥ.*

³³ CS Śā 1.137: *yoge mokṣe ca sarvāsām vedanānām avartanam /*

mokṣe niṛttir niḥśeṣā yogo mokṣappravartakaḥ //

³⁴ この解説の一部 (140-141) に、YogS 第3章の内容に近い表現が見られる。詳しくは本論文 CS Śā 和訳と訳注参照。

²⁶ CS Śā 1.98: *dhīdhṛtismṛtīvibhraṁśaḥ saṃprāptiḥ kālakarmaṇām /*

asātmayārthāgamaś ceti jñātavyā duḥkhaḥetavaḥ //

²⁷ CS Śā 1.132: *nātmendriyaṃ mano buddhiṃ gocaraṃ karma vā vinā /*

sukhaduḥkhaṃ yathā yac ca boddhavyaṃ tat tathocyate //

²⁸ CS Śā 1.133: *sparśanendriyasamsparsaḥ sparśo mānasa eva ca /*

dvividhaḥ sukhaduḥkhānām vedanānām pravartakaḥ //

「解脱は激質と翳質の非存在³⁵から、行いの完全な消滅から〔生じる〕。あらゆる結合からの分離が非再生と言われる。」(142)³⁶

これに続いて、解脱のための行いと、解脱への道としての真理についての記憶 (*tattvasmṛti*) が説明された (142-151)³⁷あと、次のように言われる。

「すべて原因をもつものは苦であり、自分のものでないものであり、またまさに恒常でないものである。なぜならそれはアートマンによって作られたものでないから、そこには自己〔の意識〕が生ずる〔だけである〕。」(152)³⁸

「これは私ではない、という真実の認識が生じない限り〔そのままである〕。その〔真実の認識〕によって、これは私のものではないと識別して、知る主体は、すべてを越えるのである。」(153)³⁹

「この最終的な放棄において、あらゆる感覚は根こそぎに、理解・認識・識別を伴って、残らず停止に至る。」(154)⁴⁰

このように、ここではアートマンと解脱が中心的なテーマとなっているのである。

〈問23〉「唯一の寂静な個体のアートマン（元素我）は、どのような徴表によって知覚される

³⁵ 激質 (*rajas*) と翳質 (*tamas*) が輪廻の原因となっていることについては、この章の第68cd節でも次のように言われている。「激質と翳質とに入り込まれたものが、輪のように回転する。」

(*rajastamobhyām āviṣṭaś cakravat parivartate.*)

³⁶ CS Śā 1.142: *mokṣo rajastamo 'bhāvāt balavat karmasamkṣayāt / viyogaḥ sarvasaṃyogair apunarbhava ucyaṭe //*

この第142節は、VS 5.2.20の内容に近い。

VS 5.2.20: *tadabhāve saṃyogābhāvo 'prādurbhāvaḥ sa mokṣaḥ*. 「それ〔*adrṣṭa*〕が存在しないとき、〔アートマンとマナスとの〕結合の非存在、現われないこと、それが解脱である。」(〔〕内はCandrānandaの注による) cf. Comba 1987 pp.60-61.

³⁷ 第143,144節で示される解脱のための行いについてのさらに詳しい記述がCS Śā 5.12に見られる。その部分の記述については後述する。

³⁸ CS Śā 1.152: *sarvaṃ kāraṇavad duḥkham asvaṃ cānityam eva ca / na cātmakṛtakam tad dhi tatra cotpadyate svatā //*

³⁹ CS Śā 1.153: *yāvan notpadyate satyā buddhir naitad ahaṃ yaya / naitan mameti vijñāya jñāḥ sarvam ativartate //*

この第153d節に関連する表現が、CS Śā 5.10 および BC 12.23に見られる。これについては後述する。

⁴⁰ CS Śā 1.154: *tasmiṃś caramasaṃnyāse samūlāḥ sarvavedanāḥ / sasamjñājnānavijnānā nivṛttiṃ yānty aśeṣataḥ //*

のか?」(14cd)⁴¹

この問いに対しては、第154節に続けて、「残らず停止に至」った以降のアートマンについて、次のように回答される。

「これ以降、個体のアートマンはブラフマンとなり、捉えられることはない。すべての状態（存在）から抜け出たもの、そのもののしるしは存在しない。」(155a-d)⁴²

「ブラフマンを知る者たちにとっての進路は、ブラフマンであり、またそれは不滅のものであり、証相をもたないものである。ブラフマンを知る者たちには知識がある。また、これに関して無知な者は、それ（ブラフマン）を知ることはできない。」(155e-h)⁴³

CS Śā 第1章の最後では、このようにアートマンとブラフマンの合一が説かれるのである。

以上のように、この章の内容を概観したが、ここで改めて、この章の問答の流れを示すと、「プルシャ（アートマン）とはどのようなものか→苦痛(病氣)を癒すこと→あらゆる感覚の除去→ヨーガ→解脱→ブラフマン」ということになる。これは明らかにウパニシャッド以来のインド思想におけるアートマン論、解脱論の展開過程を意識したものと見ることができるであろう。このなかにはサーンキヤ・ヨーガ学派、ヴァイシェシカ学派の思想にきわめて近い内容の記述が散見され、さらにはヴェーダーンタ的な表現も見られる。しかし、ここでは、そのうちのいずれかの説に完全に依拠するというではなく、いわば折衷的な態度に終始している。また、この問答の中には、アーユルヴェーダについての知識がたくみに取り入れられており、アーユルヴェーダを伝統的なインド思想の流れの中に位置付けようとするかのような傾向も見られる。このような傾向は、医師(*vaidya*)の仕事を、過去・現在・未来のすべての苦痛(病氣)を癒すことであるとし、欲望と苦を除去してあらゆる感覚の停止を目指すヨーガ、さらには解脱の観念とも近いものとして位置付けている点からもうかがうことができる。欲望をなくすことは、最終的な「治療」(*cikitsā*)である(94cd)とさえ言われるのである。

⁴¹ CS Śā 1.14cd: *ekaḥ prasānto bhūtātmā kair liṅgair upalabhyate.*

⁴² CS Śā 1.155a-d: *ataḥ paraṃ brahmabhūto bhūtātmā nopalabhyate /*

niḥśṛtaḥ sarvabhāvebhyaś cihnaṃ yasya na vidyate //

⁴³ CS Śā 1.155e-h: *gatir brahma vidāṃ brahma tac cākṣaram alakṣaṇam / jñānaṃ brahma vidāṃ cātra nājñas taj jñātum arhati //*

これらのことから、この章の編纂者が目指したものは、いくつかの哲学説を折衷的に取込みつつ、伝統的な思想の流れの中にアーユルヴェーダの位置を確保し、さらにはアーユルヴェーダ独自の1元論的なアートマン観を確立することにあつたのではないかと考えられる。また、この章の中では *puruṣa*、*ātman*、*paramātman*、*bhūtātman*などの語があらわれるが、ここではこれらの語は厳密な定義のもとに、区別して用いられているわけではなさそうである⁴⁴。また、*buddhi*については、本章第32-34,72節ではヴァイシェーシカ的に「知覚」「認識」を意味するものと考えられるが、第63,66,99,109節ではサーンキヤ的に「理性」を意味しているようである⁴⁵。また、前述のように第94,95節にあらわれる *upadhā*の用法には疑問が残る。本章にみられるこのようにいくつかの語の語義のあいまいさは、様々な哲学説を折衷的に取り入れようとする態度に起因するものであろうが、この章の編纂者が本来このような哲学的な述作を専門とする人物ではなかったことの証左と言えるかも知れない。

⁴⁴cf. 金倉 1978 p.10.

⁴⁵cf. Cornba 1987 p.53.

1.3.2 Carakasamhitā, Śārīrasthāna 第2章

CS Śā 第2章は、48の韻文からなる。この章もアグニヴェーシャとアートレーヤの問答形式である。問いの数は大別すると17(ただし、本章第48節では、これらの問いを細かく分けて36問とする)であり、ほぼすべての問答が、人間の誕生に関係するものである。概略は次の通り。

CS Śā 第2章(全48節)

「異なった親族の」(*atulyagotrīya*) [という言葉ではじまる] 章

1-2 序

3 問1 母胎内で胎児の状態になるものは何か?

4 問1の答 *śukra*について

5 問2 健康な胎児出生の条件、問3 異常な出産、問4 胎児死亡について

6 問2の答 健康な胎児出生の条件について

7 問3の答 長時間後に胎児を得る場合について

8-10 問4の答 胎児が亡くなる理由について

11 問5 胎児の性と数、問6 長時間の出産、問7 双子について

12-14 問5の答 胎児の性別と数の決定の理由について

15 問6の答 胎児が長時間後に生まれる場合について

16 問7の答 双子の優劣の理由について

17 問8 性的変異について

18-21 問8の答 8種の性的変異が生じる理由について

22 問9 妊娠の徴候、問10 胎児の位置、問11 子供が似ることについて

23 問9の答 妊娠の徴候について

24-25ab 問10の答 胎児の性差による腹中の位置などについて

25cd-27 問11の答 胎児が〔あるものに〕似る理由について

28 問12 胎児の障害、問13 出生とアートマン、問14 アートマンについての問い

29-30 問12の答 障害のある胎児出生の理由について

31-36 問13の答 アートマンが次の身体に入る事情について

37-38 問14の答 アートマンが結びついているものについて

39 問15 病気、問16 喜び(*harṣa*)と悲しみ(*śoka*)、問17 病気の再発について

40 問15の答 病の原因・鎮静について

41-42 問16の答 喜びと悲しみの原因について

43-47 問17の答 病がふりかからない理由について

48 まとめの詩節

以下、この章の主な問答の内容を見ることにする。

〈問1〉「母胎内で胎児の状態になるものは何か?」

これは精液(*śukra*)であって、風・火・土・水の性質を4つの部分としてもつものであり、また、食物の栄養素としての6つの滋味(*rasa*)から生じたものである(第4節)。ここで、精液の性質として空が欠けていることについて、注釈者Cakrapāṇidattaは次のように述べる。「[5大元素のうち] 空は遍在であるから、他の4つの大元素と共に、男性から胎児へと移動するわけではない。」

〈問2〉「健康な胎児出生の条件とはなにか?」 これについては次のように回答される。

「精液・血・アートマン・場(子宮)・時が完全にそなわり、健全な食物による世話がなされた、[そのような] 胎児は、完全に満ち足りた身体をもって、[適切な] 時に、健やかに、楽に生まれる。」(6)⁴⁶

〈問3,4,6,7,8,12〉とその答は妊娠時と出産時の異常、胎児の障害、胎児死亡など様々な異常事態についてのものである。これらの異常の原因の1つとして、両親の*karman*あるいは胎児の前生の*karman*が挙げられている点(16,21,29)は注目すべきであろう。

〈問5〉「胎児の性と数の決定の理由は何か?」

この問いに対する回答には*bija*という語が出てくる。アーユルヴェーダでは、受精とは、父親の精液(*śukra*)と母親の[月経の]血液(*śoṇṭa*あるいは*ārtava*)との結合であるとされており、その受精体が、*bija*という語であらわされることが多い⁴⁷。回答は次の通りである。

⁴⁶CS Śā 2.6: *śukrāśṛgātmāśayakālasaṃpad yasyopacāraś ca hitais tathā 'nnaiḥ /*

garbhaś ca kālē ca sukhī sukhaṃ ca saṃjāyate saṃparipūrṇadehaḥ //

⁴⁷ただし、*bija*は、「生殖能力をもつもの」として、受精に至る前の「精液」、あるいは(女性の)「血液」を意味することもある。

「血が優勢であることによって女子を、精液が[優勢であることによって]男子を、そのबीジャ⁴⁸が[等分に]2つになることによって女子と男子とを生む。それぞれのबीジャ⁴⁹のどちらかが優勢であることによって[男か女かが決まる]。」(12)⁵⁰

「その(बीジャの)分割にしたがって、その数だけの、行為を本性としてもつ子供たちを 自己の意志によらずに[その女性は]生む。」(14cd)⁵¹

〈問11〉「胎児が[あるものに]似る理由」これについては次のように回答される。

「一方、胎児を孕んでいるときに、[その]女性のマナスが、あるものに向けられていると、[その女性は] そのものに似た子供を生む。」(25)⁵²

〈問13,14〉前章(CS Śā 第1章)で明らかにされたように、アートマンが恒常、遍在であり、始まりをもたないものであるならば、人間の出生の際、そのようなアートマンはどのようにして、前の身体から次の身体へと移って行くのであろうか。問13,14とその答は、まさにこれを問題にしている。アートレーヤの回答は次の通りである。

「[地水火風の]4種の極めて微細な元素をそなえ、マナスの[ような]速さをもつものは、[ある]身体から、[他の]身体に入る。一方、行為を本性とすることから、その姿は、超自然の(*divya*)目がなくては見ることができない。」(31)⁵³

これはサーンキヤ哲学やヴェーダーンタ哲学で、輪廻の主体とされる「微細身」(*sūkṣma-śarīra*もしくは*liṅga*)、あるいは「元素我」(*bhūtātman*)と呼ばれるもののことを述べているようである。さらにアートレーヤはこれに続けてアートマンの同義語を列挙したあと、次のように言う。

⁴⁸ここでは「受精体」の意味であろう。

⁴⁹ここでは「精液と血液」の意味であろう。

⁵⁰CS Śā 2.12: *raktena kanyām adhikena putraṃ śukreṇa tena dvividhīkṛtena / bijena kanyām ca sutaṃ ca sūte yathāsvabījānyatarādhikena //*

⁵¹CS Śā 2.14cd: *tāvanty apatyāni yathāvivbhāgaṃ karmātmakāny asvavaśāt prasūte.*

⁵²CS Śā 2.25: *putraṃ tv ato liṅgaviparyayaṇa vyāmīśraliṅgā prakṛtiṃ tṛtīyām / garbhopapattau tu manaḥ striyā yaṃ jantum vrajet tatsadṛśaṃ prasūte //*

⁵³CS Śā 2.31: *bhūtaiś caturbhiḥ sahitaḥ susūkṣmair manojavo deham upaiti dehāt / karmātmakatvān na tu tasya dṛśyaṃ divyaṃ vinā darśanam asti rūpam //*

「身体における、〔食物から得た栄養素としての〕滋味(*rasa*)・自己(*ātman*)・母・父から生ずる元素(*bhūta*)は、〔そのそれぞれが地水火風の4元素と結合して〕16種であるとするべきである。その〔胎児の〕アートマンにおいて、〔滋味・自己・母・父から生ずる〕4つの〔元素〕は結合しており、また同様に、アートマンは、これら4つの〔元素〕に位置している。」(33)⁵⁴

「母・父から生じた元素は、胎児においては、血と精液であると〔人々は〕言う。精液と血が、それによって充満させられるその元素は、滋味から生じるものである。」(34)⁵⁵

「一方、行為から生じアートマンに結合している4つの元素、それらが胎児に入る。」(35ab)⁵⁶

すなわち輪廻の主体となる4大元素⁵⁷をそなえた微細なアートマンが、精液と血液の受精体(*bīja*)に入ることによって、受精体が持っている滋味・自己・母・父から生ずる4つの元素がアートマンの4大元素とそれぞれに結合し、16種の元素となり、それによって胎児が形成されるという意味であろう。そして、この輪廻の主体となるものと、アートマンとが不可分離の関係にあることについては次のように明言される。

「アートマンは、かの感覚器官を超えた極めて微細な形相をもつものと、分離した形相をもつものでは決してない。行為と、実に、マナス、思考と、また自我意識・病・病素とも〔分離した形相をもつものでは決して〕ない。」(37)⁵⁸

また、マナスと輪廻についても言及されている。

「形相(*rūpa*)から、形相の発生がある〔ということは〕確立しているから、行為を本性としてもつもの達にとって、マナスの〔発生は〕マナスからである。しかし、外観(*ākṛti*)とブッディの差異が存在しているところ、そこでは、ラジャス・タマスと行為が〔差異の原因である。〕(36)⁵⁹

⁵⁴CS Śā 2.33: *rasātmamātāpitṛsaṃbhavāni bhūtāni vidyād daśa ṣaṭ ca dehe / catvāri tatrātmāni saṃśritāni sthitas tathā "tmā ca caturṣu teṣu //*

⁵⁵CS Śā 2.34: *bhūtāni mātāpitṛsaṃbhavāni rajaś ca śukraṃ ca vadanti garbhe / āpyāyyate śukram asṛk ca bhūtair yais tāni bhūtāni rasodbhavāni //*

⁵⁶CS Śā 2.35ab: *bhūtāni catvāri tu karmajāni yāny ātmalīnāni viśanti garbham.*

⁵⁷空が除かれている理由については問1の項参照。

⁵⁸CS Śā 2.37: *atīndriyais tair atisūkṣmarūpair ātmā kadācin na viyuktarūpaḥ / na karmaṇā naiva manomatibhyāṃ na cāpy ahaṅkāraṅkāradōṣaiḥ //*

⁵⁹CS Śā 2.36: *rūpād dhi rūpaprabhavaḥ prasiddhaḥ karmātmakānāṃ manaso manastah / bhavanti ye tv ākṛtibuddhibhedā rajastamas tatra ca karma hetuḥ //*

「マナスはラジャスとタマスとに結び付いているから、知識(*jñāna*)がなければ、そこ(マナス)には全ての欠陥がある。一方、〔アートマンの〕進行(*gati*)と活動(*pravṛtti*)との原因は、欠陥を伴うマナスと、強力な行為であると言われる。」(38)⁶⁰

〈問15,16,17〉「病の原因・鎮静について」「喜びと悲しみの原因について」「病がふりかからない理由について」

この3つの問いへの回答では、前章と同様に、病気の原因を抑えることからさらに解脱論へと論議が展開していく。

「以前に述べられた通りに、〔病には〕2種の拠り所(身体とサットヴァ(マナス))があるが、常に病に対処し、感覚器官を制御したものには、病はふりかからない。もし、その〔病が生じる〕時に結び付いた天命(*daiva*)がない場合には。」(43)⁶¹

「前の〔生に〕為されたこと、それが天命であると言われ、一方、この〔生での〕行い、それが人為(*pauruṣa*)であると経験的に知られている。不均衡なそれ(天命と人為)が、活動(*pravṛtti*)の原因であると経験的に知られ、均衡のとれたそれこそが、止滅(*niṛtti*)の原因であると〔経験的に知られている。〕(44)⁶²

以上のように、CS Śā 第2章の目的は、男女の交わりから妊娠の徴候が現われる頃までの様々な胎生学的な事柄を説明し、胎児が形成される条件とその形成過程で発生する異常の原因を明らかにすることにあると言える。しかしこの章においても、人間の誕生についての医学的な論議からはじまって、次第に形而上学的なテーマへと移り、章の後半では、CS Śā 第1章と同様にアートマンと *karman*、輪廻、さらには解脱といった問題に重点が置かれているのである。

⁶⁰CS Śā 2.38: *rajastamobhyāṃ hi mano 'nubaddhaṃ jñānaṃ vinā tatra hi sarvadoṣaḥ / gatipravṛtṭtyos tu nimittam uktaṃ manaḥ sadoṣaṃ balavac ca karma //*

⁶¹CS Śā 2.43: *satyāśraye vā dvividhe yathokte pūrvaṃ gadebhyah pratikarma nityam / jīendriyaṃ nānupatanti rogās tatkālayuktaṃ yadi nāsti daivam //*

⁶²CS Śā 2.44: *daivaṃ purā yat kṛtam ucyate tat tat pauruṣaṃ yat tv iha karma dṛṣṭam / pravṛttihetur viśamaḥ sa dṛṣṭo niṛttihetur hi samaḥ sa eva //*

1.3.3 Carakasamhitā, Śārīrasthāna 第3章

CS Śā 第3章は、27節からなる。このうち最後の9節のみが韻文で、他はすべて散文である。この章は前の第1,2章とは異なり、アグニヴェーシャとアートレーヤの師弟による問答形式ではなく、以下に示すようにアートレーヤと対論者バラドヴァージャ(Bharadvāja)による討論を中心に構成されている。

CS Śā 第3章（全27節）

「胎児の降下」〔についての〕小さい(*khudḍikā garbhāvakrāntī*)章⁶³

1-2 序

3 胎児の発生機序、構成要素、および*sattva*についてのアートレーヤの教説

4 バラドヴァージャの反論

5-14 アートレーヤの教説の補足と詳述

15 バラドヴァージャの再反論と疑問、アートマンについての疑問

16-25 アートレーヤの回答、アートマンについての結論

26-27 まとめの詩節

この章の討論のテーマは、人間（胎児）の発生、人間を構成する要素、サットヴァ（マナス）の発生についてである。最初に第3節で、アートレーヤが次のように自説を述べる。

「損なわれていない精液(*retas*)をもつ男性と、汚されていない母胎(*yoni*)・血・子宮(*garbhāśaya*)をもつ女性との交わりが、妊娠適時になされ、また、この両者にふさわしい交わりにおいて、子宮内部に至った精液と血が結合したものに、サットヴァ(*sattva*)（マナス）との結びつきから、ジーヴァ(*jīva*)⁶⁴が降下すると、その時、胎児が〔その結果として〕発生する。

その（胎児）は、〔習慣的な食事や行いのうち〕自分に合ったもの(*sātmya*)・〔食物の栄養素としての〕滋味(*rasa*)を享受することによって、また、正しい手当てがなされると、病を得ることなく成長する。

⁶³ この章のタイトルには「小さい」(*kṣudraka*)という語のプラークリット形 *khudḍikā* (第27節では *khudḍikā*) が用いられている。CS では他に、Sū 第9章の章名 (*khudḍākacatuṣpāda*) および、油剤の名称の1つ (*khudḍākapadmaka taila* Ci 29.115) に、*kṣudraka* のプラークリット形が用いられているが、これら以外の部分ではすべて *kṣudraka* または *kṣudra* という語が用いられている。

⁶⁴ CP によれば、ここでサットヴァはマナス、ジーヴァは意識要素としてのアートマンを意味し、本来、すべてに遍満し運動をもたないアートマンが、運動をもつサットヴァ (=マナス) と結びつくことによって、降下〔という運動を〕するのであると解釈している。

そして、時が満ちると、全ての感覚器官をそなえ、満ち足りた身体をもち、優れた体力・体色・サットヴァ（マナス）・堅固さを完全にそなえたものが、これら〔以上述べた〕諸々のもの⁶⁵の総合(*samudaya*)から、楽に生まれる。

また、この胎児は、母親から生じるものであり、父親から生じるものであり、アートマンから生じるものであり、自分に合ったもの(*sātmya*)から生じるものであり、滋味から生じるものである。

また、実に、サットヴァ（マナス）は、自然に発生するもの(*aupapāduka*)⁶⁶であると、実に、尊いアートレーヤは言った。」(3)⁶⁷

アートレーヤのこの教説は次の3点にまとめることができよう。1. 胎児の発生は、ここではヴェーダーンタ的に「ジーヴァ」(*jīva*)と呼ばれる輪廻の主体が、サットヴァ（マナス）と結び付いて、共に他の身体に「降下」することによって起こる。2. その胎児とは、母親、父親、アートマン（自己）、〔習慣的な食事や行いのうち〕自分に合ったもの(*sātmya*)、〔食物の栄養素としての〕滋味(*rasa*)のそれぞれから生じるものの総合体である。3. ジーヴァを動かすサットヴァ（マナス）は、自然に発生するものである。

この主張の1つ1つに対して、バラドヴァージャは徹底して次のように反論を試みる。胎児が父母から生じるのだとすれば、息子を望むすべての男女は等しく望み通りに子を得るであろう。胎児がアートマンから生じるのだとすれば、アートマンがアートマンを（自分が自分を）生むということになり矛盾である。またたとえそうであっても、ではなぜ〔自在力のある〕アートマンは優れていない者をも生むのか。またなぜ望み通りの母胎に生まれないのか。自分に合った〔習慣的な食事や行い〕から生じるのだとすれば、そのような物事を実践している人には必ず子供ができ、そうでない人には子供はできないことになるが、事実是这样ではない。〔食物

⁶⁵ CP: 「以上に述べられた、精液・血・ジーヴァ・サットヴァ・自分に合ったもの(*sātmya*)・滋味・正しい手当て」

⁶⁶ CP: 「アートマンの、他の身体との結合を生じさせるもの」(*ātmanah śarīrāntara- sambandhopapādakam*)

⁶⁷ CS Śā 3.3: *puruṣasyānupahataretasaḥ striyaś cāpraduṣṭayoni-śoṇita-garbhāśayāyā yadā bhavati saṃsargaḥ ṛtukāle, yadā cānayos tathāyukte saṃsarge śukraśoṇitasamṣargam antargarbhāśayagataṃ jīvo 'vakrāmati sattvasamprayogāt tadā garbho 'bhinirvartate, sa sātmyarasopayogād arogo 'bhivardhate samyagupacāraiś copacaryamāṇaḥ, tataḥ prāptakālaḥ sarvendriyopapannaḥ paripūrṇaśarīro bala-varṇa-sattva-saṃhanana-saṃpad upetaḥ sukhena jāyate samudayād eṣāṃ bhāvānāṃ, mātṛjaś cāyaṃ garbhaḥ pitṛjaś cātmajaś ca sātmyajaś ca rasaś ca, asti ca khaku sattvam aupapādukam iti hovāca bhagavān ātreyaḥ.*

の栄養素としての] 滋味から生じるのだとすれば、食物をとらない人はいないのだから、だれにでも子供ができるということになる。また、優れた滋味をとる人にだけ子供ができるというわけでもない。また、サットヴァ（マナス）が「他の世界」(*paraloka*)からやってきて、胎児に降下するのだとすれば、なぜその胎児は前生の記憶をもたないのか(4)と。

この反論に対してアートレーヤは、まず、「これら全ての存在物の総合から、[その結果として] 胎児は発生する。」(*sarvebhya ebhyo bhāvebhyaḥ samuditebhyo garbho 'bhinirvartate*.)⁽⁵⁾と述べ、胎児は父母などの個々の要因から生じるとするバラドヴァージャの誤解を指摘した後、それぞれのものから発生する胎児の部分具体的に列挙しながら、次のように自説を補足する。すなわち、父母がいなければ子供は生まれない。母親から生じる部分とは、皮膚・血・肉・脂肪・臍・心臓をはじめとする内臓類である。父親から生じる部分は、髪・髭・爪・体毛・歯・骨・シラー管・腱・ダマニー管・精液であると。そして、アートマンについては次のように述べる。

「この胎児は、アートマンから生じるものである。(中略) その[アートマン] は、子宮(*garbhāśaya*)に入り、精液と血との結合に至り、胎児として、自分で自分を(*ātmanā ātmānam*) 生じさせる⁶⁸。なぜなら、胎児について、アートマン(自己)と呼ばれる[ことがある] からである。また、そのアートマンには、始まりがないことから、誕生はない。このことから、その生まれた[アートマン] が、まさに[まだ] 生まれていない胎児を生じさせることはない。なぜなら、その生まれていない[アートマン] が、生まれていない胎児を生じさせるからである。その同じ胎児が、時を隔てて、子供・青年・壮年の状態となる。その[胎児] が、それぞれの状態において存在する、そのそれぞれの状態において、生まれたものとなるのである。(中略) なぜなら、存在物にとっては、まさに別の状態に行くことこそが、それぞれの状態の年齢における、その時その時の「誕生」(*janma*) であると言われるか

⁶⁸ 安達俊英(安達 1992) は、前述した CS Śā 2.28; 3.3 およびこの節に見られる、アートマンが身体の外から入り込んで受胎が成立することに関する記述と、VS 5.2.19 に見られる輪廻観とは基本的に共通するものであると述べている。cf. VS 5.2.19: 「[アートマンの、身体からの] 離脱と[新たな身体への] 接近(進入)と[母親の] 飲食したものととの結合と他の諸結果(=胎児の諸段階)との結合とは、不可見力によってなさしめられる」(*apasarpaṇam aśitapītasamyogaḥ kāryāntarasamyogāś cety adṛṣṭakāritāni*.) (安達訳) また、安達はこのような、アートマンが輪廻していく様相は、*Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* 4.4.2-3, ManS 12.22 にも見られるものであるとする。

らである。(以下略)」(8)⁶⁹

ここではアートマンが次の生へと輪廻すること、本来始まりがないはずのアートマンが、胎児として「誕生」することに対する説明がなされているわけである。アートレーヤはさらに、バラドヴァージャの「なぜ[自在力のある] アートマンは優れていない者をも生むのか。またなぜ望み通りの母胎に生まれないのか。」という問いかけに対しては次のように述べる。

「実に、胎児にとって、母親にとって、父親にとって、アートマンにとって、あらゆる状態における望み通りの行いというものは存在しない。それら(胎児、母親、父親、アートマン) は、あることは、自身の力によって為し、[また] あることは、行為(*karman*) の力によって[為すのである]。また、ある場合には、これらにとって、行為手段(*karaṇa*)としての力があり、ある場合にはない。

サットヴァ(マナス)をはじめとする行為手段(器官)が完全であるところ、そこでは、力に応じて、望み通りの行いがある。そうでなければその逆である。また、胎児を生むことにおいて、アートマンは、行為手段の欠陥によって、行為手段のないものになるのではない。アートマンを知る人々によって、望ましい母胎、独立性(*aiśvarya*)、解脱(*mokṣa*) は、アートマンに依存しているものであると、経験的に知られている。なぜならば、楽と苦とを作る者は、[アートマンとは] 異なったものではないからである。また、生まれつつある胎児は、[アートマンとは] 異なったものからは生まれない。種子でないものから、芽がでることはない[ように]。』(9)⁷⁰

さらに、胎児を構成する要素としての「アートマンから生じるもの」が列挙される。

⁶⁹ CS Śā 3.8: *ātmaś cāyaṁ garbhaḥ. ...sa garbhāśayam anupraviśya śukraśoṇitābhyāṁ saṁyogam etya garbhatvena janayaty ātmanā 'tmānam, ātmasaṁjñā hi garbhe. tasya punar ātmano janmānāditvān nopapadyate, tasmān na jāta evāyam ajātaṁ garbhaṁ janayati, ajāto hy ayam ajātaṁ garbhaṁ janayati. sa caiva garbhaḥ kālāntareṇa bāla-yuva-sthavira-bhāvān prāpnoti, sa yasyāṁ yasyām avasthāyāṁ vartate tasyāṁ tasyāṁ jāto bhavati. ...sato hy avasthāntaragamanamātram eva hi janma cocyate tatra tatra vayasī tasyāṁ tasyām avasthāyāṁ.*

⁷⁰ CS Śā 3.9: *na khalu garbhasya na ca mātur na pitur na cātmanaḥ sarvabhāveṣu yatheṣṭakāritvam asti. te kiṁcīt svavaśāt kurvanti, kiṁcīt karmavaśāt, kvacic caīṣāṁ karaṇaśaktir bhavati, kvacin na bhavati. yatra sattvādikaraṇasaṁpat tatra yathābalaṁ eva yatheṣṭakāritvam, ato 'vyathā viparyayaḥ. na ca karaṇadoṣād akaraṇam ātmā saṁbhavati garbhajanane, dṛṣṭaṁ ceṣṭā yonir aiśvaryaṁ mokṣaś cātmaividbhir ātmāyattam. na hy anyāḥ sukhaduḥkhaṇyoh kartā. na cānyato garbho jāyate jāyamānaḥ, nāṅkurotpattir abijāt.*

「すなわち、それぞれの母胎における発生(*utpatti*)、生命(*āyus*)、自己に関する知識(*ātmaññāna*)、マナス、感覚器官(*indriya*)、呼吸・吸気(*prāṇāpāna*)、促進(*preraṇa*)、保持(*dhāraṇa*)、形態(*ākṛti*)・声・体色の違い、楽と苦、欲求と嫌悪、精神性(*cetanā*)、堅持(*dhṛti*)、理性(*budhi*)、記憶(*smṛti*)、自我意識(*aharikāra*)、努力(*prayatna*)、以上がアートマンから生じるものである。」(10)

ここには、第1章第70-73節で「アートマンの徴表(*liṅga*)」として示されたもののうちのほとんどが含まれている。

アーユルヴェーダでは、食事や行いに関しては、特に「自分に合ったもの」(*sātmya*)を習慣とすることが、健康を維持する上で重要なことであるとされている⁷¹。この「自分に合ったもの」から生じるもの(*sātmyaja*)も、胎児を構成する要素とされている。これに関して次のように言われる。

「この胎児は、自分に合ったもの(*sātmya*)から生まれるものである。なぜなら、自分に合わないものを習慣とすること以外には、男女の不妊はなく、あるいはまた、胎児に関しても、望ましくない状態はないからである。(中略) 無病(*ārogya*)、無気力でないこと(*anālasya*)、食欲でないこと(*alolupatva*)、感覚器官が清浄であること、声・体色・ピージャが完全であること、喜びが大きいこと。以上が自分に合ったものから生じるものである。」(第11節)

同様に食物の栄養素としての「滋味」から生じるもの(*rasaja*)も、胎児を構成する要素であると言われる。

「また、この胎児は、滋味(*rasa*)から生じるものである。なぜなら、滋味がなければ、母親の生命の持続(*prāṇayātrā*)もないであろうし、まして、胎児の誕生は【ないであろう】からである。また、不正確に摂取される滋味は、胎児を発生させない。また単に、滋味の正しい摂取のみによって、胎児の発生があるのではない。ここ(アーユルヴェーダ)では、【様々なものの】集合が、【胎児の発生の】原因であると言われる【からである】。(中略) 身体の発生(*abhinirvṛtti*)・成長(*abhiṛddhā*)、生命の継続(*prāṇānubandha*)、満足(*trpti*)、肥えること(*puṣṭi*)、力(*utsāha*)。以上が³、滋味から生じるものである。」(12)

⁷¹ *sātmya*については、例えばCS Vi 1.20 参照。

CS では、マナス(*manas*)はサットヴァ(*sattva*)と呼ばれることが多い。このマナス、サットヴァについてのアートレーヤの説明は次の通りである。

「サットヴァは実に、自然に発生するもの(*aupapāduka*)である。ジーヴァに接し、身体と結び付くもの。それが離れて行くと、その【人の】性向(*śīla*)が離れ、嗜好(*bhakti*)は変化させられ、全ての感覚器官は損なわれ、体力は失われ、病気が増大する、そのようなもの。それが欠けている者は、生命(*prāṇa*)をなくす、そのようなもの。諸感覚器官を掌握するものであり、「マナス」と呼ばれるもの。それは、3種類であると言われる。清浄なもの(*śuddha*)、激質的なもの(*rājasa*)、翳質的なもの(*tāmasa*)である。実に、この【胎児】のマナスは、それ(サットヴァ)が優勢であるものであり、それとの結合(*saṁprayoga*) (マナスとサットヴァとの結合)は、二度目の生において【も】存在する。そして、もし、清浄な(*śuddha*)それ(サットヴァ)と結合されるならば、その時には、【その人は】過ぎ去った生をも記憶している。なぜなら、その【サットヴァの】継続していることに関して、人が、【前】生の記憶をもつもの」(*jāṭismara*)であると言われる、まさにその【サットヴァ】の、アートマンの記憶についての認識は、マナスの連続(*anubandha*)に依存するからである。(以下略)」(13)⁷²

ここで言われるように、マナスはサットヴァと結合するものであり、そのサットヴァには3種類あり、そのうちのどれと結合するかによって、マナスの性質が決定されるのであるとすれば、マナスとサットヴァとは完全には同義ではなく、ここで言うサットヴァとは何なのかが、問題となろう。ここではサットヴァは、「自然に発生するもの」(*aupapāduka*)とされている点が注目されるが、この意味はあまり明確ではない。胎児の構成要素としてのサットヴァから生じるもの(*sattvaja*)については、次のようなものが列挙されおり、サットヴァとは人間の性格

⁷² CS Śā 3.13: *asti khalu sattvam aupapādukaṁ. yaj jīvaṁ spṛkṣarīreṇābhisambadhnāti, yasminn apagamana-puraskṛte śīlam asya vyāvartate, bhaktir viparyasyate, sarvendriyāṇy upatapyante, balaṁ hīyate, vyādhaya āpyāyyante, yasmād dhīnaḥ prāṇāñ jahāti, yad indriyāṇām abhigrāhakaṁ ca mana ity abhidhīyate. tat trividham ākhyāyate, śuddhaṁ, rājasaṁ, tāmasam iti. yenāsya khalu mano bhūyīṣṭhaṁ, tena dvitīyāyām ājātau saṁprayogo bhavati. yadā tu tenaiva śuddhena saṁyujyate, tadā jāter atikrāntāyā api smarati. smārtaṁ hi jñānam ātmanas tasyaiva manaso 'nubandhād anuvartate, yasyānurvṛttiṁ puraskṛtya puruṣo jāṭismara ity ucyate.*

の決定に関わっているもののようである。

「嗜好 (*bhakti*)、性向 (*śīla*)、清浄さ (*śauca*)、嫌悪 (*dveṣa*)、記憶 (*smṛti*)、迷妄 (*moha*)、放棄 (*tyāga*)、妬み (*mātsarya*)、勇気 (*śaurya*)、恐れ (*bhaya*)、怒り (*krodha*)、倦怠 (*tandrā*)、力 (*utsāha*)、鋭さ (*taikṣṇya*)、穏やかさ (*mārdava*)、威厳 (*gāmbhīrya*)、落ち着きのなさ (*anavasthitatva*)。」(13)

アートレーヤは、これら様々なものの集合 (*samudāya*) から胎児が発生すると主張するのであるが、これに対して、対論者バロドヴァージャは、再び次のような疑問を提示する。

〈疑問1〉：胎児が、様々なものの集合から発生するならば、それはどのようにして構成される (*sam-√dhā*) のか？なぜ集合を起源とする胎児が、人間の形態をもつものとして生じ、そして、人間は人間を起源とするものであると言われるのか？

〈疑問2〉：人間が人間を起源とするものであるならば、なぜ、様々な知的、身体的障害をもった者から生まれた者が、必ずしも親と同じように障害をもった者となるわけでないのか？

〈疑問3〉：(疑問2に関連して) 知る主体 (*jñā*) であるアートマンは、感覚器官が障害をうけている場合には、知る主体でないものなのか？(15)

この3つの疑問に対して、アートレーヤは次のように回答する。

〈疑問1への回答〉

「…生類の母胎は、4種である。胎盤、卵、湿気、芽である。実に、これらの母胎は、4種類ではあっても、一つ一つの母胎は、数えきれない差異をもつものである。生類の外観の相違は、数えきれないものであるからである。このうち、胎生と、卵生の生物のうち、これらの胎児をつくる〔原因となる〕ものは、それぞれの母胎に達する。〔そして〕それぞれの母胎において、それぞれの色形をもつものとなるのである。例えば、それぞれの蜜蠟〔で作られた〕型に流し込まれる、金・銀・銅・錫・鉛、それらがもし、人間の鋳型に達すると、そのときには、人間の形態をもつものとして生じるように。そのように、集合を起源とするその胎児は、人間の形態をもつものとして生じるのである。そして、人間は人間を起源とするものであると言われるのである。その母胎であることによって。」(16)⁷³

⁷³CS Śā 3.16:… *bhūtānām caturvidhā yonir bhavati, jarāyvaṇḍasvedodbhidaḥ. tāsāṃ khalu catasṛṇām*

〈疑問2への回答〉

「…受精体 (*bīja*) において、それぞれの身体部分の〔それぞれに対応する〕受精体の部分が障害されると、そのそれぞれの身体部分の変異 (*vikṛti*) が生じる。また、障害されないことによって〔変異は〕生じない。このことから、ここでは両方の可能性があるのである。また、全ての感覚器官は、アートマンから生じるものである。これら〔諸感覚器官〕の、存在・非存在の原因は、天命 (*daiva*) である。このことから、愚かな者等から生まれた者たちは、必ずしも親と似たものとなるわけではないのである。」(17)⁷⁴

〈疑問3への回答〉

「また、アートマンは、諸感覚器官が存在していれば知る主体であり、存在していなければ、知る主体でないものであるわけではない。なぜなら、アートマンは決してサットヴァ (マナス) をもたないものではなく、個々の知識は、個々のサットヴァ (マナス) によって、知覚されるからである。」(18)⁷⁵

「行為者にとって、感覚器官が存在しないことによって、行なうべきことに関する知識は生じない。ある条件によって存在しているその行為は、そのある条件がなければ存在しない。」(19)⁷⁶

「[たとえば] 壺をつくる陶工は、[作り方を] 知っていても、粘土が存在しないことによって、[行為を] 発動しない〔ように〕。また、この大いなるアートマンを知る力をもつ、最高のアートマン (*adhyātman*) が、聞かれねばならない。」(20)⁷⁷

api yonīnām ekaikā yonir aparisaṃkhyeya-bhedā bhavati, bhūtānām ākṛti-viśeṣāparisaṃkhyeyatvāt. tatra jarāyujānām aṇḍajānām ca prāṇinām ete garbhakarā bhāvā yāṃ yāṃ yonim āpadyante, tasyāṃ tasyāṃ yonau tathātathārūpā bhavanti. yathā, kanaka-rajata-tāmra-trapu-sisakāṇy āsicyamānāni teṣu teṣu madhūcchiṣṭavigraheṣu, tāni yadā manuṣyabimbam āpadyante tadā manuṣyavigraheṇa jāyante, tasmāt samudāya-prabhavaḥ saṃ garbho manuṣyavigraheṇa jāyate. manuṣyaś ca manuṣyaprabhava ucyate, tady-onitvāt.

⁷⁴CS Śā 3.17: … *yasya yasya hy aṅgāyavyasya bīje bījabhāga upatāpto bhavati, tasya tasyāṅgāyavyasya vikṛtir upajāyate, nopajāyate cānupatāpāt. tasmād ubhayopapattir apy atra. sarvasya cātmajānāndriyāṇi, teṣāṃ bhāvābhāvahetur daivaṃ. tasmān naikān tato jādātibhyo jātāḥ pitṛsadṛśarūpā bhavanti.*

⁷⁵CS Śā 3.18: *na cātmā satsu indriyeṣu jñāḥ, asatsu vā bhavaty ajñāḥ. na hy asattvaḥ kadācid ātmā, sattvaviśeṣāc copalabhyate jñānaviśeṣa iti.*

⁷⁶CS Śā 3.19: *na kartur indriyābhāvāt kāryajñānaṃ pravartate / yā kriyā vartate bhāvaiḥ sā vinā tair na vartate //*

⁷⁷CS Śā 3.20: *jānann api mṛdo 'bhāvāt kumbhakarṇ na pravartate /*

「また、感覚器官を制御し、動きやすいマナスを制御して、アートマンを知る者は、最高のアートマンに到達して、自身の知識において、確固としたものとなる。」(21)⁷⁸

「感覚器官と言葉と動きが止まっている眠っている人が、夢を見た時、[感覚器官の] 対象と苦・楽を知覚する。このことから、[アートマンは] 知る主体でないものではないと教えられている。」(23)⁷⁹

「アートマンについての知識がなければ、1つの知識も決して発動しない。なぜなら、1つの存在がなければ、原因がないということもないからである。」(24)⁸⁰

これでアートレーヤとバラドヴァージャ⁸¹の討論は終了する。このように、この章でも最後に問題となるのはやはり、アートマンである。

以上見てきた通り、この章は、個体としての胎児の発生機序、構成要素についての解明を主題とするものであり、CS Śā 第1章で、哲学的な文脈で語られていたアートマンが、この章では、実際の人間の誕生という場面に即して、改めて解説されているわけである。

śrūyatām cedam adhyātmam ātmajñānabalaṃ mahat //

⁷⁸CS Śā 3.21: *indriyāṇi ca saṃkṣīpya manaḥ saṃkṣīpya cañcalam /*

praviśyādhyātmam ātmajñāḥ sve jñāne paryavasthitāḥ //

⁷⁹CS Śā 3.23: *nivṛttendriya-vāk-ceṣṭaḥ sūptāḥ svapnagato yadā /*

viśayān sukhaduḥkhe ca vetti nājñō 'py ataḥ smṛtāḥ //

cf. VS 9.23; PDhS *Svapnaprakaraṇa* (D.ed.p.183-184) にもほぼ同内容の記述が見られる。

⁸⁰CS Śā 3.24: *nātmajñānādṛte caikaṃ jñānaṃ kiñcit pravartate /*

na hy eko vartate bhāvo vartate nāpy ahetukaḥ //

⁸¹アーユルヴェーダの起源に関する神話的な記述(CS Sū 1.4-33)の中にもバラドヴァージャ(Bharadvāja)という名前が見える(本論文 1.1 Carakasamhitā についての 項参照)。しかもそこでは、バラドヴァージャは聖仙たちを代表してインドラ神のもとに赴き、最初にアーユルヴェーダを学んだ聖仙であるとされ、アートレーヤにとっての師ということになっている。Debiprasad Chattopadhyaya は、このアートレーヤの師としてのバラドヴァージャとCS Śā 第3章でアートレーヤに対立し論破される人物とは同一人物であるとみなし、CSの成立過程において、古い時代のアーユルヴェーダの権威者であるバラドヴァージャと、新しい権威者であるアートレーヤの関係が逆転した結果であろうと見ている(Chattopadhyaya 1977 pp.404-424)。しかし、アートレーヤの師としてのバラドヴァージャと、対論者としてのバラドヴァージャが同一人物であるかどうかについては、CSのテキストからは判断がつかず、Chattopadhyaya の推理には無理があると言うべきであろう。

1.3.4 Carakasamhitā, Śārīrasthāna 第4章

CS Śā 第4章は、45節からなる。このうち最後の4節のみが韻文で、他はすべて散文である。この章には質問者も対論者も登場せず、アートレーヤの教説のみで構成されている。概略は以下の通りである。

CS Śā 第4章(全45節)

「胎児の降下」[についての] 大きい(*mahatī garbhāvakrāntī*) 章

1-2 序

3 この章の内容説明

4 胎児は何から生じるか

5 胎児の定義

6 胎児は何の(*vikāra*) か

7-8 アートマンについて

9-11 妊娠1-3 か月目の胎児

12 胎児の5大元素(*vikāra*) であるもの

13 人間(*puruṣa*) と世界(*loka*)

14 胎児の出生後に生じるもの、性差について

15 *dvaiḥṛdayya* について

16 妊娠と *dvaiḥṛdayya* の徴候について

17-19 妊婦が欲するもの、胎児に障害を与えるものについて

20-26 妊娠4-10 か月目の胎児

27-29 胎児の成長の条件について

30-32 胎児の異常について

33 アートマンと個々の知覚(*viśeṣopalabdhi*) について

34 身体とサットヴァの病素(*doṣa*) について

35 身体発生の4種

36-40 サットヴァの分類について

41 この章の意義

42-45 まとめの詩節

前章(CS Śā 第2,3章)までは、胎児の形成に至るまでの様々な問題がテーマとされていたが、この章では、受精体と結合し、胎児の形をとったアートマンのその後の状態が説明される。それは具体的には、出産までのひと月毎の母胎中での胎児の成長過程の詳細な記述という形で、抽象的には、5大元素の身体内への取り込みと、それら5大元素の身体内での変容についての説明という形で明らかにされる。さらに、この章の末尾では、胎児（アートマン）の成長と共にあきらかとなる各個人の気質、性格を形作るものとしてのサットヴァ（マナス）の分類についての記述が見られる。

胎児となったアートマン

この章の最初の部分では、CS Śā 第1および第3章で説明された内容が繰り返される。すなわち、胎児は父母、アートマン、自分に合ったもの、滋味、サットヴァ（マナス）から生じたものの集合体であること(4)、精液と血液とジーヴァの結合によって胎児となること(5)、胎児は5大元素が変異(*vikāra*)したものに精神性(*cetanā*)を加えた6つの要素からなるものであること(6)、である。

そして、第7節以降では、アートマン（ジーヴァ）が次の身体に入った後の段階についての様々な事柄が、時間順に解明されて行く。

アートマンが最初に行うことは、5大元素の性質(*guṇa*)を空(*ākāśa*)から順に受け取ることであるという。これについて次のように説明される。

「…このように、興奮状態となったアートマンによって駆り立てられ、また、[アートマンによって] 支配された、精液(*bija*)の形をとる身体要素が、男性の身体から出て、しかるべき道筋を通して、子宮に入り、血と結合する。」(7)⁸²

「ここで、最初に、精神性要素(*cetanādhātu*)であり、サットヴァ（マナス）を器官としてもつものが、[5大元素の] 性質(*guṇa*)の把握のために現れる。（中略）それは、性質を得る際に、他の性質よりも先に、空を受け取る。（中略）そのように、身体を把握する時にもまた、現われつつあるものが、まずはじめに、まさに空を受け取る。そして次第により明瞭な性質をもつ風をはじめとする4つの要素（元素）を[受け取る]。しかしまた、

実に、このすべての性質を得ることは、わずかな時間によるものである。」(8)⁸³

この記述の直後に、1か月毎の胎児の成長過程についての記述が続く。その1～3か月目についての記述は次の通りである。

「その、全ての性質をもち、胎児となったものは、最初の月には、凝結したもの(*saṁ-mūrcchita*)、すべての要素が[まだ]明らかではないもの(*sarvadhātukaluṣikṛtaḥ*)、粘液であるもの(*khetabhūta*)、明瞭ではない形態をもつもの(*avyaktavigraha*)、[すでに] 存在する身体部分と[まだ] 存在しない部分とをもつもの(*sadasadbhūtāṅgāvayava*)である。」(9)

「2か月目には、丸い塊(*piṇḍa*)である、ガナ(*ghana*)、あるいはペーシー(*peśi*)、あるいはアルブダ(*arbuda*)となる。このうち、ガナは男性、ペーシーは女性、アルブダは中性(*napuṁsaka*)である。」(10)

「3か月目にはすべての感覚器官とすべての身体部分とが同時に発生する。」(11)

5大元素の性質(*guṇa*)

この後、さらに出産に至るまでの1か月毎の胎児の状態の説明⁸⁴が続くが、その記述の間に、人間の身体における5大元素の性質(*guṇa*)から変容したものについての説明がある。それは次の通りである。

「このうち、この[胎児の] 空(*ākāśa*)の性質を持つものは、音声(*śabda*)、聴覚器官(*śrotra*)、軽さ(*lāghava*)、微小さ(*saukṣmya*)、識別[能力] (*viveka*)であり、

風(*vāyu*)の性質を持つものは、触覚(*sparsa*)、触覚器官(*sparsana*)、荒さ(*rauṣya*)、動作(*preraṇa*)、[身体] 要素を形成すること(*dhātuvyūhana*)、身体の活動(*ceṣṭā*)であり、

火(*agni*)の性質を持つものは、色形(*rūpa*)、視覚器官(*darśana*)、光(*prakāśa*)、消化(*pakti*)、熱(*auṣṇya*)であり、

水(*ap*)の性質を持つものは、滋味(*rasa*)、味覚器官(*rasana*)、冷たさ(*śaitya*)、柔らかさ(*mārdava*)、滑らかさ(*sneha*)、潤い(*kleda*)であり、

⁸³CS Śā 4.8: *tatra pūrvam cetanādhātuḥ sattvakaraṇo guṇagrahaṇāya pravartate.sa guṇopādānakāle 'ntarikṣam pūrvam anyebhyaḥ guṇebhya upādatte. tathā dehagrahaṇe 'pi pravartamānaḥ pūrvataram ākāśam evopādatte, tataḥ krameṇa vyaktataraguṇān dhātūn vāyu-ādikāṁś caturāḥ. sarvam api tu khalu etad guṇopādānam aṇunā kālena bhavati.*

⁸⁴これについては本論文の第2章で扱う。

⁸²CS Śā 4.7: *...sa tathā harṣabhūtenātmanodīritas ca adhiṣṭhitas ca bijarūpo dhātuḥ puruṣa-śarīrād abhivṛtṭyocitena pathā garbhāśayam anupraviśyārtavena abhisamṣargam eti.*

地(*pr̥thivī*)の性質を持つものは、香り(*gandha*)、嗅覚器官(*ghrāṇa*)、重さ(*gaurava*)、安定性(*sthairya*)、物質的形態(*mūrti*)である。」(12)

「このように、この人間(*puruṣa*)は、世界に相応したものである。なぜなら、世界において物質的形態をもつ存在の差異があるように、人間においても同様である。〔また、〕人間においてそうであるように、世界においても同様であるからと、このように賢者たちは見ようとする。」(13)⁸⁵

人間(*puruṣa*)と世界(*loka*)との対応関係については、次章(CS Śā 第5章)でさらに詳しく説明される。

マナス(サットヴァ)の分類

CSにおいてはマナスが、サットヴァとも呼ばれることについては前に触れたが、そのマナス(サットヴァ)にとって、ラジャスとタマスは、身体にとっての病素(*doṣa*)と同じようなものであると言われる。

「さて、3つの、身体の病素(*śarīradoṣa*)は、ヴァータ(*vāta*)・ピッタ(*pitta*)・シュレーシュマン(*śleṣman*)であり、これらが身体を汚させる。また、サットヴァ(マナス)の2つの病素(*sattvadoṣa*)は、ラジャス(*rajas*)とタマス(*tamas*)であり、この2つがサットヴァ(マナス)を汚させる。」(34)

そしてサットヴァ(マナス)は、大別すると、清浄なもの(*śuddha*)、ラジャスによって汚されたラジャス的なもの(*rājasa*)、タマスによって汚されたタマスのなもの(*tāmasa*)の3種であると言われ、さらにこの3種のサットヴァは、それぞれ数えきれないほどの多様性をもつものであるとされる(36)。その多様性について、第37節では清浄なサットヴァを、ブラフマンのようなもの、聖仙のようなもの、インドラのようなもの、ヤマのようなもの、ヴァルナのようなもの、クベーラのようなもの、ガンダルヴァのようなものの7種に分類し、第38節ではラジャス的なサットヴァを、同様にアスラ、ピシャーチャ、ラクシャス、ヘビ、プレータ、鳥のようなものの6種に分類し、第39節ではタマスのサットヴァを、家畜、魚、木のようなものの3

種に分類し、それぞれについて解説している。すなわちここでは、数えきれないほどの多様性をもつものである人間ひとりひとりの気質、性格の分類が試みられているわけである。

以上のようにCS Śā 第4章では、胎児となったアートマンの成長過程の解明と、その性格の分類が主要なテーマとされている。

1.3.5 Carakasamhitā, Śārīrasthāna 第5章

CS Śā 第5章は、26節からなる。冒頭から第12節まではすべて散文、第13節以降はすべて韻文で構成され、アグニヴェーシャとアートレーヤの間答形式をとっている。その概略は以下の通りである。

CS Śā 第5章(全26節)

「人間の考察」(*puruṣavicaya*)の章

1-2 序

3-5 人間(*puruṣa*)と世界(*loka*)の対応関係と類似性の指示

6-8 人間と世界の類似性を指示した目的について

9-12 生起(流転)(*pravṛtti*)の根本(*mūla*)と止滅(*niṣṛtti*)(=*mokṣa*)の方法

13-18 サットヴァとブッディについて

19 ブッディについて

20 寂静(*śānti*)について

21 ブラフマンについて

22 アートマンと解脱について

23 寂静(*śānti*)の同義語について

24 完全な寂静(*praśama*)について

25-26 まとめの詩節

この章では、前章までとは大きく異なり、人間と世界との対応関係、倫理的な規定、さらに解脱の問題が主題とされている。また、この章ではブラフマンについても言及される。

⁸⁵CS Śā 4.13: *evam ayaṃ lokasaṃmitaḥ puruṣaḥ. yāvanto hi loke mūrtimanto bhāvaṣeṣās tāvantaḥ puruṣe, yāvantaḥ puruṣe tāvanto loke iti. budhās tu evaṃ draṣṭum icchanti.*

人間と世界について

前章でアートレーヤは、「この人間(*puruṣa*)は、世界に相応したもの(*lokasaṃmita*)である。」(CS Śā 4.13)と述べたが、それについてアグニヴェーシャが、この章でさらに詳しい説明を求める(3)。それに対するアートレーヤの回答は、次のように人間と神格および世界との対応関係を説明するものである。

「この人間の物質的形態は地、湿気は水、体熱は火、呼吸(*prāṇa*)は風、空隙(*suṣira*)は空、内なるアートマン(*antarātman*)はブラフマン(*brahman* neu.)である。実に、世界においてブラーフミー(*brāhmī*)が豊饒(*vibhūti*)であるように、同様に、人間においても、内なるアートミキー(*āntarātmikī*)は豊饒である。世界におけるブラフマンの豊饒さは、プラジャーパティ〔によるもの〕であり、人間における内なるアートマンの偉大さは、サットヴァ〔によるもの〕である。...(中略)...世界にとっての創造の始まり(*sargādi*)であるものは人間にとっての受胎(*garbhādhāna*)であり、クリタユガ(*kṛtayuga*)であるものは幼年期(*bālya*)であり、トレーター(*tretā*)〔ユガ〕は青年期(*yauvana*)であり、ドヴァーパラ(*dvāpara*)〔ユガ〕は壮年期(*sthāvirya*)であり、カリ(*kali*)〔ユガ〕であるものは病的な(*āturya*)〔状態〕であり、ユガの終わり(*yugānta*)は死(*maraṇa*)である。」(5)

これを理解した後、アグニヴェーシャは、ではこのような人間と世界との共通性(*sāmānya*)の教示の目的はなにか? と再度問いかける。これに対するアートレーヤの回答は次の通り。

「...アートマンのなかにあらゆる世界を、また同じように、あらゆる世界のなかにアートマンを見る人に、真実の知性(*satyā buddhi*)が、生じるのである。なぜなら、アートマンのなかにあらゆる世界を見る人にとって、アートマンこそが楽・苦を作る者であり、他のものではないのであるからと。また、行為より成ることから、原因等に結びついているあらゆる世界が、「私」であるを知って、まず、知識が、終結(解脱)(*apavarga*)のために生ぜしめられる〔からである〕。」(7)⁸⁶

⁸⁶CS Śā 5.7: ...*sarvalokam ātmany ātmānaṃ ca sarvaloke samam anupaśyataḥ satyā buddhiḥ samutpadyate. sarvalokaṃ hy ātmani paśyato bhavaty ātmaiva sukhaduḥkhaṇyoh kartā nānya iti. karmātmakatvāc ca hetvādibhir yuktaḥ sarvaloko 'ham iti viditvā jñānaṃ pūrvam utthāpyate 'pavargāyati. tatra saṃyogāpekṣī lokaśabdaḥ. śaḍdhātusamudāyo hi sāmāny atah sarvalokaḥ.*

「それ(世界)は、原因、発生、増大、災害、分離をもつ。このうち、原因は〔人間にとっては〕発生の原因であり、発生は誕生であり、増大は肥えることであり、災害は苦しみが到来することであり、分離は6つの要素の分離(*śaḍdhātuvibhāga*)であり、それは、ジーヴァが去ることであり、それは、呼吸が止まることであり、それは滅亡であり、それは世界の本性である。また、その〔分離の〕根本は、すべての災害の生起(流転)(*pravṛtti*)であり、また〔その〕消滅は、〔すべての災害の〕止滅(還滅)(*nivṛtti*)である。「生起(流転)は苦であり、止滅(還滅)は楽である」というふうにあらわれたその知識、それは真実(*satya*)である。その〔知識の〕原因は、あらゆる世界〔と人間と〕の共通性についての知識である。以上が共通性の教示の目的であると〔アートレーヤは言った〕。」(8)⁸⁷

つまり人間と世界との共通性を示した目的は、「生起は苦であり、止滅は楽である」という真実の知識を得て、さらには解脱へと向かうためであるとされているのである。ここで言われる「生起」(*pravṛtti*)とは、輪廻における「流転」を、「止滅」(*nivṛtti*)とは輪廻の止滅であり解脱を意味しているものと見てよいであろう。また、「6つの要素の分離」(*śaḍdhātuvibhāga*)という語が出てくるが、人間を構成する6つの要素とは、CS Śā 1.16ab; 4.6 では、地水火風空の5大元素と精神性(*cetanā*)とされていたが、本章第4節では、「6つの要素の集合したものが、人間という言葉を得る。すなわち、地、水、火、風、空、未展開のブラフマンである。」⁸⁸とされ、世界についても、「あらゆる世界は、一般的に、6つの要素の集合(*śaḍdhātusamudāya*)である。」(7)という表現が見られる。

輪廻の原因

以上のような論議を踏まえて、アグニヴェーシャはさらにアートレーヤに問いかける。「生起(*pravṛtti*)は、どのような根本(*mūla*)をもつものであるのか? また、止滅(*nivṛtti*)についての方法

⁸⁷CS Śā 5.8: *tasya hetuḥ, utpattiḥ, vṛddhiḥ, upaplavaḥ, viyogaś ca. tatra hetur utpattikāraṇaṃ, utpattir janma, vṛddhir āpyāyanam, upaplavo duḥkhāgamaḥ, śaḍdhātuvibhāgo viyogaḥ sajīvāpagamaḥ sa prāṇanirodhaḥ sa bhaṅgaḥ sa lokasvabhāvaḥ. tasya mūlaṃ sarvopaplavānāṃ ca pravṛttiḥ, nivṛttir upamaḥ. pravṛttir duḥkhaṃ, nivṛttiḥ sukham iti yaj jñānam utpadyate tat satyam. tasya hetuḥ sarvaloka-sāmānyajñānam. etat prayojanaṃ sāmānyopadeśasyeti.*

⁸⁸CS Śā 5.4: ...*śaḍdhātavaḥ samuditāḥ puruṣa iti śabdaṃ labhante. tadyathā, pṛthivy āpas tejo vāyur ākāśaṃ brahma cāvryaktam iti. ...*

これとまったく同じ表現が BhS Śā 5.11 にも見られる。

(*upāya*) とは何か? と。」(9) この問いに答えて、アートレーヤは、次のようにまず輪廻の原因について説く。

「... 生起は、迷妄・欲望・嫌悪・行為を根本としているものである⁸⁹。なぜなら、それ（生起）から生じた、自我意識 (*ahaṅkāra*)・執着 (*saṅga*)・懷疑 (*saṃśaya*)・増長 (*abhisamplava*)・墮落 (*abhyavapāta*)・逆行 (*vipratyaya*)・無差別 (*aviśeṣa*)・〔解脱のための〕⁹⁰（正しい）手段ではないこと (*anupāyā*) が、あたかも、非常に大きな枝をもつ木々が、若木を圧倒するように、人間を圧倒するかのように立っているからである。それらによって圧倒されたものは、〔輪廻における〕⁹¹存在 (*sattā*)〔であること〕を超えることはない。...」(10)⁹²

これに続いて、上に示された自我意識、執着、懷疑、増長、墮落、逆行、無差別、〔解脱のための〕手段ではないことの8種の輪廻の原因が次のようにそれぞれ説明される。

「このうち自我意識は、「私はこのような生まれ・容姿・富・行ない・知性・習慣・学識・氏族・年齢・体力・威光をそなえている」と〔考えること〕であり、終結（解脱）のためでなく、マナス・言葉・身体の行為をもつこと、それが執着であり、行為の果報・解脱・人間の来世の存在などが存在するのがあるいは存在しないのかと〔疑うこと〕が、懷疑であり、

「私はあらゆる状態において他とは異なったものであり、私は創造者であり、私は生まれつき完成されたものであり、私は身体・感覚器官・ブッディ・記憶の特別の集合体である」というとらえかたが増長であり、

母・父・兄弟・妻・子・親族・友人・召し使いの集団は私のものであり、また私は、集団のものであるということが、墮落であり、

為されるべきこと・為されるべきでないこと、有益なこと・無益なこと、良いこと・悪いことに対して逆に固執することが、逆行であり、

⁸⁹ *moheccchādveṣakarma* は、「迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為」ともとれる。CS Śā 1.53cd には、「集合体とも呼ばれるプルシャは、しかし、迷妄・欲望・嫌悪・行為から生じるものである」(*puruṣo rāsisaṃjñas tu moheccchādveṣakarmajaḥ*.) という表現も見られる。

⁹⁰ CP の解釈に従って補う。

⁹¹ CP の解釈に従って補う。

⁹² CS Śā 5.10: ... *moheccchādveṣakarmamūlā pravṛttiḥ. tajjā hy ahaṅkāra-saṅga-saṃśayābhisamplava-abhyavapāta-vipratyayāviśeṣānupāyās taruṇam iva drumam ativipulaśākhās taravo 'bhibhūya puruṣam avatatyaiivottīṣṭhante. yair abhibhūto na sattām ativartate.*

知る主体と知る主体でないもの、質料因と派生物、生起と止滅が同様に見えることが無差別であり、

灌水・断食・アグニホートラ・〔1日に〕3回〔ソーマを〕搾ること・灌頂・〔祭場に〕招き入れること・〔人におこなってもらう〕祭式・〔自分でおこなう〕祭式・勧請・水と火に入ることなどが企てられることがまさに、〔解脱のための〕（正しい）手段ではないことであると言われる。... (中略) ... このような自我意識をはじめとする欠陥 (*doṣa*) によって、つき動かされつつあるものは、生起 (*pravṛtti*) を越えて行くことはない。また、それ（生起）は罪禍 (*agha*) の根本である。」(10)⁹³

「止滅は終結である。それは最高のものであり、それは寂静であり、それは不滅のものであり、それはブラフマンであり、それは解脱である。」(11)⁹⁴

ここでは灌水・断食・アグニホートラなどの祭式行為が、解脱のための正しい手段ではないとされている点が興味深い。さらに注目すべきことはこの部分の記述に極めて近い表現が、『ブッダチャリタ』(BC) 第12章第23～32節に見出せることである⁹⁵。それは次の通りである。

「無知と行為と渴望とは輪廻の原因であると認識されるべきである。

この3つのものに留まっている生類は、その存在性を超えることはない。」(BC 12.23)⁹⁶

「〔それは〕逆行、自我意識、不確実さ、増長、無差別、〔正しい〕手段ではないことによ

⁹³ CS Śā 5.10: *tatraivaṃ jāti-rūpa-vitta-vṛtta-buddhi-śīla-vidyābhijana-vayo-vīrya-prabhāva-saṃpanno 'ham ity ahaṅkāraḥ, yan mano-vāk-kāya-karma nāpavargāya sa saṅgaḥ, karmaphala-mokṣa-puruṣapretya-bhāvādayaḥ santi vā neti saṃśayaḥ, sarvāvasthāsu ananyo 'ham ahaṃ sraṣṭā svabhāva-saṃsiddho 'ham ahaṃ śarīrendriya-buddhi-smṛti-viśeṣa-rāsīr iti grahaṇam abhisamplavaḥ, mama mātṛ-pitṛ-bhrātṛ-dārāpatya-bandhu-mitra-bhṛtyagaṇo gaṇasya cāham ity abhyavapātaḥ, kāryākārya-hitāhita-śubhāśubheṣu viparīta-abhiniveśo vipratyayaḥ, jñājñāyoh prakṛtīvikārayoh pravṛttinivṛttyoś ca sāmānya-darśanam aviśeṣaḥ, prokṣaṇānaśanāgnihotra-triṣavaṇābhīyukṣaṇāvāhana-yājana-yajana-yācana-salīlahutāśanapraveśādayaḥ samārambhāḥ procyanṭe hy anupāyāḥ.*

... *evam ahaṅkāradibhir doṣair bhrāmyamāṇo nātivartate pravṛttiṃ, sā ca mūlam aghasya.*

⁹⁴ CS Śā 5.11: *nivṛttir apavargaḥ. tat paraṃ praśāntaṃ tat tad akṣaraṃ tad brahma sa mokṣaḥ.*

⁹⁵ cf. Johnston 1937 p.51.

⁹⁶ BC 12.23: *ajñānaṃ karma tṛṣṇā ca jñeyāḥ saṃsārahetavaḥ / sthīto 'smiṃs tritaye jantus tatsattvaṃ nātivartate //*

る。」(BC 12.24)⁹⁷

先に見たように、CS Śā 5.10では、「それらによって圧倒されたものは、〔輪廻における〕存在 (*sattā*)〔であること〕を超えることはない。」(*yair abhibhūto na sattām ativartate.*)となっていた部分と、BCの「...その存在性を超えることはない。」(*tatsattvam nātivartate*)という箇所の *sattā* と *sattva* の違いは重要であろう。また、CSで挙げられている8種の欠陥のうち、「懷疑」(*saṃśaya*)が、BC 12.24では「不確実さ」(*saṃdeha*)とされているが、意味の上ではそれほど大きな違いはなく、これ以外の7種の欠陥については、CSとBCとはまったく同じである。そしてBCのこれ以降の部分(12.24-32)でもCSと同様にこれら8種の欠陥についての説明が続く。

解脱の方法

これに続く第12節では、解脱の方法が明らかにされる。その全文を以下に掲げる。

「ここで、解脱を望むものたちにとっての向上〔の方法〕(*udayana*)を述べよう。

このうちまず最初に、世界の欠陥を見て解脱を望むものにとっては、先生に従うこと、その〔先生〕の教えを実行すること、火(*agni*)に仕えること、法典(*dharmaśāstra*)に従うこと、その〔法典の〕内容を理解すること、その〔法典の理解〕によって〔法典を〕堅固なものとする、そこ(法典)で述べられている通りに行なうこと、良き人々を崇拝すること、良くない人々を避けること、悪人と接触しないこと、あらゆる生類に有益な荒々しくない真実を、適当な時期に吟味して語ること、あらゆる生物に対して、あたかも自分自身に対するかのように配慮すること、あらゆる女性を想起しないこと、望まないこと、求めないこと、話しかけないこと、あらゆる所有物を放棄すること、覆い隠すためには腰布が、鉈物性の〔染料で染めた〕赤色の着物が、ぼろを縫うために針と針の容器が〔用いられること〕、清潔さを保つために水壺が〔用いられること〕、杖を持つこと、乞食をするために容器が〔用いられること〕、生命を維持するために〔一日に〕一度、調理されていない得られたままの食物をとること、疲れをとるために萎れて乾いた葉や草をひろげて置くこと、瞑想(*dhyāna*)のために身体を結び付ける布が〔用いられること〕、森のなかで家なく

⁹⁷BC 12.24: *vipratyayād ahaṅkāṛāt saṃdehād abhisamplavāt / aviśeṣānupāyābhyāṃ saṅgād abhyavapātataḥ //*

住むこと、倦怠・睡眠・怠惰等の行為を避けること、感覚器官の対象への愛情や焦燥を抑えること、寝ること・立つこと・動くこと・見ること・食事をする・休養すること・身体部分を動かすこと等の開始に際しては、想起を前提とした活動が〔なされるべきこと〕⁹⁸、もてなし・称赞・非難・侮蔑に寛容であること、 飢え・渇き・苦勞・疲勞・冷たさ・暑さ・風・雨・樂・苦の感覚に耐えること、悲しみ・落胆・自惚れ・不安・興奮・貧欲・愛欲・妬み・恐れ・怒り等によって動揺しないこと、自我意識等に対して、「災い」と称すること、世界と人との創造等に共通性を見ること、〔解脱のためになすべきことの〕⁹⁹なすべき時間が過ぎ去ることを恐れること、ヨーガのはじめには常に無頓着ではないこと、生氣と氣力をもつこと、終結(解脱)(*apavarga*)のために知恵・堅固さ・記憶の力を身につけること、チェータスに諸感覚器官を繋ぎ止めること、アートマンにチェータスを〔繋ぎ止めること〕、また、アートマンを〔アートマンに繋ぎ止めること〕、要素の区別によって身体部分を数え、観察すること、あらゆる原因をもつものは苦であり、自分のものでないものであり、恒常でないものであると認めること、あらゆる生起(*pravṛtti*)に対して、罪禍(*agha*)と称すること、あらゆる放棄(*saṃnyāsa*)に、樂(*sukha*)があると決定すること。これが終結(解脱)(*apavarga*)のための道である。これより他の仕方では、束縛される。このよう

に向上の〔方法〕が述べられた。」(12)¹⁰⁰

⁹⁸CP: 「「想起を前提とした活動」とは、私はだれか、何のために愛欲を捨てることなどの〔行いが〕なされるのか、などとあらゆる点において想起すべきであるという意味。」

⁹⁹CPの解釈に従って補う。

¹⁰⁰CS Śā 5.12: *tatra mumukṣūṇām udayanāni vyākhyāsyāmaḥ. tatra lokadoṣadarśino mumukṣor ādita evācāryābhigamanam, tasyopadeśānuṣṭhānam, agner evopacaryā, dharmasāstrānugamanam, tad artha-avabodhaḥ, tenāvaṣṭambhaḥ, tatra yathoktāḥ kriyāḥ, satām upāsanaṃ, asatām parivarjanam, asaṅgatir janena, satyaṃ sarvabhūtahitam aparūṣam anatikāle parikṣya vacanaṃ, sarvapraṇiṣu cātmanīvāvekeṣā, sarvāsām asmaranam asanikalpanam aprārthanam anabhibhāṣaṇam ca strīṇām, sarvapariagrahatyāgaḥ, kaupīnam pracchādanārtham, dhātu-rāga-nivasanam, kanthā-sīvanahetoḥ sūcī-pippalakam, śaucādhānahetor jalakuṇḍikā, daṇḍadhāraṇam, bhaikṣacaryārtham pātram, prāṇadhāraṇārtham ekakālam agrāmyo yathopapanno 'bhy-avahāraḥ, śramāpanayanārtham śīrṇa-śuṣka-parṇa-tṛṇāstaraṇopadhānam, dhyānahetoḥ kāyanibandhanam, vaneṣu aniketavāsaḥ, tandrā-nidrālasyādi-karma-varjanam, indriyārtheṣu anurāgopatāpanigrahaḥ, sūpta-sthita-gata-prekṣitāhāra-vihāra-pratyāgacēṣṭādikeṣu ārambheṣu smṛtipūrvikā pravṛttiḥ, satkāra-stuti-gaṇha-avamānakṣamatvaṃ, kṣut-pipāsāyāsa-śrama-śītoṣṇa-vāta-varṣā-sukhaduḥkhasaṃsparśa-sahatvaṃ, śoka-dainya-mānodvega-mada-lobha-rāgerṣyā-bhaya-krodhādibhir asaṃcalanam, ahaṅkāṛādiṣṭupasarga-saṃjñā, loka-*

ここに挙げられている解脱の方法には、法典(*dharmaśāstra*)を遵守することや、苦行に関するもの、また倫理的な規定に関するものなどがあり、そのどれもが具体的実践的である点が特徴的であると言えよう。また、ここでも仏教的な色彩の表現が含まれている点に注目すべきである。さらに、「要素の区別によって身体部分を繰返し数えること」(*dhātubhedena śarīrāvayava-saṃkhyānam abhikṣaṇaṃ*)とあり、CS Śā 自体の内容を示しているかのようである。

第13節以下章末までは、この章全体の内容を総括するような、アートマン、サットヴァ（マナス）、ブッディについての韻文が続く。例えば次のような詩節が見られる。

「世界の中に広がったアートマンを、またアートマンの中に〔広がった〕世界を見る人にとって、遠いものと近いものを見る人にとって、知識を根本とする寂靜(*śānti*)は滅びることはない。」(20)¹⁰¹

「あらゆる存在を、あらゆる状態において、常に見る人にとって、清浄なブラフマンであるものにとって、結合(*saṃyoga*)は生じない。」(21)¹⁰²

「行為手段（器官）(*karaṇa*)が存在しないことによって、アートマンのしるし(*liṅga*)もまた捉えられることはない。その〔アートマン〕は、あらゆる行為手段（器官）と結びついていないことによって、離されたもの（解脱したもの）(*mukta*)と呼ばれる。」(22)¹⁰³

「良き人よ。以上のことが、疑いを離れ、迷妄・激情(*rajas*)・欲望をなくしたムニ達こそそれを知って、完全な寂靜(*praśama*)に赴くところのその識別知(*viñāna*)である。」(24)¹⁰⁴

以上概観したように、この章の主題は、人間と世界の対応関係の解明と、輪廻の原因および解脱の方法の教示であり、医学的な内容はほとんど含まれていない。その意味で、CS Śā の中

puruṣayoḥ sargādi-sāmānyāvekṣaṇaṃ, kāryakālātyaya-bhayaṃ, yogārambhe satatam anirvedaḥ, sattvotsāhaḥ, apavargāya dhī-dhṛti-smṛti-balādhānaṃ, niyamanam indriyāṇāṃ cetasi, cetasa ātmani, ātmanaś ca, dhātubhedena śarīrāvayava-saṃkhyānam abhikṣaṇaṃ, sarvaṃ karaṇavad duḥkham asvam anityam ity abhyupagamaḥ, sarvapravṛttiṣu aghasaṃjñā, sarvasaṃnyāse sukham ity abhiniveśaḥ. eṣa mārgo 'pavargāya, ato 'nyathā badhyate. ity udayanāni vyākhyātāni.

¹⁰¹CS Śā 5.20: *loke vitatam ātmānaṃ lokam cātmani paśyataḥ /*

parāvaradṛśaḥ śāntir jñanamūlā na naśyati //

¹⁰²CS Śā 5.21: *paśyataḥ sarvabhāvān hi sarvāvasthāsu sarvadā /*

brahmabhūtasya saṃyogo na śuddhasyopapadyate //

¹⁰³CS Śā 5.22: *nātamaṇaḥ karaṇābhāvāl liṅgam apy upalabhyate /*

sa sarvakaraṇāyogān mukta ity abhidhīyate //

¹⁰⁴CS Śā 5.24: *etat tat saumya viñānaṃ yaj jñātvā muktasaṃśayāḥ /*

munayaḥ praśamaṃ jagmur vīta-moha-rajah-sprhāḥ //

でも際立って特徴的であると言ふべきである。

1.3.6 Carakasamhitā, Śārīrasthāna 第6章

CS Śā 第6章「身体の考察」についての章は、34節からなる。第19節と第31-34節は韻文であるが、他はすべて散文である。その概略は以下の通り。

CS Śā 第6章（全34節）

「身体の考察」(*śarīravicaya*)の章

1-2 序

3 この章の意義

4-8 身体の諸要素と治療について

9-11 身体諸要素の増減、性質(*guṇa*)と食物について

12 身体を増大させるものについて

13 体力を増大させるものについて

14-15 食物を変化させるものとその働きについて

16 食物と身体について

17 身体の2種の性質(*mala*と*prasāda*)について

18 汚させるもの(*dūṣayitr*)について

19 医師についての詩節（以上のまとめ）

20 胎児に関するアグニヴェーシャの9つの質問

問1 腹中での胎児の初発部位はどこか?

問2 腹中では胎児はどのような状態か?

問3 腹中での食物は何か?

問4 出産の状態について

問5-6 出産後の胎児の食物、養生について

問7 神等の怒りを原因とする病について

問8 ふさわしい時の死(*kālaṃṛtyu*)と、ふさわしくない時の死(*akālaṃṛtyu*)について

問9 最長の寿命は何年か? その原因は何か?

21 問1の答、聖仙達の論議

22 問2の答

23 問3の答

24 問4の答

25-26 問5-6の答

27 問7の答

28 問8の答

29-30 問9の答

31-34 まとめの詩節

この章は、その内容から見て、前半と後半の2つの部分に分けることができる。前半は第3節から第19節までで、ここでは身体要素に関するアーユルヴェーダの理論的な基礎とも言うべき内容が扱われる。第19節の韻文は、この前半部分のまとめである。後半部分、すなわち第20節から第30節までは、胎児の出産と死に関するアグニヴェーシャの9つの質問とアートレーヤによる回答である。第31-34節の韻文はこの章全体のまとめである。この前半と後半の内容にはあまり関連性は見られない。

身体要素の均衡について

アーユルヴェーダでは、人間の身心は、様々な要素から成り立っているものであると認識されており、その意味で人間のことを、「集合体」(*samudāya*)あるいは「かたまり」(*rāśi*)と呼ぶ場合があること、また、これらの要素の分類のしかたにはいくつかの方法があること、またこのような認識方法はインドの伝統的な世界観に関連していることについては、これまでに見てきた通りである。アーユルヴェーダの医学理論の基礎をなす「7身体要素説」および「3病素説」もこのようなアーユルヴェーダの、人間についての基本的な認識方法がもとになっている。

「7身体要素説」とは、人間の身体は7種の要素(*dhātu*)から成っているとする説である。その7種の身体要素とは、〔摂取された食物の栄養素としての〕滋味(*rasa*)、血(*rakta*)、肉(*māṃsa*)、脂肪(*medas*)、骨(*asthi*)、髄(*majjā*)、精液(*śukra*)の7種類である。そして、各要素はそれぞれにつながりをもっているとされている。最初に、その人の摂取した食物が、その栄養素としての滋味(*rasa*)の形で身体中に取り込まれ、それがその人の血になり、やがて肉になりといったように、この順番で、先のものから後のものへと次第に変化していくとされるのである。ま

た、各要素は、その人の住んでいる土地、その季節、食物、生活習慣、その人自身のもっている性質などから様々に影響を受けて、常に増減している。そして、これらの要素が均衡のとれた状態にあれば、その人は健康であり、不均衡な状態にあれば、その人の身体には何らかの異常が生じるとされる。

「3病素説」の3病素(*doṣa*)とは、ヴァータ(*vāta*)あるいはヴァーユ(*vāyu*)、ピッタ(*pitta*)、シュレーシュマン(*śleṣman*)あるいはカパ(*kapha*)であり、それぞれが7身体要素と同様に身体を構成している要素である。この3病素も、他の身体要素と均衡した状態にある場合には健康を維持するのに役立つが、何らかの原因によって「激発」(*prakopa*)の状態に至ると、これらが本来もっている「汚させるもの」(*dūṣayitr*)としての性質をあらわし、要素の均衡を乱し、その人の身体に深刻な影響を与えるものであるとされている¹⁰⁵。

そして、身体要素と病素の均衡をはかり、その人の健康を維持することが、アーユルヴェーダの目的であると言われるのである。

この章の前半部分ではこのような「7身体要素説」と「3病素説」の一端が明らかにされている。例えば次のように言われている。

「ここで、身体というのは精神性(*cetanā*)の拠り所であるものであり、5大要素が変化したものの集合からなるものであり、均衡のとれた結合(*samayoga*)をもたらすものである。なぜなら、もしこの身体にある諸要素(*dhātu*)が不均衡(*vaiṣamya*)となると、その時には痛みあるいは〔身体の〕破壊をもたらすことになるからである。また、諸要素が不均衡となるということは、部分的に、また生まれつきの性質として、〔諸要素が〕増大〔あるいは〕減少するということである。」(4)¹⁰⁶

「一方、同時に、相反する諸要素の増大・減少がある。なぜなら、ある要素にとっては、増大をもたらすもの、それが、その〔要素とは〕反対の性質をもつ要素にとっては、減少をもたらすものだからである。」(5)¹⁰⁷

¹⁰⁵ 「7身体要素説」「3病素説」については、CS Sū 28.3-4; CS Ci 15.15-35; SS Sū 14.3-20, 15, 16.3-6, 21.3-4. etc.; Müller 1939; Kutumbiah 1962 pp.34-75; Meulenbeld 1974 pp.469-471 参照。

¹⁰⁶ CS Śā 6.4: *tatra śarīraṃ nāma cetanādhiṣṭhānabhūtaṃ pañcamahābhūta-vikāra-samudāyātmakam samayogavāhi. yadā hy asmiṃ śarīre dhātavo vaiṣamyam āpadyante tadā kleśam vināśam vā prāpnoti. vaiṣamyagamanaṃ hi punar dhātūnām vṛddhi-hrāsa-gamanam akārtsnyena prakṛtyā ca.*

¹⁰⁷ CS Śā 6.5: *yaugapadyena tu virodhinām dhātūnām vṛddhihrāsau bhavataḥ. yad dhi yasya dhātor vṛddhikaram tat tato viparītaguṇasya dhātoḥ pratyavāya-karam saṃpadyate.*

「このことから、まさに正しく適用される治療は、欠乏している〔あるいは〕 過多の要素を、同時に均衡のとれた状態にするものであり、過剰なものを除き、欠乏しているものを増大させるのである。」(6)¹⁰⁸

また、各身体要素にはそれぞれに20種の性質(*guṇa*)があり、各身体要素の増減は、これらと同じあるいは異なった性質をもつ食物の摂取の仕方に依存していると説明される。

「ここでは、これら〔以下のもの〕が、数えることのできる身体要素の性質(*śarīra-dhātu-guṇa*)である。すなわち、重(*guru*)・軽(*laghu*)・冷(*śīta*)・熱(*uṣṇa*)・湿(*snigdha*)・乾(*rūkṣa*)・緩(*manda*)・激(*tikṣṇa*)・固(*sthira*)・液(*sara*)・軟(*mṛdu*)・硬(*kāṭhina*)・清(*viśada*)・濁(*picchila*)・滑(*ślakṣṇa*)・荒(*khara*)・微(*sūkṣma*)・粗(*sthūla*)・粘着(*sāndra*)・流動(*drava*)である。これら〔身体要素の性質〕のうち、重であるもの、それは、重の性質をもつ食物を調理したものの繰返し〔の摂取〕によって、増大させられ、また、〔身体要素の性質のうち〕軽であるものは、〔重の性質をもつ食物を調理したものの繰返しの摂取によって、〕減少する。一方、〔身体要素の性質のうち〕軽であるものは、軽であるものによって増大させられ、重のものは〔軽であるものによって〕減少する。…」(10)

さらにこれとは別に、身体の性質を2分して次のように述べる。

「また、身体の諸性質は、概括すると、不浄なものと清浄なものとの2種である。このうち、不浄なもの、それらは、身体にとっては、苦痛をもたらすものである。すなわち、身体の穴を覆い別々に生じる〔体の〕外側に出てくるもの、完全に腐敗した〔身体〕諸要素、激発したヴァータ・ピッタ・シュレーシュマン、また、その他の身体に存在している何らかの物で身体に害を及ぼすもの、これらすべてを不浄と見なす。一方、〔これらとは〕異なったものを清浄と〔見なす〕。〔すなわち、〕性質の違いによって、重(*guru*)で始まり流動(*drava*)で終るものを、また、物質の違いによって、滋味(*rasa*)で始まり精液(*śukra*)で終るものを〔清浄と見なす〕。」(17)¹⁰⁹

¹⁰⁸ CS Śā 6.6: *tad eva tasmād bheṣajam samyagavacāryāmāṇam yugapan nyūnātirikṭānām dhātūnām sāmīyakaram bhavati, adhikam apakarṣati nyūnam āpyāyayati.*

¹⁰⁹ CS Śā 6.17: *śarīraguṇāḥ punar dvividhāḥ saṃgrahaṇa, malabhūtāḥ, prasādashūtāḥ ca. tatra mal-*

以上のようにCS Śā 第6章の前半では、アーユルヴェーダの基本とも言える身体要素についての教説が示されている。

胎児の誕生と死についての問答

CS Śā 第6章の後半は、再びアグニヴェーシャとアートレーヤの問答形式である。ここで、アグニヴェーシャは胎児の誕生と死について、9つの質問を発する(20)。その問答の内容は以下の通りである。

〈問1〉「胎児のどの部分が最初に腹中で発生するのか?」

この問いに対して、アートレーヤは、〔アーユルヴェーダの〕スートラ作者である聖仙達の多様な「論議」(*viprativāda*)として、この問題についての8人の論者の見解をその理由とともに紹介している(21)。それによれば、まずKumārasīrasa Bharadvājaが、全ての感覚器官(*indriya*)の拠り所(*adhiṣṭhāna*)であることから、「頭が、最初に腹中で発生する。」(*śiraḥ pūrvam abhinirvartate kuṣau*)とする。以下順に、Bāhlikaの医師Kāṅkāyanaは、*cetanā*の拠り所であることから心臓(*hṛdaya*)が、Bhadra Kāpyaは、食物の通路(*āhārāgama*)であることから臍(*nābhi*)が、Bhadra Śaunkaは、風(*māruta*)の拠り所であることから腸の一部(*pakvāsāyaguda*¹¹⁰)が、Baḍiśaは、人間の行為手段であること(*karaṇatva*)から手足(*hastapāda* sg.)が、VidehaのJanakaは、*buddhi*の拠り所であることから諸感覚器官(*indriya* pl.)が最初に発生するとしている。これに対してMārīci Kaśyapaは、「知覚できないことから、不可知である。」(*parokṣatvād acintyam*)とし、Dhanvantariは、「全ての〔身体〕部分の発生は同時である。」(*sarvāṅgābhinirvṛttir yugapad*)とする。このように各論者の説を順に紹介した後、アートレーヤは最後に示したダンヴァンタリの見解を「それが妥当である。」(*tad upapannam*)として支持し、人間のすべての身体部分の根本の拠り所は心臓(*hṛdaya*)ではあるものの、全てのものは相互に結び付いているために¹¹¹、母胎内では全ての部

abhūtās te ye śarīrasyābādha-karāḥ syuḥ. tadyathā, śarīracchidreṣūpadehāḥ pṛthagjanmāno bahirmukhāḥ, paripokvās ca dhātavaḥ, prakupitās ca vāta-pitta-sleṣmāṇaḥ, ye cānye 'pi kecic charīre tiṣṭhanto bhāvāḥ śarīrasyopaghātāyopapadyante, sarvāṃs tān male saṃcakṣmahe. itarāṃs tu prasāde, gurvādīṃs ca dravāntān guṇabhedena, rasādīṃs ca śukrāntān dravyabhedena.

¹¹⁰ この語の用例はCSではこの箇所だけである。CSの注釈者Cakrapāṇidattaはこの語を「*pakvāsāya*と*guda*のこと。あるいは*pakvāsāya*の近くにある*guda*すなわち*uttaraguda*のこと。」として2通りの解釈を示している。

¹¹¹ CS Śā 6.21: *... sarvāṅgānām hy asya hṛdayam mūlam adhiṣṭhānam ca keṣāṃcid bhāvānām, na ca tasmāt pūrvābhinirvṛttir eṣām; tasmād dhṛdayaprabhṛtīnām sarvāṅgānām tulyakālābhinirvṛttīḥ, sarve bhāvā hy any-*

分が同時に発生するというダンヴァンタリの説をこの議論の最終的な結論としている。

このようにアートレーヤが、自らの見解を表明することを避け、他の人物の説に同意し、それを結論として採用するといった例は、CS では他には見られない。またここでアートレーヤはダンヴァンタリ説を支持する明確な論拠を示し得ているとは言い難い。そして最も注目すべきことは、このダンヴァンタリは、アートレーヤと並ぶアーユルヴェーダの一方の権威であり、アートレーヤ学派とは異質の外科的な医術を得意とする“ダンヴァンタリ学派”の主導者であるという点である。

この議論とまったく同じテーマの議論が、SS Śā3.32 と BhS Śā 4.30 にも見られる。以下この両文献の議論の内容を紹介する。

SS はアーユルヴェーダのうちのダンヴァンタリ学派に属する文献であり、Divodāsa Dhanvantari が弟子の Suśruta に医学知識を授けるという形式で記述されている。SS Śā でも CS Śā と同様に、胎児の発育過程などの胎生学的な説明に続いて3.32で、母胎内での胎児の初発部位について、6人の論者による議論形式の記述が見られる。ここではまずŚaunakaが、主要な感覚器官の根本(*mūla*)であることから頭(*śiras*)が最初に発生するという。以下順に、Kṛtavīrya は、*buddhi* と *manas* の場 (*sthāna*) であることから心臓(*hṛdaya*) が、Pārāśarya は、そこから身体が成長することから臍(*nābhi*) が、Mārkaṇḍeya は、胎児の運動の根本をなすことから手足(*pāṇipāda* sg.) が、Subhūti Gautama は、四肢の発生がそこに結び付いていることから胴体(*madhyaśarīra*) が最初に生じるとする。これに対してダンヴァンタリはこれら全員の説を否定して、胎児の身体のすべての部分は微細であるため認識はされないが、当初からすでにそなわっており、時間の経過によって各部分があきらかになるのである¹¹²と考え、「すべての〔身体〕部分と小部分は同時に生じる。」(*sarvāṇy aṅgapratyaṅgāni yugapat sambhavanti*) と主張しこの議論の結論とする。

ダンヴァンタリ学派のSSにおいて、議論の最後にダンヴァンタリの人が登場して結論を下すのは自然なことなのであるが、ここに見られるダンヴァンタリの結論が、その論拠は別にし

て、CS Śā 6.21 で見たものと同内容であることが注目される。

アーユルヴェーダのアートレーヤ学派にはCSの他に、BhSという重要な文献が不完全ながら現存している。このBhS Śā 4.30にも同様に胎児の初発部位についての議論が見られる。ここではアートレーヤを含む7人の論者が登場する。最初にBaḍīśaが、それによって身体が安定することから、最初に発生するのは両手、両足(*hastau pādau du.*)であると主張する。そして順に、Śaunaka は、風(*vāyu*)の拠り所であることから後部の腸(*paścādguda*¹¹³)が、Kaṇḍa Kāpya は、そこにおいて脈管(*nāḍī*)が安定していることから臍(*nābhi*)が、Parāśara は、それが認識の根本をなすもの(*viññānamūlaka*)の根本(*mūla*)であることから心臓(*hṛdaya*)が、Bharadvāja は、それが身体の根本であることから頭(*śiras*)が、Kāśyapa は、理由は示さずに¹¹⁴目(*cakṣus*)がそれぞれ初発部位であるとする。最後にPunarvasu Ātreya が、すべての論者の見解を否定して、「そこにおいてすべての身体各部位が生じる」(*tatra sarve śarīrapradeśās sambhavanti*)ことから、最初に発生するのはアルブダ(*arbuda*)であると述べる。

この議論にはダンヴァンタリは登場しない。そしてアートレーヤ学派の定法に従って、ここではPunarvasu Ātreyaが自らの見解をもって結論を下している。

以上のようなCSとSSの議論の結論部分を比較することによって、CSがダンヴァンタリ学派の影響を受け、その教説の一部を自派の見解に取り入れたことが推測される。さらに、CSとBhSの議論の比較から、ダンヴァンタリ学派から影響を受ける以前の、本来のアートレーヤ自身の見解が、BhSには保存されていると見ることができるであろう。BhSはその文体や内容などから判断して、CSよりも古い要素を含む文献である可能性があり、これはその一例であると考えられる。また、アートレーヤ学派とダンヴァンタリ学派とでは、議論の登場人物の顔ぶれの違いが明らかであるのに対して、アートレーヤ学派に属するBhSの議論の参加者のほとんどは、同学派のCSの議論にも参加している。

母胎内で人間の身体のどの部分が最初に現れるのかという問いに対してBhSでアートレーヤが答えた*arbuda*という語は、CS Śā 4.10; SS Śā 3.18では2ヵ月目の胎児を示す語¹¹⁵の1つと

¹¹³ CSの議論ではBhadra Śaunakaは*pakvāśayaguda*としている。

¹¹⁴ この部分にテキストの欠落があるのかも知れない。

¹¹⁵ MBh 12.308.117, YājñS 3.75でも*arbuda*は胎児の発育段階の1つを示す語として理解し得る。また、この語

onyapratibaddhāḥ...

¹¹² SS Śā 3.32: *...evaṃ garbhasya tārūṇye sarveṣu aṅgapratyaṅgeṣu satsv api sauḥṣmyād anupalabdhīḥ, tāny eva kālaprakaraṣāt pravvyaktāni bhavanti.*

して用いられており、アートレーヤ自身がBhSで説明している通り「そこにおいてすべての身体各部位が生じる」ところの未分化な小胞状の「胎芽」(embryo)を意味する語であると考えられる。そうであるとすれば、*arbuda*という語は身体の部分ではなく、胎児の成長の初期の段階、あるいは状態を示す語であって、この議論の答えとしてはやや説明不足であると言わざるを得ない。これに対して、胎児には初期の段階からすでに人間の身体各部分が微細ながらそなわっていて、それが時間の経過とともに明らかになってくるのであるとするSSのダンヴァンタリの説は、BhSのアートレーヤ説を踏まえて、それをより詳しく解説したものと理解できる。CSにおいてアートレーヤが、あえてダンヴァンタリの見解を取り入れたのは、このようなダンヴァンタリ説の優位性が、当時の専門家の間で認められるに至ったことによるものと考えられるべきであろう¹¹⁶。あるいは、ここで言われているように、各身体部位は別々に発生してくるものではなく、あらかじめすべての部分が微細ながらもそなわっているものとは、CS Śā 2.31で触れられた、輪廻の主体である「微細身」(*sūkṣma-śarīra*)のようなものを意味しているものとも考えられる。

〈問2〜7〉は母胎の中での成長から出産までの胎児の状態についての医学的な質問が続き、その後の問8と9は、人間の死と寿命についての問答である。

〈問8〉は、人間の死には、「ふさわしい時の死」(*kālamṛtyu*)あるいは「ふさわしくない時の死」(*akālamṛtyu*)と言われるものが、あるのかないのかという問いである。

これについてアートレーヤは、ここでもいくつかの異論を紹介しながら回答している。その結論は、「ふさわしい時の死」も「ふさわしくない時の死」も、ともに存在する、というものである。ここで「ふさわしい時の死」と言うのは、ある人が、その人の命を終えることによって迎える自然な死のことであり、また、「ふさわしくない死」とは、病気や事故、あるいは誤った生活習慣などによってその人の命半ばにして迎える死のことであるとされる。つまり、人間の死とは、各人の死の時があらかじめ定められていて、その時が来れば、必ずその人は死ぬことはパーリ語形 *abbuda* として仏教文献にも同様の用例が見られる。cf. Windisch 1908 pp.109-121; Suneson 1991 pp.109-121.

¹¹⁶cf. Dasgupta 1922 II pp.316-317; Barkhuis 1986 pp.12-15.

になるといったものではないという意味である。もしそうであれば、病気の治療や、アーユルヴェーダで論じられる健康法などはまったく意味をなさないものになってしまうからである。これについて次のように言われる。

「...もし、ふさわしくない時の死がないとすると、あらゆる生命は、定められた時間量をもつものになってしまうであろう。このようであれば、健康・不健康についての知識は、理由のないものになってしまうであろう。...」(28)¹¹⁷

各個人の生命の長さ、死の時が、あらかじめ決められているのではないとすれば、*karman*と果報(*phala*)もその人の寿命には関係しないことになるが、これについては説明されていない。また、これと同様の論議は、CS Vi 3.37-38, 8.43-44 さらに *Milindapañho* (Trenckner ed. pp.302-309) にも見られ、そのどれもが、この2種の死の存在を認めるというものである。このうち、CS Vi 第3章の論議では次のように言われている。

「(あらゆる生物の生命の時間量(長さ)はあらかじめ定められているという説を否定した後)これに続いて、アグニヴェーシャは言った。尊い方よ。このようであったとしても、時間量の決まっていない生命をもつものたちにとって、どうしてふさわしい時の死(*kālamṛtyu*)あるいはふさわしくない時の死(*akālamṛtyu*)があるのですかと。」(CS Vi 3.37)¹¹⁸

「尊いアートレーヤが彼に言った。聞きなさい、アグニヴェーシャよ。乗物に正しく取り付けられ、生まれつきの性質として車軸としての性質をそなえた車軸は、また、あらゆるよい性質をそなえ、動かされつつあるそれは、然るべき時に、自身の〔生命の〕量の尽きることによってのみ停止するように、そのように、身体にそなわった生命は、力強い生まれつきの性質によって、然るべく養生すると、自身の量の尽きることによってのみ停止する。それがふさわしい時における死である。

また、この同じ車軸が、過剰な荷物を載せることによって、平坦でない道〔を通ること〕によって、道がない〔ところを通る〕ことによって、車軸の輪が壊れることによって、運ばれるものと運び手の過ちによって、ねじがはずれることによって、付属物がないことによって、転倒することによって、途中で停止するように、そのように、生命もまた、無理な企

¹¹⁷CS Śā 6.28: ...*yadī hy akāle mṛtyur na syān niyata-kāla-pramāṇam āyur sarvaṃ syāt. evaṃ gate hitāhitajñānam akāraṇaṃ syāt. ...*

¹¹⁸CS Vi 3.37: *ataḥ param agniveśa uvāca. evaṃ saty aniyata-kāla-pramāṇāyusāṃ bhagavan. katham kalamṛtyur akalamṛtyur vā bhavati.*

てによって、〔消化の〕火にふさわしくない〔食物の〕摂取によって、不規則な〔食物の〕摂取によって、正しくない身体の姿勢によって、過度の交わりによって、よくないことに耽けることによって、排泄を抑えることによって、抑えるべき排泄を抑えないことによって、魔物(*bhūta*)・毒・風(*vāyu*)・火に苦しめられることによって、怪我によって、食物や治療を避けることによって、途中で停止する。これが、ふさわしくない時における死である。同様に、誤った手当てをされた熱病などの病も、ふさわしくない時における死〔の原因〕であるとみなす。」(CS Vi 3.38)¹¹⁹

問8では、各個人にとっては、寿命はあらかじめ定まっているわけではないというアーユルヴェーダの死に対する見解が明らかにされたのであるが、
〈問9〉は、人間一般にとっての寿命は何年かという問いである。この問いに対する答は次の通りである。

「この時期（カリユガ）における生命の量（長さ）は、実に、100年である。」(29)¹²⁰

「その〔生命の量を全うする〕原因は、〔その人の生まれつきの〕正常さ・性質・アートルンが完全であることと、自分に合ったものを用いることである。」(30)¹²¹

以上のように、この章で論じられているテーマは、前半は身体要素についての医学理論であり、後半は胎児の母胎中での状態、出産、そして人間の死についてである。

¹¹⁹CS Vi 3.38: *tam uvāca bhagavān ātreyaḥ. śrūyatām agniveśa.*

yathāyāna-samā-yukto 'kṣaḥ prakṛtyaiivākṣaguṇair upetaḥ sa ca sarvaguṇopapanno vāhyamāno yathākālāṃ svapramāṇakṣayād evāvasānaṃ gacchet, tathā "yuḥ śārīropagataṃ balavatprakṛtyā yathāvad upacaryamāṇaṃ svapramāṇakṣayād evāvasānaṃ gacchati sa mṛtyuḥ kālē. yathā ca sa evākṣo 'tibhārādhiṣṭhitatvād viśama-pathād apathād akṣacakraḥṇigād vāgya-vāhaka-doṣād aṇimokṣād anupāṇgāt paryasanāc cāntarā 'vasānam āpadyate, tathā "yur apy ayathābalaṃ ārambhād ayathāgny-abhyavaharaṇād viśamābhyavaharaṇād viśama-śārīra-nyāsād atimaithunād asatsaṃśrayād udīrṇa-vega-vinigrahād vidhārya-vegāvidhāraṇād bhūta-viśa-vāyu-agny-upatāpād abhighātād āhāra-pratikāra-vivarjanāc cāntarā 'vasānam āpadyate, sa mṛtyur akālē. tathā jvarādīn apy ātānkān mithyopacaritān akālamṛtyūn paśyāma iti.

¹²⁰CS Śā 6.29: *varṣasātaṃ khalv āyusaḥ pramāṇam asmin kālē.*

Veda 文献にも、人間の寿命を100年とする記述が見られる。例えば *Taittirīyasaṃhitā* 1.5.2.2; 1.5.7.6; 2.3.2.1; 2.3.11.5 etc., *Maitrāyaṇīsaṃhitā* 1.6.4.; 1.6.11; 1.7.5; 2.1.7; 2.2.2 etc.

¹²¹CS Śā 6.30: *tasya nimittāṃ prakṛtiguṇātmasaṃpat sātmyopasevanāṃ ceti.*

1.3.7 Carakasamhitā, Śārīrasthāna 第7章

第7章は、20節からなる。章末の2節のみ韻文で、他はすべて散文である。その概略は以下の通り。

CS Śā 第7章（全20節）

「身体の数」(*śārīrasaṃkhyā*)の章

1-2 序

3 身体の各部分の数についてのアグニヴェーシャの問い

4-15 アートルレーヤの回答

4 皮膚(*tvac*)の6種

5 身体の6区分

6 骨(*asthi*)の360種

7 5感覚器官(*buddhīndriya*)、5運動器官(*karmendriya*)

8 *cetanā*の拠り所について

9 氣息の在所(*prāṇāyatana*)の10種

10 内臓(*koṣṭha*)の15種

11 身体小部分(*pratyaṅga*)の56種

12 孔(*chidra*)の9種

13 以上(4-12)は見ること、示すことが出来るもの

14 以下(14-15)は推量されるのみのもの

靱帯(*snāyu*)、シラー管(*sirā*)、ダマニー管(*dhamanī*)、急所(*marman*)、関節(*saṃdhi*)等

15 *añjali*量によって計られるもの水分、便、血等

16 5大元素と身体との関係について

17 極微(*paramāṇu*)について

18 執着(*saṅga*)、解放（解脱）(*apavarga*)について

19-20 まとめの詩節

この章の目的は、人間の身体内外の各部分、構造物の名称をすべて列挙し、その数(*saṃkhyā*)を徹底して数え上げることにあると見ることができる。その内容は、CSの解剖学的な知識の

総括としてこれまでもアーユルヴェーダ研究者によって重視されてきたものである¹²²。しかし、この章では各器官や臓器の位置・形態・機能についての医学的に重要な説明はあまり見られず、身体各部分の名称と数量の列挙のみに終始している点に注意すべきである。

このような記述の態度は、これまでに見てきたように、生命体としての人間を様々な要素に分解して、それらを数え上げるというアーユルヴェーダの基本的な認識方法に従ったものであり、また、「プルシャはいくつの部分に、要素の区分によって分けられるのか? 賢者よ。」(*katidhā puruṣo dhīman dhātubhedena bhidyate.*)(CS Śā 1.3ab) というアグニヴェーシャの問いかけから始まった CS Śā の記述の主目的に沿ったものと見ることも可能であろう。

この章の第3～15節に見られる人間の身体に関する解剖学的な知識の詳細については本論文第1部第3章で見ることにし、ここでは、このような医学的な内容の章においても見られるアートマンおよび解脱に関連する記述に注目することにする。

アートマン、粗大な区分と極微の区分

この章の第3～15節で、人間の身体各部位が列挙された後、第16節では人間と5大元素との対応に関して、次のような記述が見られる。

「この〔身体の〕うち、特に、粗大な(*sthūla*)、堅固な(*sthira*)、物質的形態をもつ(*mūrtimat*)、重い(*guru*)、粗い(*khara*)、固い(*kaṭhina*)部分である、爪、骨、歯、肉、皮膚、便、髪、髭、体毛、腱などと、香り(*gandha*)と嗅覚器官(*ghrāṇa*)とは地性のもの(*pārthiva*)である。

流動性(*drava*)、液状(*sara*)、遅い(*manda*)、粘性(*snigdha*)、柔らかい(*mṛdu*)、粘着性の(*picchila*)、滋味(*rasa*)、血、脂肪、カパ(*kapha*)、ピッタ(*pitta*)、尿、汗など、これらと味(*rasa*)と味覚器官(*rasana*)とは水性のもの(*āpya*)である。

ピッタ(*pitta*)、熱(*uṣman*)、身体にある光輝(*bhā*)、これら全てと色形(*rūpa*)と視覚器官(*darśana*)とは火性のもの(*āgneya*)である。

呼気(*ucchvāsa*)、吸気(*praśvāsa*)、開眼(*unmeṣa*)、閉眼(*nimeṣa*)、屈曲(*ākuñca*)、伸展(*prasāraṇa*)、進行(*gamana*)、促すこと(*preraṇa*)、支えること(*dhāraṇa*)など、これらと、触(*sparsa*)と触覚器官(*sarsana*)とは風性のもの(*vāyavīya*)である。

空隙(*vivikta*)、大きなまた微小な脈管(*srotas*)といわれるもの、これらと、音声(*śabda*)と聴覚器官(*śrotra*)とは空性のもの(*āntarikṣa*)である。

¹²²例えば、Hoernle 1907, Jolly 1901 など。

行為者(*prayoktr*)¹²³であるもの、これと、ブッディ(*buddhi*)とマナス(*manas*)とは、もつとも重要なもの(*pradhāna*)である。このように、それぞれの粗大な区分(*sthūlabheda*)によって、各部位の身体部分の数が示された。」(16)

ここで、「風性のもの」(*vāyavīya*)とされるもののうち、呼気(*ucchvāsa*)、吸気(*praśvāsa*)、開眼(*unmeṣa*)、閉眼(*nimeṣa*)、促すこと(*preraṇa*)、支えること(*dhāraṇa*)は、CS Śā 1.70 で挙げられたアートマンの徴表(*liṅga*)のうちにすべて含まれる。また同様にアートマンの徴表を列挙する VS 3.2.4¹²⁴ の記述内容にも一致点が見出せる。「風性のもの」(*vāyavīya*)とは、ここでは「氣息」あるいは「生命」(*prāṇa*)を意味しているものとも考えられる¹²⁵。さらにこれ以外の、屈曲(*ākuñca*)、伸展(*prasāraṇa*)、進行(*gamana*)については、VS 1.1.6¹²⁶ に見られる *karman* の種類のうちにすべて含まれている。

また、ここではアートマンは「行為者」(*prayoktr*)と言われている。

以上のような身体部分の列挙は、「粗大な区分」(*sthūlabheda*)によるものであるとされたが、次のやや難解な第17節ではこれに対して、「極微の区別」(*paramāṇubheda*)に言及される。

「一方、身体部分は、極微の区別によっては列挙され得ない。非常に多いことから、また非常に微細であるから、また超感官性であることから。これらの極微の合・離における原因は、風(*vāyu*)と行為の本性(*karmasvabhāva*)とである。」(17)¹²⁷

すなわち、輪廻の主体としての微細な身体をもつ超感官性のもの(アートマン)は、「極微の区別」によってしても、とらえきれないという意味であろうか。また、ここでは、極微の合・離における原因とされる、「風」(*vāyu*)と「行為の本性」(*karmasvabhāva*)についてはあまり明確

¹²³CP: *prayoktr itī yac charīrādīprerakaṇi cetanam.*

¹²⁴VS 3.2.4: *prāṇāpāna-nimeṣonmeṣa-jīvana-manogatīndriyāntaravikārāḥ sukhaduḥkhe icchādveṣau pray-atnaś cety ātmaliṅgāni.*

cf. CS Śā 3.10.

¹²⁵PDhS *Vāyunirūpaṇaprakaraṇa* (D.ed.p.44) にもこれに関連する内容が見られる。

¹²⁶VS 1.1.6: *utkṣepaṇam avakṣepaṇam ākuñcanaṇi prasāraṇaṇi gamanaṇi iti karmāṇi.*

¹²⁷CS Śā 7.17: *śarīrāvayavās tu paramāṇubhedanāparisaṃkhyeyā bhavanti, atibahutvād atisaukṣmyād atīndriyatvāc ca. teṣāṃ saṃyogavibhāge paramāṇuunāṇi kāraṇaṇi vāyuyḥ karmasvabhāvaś ca .*

にされていないが、第17節で記述された、アートマンの徴表と *karman* を含む、「風性のもの」(*vāyavīya*) と関係があるのかも知れない。

輪廻と解脱

次の第1節では、輪廻と解脱が示唆される。

「単一性(*ekatva*)によって見られた、このように多くの部分を列挙された身体は、執着(*saṅga*)であり、別異性(*prthaktva*)によって〔見られた身体は〕、解放(解脱)(*apavarga*)である。このうち執着しないもつとも重要なもの(*pradhāna*)は、あらゆる存在の滅(*sarvasattānivr̥tti*)において滅すると〔言われる〕」。(18)¹²⁸

ここでは「単一性」(*ekatva*)と「別異性」(*prthaktva*)というヴァイシェーシカ的な用語が見られること、また、前述の通り CS Śā 5.10 に見られた *sattā* という語がここでも輪廻の観念に関連して用いられていることに注目すべきであろう。

以上のように、CS における身体の解剖学的知識の集成としてのみ重視されてきたこの章においても、アートマン、輪廻、および解脱といった内容が含まれていることに留意すべきである。

1.3.8 Carakasamhitā, Śārīrasthāna 第8章

第8章は、69節からなる。末尾の2節のみが韻文である。この章は、これまでの第1～7章とは異なり、妊娠、出産、育児について、きわめて具体的実践的に時間の経過を追って、きわめて詳細に解説されている。以下にその概略を示す。

第8章（全69節）

「誕生のストラの」(*jātisūtrīya*) 章

1-2 序

3-19 優れた子孫を得るための行いについて

4 養生について

5-7 男女の交わりについて

8 性交時のマントラ

9 優れた息子を欲する女性の食物、行い等について

10-12 祭式行為について

13 シュードラの女性についての規定

14 望みの息子を得るための行いについて

15 子供の体の色について

16 子供の性格(*sattva*)の決定要因について

17 精液(*śukra*)等について

18 性差等について

19 男子出生をもたらす儀礼(*puṃsavana*)について

20 胎児の保持(*garbhassthāpana*)について

21 胎児の障害をなすもの、妊婦の嗜好・習慣と胎児について

22 妊婦の病気の手当てについて、油壺の比喩

23-25 出血(*puṣpa*)について

26-27 胎児の流出(*niḥsrutatva*)、固着(*upaviṣṭaka*)とナーガウダラ(*nāgaudara*)について

28 胎児が不活発な場合の妊婦への処置

29 妊婦に対する浣腸と塗油について

30 腹中での胎児の死亡とその徴候について

31 死亡した胎児(*garbhaśalya*)の除去とその妊婦の手当て

32 妊娠月毎の胎児の健やかな発育のためになすべきこと

33 産室(*sūtikāgāra*)について、

34 産室に備え付けるべきものと付添婦について

35 妊婦が産室に入るための儀礼

36-37 陣痛(*āvi*)出産の徴候と準備

38 出産遅延の場合

39 胎児の取り上げ、出産時のマントラ

40 付添婦による指示について

41 後産と産婦の手当てについて

42-43 新生児の手当てについて

¹²⁸CS Śā 7.18: *tad etac charīraṃ saṅkhyātam anekāvayavaṃ dṛṣṭam ekatvena saṅgaḥ, prthaktvenāpavargaḥ. tatra pradhānam asaktaṃ sarvasattānivr̥ttau nivartate iti.*

- 44-45 臍の緒 (*nāḍī*) の切断の方法について
- 46 誕生式 (*jātakarman*) について
- 47 新生児の守護の方法について
- 48 健康な産婦の飲物と手当てについて
- 49 産婦の病気の手当てについて
- 50 命名式、命名の規則について
- 51 長命の相 (*dīrghāyurlakṣaṇa*) について
- 52 乳母の〔資質の〕吟味 (*dhātrī-parīkṣā*) について
- 53 優れた乳房について
- 54 優れた母乳について
- 55-56 不健全な母乳とその浄化について
- 57 母乳を生ずる食物について
- 58 乳母の行い (*dhātrī-karman*) について
- 59 子供部屋 (*kumārāgāra*) について
- 60 子供の寝台・椅子・敷物などについて
- 61 子供の衣服・寝台などの香料について
- 62 子供が身に着けるべきものについて
- 63 子供の玩具 (*kriḍanaka*) について
- 64 子供を恐がらせるべきでない
- 65-66 子供の病気・健康・保護について
- 67 まとめ
- 68 まとめの詩節
- 69 *Śārīrasthāna* のまとめの詩節

この章では、一人の人間が母胎に宿り、やがて誕生し、生育し、成年に達するまでの間に、その父母をはじめとする周囲の人々がどのような行いをすれば、その人が健やかに育つことができるかについて、当時のバラモン社会の慣習を含む日常的な事柄を中心に、順を追って詳細に記述されており、この章全体が一つの独立した産科小児科の解説書であるかのようである。

ここでは、この章の個々の内容にまでは立ち入らないが、このなかで特に目をひくのは、「男子出生をもたらす儀礼」(*pumsavana*)(19)や「命名式」(46)、「誕生式」(47)など儀礼的な内容

の記述が見られること、重要な行為の際に唱えられるマントラが紹介されている(8,39)ことである。このことはCS Śā 第5章で、祭式的な行為が否定的に語られていたのとは対照的である。また、様々な薬草の調合や飲食物の摂取法や、臍の緒の切断の方法など、臨床医学的な記述も多い。このような具体的実践的なこの章全体の内容は、理論的抽象的な事象についての記述が多いCS Śā の他の章とは明らかに異なっている。このような内容の章が、CS Śā の最終章としてあることによって、前章までのCS Śā の理論的な人間観に、さらに、当時のバラモン社会の中での慣習を踏まえた、いわば社会的な視点からの人間観が加わったと見ることもできよう。

1.4 Carakasamhitā, Śārīrasthāna の意義

以上概観したように、CS Śā の各章の内容は、哲学的な人間観(第1章)、胎生学的な視点からの人間の誕生について(第2,3,4章,第6章後半)、人間の身体要素について(アーユルヴェーダの生理学理論)(第6章前半)、人間と世界との関係、輪廻と解脱について(第5章)、人間の身体構造について(第7章)、産科のおよび社会的な視点からの人間の誕生と成長について(第8章)である。そして、第8章を除く全ての章には輪廻と解脱について触れた箇所が見られた。

このように、様々な内容の章が一見乱雑に配列されたかのようにも見えるCS Śā であるが、ここで問題とされていたのは一貫して、アートマンであり、一つの有機的全体としてのまとまりをもつ生命体の生と解脱(死)についてであると言うことができよう。ひとつのアートマンが前生の身体から出て、新たな受精体(*bija*)に入って5大元素を受け取り、母親からのもの、父親からのものなど、様々な構成要素からなる新たな身心を得て、母胎中でいくつかの段階を経て成長し、やがて多くの身体部位をそなえたひとりの人間として誕生し、バラモン社会の中で周囲の人々の庇護の下に成長し、成年に達し、やがて輪廻からの解脱を希求しつつ死を迎える、というような、個体としてのアートマンの生の諸相がここで明らかにされているのである。

この巻のタイトルが*Śarīra-*でも*Ātma-*でもなく、*Śārīrasthāna*とされているのは、このような有機的全体としての個体についての教説を意図しているからであろう。

また、医学書としてのCSのこの巻の本来の目的は、人体の構造についてと胎児の成長発育、

出産についての解説であり、その他の部分は、後に何らかの理由で付け足されたものではないかという見方もできよう。しかし、CS よりもより古い段階の内容を含む可能性がある BhS の Śā も、後述するように、現在見ることでできる部分について言えば、CS Śā の構成、内容にきわめてよく似たものであり、CS Śā と同様に 1 つの个体論としての性格をそなえていると見ることができる。このことからすれば、CS Śā もそのテキスト成立のかなり早い段階から現在見られるような内容のものであった可能性が高いと言えよう。さらに、CS には、他の巻にも、哲学的な論議や社会的な慣習を含む当時の人間生活の様々な局面についての記述が多く含まれていることから、CS におけるアーユルヴェーダとは、本来、単なる医学医術だけに留まらず、人間（个体）について、様々な観点から理解することを目指すものであったとみることも可能であろう。

第2章 Carakasamhitā, Śārīrasthāna と Yājñavalkyasmṛti

これまでに見てきたように、CS Śā は、全巻を通じて、一つの个体論を展開しているものと解釈することができるのであるが、本章では、このような CS Śā の个体論が、法典 *Yājñavalkyasmṛti* (YājñS) の中に取り入れられていることを指摘し、CS Śā の个体論が、アーユルヴェーダ以外の学問領域に与えた影響の一つと見なし得ることを明らかにしたい。

YājñS の第3巻 *Yatidharmaprakaraṇa* には、人間の胎児の発育と、人間の身体構造に関するかなり詳しい記述が含まれている。これらが CS Śā に見られる胎生学と解剖学に関する記述に近い内容のものであることは、すでに Julius Jolly¹によって指摘されている。また、A.F. Rudolf Hoernle は、YājñS に見られる人体の解剖学的な記述のうち、骨に関する記述とアーユルヴェーダ文献に見られるそれとを比較研究した結果、YājñS のその記述は、CS と BhS と異なる、Āyurveda の Ātreya の学説を受け継ぐ第3の医学書に基づくものであると結論を下した²。さらに J.J. Meyer は、YājñS と *Viṣṇusmṛti* の解剖学的な記述と CS Śā のそれとを詳細に比較することによって、YājñS は CS の解剖学的記述を、やや不正確な部分はあるものの、ほぼそのまま引用しているが、*Viṣṇusmṛti* は、その YājñS の内容を、粗略な形でとり入れたものであることを明らかにした³。

このように、YājñS の胎生学と解剖学の記述に関しては、CS の影響が既に指摘されているのであるが、これらの論述の前後の部分に見られるアートマンについての記述中にも CS からの

¹Jolly 1901. pp.42-44, 53-55.

²“It will be shown that this Non-medical Version really represents a third medical version of Ātreya’s theory, going back to another pupil of Ātreya, different from Agniveśa and Bheḍa, but whose name is no longer known.” (Hoernle 1907 p.4.) Hoernle のこの結論は、YājñS, CS, および BhS の人骨についての記述のみを比較した結果によるものであって、骨以外の部分の記述について検討することなく、このような結論を下すのは性に過ぎると言わざるを得ない。

³Meyer 1928

引用と見られる記述が含まれていることについては、これまであまり注意されてこなかったようである。YājñS 3.67-205に見られるこれらの記述の配列の概略を示すと次のようになる。

YājñS 3.67-74: アートマンの誕生

YājñS 3.75-83: 胎児の月毎の成長と出産

YājñS 3.84-107: 身体各部分の名称と数

YājñS 3.108-205: アートマンの諸相

この構成を見ると、YājñS 3.67-74とYājñS 3.108-205のアートマンに関する記述の間、すなわちYājñS 3.75-107に、胎生学的な記述と解剖学的な記述が、その前後の記述内容とは無関係に挿入されているようにも見える。しかしこれはそうではなく、3.75-83は、人間の胎児の形をとって生まれるアートマンの月毎の成長と出産についての記述として、3.84-107は人間として生まれたアートマンの身体の構成に関する記述として読まれるべきであり、YājñS 3.67-205は、全体としてひとつのまとまりのあるアートマン論として解釈すべきである。このような胎生学と解剖学に関する詳細な内容を伴うアートマン論は、CS Śāに見られる個体としてのアートマン論の構想にきわめて近いものである。

以下、YājñS 3.67-205の内容を、CS Śāから影響を受けているものと考えられる部分を中心に見ていくこととする。

2.1 アートマンの誕生 (YājñS 3.67-74)

YājñS 3.67-74は、YājñSのアートマン論の導入部であり、1つのアートマンから複数のアートマン(YājñS 3.67cd)が発生する事情について述べる。その内容と、それに一致するCS Śāの箇所を表にすると次のようになる。(このなかで、cf.としたものは、言語表現上は一致しないものの、その内容に類似点が見出せるものを示す。)

表1 YājñS 3.67-74

YājñS	内容	CS Śā
3.67	火花の比喻	
3.68	アートマンの行為	
3.69	アートマンの別称	4.8
3.70	5大元素の受取り	4.8
3.71	5火説	
3.72ab	śukraとśoṇita	cf. 8.17
3.72cd	5大元素と第6の要素	1.16, 4.6
3.73-74	アートマンから生じるもの	3.10

YājñS 3.69-70:アートマンの別称、5大元素の受取り

YājñS 3.69ab: *nimittam akṣaraḥ kartā boddhā brahma guṇī vaśī/*

YājñS 3.69cd: *ajāḥ śārīragrahaṇāt sa jāta iti kīrtiyate//*

YājñS 3.70ab: *sargādaḥ sa yathākāśaṇi vāyurṇi jyotir jalam mahīm/*

YājñS 3.70cd: *sṛjaty ekottaraguṇāṃs tathādatte bhavann api//*

「原因、不滅者、行為者、理解する者、ブラフマン、属性を持つ者、支配者

不生の者、それが、身体をとることから、「生まれた」と見なされる。

創造の始めに、空、風、火、水、地を創出するように、そのように、彼は存在しつつ、1つずつ増加する属性をもつものを受け取る。」

このYājñS 3.69ではアートマンの様々な別称が示され、YājñS 3.70ではそのアートマンの誕生の際の5大元素の受け取りについて記述されている。これとほぼ同じ構成と内容を示す記述が、CS Śā 4.8に見られる。こちらは韻文ではなく、次に示すようにやや長い散文である。

CS Śā 4.8: ... *sa hi hetuḥ kāraṇaṇi nimittam akṣaraṇi kartā mantā veditā boddhā draṣṭā dhātā brahmā viśvakarmā viśvarūpaḥ puruṣaḥ prabhavo 'vyayo nityo guṇī grahaṇaṇi pradhānam avyaktaṇi jīvo jñāḥ pudgalaś cetanāvān vibhur bhūtātmā cendriyātmā cāntarātmā ceti. sa guṇopādānakāle 'ntarikṣaṇi pūrvam anyebhyo guṇebhya upādatte, yathā pralayātyaye sisṛkṣur bhūtāny akṣarabhūta ātmā sattvopādānaḥ pūrvataram ākāśaṇi sṛjati, tataḥ krameṇa vyaktataraguṇān dhātūn vāyūvādikāṇs caturaḥ; tathā dehagrahaṇe 'pi*

pravartamānaḥ pūrvataram ākāśam evopādatte, tataḥ krameṇa vyaktataraguṇān dhātūn vāyv-ādikāṃś caturaḥ. . .

「彼は、原因、質料因、期成因、不滅者、行為者、思考する者、知る者、知覚する者、見る者、保持する者、ブラフマン、一切の行為を持つ者、一切の形態を持つ者、プルシャ、起源、不変の者、永遠の者、属性を持つ者、把握、第一原因、未開展物、ジーヴァ、知者、ブドガラ、意識を持つ者、遍在、元素としてのアートマン、感官のアートマン、内部のアートマンである。

このものは、属性を得る時に、空を他の属性よりも、まずはじめに、受け取る。

あたかも、世界の破滅の終わりに、存在物を創造しようとする、不滅のものであり、サットヴァを得たものであるアートマンが、まずはじめに空を創造し、そして次第により明瞭な属性を持つ風をはじめとする4つの要素を〔創造する〕ように。

そのように、身体を把握する時にもまた、現われつつあるものが、まずはじめに、まさに空を受け取る。そして次第により明瞭な属性を持つ、風をはじめとする4つの要素を〔受け取る〕。」

YājñS 3.69で挙げられているアートマンを表わす8つの語のうち、*vaśī*、*aja*以外の6つの語はそのままの順序で、CS Śā 4.8前半部分にあらわれている⁴。というよりも、CSが挙げている雑多なアートマンの別称のうち、特にその中の6種をYājñSが選んだと見るべきであろう。CS Śā 4.8後半では「世界の破滅の終り」(*pralayātyaya*)とアートマンの誕生の際の5大元素の受取りを対比させているが、YājñS 3.70aでは世界の「創造の始め」(*sargādi*)としており、これによってこの比喩の意味がより明らかになっていると言える。このようにYājñS 3.69-70は、CS Śā 4.8の散文のテキストを、その構成はそのまま保持し、内容に関しては部分的に取捨、改変して、簡略に韻文化したものと見ることができるであろう。

先に示したYājñS 3.69-70で、特に重要と考えられるのは、始まりをもたず、不生の者(*aja*)であるはずのアートマンが「生まれる」ということはあり得ず、アートマンが〔胎児としての〕「身体をとること」(*śarīragrahaṇa*)によって、外見上は、新たにこの世に「生まれた」(*jāta*)と見なされる、という部分(YājñS 3.69cd)⁵である。YājñS 3の記述は、この後、胎児の成長、

⁴YājñSに見られる中性形の*brahma*は、CSでは男性形*brahmā*となっている。

⁵さらにYājñS 3.117abでも、次のように言われている。「アートマンは始まりを持たないと語られている。しかし身体がその始まりである。」(*anādir ātmā kathitas tasyādis tu śarīrakam*)

CS Śā 4.8にはこれらの表現に直接対応する部分は見あたらないが、CS Śā 3.8では、次のような表現が見られる。「なぜなら存在物にとっては、まさに別の状態に行くにすぎないことのみが、それぞれの年齢におけるその時の

さらに人体の構造についてへと展開していくのであるが、それらはまさに「身体をとること」(*śarīragrahaṇa*)についての詳説とみなすことができる。

YājñS 3.72: *śukra*と*śoṇita*、5大元素と第6の要素

YājñS 3.72ab: *striṇṇṇsayos tu saṃyoge viśuddhe śukraśoṇite/*

YājñS 3.72cd: *pañca dhātūn svayaṃ ṣaṣṭha ādatte yugapat prabhuḥ//*

「一方、男女の結合の際に、精液と血が清浄であれば、全能者が、第6のものとして、自ら、5つの要素を同時に受け取る。」

CS Śā 8.17にも*śukra*と*śoṇita*の清浄さを強調する次のような記述が見られる。

CS Śā 8.17: *yathoktena vidhinopasaṃskṛtaśarīrayoḥ striṇṇṇsayor miśrībhāvam āpannayoh śukraṃ śoṇitena saha saṃyogaṃ sametyāvvyāpannam avyāpannena yonāv anupahatāyam apraduṣṭe garbhāśaye garbham abhinirvartayaty ekāntena. . .*

「述べられた通りの、規則によって整えられた身体をもつ男女が、交わったならば、損なわれていない精液は、損なわれていない血と結合し、害せられていない母胎において、汚されていない子宮において、必ず、胎児を生じさせる。」

YājñS 3.72cdは、次に示すCS Śā 1.16の内容に近い。

CS Śā 1.16ab: *khādayaś cetanāṣaṣṭhā dhātavaḥ puruṣaḥ smṛtaḥ/*

CS Śā 1.16cd: *cetanādhātur apy ekaḥ smṛtaḥ puruṣasaṃjñakaḥ//*

「プルシャは、空をはじめとし、チェータナーを第6とする要素であると教えられている。チェータナー要素ひとつだけでも、プルシャという名をもつものと教えられている。」

さらにCS Śā 4.6に、より詳しい記述が見られる。

CS Śā 4.6: *garbhas tu khalv antarikṣa-vāyv-agni-toya-bhūmi-vikāraś cetanādhiṣṭhānabhūtaḥ. evam anayā yuktyā pañcamahābhūtavikārasamudāyātmako garbhas cetanādhiṣṭhānabhūtaḥ, sa hy asya ṣaṣṭho dhātur uktaḥ.*

「一方、実に、胎児は、空・風・火・水・地が変異したものであり、チェータナーの拠り所であるものである。このように、この道理によって、5大元素が変異したものの集合より成るものが、胎児であり、チェータナーの拠り所であるものである。なぜなら、かの胎児にとってのこれは6番目の元素であるといわれるからである。」

CSの記述のうち*cetanā*という語が重要であるが、YājñSの対応する部分では、*cetanā*につ時の「誕生」であると言われるからである。...」(*sato hy avasthāntara-gamana-mātram eva hi janma cocyate tatra tatra vayasī tasyāṃ tasyām avasthāyām. . .*)

いては触れられていない。

YājñS 3.73-74: アートマンから生じるもの

YājñS 3.73ab: *indriyāṇi manaḥ prāṇo jñānam āyur sukhaṁ dhṛtiḥ/*

YājñS 3.73cd: *dhāraṇā preraṇaṁ duḥkham icchāhaṁkāra eva ca//*

YājñS 3.74ab: *prayatna ākṛtir varṇaḥ svaradveṣau bhavābhavau/*

YājñS 3.7cd: *tasyaitad ātmajaṁ sarvaṁ anāder ādim icchataḥ//*

「感覚器官、思考器官、氣息、知識、寿命、樂、堅固さ、

凝念、促進、苦、欲求、自我意識、

努力、形態、色、音声、憎惡、有、非有、

以上、アートマンから生じる全てのものは、始まりを欲する始めなき彼に〔属する〕。」

ātmaja という語は、ここでは、「自ら生じるもの」ではなく、「アートマンから生じるもの」と解釈すべきである。というのは、アーユルヴェーダにおいては、本論文第1部第1章で見た通り、胎児の精神的および身体的な要素は、母親、父親、アートマン、自分に合ったもの (*sātmya*)、〔食物の栄養素としての〕滋味 (*rasa*)、サットヴァ (マナス) のそれぞれから由来するものの集合から成るものであるとされており⁶、YājñS 3.73-74 で列挙される *ātmaja* の各項目は、CS Śā 3.10 で「アートマンから生じるもの」 (*ātmaja*) として列挙されているものにほぼ対応しているからである。

CS Śā 3.10: ... *garbhasyātmajanī ... tadyathā tāsu tāsu yoniṣūtpattir āyur ātmajñānaṁ mana indriyāṇi prāṇāpānau preraṇaṁ dhāraṇam ākṛtisvaravarnaviśeṣāḥ sukhaduḥkhe icchādveṣau cetanā dhṛtir buddhiḥ smṛtir ahaṁkāraḥ prayatnaś ceti ātmajanī.*

先に挙げた YājñS 3.73-74 の列挙項目のうち *bhavābhavau* 以外は、若干の語形の違いはあるものの、全て CS Śā 3.10 に見られる。一方、CS の列挙項目のうち、「それぞれの母胎における発生」 (*tāsu tāsu yoniṣūtpatti*)、*cetanā*、*buddhi*、*smṛti* を YājñS は挙げていない。また、CS が「アートマンの認識」 (*ātmajñāna*) としているところを YājñS 3.73b では単に「認識」 (*jñāna*) としている。ここでも YājñS は CS が挙げている *cetanā* を取り上げていないことが注目される。

⁶CS Śā 4.4: *mātṛtaḥ pitṛta ātmataḥ sātmyato rasataḥ sattvata ity etebhyo bhāvebhyāḥ samuditebhyo garbhaḥ sambhavati.*

2.2 胎児の月毎の成長と出産 (YājñS 3.75-83)

この部分の YājñS と CS Śā の対応関係を表にすると次のようになる。

表2 YājñS3.75-83

YājñS	内容	CS Śā
3.75ab	受胎後1か月目の胎児	4.9
3.75c	2か月目の胎児	4.10
3.75d	3か月目の胎児	4.11
3.76-78	身体と5大元素について	4.12,15
3.79	妊婦の欲求について	4.15
3.80a	4か月目の胎児	4.20
3.80b	5か月目の胎児	4.21
3.80cd	6か月目の胎児	3.10
3.81	7〜8か月目の胎児	cf.4.23
3.82	8か月目の胎児と <i>ojas</i>	4.24
3.83	9〜10か月目の胎児、出産	cf.4.25

YājñS 3.75: 受胎後1〜3か月目の胎児

YājñS 3.75ab: *prathame māsi samkledabhūto dhātuvimūrcchitaḥ /*

YājñS 3.75cd: *māsy arbudaṁ dvitīye tu tṛtīye 'ṅendriyair yutaḥ //*

「最初の月には、〔アートマンは〕湿った状態にあり、要素が凝集したものである。

2か月目には、アルブダとなり、3〔か月目〕には、肢体と感官を備えたものとなる。」

胎児は受胎後、*kalala*(あるいは *kalalī*)、*arbuda*(あるいは *budbuda*あるいは *abbuda*)、*peśi* の順に成長していくとする記述は、パーリ語の仏教文献を含む、多くの文献に見られる⁷。しか

⁷MBh 12.308.116ab: *binduny āsādayo'vasthāḥ śukraśoṇitasamḥbhavāḥ/*
MBh 12.308.116cd: *yāsām eva nipātena kalalaṁ nāma jāyate//*
MBh 12.308.117ab: *kalalād arbudotpattiḥ peśi cāpy arbudodbhavā/*
MBh 12.308.117cd: *peśyās tu aṅgābhiniṛvṛttir nakharomāṇi cāngataḥ//*
Samyutta Nikāya 10.1.3: *paṭhamam kalalam hoti, kalalā hoti abbudam/*
abbudā jāyate peśī, peśī nibbattati ghano/ ghanā pasākhā jāyanti kesā lomā nakhā pi ca//
cf. *Milindapañho* (Trenckner ed. pp.40,125).
cf. *Garbhopaniṣad* 3: ... *ṛtukāle samprayogād ekarātroṣitam kalalam bhavati saptarātroṣitam budbudam bhavati ardhmāsābhyantare piṇḍo bhavati. māsābhyantare kaṭhino bhavati māsadvyaena śiraḥ samṇadyate. māsatreyaṇa pādapradeśo bhavati. ...*
Gaudapādabhāṣya on SK 43: ... *śukraśoṇitasamṇyoge vivṛddhihetukāḥ kalalādyā budbuda-māṁsa-peśi-pra-*
bhṛtayaḥ, ...
Candrānandavṛtti on VS 5.2.19: ... *kalalārbudamāṁsapēśighanaśarīra ...*
PP 2.66.30ab: *śukram ca raktam ekastham ekāhāt kalalam bhavet/*
PP 2.66.30cd: *pañcarātreṇa kalalam budbudatvam tato vrajet//*

し、このYājñS 3.75の記述には*kalala*という語は用いられていない。また、胎児の生育過程を1か月毎に記録するのはアーユルヴェーダ文献に多く見られる特徴⁸である。このようなYājñS 3.75の記述は、次のCS Śā 4.9-11の記述に最も近い。

CS Śā 4.9: *sa sarvagūṇavān garbhatvam āpannaḥ prathame māsi saṃmūrcchitaḥ sarvadhātu kaluṣīkṛtaḥ kṣetabhūto bhavaty avyaktavigrahaḥ sadasadbhūtāṅgāvayavaḥ.*

「この、全ての属性を持つ、胎児性を得たものは、最初の月においては凝結した、全ての要素が明らかでない、粘液であるものであり、明瞭でない形態をもつものであり、実在のものと非実在のものと〔からなる〕身体部分を持つものである。」

CS Śā 4.10: *dvitiye māsi ghaṇaḥ saṃpadyate piṇḍaḥ peśy arbudaṃ vā. tatra ghaṇaḥ puruṣaḥ, peśī strī, arbudaṃ napuṃsakam.*

「2か月目には、丸い塊であるガナ、あるいはペーシー、あるいはアルブダとなる。ここで、ガナは男性、ペーシーは女性、アルブダは中性である。」

CS Śā 4.11: *tṛtīye māsi sarvendriyāṇi sarvāṅgāvayavās ca yaugapadyenābhiniṣvartante.*

「3か月目には、全ての感覚器官と、全ての身体部分とが同時に発生する。」

CSもYājñSと同様に、胎児の最初期の状態に関して、*kalala*という語は用いていない。CSをはじめとするアーユルヴェーダ文献は、2か月目に胎児の性差が明らかになり、*ghana*、*peśī*、*arbuda*という状態がそれぞれ胎児の男性、女性、中性に対応するとしているが、このYājñS 3.75cの記述では性差については触れず、2か月目の胎児については*arbuda*という語のみを示している⁹。

GP 2.32.23cd: ... *ahorātreṇa kalilaṃ budbudaṃ pañcabhir dinaiḥ* //

GP 2.32.24ab: *caturdaśe bhaven māṃsaṃ miśradhātusamanvitam* /

GP 2.32.24cd: *ghanaṃ māṃsaṃ ca viṃśāhe garbhastho varddhate kramāt* //

GP 2.32.25ab: *pañcaviṃśatime cāhni balaṃ puṣṭiś ca jāyate* /

GP 2.32.25cd: *tathā māse tu sampūrṇe pañcatattvaṃ nidhārayet* //

cf. Windisch 1908. pp.87-92.; Suneson 1991.

⁸SS Śā 3.18: *tatra prathame māsi kalalaṃ jāyate. dvitiye śītoṣmānilair abhiprapacyamānānāṃ mahābhūtānāṃ saṃghāto ghaṇaḥ saṃjāyate yadi piṇḍaḥ pumān, strī cet peśī, napuṃsakaṃ ced arbudaṃ iti. tṛtīye hastapādaśirasāṃ pañca piṇḍakā nirvartante 'ṅapratyaṅgavibhāgaś ca sūkṣmo bhavati. ...* (このSS Śā 3.18の一部はVijñāneśvaraによるYājñSへの注釈*Mitākṣarā*に引用されている。)

AHS Śā 1.37: *avyaktaḥ prathame māsi saptāhāt kalalī bhavet.*

AHS Śā 1.49-50: ... *dvitiye māsi kalalād ghaṇaḥ peśy athavā 'rbudam / pumstrīklibāḥ kramāt tebhyaḥ* ...

AHS Śā 1.54-55: ... *māse 'sya tṛtīye gātrapañcakam /*

mūrdhā dve sakthini bāhū sarvasūkṣmāṃgajanma ca /

samam eva hi mūrdhādyair jñānaṃ ca sukhaduḥkhaḥ //

⁹BhSには*arbuda*が、最初に発生するというĀtreyaの説が見られる。BhS Śā 4.30: ... *nety āha bhagavān*

YājñS 3.76-78: 身体と5大元素

YājñS 3.76ab: *ākāśāl lāghavaṃ saukṣmyaṃ śabdaṃ śrotraṃ balādikam /*

YājñS 3.76cd: *vāyoś ca sparśanaṃ ceṣṭāṃ vyūhanaṃ raukṣyam eva ca //*

YājñS 3.77ab: *pittāt tu darśanaṃ paktim auṣṇyaṃ rūpaṃ prakāśitām /*

YājñS 3.77cd: *rasāt tu rasanāṃ śaityaṃ snehaṃ kledaṃ samārdavam //*

YājñS 3.78ab: *bhūmer gandhaṃ tathā ghrāṇaṃ gauravaṃ mūrtim eva ca /*

YājñS 3.78cd: *ātmā gṛhṇāty ajaḥ sarvaṃ tṛtīye spandate tataḥ //*

「虚空から軽さ、微細さ、声、聴覚器官、力などを、

また風から触覚器官、動作、配列、粗さを、

一方、ピッタ(火)から視覚器官、消化、熱さ、色、輝きを持つものたる性質を、

またラサ(水)から味覚器官、冷たさ、粘着、湿潤を柔らかさとともに、

地から香り、嗅覚器官、重さ、形態を不生なるアートマンは、〔これら〕すべてを3〔か月目〕に得る。その後、動く。」

CS Śāの第4章には、前述のように、1か月毎の胎児の成長過程についての記述がある。この記述のうちCS Śā 4.9-11は1～3か月目の胎児についてであり、CS Śā 4.20-26が4か月目～出産までの胎児と妊婦の状態の説明である。この間の部分、すなわちCS Śā 4.12-19の内容は、CS Śā 4.12:胎児の身体うちにある5大元素について。4.13:人間(*puruṣa*)と世界(*loka*)の対応について。4.14:性差について(3か月目の胎児に関連)。4.15:胎児が動き始めること。*dvaihrdayya*について(3か月目の胎児に関連)。4.16-17:*dvaihrdayya*の状態にある妊婦について(3か月目の胎児に関連) 4.18:胎児を害するものについて。4.19:妊婦の欲求するものについて。であり、この前後にある各月毎の胎児の状態の簡潔な説明の間に挿入された、補足的な説明といった内容になっている。特にこのうち、CS Śā 4.12-13の記述は、胎児の身体と5大元素、世界との対応についての一般的な記述であり、3か月目の胎児の状態の説明とはあまり関連はないように見える。しかし、上に示したYājñS 3.76-78では、このCS Śā 4.12の内容を取り込んで、「アートマンは、〔これら〕すべてを3〔か月目〕に得る。」として3か月目の胎児(アートマン)の状態に関連付けているのである。そのCS Śā 4.12の内容は次の通りである。

CS Śā 4.12: *tatrāsya kecid aṅgāvayavā mātṛjādīn avayavān vibhajya pūrvam uktā yathāvat.*

mahābhūta- vikāra-pravibhāgena tv idānīm asya tāṃś caivāṅgāvayavān kāṃścit paryāya- antareṇāparāṃś cānuvākhyāsyāmaḥ. mātṛjādayo 'py asya mahābhūta-vikārā eva. tatrāsya ākāśātmakaṃ śabdaḥ śrotraṃ lāghavaṃ saukṣmyaṃ vivekaś ca, vāyūātmakaṃ sparśaḥ

punarvasur ātreyaḥ. tasmād arbudaṃ evāsya prathamam sambhavati. tatra sarve śārīrapradeśās sambhavanti しかし、このBhSの言う*arbuda*とYājñS3.75cの*arbuda*とが同じものを意味しているかどうかについては疑問である。

sparsanam raukṣyam preraṇam dhātu-vyūhanam ceṣṭāś ca śārīryaḥ, agnyātmakam rūpam darśanam prakāśaḥ paktir auṣṇyam ca, abātmakam raso rasanam śaityam mārdavam snehaḥ kledaś ca, pṛthivyātmakam gandho ghrāṇam gauravam sthairyam mūrtiś ceti.

「この（胎児の）、ある身体部分のうち、母親から生じるものなどの部分については、以前に¹⁰、分けて、然るべく述べられた。一方、今、大元素の変異の区分によって、この（胎児）の、他の、ある身体部分を、別の同義語によって、述べよう。

この（胎児の）、母親から生じたもの等も、まさに大元素の変異したものである。このうち、この（胎児の）、空の性質を持つものは、声、聴覚器官、軽さ、微小さ、識別であり、風の性質を持つものは、触覚、触覚器官、荒さ、動作、要素を形成すること、身体が動くことであり、火の性質を持つものは、色形、視覚器官、光、消化、熱であり、水の性質を持つものは、味、味覚器官、冷たさ、柔らかさ、油性、湿性であり、地の性質を持つものは、臭い、嗅覚器官、重たさ、堅固さ、物質の形態である。」

YājñS 3.78d で記述される「胎動」に関しては次の CS Śā 4.15 の記述に一致している。

CS Śā 4.15: *tasya yatkālam evendriyāṇi saṃtiṣṭhante, tatkālam eva cetasi vedanā nir-bandham prāpnoti; tasmāt tadā prabhṛti garbhaḥ spandate,...*

「この（胎児の）諸感覚器官が完成するその時、まさにその時に、チェータスにおいて、感覚作用が、固定される。それゆえに、その時から胎児は、動く。」

このように YājñS 3.75-78 は、CS の胎児の月毎の成長についての記述と、その間に挟まれた一般的な記述とをほぼその順序通りに取り入れたものと見ることができる。

YājñS 3.79: 妊婦の欲望について

YājñS 3.79ab: *dauhṛdasyāpradānena garbho doṣam avāpnuyāt /*

YājñS 3.79cd: *vairūpyam maraṇam vāpi tasmāt kāryam priyam striyāḥ //*

「妊娠中の欲望が与えられないことによって、胎児は欠陥、奇形、あるいは死を得るかもしれない。従って、女性(妊婦)にとって好みのことがなされるべきである。」

dauhṛdaya (あるいは *dvaiḥṛdayya*) について、CS では先に引用した CS Śā 4.15 の「胎児は、動く。」の部分のすぐ後に続けて、次のように説明している。

CS Śā 4.15: ... *garbhaḥ spandate, prārthayate ca janmāntarānubhūtam yat kiṃcit, tad dvaiḥṛdayyam ācakṣate vṛddhāḥ. mātṛjam cāsya hṛdayam mātṛhṛdayenābhisambaddham bhavati rasavāhinībhiḥ saṃvāhinībhiḥ; tasmāt tayos tābhir bhaktiḥ saṃspandate. tac caiva kāraṇam avekṣamāṇā na dvaiḥṛdayyasya vimānitam garbham icchanti kartum. vimānane*

¹⁰CS Śā 3.6-7,10-13 を指す。

hy asya drśyate vināśo vikṛtir vā. samānayogakṣemā hi tadā bhavati garbheṇa keśucid artheṣu mātā. tasmāt priyahitābhyām garbhiṇīm viśeṣeṇopacaranti kuśalāḥ.

「...胎児は、動く。そして、他の生で経験された、あることを欲求する。この（状態を）長老達は、2つの心臓をもつ（状態）であるという。

また、母親から生じたものである、この（胎児の）心臓は、母親の心臓と、ラサを運ぶ導管によって、繋がれている。それゆえに、この両者（母親と胎児）の愛着は、これら（導管）によって、（共に）動く。また、まさにこの原因を見る人々は、2つの心臓をもつ（状態）の、胎児（の欲求）を、ないがしろにしようとはしない。なぜならば、ないがしろにしていれば、この（胎児の）破滅、あるいは異常が見られるゆえに。この時、母親は、胎児と共に、ある目的のために、同一の結合に安住しているものであるゆえに。

このことから、よき人々は、妊婦を、好みのものと有益なものによって、特に、世話をするのである。」

YājñS では *dauhṛdaya* とし、CS では *dvaiḥṛdayya* としているものの、その意味はこの両文献ともほぼ一致していると見ることができる¹¹。

YājñS 3.80: 4～6 か月目の胎児

YājñS 3.80ab: *sthairyam caturthe tv aṅgānām pañcame śoṇitodbhavaḥ /*

YājñS 3.80cd: *ṣaṣṭhe balasya varṇasya nakharomṇām ca sambhavaḥ //*

「4 [か月目] に肢体の安定性が [生じ]、5 [か月目] に血の発生があり、6 [か月目] に力、色、爪、体毛の発生がある。」

4 か月目と 5 か月目の胎児の状態に関しては、次の CS の記述にほぼ一致する。

CS Śā 4.20: *caturthe māsi sthiratvam āpadyate garbhaḥ, tasmāt tadā garbhiṇī gurugātrratvam adhikam āpadyate viśeṣeṇa.*

「4 か月目には、胎児は安定性を得る。それゆえに、この時期には、妊婦は、特に、更に身

¹¹SS は、*dvihṛdaya*、*dauhṛda* とし、4 か月目の状態であるとする。

SS Śā 3.18: ... *dvihṛdayām ca nārīm dauhṛdinīm ācakṣate, dauhṛdavimānanāt kubjam kuṇiṇi khañjam jaḍam vāmanam vikṛtākṣamanakṣam vā nārī sutam janayati, tasmāt sā yadyad icchet tattat tasyai dāpayet, labdhadauhṛdā hi vīryavantam cirāyusam ca putram janayati.* この一部は注釈 *Mitākṣarā* に引用されている。

cf. AHS Śā 1.52cd: *mātṛjam hy asya hṛdayam mātus ca hṛdayena tat//*

AHS Śā 1.53ab: *sambaddham tena garbhiṇyā neṣṭam śraddhāvīmānanam/*

AHS Śā 1.53cd: *deyam apy ahitam tasyai hitopahitam alpam//*

AHS Śā 1.54ab: *śraddhāvighātād garbhasya vikṛtiś cyutir eva vā/*

cf. Lüders 1898; Jolly 1899.

体が重くなる。」

CS Śā 4.21: *pañcame māsi garbhasya māmśaśoṇitopacayo bhavaty adhikam anyebhyo māsebhyaḥ, tasmāt tadā garbhiṇī kārśyam āpadyate viśeṣeṇa.*

「5か月目には、胎児の肉と血の増加は、他の月よりも多くなる。それゆえに、この時期には、妊婦は特に痩せる。」

YājñS の記述のうちの4か月目の「安定性」(*stairyam*)(3.80a)は、CS の記述中の *sthira-tvam*(4.20) に、5か月目の「血の発生」*śoṇitodbhava*(3.80b) は、CS の「肉と血の増加」*māmśa-śoṇitopacaya*(4.21) という語に対応している。

6か月目の胎児の状態について、CS は次のように述べる。

CS Śā 4.22: *ṣaṣṭhe māsi garbhasya balavarṇa-upacayo bhavaty adhikam anyebhyo māsebhyaḥ, tasmāt tadā garbhiṇī balavarṇahānīm āpadyate viśeṣeṇa.*

「6か月目には、胎児の体力と、体色の増加が、他の月よりも多くなる。それゆえに、この時期には、妊婦は、体力と、体色を、特に消耗する。」

この記述も YājñS の6か月目の記述に近い¹²。

アーユルヴェーダ文献、特にCSとSSには、胎児の身体的全部分は、〔受胎の〕当初からすでにそなわっているものであり、最初は全部分が微細なものであるため、認識はされないが、時間の経過によって各部分が徐々にあきらかになってくるのであるという説¹³が示されている。しかし、これまでに見た YājñS の記述では、血の「発生」(*udbhava*)(3.80b)、力、色、爪、体毛の「発生」(*saṁbhava*)(3.80d) という語が用いられているように、YājñS では身体各部分が別々に「発生」すると考えていたようであり、既に微細ながらそなわっている各部分が、徐々に「明らかになる」というアーユルヴェーダ文献に見られるような発想は示されていない。

¹² 4～6か月目の胎児の状態について、SSとAHSは次のように述べる。

SS Śā 3.18: ... *caturthe sarvāṅgapratyaṅgavibhāgaḥ pravvyakto bhavati, garbhahṛdayaprayaktibhāvāc cetanādhātur abhivyakto bhavati, kasmāt tatsthānatvāt; tasmād garbhaś caturthe māsy abhiprāyam indriyārtheṣu karoti,...*

SS Śā 3.30: *pañcame manaḥ pratibuddhatarāṃ bhavati, ṣaṣṭhe buddhiḥ,...*

AHS Śā 1.57ab: *caturthe vyaktatāṅgānām cetanāyās ca pañcame /*

AHS Śā 1.57cd: *ṣaṣṭhe snāyu-sirā-roma-bala-varṇa-nakha-tvacām //*

YājñS 3.80cd の6か月目の胎児についての記述は、CS よりも AHS Śā 1.57cd の記述により近い。

¹³SS Śā 3.32: ...*evam garbhasya tāruṇye sarveṣu aṅgapratyaṅgeṣu satsv api saukṣmyād anupalabdhiḥ, tāny eva kālaprakarṣāt pravvyaktāni bhavanti.* cf.CS Śā 6.21.

YājñS 3.81: 7～8か月目の胎児

YājñS 3.81ab: *manaścaitanya yukto 'sau nāḍisnāyusīrāyutaḥ /*

YājñS 3.81cd: *saptame cāṣṭame caiva tvaṇīmāmśasmṛtimān api //*

「7〔か月目〕に彼は思考器官、意識を備え、ナーディー、靱帯、シラーを伴うもの〔となり〕、また8〔か月目〕に皮膚、肉、記憶をも、もつもの〔となる〕。」

7か月目の胎児と妊婦の状態について、CSは次のように述べるのみであり、YājñS3.81abの記述とは直接には対応していない¹⁴。

CS Śā 4.23: *saptame māsi garbhaḥ sarvair bhāvair āpyāyyate, tasmāt tadā garbhiṇī sarvākāraiḥ klāntatamā bhavati.*

「7か月目には、胎児はあらゆるもので、満たされる。それゆえに、この時期には、妊婦は、全ての点で、最も疲労する。」

8か月目の胎児の状態についてのYājñS 3.81cdとも、CSの記述は、一致するところはない。CSに見られる8か月目の胎児の状態の記述は、次のYājñS 3.82の記述に関連があるようである。

YājñS 3.82: 8か月目の胎児とオージャス

YājñS 3.82ab: *punar dhātrīm punar garbham ojas tasya pradhāvatī /*

YājñS 3.82cd: *aṣṭame māsy ato garbho jātaḥ prāṇair viyujyate //*

「彼のオージャスは、母親に〔流れたり〕、胎児に流れたりする。このことから、8か月目に生まれた胎児は、諸氣息から離れる。」

この詩節は、これだけを読んだ限りでは難解であるが、次のCS Śā 4.24の内容が背景にあるものとして読むと理解しやすい。

CS Śā 4.24: *aṣṭame māsi garbhaśca mātṛto garbhataś ca mātā rasahāriṇībhiḥ saṁvāhinībhir muhurmuḥur ojaḥ parasparata ādadāte garbhasyāsampūrṇatvāt. tasmāt tadā garbhiṇī muhur-muhur mudā yuktā bhavati muhurmuḥuś ca mlānā, tathā garbhaḥ; tasmāt tadā garbhasya janma vyāpattimad bhavaty ojaso 'navasthitatvāt. ...*

「8か月目には、胎児は母親から、また、母親は胎児から、ラサを運ぶ導管によって、たびたびオージャスを互いに受け取る。胎児が、未成熟であるゆえに。それゆえに、この時期には、妊婦は、たびたび喜びに満たされ、また、たびたび疲労する。胎児も同様である。そ

¹⁴SS、AHSの記述もほぼ同様にあまりYājñSの記述との関連性は認められない。

cf. SS Śā 3.30: ... *saptame sarvāṅgapratyaṅgavibhāgaḥ pravvyaktatarāḥ,...*

cf. AHS Śā 1.58ab: *sarvair sarvāṅgasampūrṇo bhāvair puṣyati saptame /*

れゆえに、この時期の胎児の誕生は、死を伴うものである。オーガスが不安定であるゆえに。」

*ojas*について、CSはSūで次のように説明している。

CS Sū 17.74ab: *hṛdi tiṣṭhati yac chuddhaṃ raktam iṣatsapītakam /*

CS Sū 17.74cd: *ojaḥ śarīre saṃkhyātam tannāśānnā vinaśyati //*

「心臓にあり、少し赤味と黄色味をおびたきれいなものが身体のオーガスと呼ばれるもので、これがなくなると人間は死ぬ¹⁵。」

このようにYājñS 3.82は、CSの胎生学の知識を踏まえて、妊娠8か月目に生まれた胎児が生きていけない理由を、オーガスの働きと関連付けて説明しているものと見ることができる¹⁶。

YājñS 3.83. 9～10か月目の胎児、出産

YājñS 3.83ab: *navame daśame vāpi prabalaḥ sūtimārutaiḥ /*

YājñS 3.83cd: *niḥsāryate bāṇa iva yantracchidreṇa sajvaraḥ //*

「9あるいは10〔か月目〕に強力な出産の風によって、道具の隙間を通過して矢が〔射られる〕ように、痛みを伴った〔アートマンが〕排出させられる。」

9～10か月目の胎児の状態、および出産についてのCSの記述は次の通りである。

CS Śā 4.25: *tasminn ekadivasātikrānte 'pi navamaṃ māsam upādāya prasavakālam ity āhur ādaśamān māsāt. etāvān prasavakālāḥ, vaikārikam ataḥ paraṃ kuṣāv avasthānaṃ garbhasya.*

「この時期を1日でも過ぎると、9か月目となり、10か月目までは、出産の時期であると言われる。この間が、出産の時期であり、異常さをそなえた胎児にとっては、(この時期を)越えた、腹の中での滞留がある。」

CS Śā 6.24: *sa copasthitakāle janmani prasūtimārutayogāt parivṛttyāvāksīrā viṣkrāmaty apatyapathena, . . .*

¹⁵cf. CP on CS Sū 17.74: *yad uktaṃ tantrāntare — prāṇāśrayasyaujaso 'ṣṭau bindavo hṛdayāśrayāḥ iti . . . aṣṭabindukasya tv avayavanāṣe 'pi mṛtyur bhavātīti . . .*

¹⁶SS、AHSにも次のようにほぼ同様の記述が見られる。

SS Śā 3.30: . . . *aṣṭame 'sthirībhavaty ojaḥ, tatra jātaś cen na jīven nirojastvān nairṛtabhāgatvāc ca, . . .*

AHS Śā 1.62cd: *ojo 'ṣṭame saṃcarati mātāputrau muḥuḥ kramāt //*

AHS Śā 1.63ab: *tena tau mlānamuditau tatra jāto na jīvati/*

AHS Śā 1.63cd: *śīśurojo 'navasthānān nārī saṃśayitā bhavet //*

「そして、この(胎児)は、出生が近付いた時に、出産の風と結び付くことによって、頭を下に向けて、産道を経て、出てくる。」

出産時の風についての記述(YājñS 3.83b: *sūtimāruta*, CS Śā 6.24: *prasūtimāruta*)は共通しているが、YājñS 3.83dに見られる出産時に胎児が「痛みを伴う」(*sajvara*)ことや「ヤントラの隙間」(*yantracchidra*)という表現はCSには見られない。

プラーナ文献には出産時の胎児の状態について詳しく述べているものが多い。そのなかでもVDhPには、YājñS 3.83cdに完全に一致する表現が見られる。

VDhP 2.114.18cd: *tatas tu kāle sampūrṇe prabalaḥ sūtimārutaiḥ //*

VDhP 2.114.19ab: *bhavaty avānī mukho jantuḥ pīḍam anubhavan parām /*

VDhP 2.114.19cd: *adhomukhaḥ saṃkaṭena yonidvāreṇa vāyunā //*

VDhP 2.114.20ab: *niḥsāryate bāṇa iva yantracchidreṇa sajvaraḥ /*

VDhP 2.114.20cd: *yoniniṣkramaṇāt pīḍam carmotkartanasannibhām //*

VDhP 2.114.21ab: *prāpnoti ca tato jātaḥ tvaṃ śītam asaṃśayam /*

VDhP 2.114.21cd: *janmajvarābhībhūtasya vijñānaṃ tasya naśyati //*

「そして、時が満ちると、力強い出産の風によって、

子供は最高の苦しみを経験しつつ、頭を下に向ける。

頭を下に向けた者が、狭い母胎の戸口を通過して風によって、

ヤントラの隙間を通過して矢が〔射られる〕ように、

痛みを伴ったものが、排出させられる。

母胎から出ることによって、皮膚が切り裂かれるかのような苦しみを、

得る。そして、生じたものは、激しい寒さを得る。疑いなく。

誕生の痛みに圧倒されたかのものの認識は滅する。」

さらに、出産時の胎児の苦しみについて、PP, APおよび*Garbhopaniṣad*には次のような記述が見られる。

PP 2.66.94ab: *evam etan mahākaṣṭam janmaduḥkham prakīrtitam /*

PP 2.66.94cd: *pumsām ajñānadoṣeṇa nānākarmavaśeṇa ca //*

PP 2.66.95ab: *garbhasthasya matir yā "sīt saṃjātasya praṇaśyati /*

PP 2.66.95cd: *saṃmūrchitasya duḥkhena yoniyantraprapīdanāt //*

PP 2.66.96ab: *bāhyena vāyunā tasya mohasaṅgena dehinām /*

PP 2.66.96cd: *sprṣṭamātreṇa ghoreṇa jvaraḥ samupajāyate //*

PP 2.66.97ab: *tena jvareṇa mahatā mahāmohaḥ prajāyate /*

PP 2.66.97cd: *saṃmūḍhasya smṛtibhramśaḥ śighraṃ saṃjāyate punaḥ //*

「このように、この誕生の苦しみは、大変苦しいものと広く言われている。
人間の無知のドーシャによって、様々な行為の力によって、
生まれた胎児の知性は滅ぼされる。気絶したもののヨーニヤントラのしめつけによる苦し
みによって、
外の風によって、彼の身体の迷妄の結合によって、
触れられた途端の苦しみによって、痛みが生じる。
彼の非常な苦しみによって大いなる迷妄が生じる。
愚かなものの記憶の破滅が速やかに生じる。」

AP 369.27: *sūtivātair adhobhūto niḥsared yoniyāntrataḥ /*
pīḍyamāno māsamātram karasparśena duḥkhitaḥ //
「出産の風によって、下を向いた者は排出する。ヨーニヤントラから。
苦しみつつあるものは、1か月の間、手で触れられることによって苦しむ」。

Garbhopaniṣad 4: ... *atha yonidvāram saṃprāpto yantreṇāpīḍyamāno mahatā duḥkhena*
jātamātrās tu vaiṣṇavena vāyūnā saṃsprṣtas tadā na smarati janmamaraṇāni na ca
karma śubhāśubham vindati.
「そして、母胎の戸口に達したものは、ヤントラによって苦しみつつ、大いなる苦しみに
よって、生まれたばかりのものは、ヴィシュヌの風に触れられると、〔過去の〕生死を記憶
せず、善悪の行為を認識しない。」

また、MBh 1.176.34 の Draupadi の媚選びの際の、弓術の腕比べの場面に次のような用例が
ある¹⁷。

MBh 1.176.34:
idaṃ dhanur lakṣyam ime ca bāṇāḥ śṛṇvantu me pāṛthivāḥ sarva eva /
yantracchidreṇābhyatikramya lakṣyaṃ samarpayadhvaṃ khagamair daśārdhaiḥ //
「これが弓、的、これらが矢であると、私から聞け。全ての王たちよ。
ヤントラの隙間を通して、的を射よ。10本の飛ぶもの（矢）によって。」

これらの記述から判断すると、YājñS 3.83d の「痛みを伴う」(*sajvara*) とは、出産の際に胎
児が、出産の風に吹かれて、母胎の戸口 (*yonidvāra*) を通過する際の痛みであり、YājñS 3.83d
の *yantracchidra* とは、産道の狭さを、弓術の試合の際に的の手前に置かれる遮蔽物 (*yantra*) の

¹⁷ 徳永宗雄教授の御教示による。

隙間 (*chidra*) になぞらえて比喩的に表現したものと理解できよう¹⁸。

漢訳仏典やプラーナ類には胎児が出産に際して、狭い産道を通る苦しみから、前世の記憶を
すべて忘れるという、いわゆる「生苦」¹⁹についての記述が多く見られる。これに対してアーユ
ルヴェーダ文献はこれについては直接にはあまり触れていない²⁰。このことからすると、YājñS
3.83cd の表現は、アーユルヴェーダ以外の、「生苦」についての知識をもつ、なんらかの領域の
伝承をもとにしたものと見るべきであろう。しかし、このように部分的に CS Śā の記述にはな
いものを、おそらくは他の分野のテキストから取り込んではいるものの、YājñS に見られる胎
生学的な記述の大半は、CS Śā の記述内容をかなり忠実に再現したものと見ることができよう。

2.3 身体各部分の名称と数 (YājñS 84-107)

CS Śā 第7章は、「身体の数」(*śarīrasaṃkhyā*) の章であり、人間の身体内外の各部分、構造
物の名称をすべて列挙し、その数 (*saṃkhyā*) を徹底して数え上げることを目的とした章である。

YājñS 3.84-107 に見られる人間の身体部位に関する詳しい記述は、この CS Śā 第7章の構成
をほぼそのまま取り入れたものである。しかし、部分的には、CS Śā 第7章の内容に一致しな
い記述も見られる。

次に、この両文献の解剖学的な記述の構成、概要を示す。両文献の記述内容に相違が見られ
る部分には下線を付す。

¹⁸ *yantra* には (外科的な) 医療器具という意味もあるが、出産時になんらかの器具を用いるという記述は、
CS, SS, AHS には見られない。

¹⁹ 「生苦」については、原 1977 および Hara 1980 に詳しい。

²⁰ ただし「生苦」についての間接的な表現はアーユルヴェーダ文献にも見られる。例えば CS Śā 8.42 では、誕生直後
の新生児に対する手当ての方法が述べられるが、その手当ての目的について、「このように、その〔新生児〕が、〔生ま
れ出る〕苦しみで傷ついた生命を再び得るように、〔このような手当てが行われるのである。〕」(*tathā sa kleśavihatān*
prāṇān punar labheta.) とされている。これに対して注釈者 CP は、「苦しみで傷ついたとは、*yoniyāntra* の締め付
けなどの苦しみによって打撃を受けた〔という意味である。〕」としている。

YājñS 3.84-107

- 3.84a 6種の〔ものから成る〕身体 (*śarīra*)
- 3.84b 皮膚:6種
- 3.84c 肢体 (*aṅga*):6種
- 3.84d-90 骨:360, 骨の名称と数の列挙
- 3.91-92c 感覚器官の対象と感覚・運動器官の列挙
- 3.92d 思考器官 (*manas*) について
- 3.93 10の氣息の拠り所 (*prāṇāyatana*) 列挙
- 3.94-95 15種の内臓の名称列挙
- 3.96-99b 身体における部位 (*śarīrake sthāna*) の列挙
- 3.99cd 9種の孔 (*chidra*) について
- 3.100ab *śirā*:700, 靱帯 (*snāyu*):900
- 3.100cd *dhamanī*:200, 筋 (*peśī*):500
- 3.101 *śirā dhamanisaṃjñitā*:2,900,956
- 3.102ab 髭と髪 (*śmaśrukeśa*):300,000
- 3.102cd 急所 (*marman*):107, 関節 (*saṃdhi*):200
- 3.103 汗腺を伴う体毛 (*roman*):546,750,000
- 3.104 極微 (*paramānu*) について
- 3.105ab *rasa*:9, 水:10 *añjali*
- 3.105cd 便:7, 血:8 *añjali*
- 3.106ab *śleṣman*:6, *pitta*:5, 尿:4 *añjali*
- 3.106cd *vasā*:3, *medas*:2, *majjā*:1, 頭部:0.5 *añjali*
- 3.107ab *śleṣmaujas*:0.5, *retas*:0.5 *añjali*
- 3.107cd *mokṣa*について

CS Śā 第7章

- 7.1-3 序、アグニヴェーシャの問い
- 7.4 アートレーヤの言葉,
6層の皮膚の説明
- 7.5 肢体 (*aṅga*) の6区分について
- 7.6 360の骨の名称列挙
- 7.7 感覚器官と運動器官の名称列挙
- 7.8 心臓 (*hṛdaya*) について
- 7.9 10の氣息の拠り所 (*prāṇāyatana*) 列挙
- 7.10 15種の内臓の名称列挙
- 7.11 56種の身体小部分 (*pratyaṅga*) の列挙
- 7.12 9種の孔 (*chidra*) について
- 7.13 「以上〔に述べた〕ものは見えるもの,
指摘することもできるものである。」
- 7.14 「これ以下〔に述べる〕ものは指摘されず,
推量されるにすぎないものである。」
- 靱帯 (*snāyu*):900, *śirā*:700, *dhamanī*:200,
筋 (*peśī*):400, 急所 (*marman*):107, 関節 (*saṃdhi*):200,
脈管類の微小な末端部:29956,
髪 (*keśa*), 髭 (*śmaśru*), 体毛 (*loma*) の数:29956
- 7.15 掌の容量 (*añjali*) によって計られるもの
水:10, *rasa*:9, 血:8, 便:7, *śleṣman*:6, *pitta* 5,
尿:4, *vasā*:3, *medas*:2, 髓 (*majjā*):1, 脳 (*mastiṣka*):0.5,
śukra:0.5, *ślaiṣmikasya ojas*:0.5 *añjali*
- 7.16-18 5大元素 (*mahābhūta*) などについて
- 7.19-20 まとめ

YājñS 3.84: 6種の〔ものから成る〕身体

tasya ṣoḍhā śarīrāṇi ṣaṭ tvaco dhārayanti ca /
ṣaḍaṅgāni tathāsthānāṃ ca saha ṣaṣṭyā śatatrayam //
「彼の6種の〔ものから成る〕身体は、6つの皮膚を保持している。
同様に6種の肢体は、360の骨を〔保持している〕。」

3.84aの「彼の6種の〔ものから成る〕諸身体」とは、YājñS 3.72cdを受けているものと考えられる。人間の皮膚は6層であり、骨の数は総計360であるというのは、CS、BhSに見られるアーユルヴェーダのアートレーヤ学派の説²¹である。アーユルヴェーダ文献のうちでも、アートレーヤ学派とは異なった学派に属するSSは、皮膚は7層²²、骨は総計300個²³であるとする。

CSは、両上肢・両下肢・頭頸部・胴体の6部分を身体の大きな部分 (*aṅga*) とし (CS Śā 7.5)、さらにこれとは別に、身体小部分 (*pratyaṅga*) として56の部分を数える (CS Śā 7.11)。YājñS は、*aṅga*については説明なしに「6種の肢体」(YājñS 3.84c) と述べるが、*pratyaṅga*については、*śarīrake sthāna* としている。これについては後述する。

YājñS 3.84d-90: 骨

CS Śā 7.6の骨についての散文では、個々の骨の名称・数が明確に記述されており、疑問の余地なくすべての骨の合計数は360となる。これに対して、YājñS 3.85-90の韻文には、骨の名称が不正確なものや、骨数の数え方に不明な点があるものがあり、YājñS 3.84dで骨の総数は360であると明言しているにも関わらず、数え方によっては骨の合計数は360にならない²⁴。これは、テキストの乱れを別にすれば、本来は散文²⁵であったものを韻文化することによって、記述内容に無理が生じたこと、また、YājñSの編者自身の各々の骨の名称についての認識が不十分

²¹皮膚については、CS Śā 7.4; BhS Śā 7.1に6層それぞれについて説明がある。また、AP 369.43-44b; VDhP 2.115.26-27も皮膚は6層であるとし、それぞれを説明している。

骨についてはCS Śā 7.4,6; BhS Śā 7.1,2 参照。なお、骨総数360説は、*Śatapatha Brāhmaṇa* 10.5.4.12; 12.3.2.3-4 等にも見られる。

²²SS Śā 4.4
²³SS Śā 5.18: 「ヴェーダを語る人々は、360の骨があるという。しかし、外科の論書においては300のみである。」
(*trīṇi saṣaṣṭīṇy asthiśatāni vedavādino bhāṣante; śalyatantre tu trīṇy eva śatāni*)

²⁴Meyer 1928 p.51. ll.16-21.

²⁵CS Śā は最後の2節を除いて全て散文である。

であったこともその原因かも知れない。YājñS の骨に関する記述の問題点は以下の通りである。

- (1) 「歯槽骨」(CS Śā 7.6: *dantolūkhala*) について、YājñS 3.85a では単純に *sthāla* としている。
- (2) 「膝は2、膝蓋は2、大腿の長骨は2、腕の長骨は2、肩は2、肩胛骨は2」(CS Śā 7.6: ... *dve jānunī, dve jānukapālike, dvāv ūrunalakau, dvau bāhunalakau, dvāv aṃsau, dve aṃsaphalake, ...*) に対応する YājñS 3.87ab は、*dve dve jānukapoloruphalakāṃsa- samudbhavē*²⁶ となっている。YājñS 3.87ab にある *kapola* は「頬」の意味であり、明らかに誤りである。CS の *ūrunalaka* を YājñS が *ūruphalaka* としたのか、あるいは、CS にある「肩胛骨」(*aṃsaphalaka*) を YājñS が *phalakāṃsa* と語順を逆にしたのかどちらか判断がつかないが、いずれにしても結果として、YājñS ではCS にある「腕の長骨」(*bāhunalaka*) と「肩胛骨」(*aṃsaphalaka*) が脱落してしまっている²⁷。
- (3) 「気管部は1」、「顎の骨は1」(CS Śā 7.6: ... *ekaṃ jatru, ... ekaṃ hanv asthi, ...*) が、YājñS 3.88d では *jatru ekaikaṃ tathā hanuḥ*²⁸ になっている。この *ekaika* を注釈者 Vijñāneśvara および A.F. Stenzler は、「[左右両側に] 1つずつ (合計2つ) の気管部の骨」と解釈している²⁹。
- (4) 「顎の根元の結合部には2、鼻・頬・頬の突出部・額は1つの骨」(CS Śā 7.6: *dve hanumūla-bandhane, ekāsthi nāsikā-gaṇḍa-kūṭa-lalāṭaṃ,*) とあるところは、前述の YājñS 3.88d の最後の *hanuḥ* に続けて YājñS 3.89ab で *tanmūle dve lalāṭākṣigaṇḍe nāsā ghanāsthikā*³⁰ となっている。YājñS ではCS にはない「目 [の部分の] 骨」が挿入されている。注釈者 Vijñāneśvara の *Mitākṣara* では、額 (*lalāṭa*)、目 (*akṣi*)、頬 (*gaṇḍa*) をそれぞれ2つずつの骨、鼻 (*nāsā ghanāsthikā*) は1つの骨と解釈しており、数の上でもCS の記述とは大きく異なっている。
- (5) 「胸における骨は14」(CS Śā 7.6: ... *caturdaśorasi, ...*) とすべきところが、YājñS 3.90c では「胸は17の骨をもつ」(*urah sapṭadaśāsthīni*) としている³¹。この胸の骨は、YājñS では最後の列挙項目であり、総計360にするための数合わせのために14から17に故意に数が増やされたものである可能性もある。

²⁶ Viśvarūpa の注釈では、*jānukapāloru*-になっている。また A.F. Stenzler の用いた写本 A では、*jānukapolau ca gulphakāṃsa*-になっている。

²⁷ J.J. Meyer は、YājñS 3.87b の *samudbhavē* が CS の *aṃsaphalake* を意味しているのかもしれないとしている。cf. Meyer 1928 p.51.1.28-p.52,1.21.

²⁸ YājñS の注釈者 Viśvarūpa によるテキストでは *jatru aikyaṃ hi* となっている。注釈者 Aparārka によるテキストおよび A.F. Stenzler の用いた写本 A では、*jatru ekaṃ ca* となっている。

²⁹ cf. Meyer 1928 p.53,11.10-21.

³⁰ 注釈者 Viśvarūpa によるテキストでは、*lalāṭāsthi gaṇḍanāsāghanāsthikā* に、注釈者 Aparārka の “ka”, “ga”, “cha” は、*lalāṭākṣigaṇḍanāsā* とする。ここでは Viśvarūpa によるテキストが CS に最も近い。

³¹ Meyer 1928 p.51 11.21-27.

YājñS 3.92d: マナス

CS では、感覚器官と運動器官の列挙の直後に、「心臓はチェータナーの拠り所であり、1つである。」(CS Śā 7.8: *hṛdayadm cetanādhiṣṭhānam ekaṃ*.) という記述がある。YājñS にはこのような心臓についての記述はなく、その代わりに、感覚器官と運動器官についての記述の直後には、「マナスは、[感覚器官と行為器官の] 両性質からなる。」(YājñS 3.92d: *manas caivobhayātmakam*) と述べる。このようなマナスについての記述はCS には見られない。YājñS はここでも3.72と3.74と同様にCS に見られる *cetanā* についての記述を取り上げない点に注意すべきである。YājñS は、明らかに故意に、CS の「心臓」、「チェータナー」についての記述を無視し、その代わりに明らかにサーンキヤ的なマナスについての記述³²を挿入しているのである。

YājñS 3.93: 氣息の拠り所

*nābhīr ojo gudaṃ śukraṃ śoṇitaṃ śarīkhakau tathā /
mūrdhāṃsakaṇṭhahṛdayaṃ prāṇasyāyatanāni tu //*

「氣息の拠り所は、臍、オージャス、腸、精液、血、[左右の] こめかみ、頭、肩、喉、心臓である。」

CS Śā 7.9³³にも10の氣息の拠り所が列挙されている。このうち YājñS 3.93 と共通のものは、臍、オージャス、腸、精液、血、頭、喉、心臓である。YājñS 3.93 にあつて CS Śā 7.9 にはないものは、こめかみと肩である。このうち、両側のこめかみ (*śarīkau*) は、CS Sū 29.3 では氣息の拠り所のうちに含まれている。しかし、肩を氣息の拠り所の1つと数える記述はCS には見あたらない。ただし、注釈者 Aparārka および Viśvarūpa によるテキスト³⁴では肩 (*aṃsa*) は入っていない。なお、YājñS 3.99 にも「氣息の拠り所」という語がでてくるが、これについては後述する。逆に CS Śā 7.9 にあつて YājñS 3.93 にはないものは、膀胱 (*basti*) と肉 (*māṃsa*) である。

YājñS 3.94-95: 内臓

CS Śā 7.10 で列挙される15種の内臓のうち、「大網」(*vapāvahana*) は、YājñS 3.94a では、

³² cf. SK 27: *ubhayātmakam atra manaḥ saṃkalpakam indriyaṃ ca sādharmaṃyāt. ...*

cf. ManS 2.92ab: *ekādaśaṃ mano jñeyaṃ svagūṇenobhayātmakam.*

³³ CS Śā 7.9: *daśa prāṇāyatanāni; tadyathā — mūrdhā, kaṇṭhaḥ, hṛdayaṃ, nābhīḥ, gudaṃ, bastiḥ, ojaḥ, śukraṃ, śoṇitaṃ, māṃsam iti.*

³⁴ Aparārka: *mūrdhā sakaṇṭhahṛdayaḥ. ... Viśvarūpa: mūrdhā ca hṛdayaṃ kaṇṭhaḥ. ...*

*vapā vasāvahananam*³⁵とされている³⁶。

また、CSが示す2種類の腸(*guda*)、すなわち *uttaraguda* と *adharaguda* については、YājñS 3.95b-c では、*guda eva ca. udaram ca gudaḥ koṣṭhyau*.³⁷ となっており、テキストの乱れもあって、理解しづらい。YājñS は、*guda* を1つの「肛門」と2つの「直腸」というように3種類に解釈したのかも知れない。CSに挙がっている *pakvāsaya* は YājñS には見られない³⁸。

YājñS 3.96-99b: 身体小部分

前述のようにCSは、人間の身体を6つの大きな部分(*aṅga*)(CS Śā 7.5)と、56の小さな部分(*pratyaṅga*)(CS Śā 7.11)にわけ、*pratyaṅga*についてはYājñS 3.96-98で、身体における「部位」(YājñS 3.98d *sthāna*)として列挙されている。両文献の列挙項目を比較すると、CSの「陰茎」(*śepha*)、「腋」(*ukha*)、「口角」(*śṛkkaṇī*)、「軟口蓋」(*galaśṇḍikā*)が、YājñS では漏れている一方、YājñS には、CS にはない「こめかみ」(*śaṅkha*)、「腎臓」(*vṛkka*)が入っている。このうち「腎臓」は、内臓のところでも挙げられており(YājñS 3.94c *vṛkkakau*)、明らかに誤りである³⁹。さらにYājñSの奇妙な点は、YājñS 3.99abで、CSも挙げている「まぶた」(*akṣivartman*)⁴⁰、足掌・手掌(*paddhastahrdaya*)を「9つの孔」とともに「氣息の拠り所」のうちに含めていることである。「氣息の拠り所」は、前述したようにYājñS 3.93で既に述べられており、ここで再び取り上げるのは不自然である。また、「9つの孔」についてはCS Śā 7.12に記述されているが、CSはこれらを「氣息の拠り所」とはしていない。あるいは3.98cdと3.99abとは順序が逆になっているのかも知れない。

³⁵ Viśvarūpa によるテキストは *vapā vapāvahananam* となっている。

Vijñāneśvara と Aparārka は、*vasāvahananam* を *vasā* と *avahananam* であるとし、*avahanana* は肺(*pupphusa*)のことであると注釈している。

³⁶ Meyer 1928 p.55, l.11-p.56, l.18.

³⁷ この部分の Viśvarūpa によるテキスト: *guda eva ca. udaram ca gudaḥ koṣṭhyo*.

Aparārka によるテキスト: *guda eva ca. uttarau ca gudaḥ koṣṭhau(ṣṭhyo)*.

³⁸ BhS Śā 7.4の内臓の列挙項目でも、CSの挙げている15の内臓のうち *pakvāsaya* だけは漏れているが、これはテキストの乱れによるものであり、偶然であろう。

³⁹ YājñS 3.96cの「両耳」(*kaṇau*)は、Viśvarūpaの注のように「両頬」(*gaṇḍau*)とすべきであろう。

⁴⁰ Aparārka と Viśvarūpa によるテキスト。

YājñS 3.100-103: 体毛など

YājñS 3.100-103の一連の列挙項目は、CS Śā 7.14に対応している。これらのうち、YājñS 3.100と102cdで列挙されているものの名称と数、すなわちシラー(*śirā*):700、靱帯(*snāyu*):900、*dhamani*:200、筋(*peśī*):500、急所(*marman*):107、関節(*saṃdhi*):200は、筋(*peśī*)を除いてCS Śā 7.14の記述と一致している。筋(*peśī*)については、CSは400とするが、500とする異読もあり、YājñSはこれを取ったのであろう⁴¹。YājñS 3.101-102ab,103の記述は、CSの記述とは異なっている。

YājñS 3.104: 極微

YājñSの解剖学的な記述のうちには極微や、解脱についての記述が含まれている。これらの記述についても、CS Śā 第7章に対応する部分がある。

YājñS 3.104は極微について次のように述べる。

vāyavīyair vigaṇyante vibhaktāḥ paramāṇavaḥ /
yady apy eko 'nuvetty eṣāṃ bhāvanām caiva saṃsthitim //
「風的なものによって、分けられた極微が数えられるとすれば、
他のだれがこれらの諸存在の成り立ちを知ろうか。」

「風的なもの」(*vāyavīya*)については、CS Śā 7.16の身体と5大元素とを対応させた記述のなかで、次のように述べられている。

CS Śā 7.16: ... *yad ucchvāsa-praśvāsa-unmeṣa-nīmeṣa-ākuñcana-prasāraṇa-gamana-preraṇa-dhāraṇādi tad vāyavīyam sparsaḥ sparsanam ca.*

「呼気、吸気、開眼、閉眼、屈曲、進展、進行、発動、把持など。これらと、触感と触覚器官とは風的なものである。」

また、極微についてはこれに続くCS Śā 7.17に次のような記述がある。

CS Śā 7.17: *śarīrāvayavās tu paramāṇubhedenāparisaṃkhyeyā bhavanti, atibahutvād atisaukṣmyād atīndriyatvāc ca. teṣāṃ saṃyogavibhāge paramāṇūnām kāraṇam vāyuh karmasvabhāvaś ca.*

「一方、身体の〔各〕部分は、極微の区別によっては列挙され得ない。非常に多いことから。

⁴¹ SS, AHS, AS は *peśī* の数は、男性は500、女性は520としている。cf. SS Śā 5.37-41; AHS Śā 3.17cd-18ab; AS Śā 5.54-58.

非常に微細であるから。超感官性であることから。これらの極微の合・離についての原因は、風と運動を本性とするものとである。」

YājñS 3.107: 解脱

YājñS の解剖学的な記述の最後に次のような表現が見られる。

YājñS 3.107cd: *ity etad asthiraṃ varṣma yasya mokṣāya kṛty asau //*
「以上のように、この身体は不安定であると知るかの者は、解脱に〔ふさわしい〕。」
これは次の CS Śā 第7章の最後の2詩節の内容に対応しているように考えられる。

CS śā.7.19: *śarīrasaṃkhyāṃ yo veda sarvāvayavaśo bhiṣak /*
tad ajñānanimittena sa mohana na yujyate //
「身体の数すべての各々の部分について知る医師、その〔医師〕は、この〔身体の数〕の無知を原因とする迷妄によって束縛されない。」
CS Śā 7.20: *amūḍho mohamūlais ca na doṣair abhibhūyate /*
nirdoṣo niḥspṛhaḥ śāntaḥ praśāmyaty apunar bhavaḥ //
「迷いのないものは、迷妄の根によって、また欠陥によって圧倒されない。欠陥のない、欲のない、静寂な、再び生じない者は、滅する。」

このように YājñS 3.84-107 の記述は、最後の部分に見られる解脱につての記述も含めて、ほぼCS Śā 第7章の構成に沿ったものであると言えるが、個々の内容について見ると、人体部位の専門的な用語に関して不正確な記述が多く見られた。このうちにはテキストの乱れによるものも含まれるであろうが、しかし、このような誤りがこの部分に特に多く見られることは、YājñS の解剖学的な記述は、これに対応するCSの散文の内容が十分に把握されないままに、韻文化されたことの証左であると言えよう。

2.4 アートマンの諸相 (YājñS 108-205)

YājñS 3.108-205 は、アートマンについての総論とも言うべき内容である。その内容と、それに一致するCS Śā の箇所を表にすると次のようになる。

表 3-1 YājñS 3.108-150

YājñS	内容	CS Śā
3.108-109 3.110 3.111 3.112-116 3.117	心臓 (<i>hṛdaya</i>) に位置するアートマン アーラニヤカ書、ヨーガシャーストラ アートマンの静慮 サーマン、ギター、解脱 アートマンと世界	
3.118ab 3.118cd 3.119-124 3.125 3.126-128	問1:どのようにして世界が発生したのか? 問2:どのようにしてアートマンが発生したのか? 問1,2の答:プルシャ=アートマン=祭式について 問2の答:プルシャの誕生 問1の答: <i>ādideva</i> から世界の誕生	1.53
3.129ab 3.129cd 3.130ab 3.130cd 3.131-132 3.133 3.134-139 3.140 3.141 3.142 3.143	問3:なぜ〔アートマンが〕悪しき母胎に生まれるのか? 問4:なぜ望ましくない状態と結び付けられるのか? 問5:なぜ前〔生〕の知識がないのか? 問6:遍在しているのになぜあらゆる知覚を感じないか? 問3の答:ジーヴァ、多くの母胎における誕生について 問3,4の答:行為の成熟について 問3,4の答:母胎、性格の分類 問4の答:ラジャス、タマス、輪廻について 問5の答:鏡の比喻 問5の答:知る主体 (<i>jñātā</i>) としてのアートマン 問6の答:知覚 (<i>vedanā</i>) について	1.6cd 1.6cd cf.3.13 1.7cd cf.5.10 cf.4.37-40 cf.1.68cd cf.1.55, cf.3.13 cf.1.79,137
3.144 3.145 3.146ab 3.146cd 3.147ab 3.147cd 3.148	単一のアートマンと個我 一つのアートマンが多数に。太陽と器の水の比喻 6要素 陶工と壺の比喻 家の作者と家の比喻 鍛冶工の比喻 蚕と繭の比喻 アートマンの誕生	5.4, cf.1.16ab cf.1.43ab cf.1.43cd
3.149ab 3.149cd 3.150	アートマンの存在論証 <i>satya</i> としてのアートマン 左右の目で見たもの 過去の想起、夢	cf.1.71cd

表 3-2 YājñS 3.151-205

YājñS	内容	CS Śā
3.151 3.152 3.153ab 3.153cd 3.154ab 3.154cd 3.155	束縛されている人々 自我意識 行為の結果に対する疑い 親族と私 転倒した考え 無差別な考え 正しくない手段 束縛されたもの	5.10 5.10 5.10 5.10 5.10 5.10 cf.5.10
3.156-159 3.160 3.161	不死のもの 不死のものとなるための手段、罪禍 ヨーガ 前生の想起	5.12, cf.5.13 cf.3.13
3.162 3.163 3.164 3.165	アートマン、身体、死 役者の比喻 胎児の奇形 解脱していない状態のアートマン 灯火の比喻、時ならぬ (<i>akāla</i>) 死	 2.29 cf.6.28,cf.CS Vi.3.37-38,8.43-44
3.166-169	灯火の比喻、光線、神々とこの世界	
3.170-173	世界の原因としてのアートマン	
3.174-176 3.177-179 3.180 3.181 3.182 3.183	<i>paramātman</i> の徴表 <i>kṣetrajñā,avyakta,ātman</i> 5 大元素と性質 行為の成熟 ラジャス・タマス、 <i>cakra</i> の比喻 <i>anādi,ādīmat,liṅga,vikāra</i>	1.70-73 1.63-66 1.27 1.68 cf.1.59-65
3.184-185 3.186-188	<i>pitṛyāna</i> ムニとリシ	
3.189-197 3.198-203 3.204	アートマンを知るための要件 ヨーガの方法 ヴェーダの反復	cf.1.140-141
3.205	家長の解放（解脱）	

（この表のなかで、cf. としたものは、言語表現は一致しないものの、その意味するところに類似点が見出せるものであることを示す。）

YājñS 3.125: *puruṣa*の誕生

YājñS 3.125ab: *anādir ātmā sambhūtir vidyate nāntarātmanaḥ /*

YājñS 3.125cd: *samavāyī tu puruṣo mohecchādveṣakarmajaḥ //*

「アートマンは始まりのないものであり、内なるアートマンの生成は存在しない。
しかし、総合体としてのプルシャは、迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為から生じるものである。」

これは、世界とアートマンの誕生についての問い(YājñS 3.118)に対する回答である。CS Śāの次の詩節がこれに近い。

CS Śā 1.53ab: *prabhavo na hy anāditvād vidyate paramātmanaḥ /*

CS Śā 1.53cd: *puruṣo rāśisaṃjñās tu mohecchādveṣakarmajaḥ //*

「最高のアートマンは、始まりのないものであることから、まさに〔その〕起源は存在しない。
集合体と呼ばれるプルシャは、しかし、迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為から生じるものである。」

上に示した CS Śā 1.53 は「プルシャの起源は何か?」(CS Śā 1.3d: *prabhavaḥ puruṣasya kaḥ*) という問いに対する回答である。この2つの韻文を比較すると、*prabhava* (CS Śā 1.53a) が、*sambhūti* (YājñS 3.125a) に、*rāśi* (CS Śā 1.53c) が、*samavāyī* (YājñS 3.125c) に変わっているが、文意には大きな差はない。ただ、*paramātman* (CS Śā 1.53b) が、*antarātman* (YājñS 3.125b) とされている点には注目すべきであろう。

mohecchādveṣakarmajaḥ (YājñS 3.125d, CS Śā 1.53d) については、CS Śā5.10の冒頭部分に「生起（流転）は、迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為を根本としているものである。」(*mohecchādveṣa-karmamūlā pravṛttiḥ*.) という表現があり、さらにこれは VS 6.2.17(*icchādveṣapūrvikā dharmādharmayoḥ pravṛttiḥ*.) に近い表現である。

YājñS 3.129-130: アートマンに関する疑問

YājñS 3.118-143 は、アートマンに関する6つの問いとその答えという形式の記述である。このような形式自体、CS Śā 第1章のアートレーヤとアグニヴェーシャの問答形式に対応するものである。そのYājñSの問いのうち、次に示すものは、CS Śā 第1章に対応するものが見られる。

YājñS 3.129ab: *yady evaṃ sa katham brahman pāpayoniṣu jāyate /*

YājñS 3.129cd: *īśvaraḥ sa katham bhāvair anīṣṭaiḥ samprayujyate //*

「もしこのようであるのならば、ブラフマンよ。どうして彼は、悪しき母胎に生まれるのか。主宰者である〔のに〕彼は、どうして望ましくない諸状態と結び付けられるのか。」

CS Śā 1.6cd: *svatantraś ced anīṣṭāsu katham yoniṣu jāyate //*

「独立したものであるとするならば、どうして望ましくない母胎に生まれるのか。」

YājñS 3.130cd: *vetti sarvagatām kasmāt sarvago 'pi na vedanām //*

「なぜ、遍在のものなのに、あらゆる所にある感覚を感じることはないのか。」

CS Śā 1.7cd: *sarvāḥ sarvagatatvāc ca vedanāḥ kiṃ na vetti saḥ //*

「また、この〔アートマン〕は、遍在性であるのに、どうしてあらゆる感覚を感じることはないのか。」

これらの問いに対する YājñS と CS それぞれの回答には、類似した内容のものが多く、その言語表現において、完全に一致する記述はあまり見られない。(表 3-1 参照)

YājñS 3.145ab: 6 要素からなるプルシャ

YājñS 3.145ab: *brahmakhānīlatejāṃsi jalam bhūś ceti dhātavaḥ /*

「ブラフマン、虚空、風、火、水、地というのが、〔アートマンの構成〕要素である。」

この部分は、次の CS Śā 5.4 の散文に対応している。

CS Śā 5.4: ... *ṣaḍdhātavaḥ samuditāḥ puruṣa iti śabdaṃ labhante. tadyathā pṛthivy āpas tejo vāyur ākāśaṃ brahma cāvvyaktam iti, eta eva ca ṣaḍdhātavaḥ samuditāḥ puruṣa iti śabdaṃ labhante.*

「6つの要素の集合したものが、人間という言葉を得る。すなわち、地、水、火、風、空、未開展のブラフマンである。また、これら6つの要素が集合したものこそ、人間という言葉を得る。」

YājñS 3.151-155: 束縛されている人々

CS Śā 5.10 は、迷妄・欲望・嫌悪・行為（あるいは迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為）(moheccchādveṣakarma) を根本とする生起（流転）(pravṛtti) から、自我意識(ahaṅkāra)・執着(saṅga)・懷疑(saṃśaya)・増長(abhisamplava)・墮落(abhyavapāta)・逆行(vipratyaya)・無差別(aviśeṣa)・〔解脱のための〕手段ではないこと(anupāyā) という8種の状態が生じ、これらによって圧倒されている人間は、生起（流転）を越えて、解脱に至ることはないという内容である。この自我意識などの8種の束縛の原因の CS Śā 5.10 中の説明は次の通りである。

CS Śā 5.10: ... *tatraivaṃ jāti-rūpa-vitta-vṛtta-buddhi-śīla-vidyābhijana-vayo-vīrya-prabhāva-saṃpanno 'ham ity ahaṅkāraḥ,*

yan mano-vāk-kāya-karma nāpavargāya sa saṅgaḥ,

karmaphala-mokṣa-puruṣa-pretyabhāvādayaḥ santi vā neti saṃśayaḥ,

sarvāvasthāsu ananyo 'ham ahaṃ sraṣṭā svabhāvasaṃsiddho 'ham ahaṃ śarīrendriya-buddhi-smṛti-viśeṣa-rāśir iti grahaṇam abhisamplavaḥ,

mama mātṛ-pitṛ-bhrātṛ-dārāpatya-bandhu-mitra-bhṛtyagaṇo gaṇasya cāham ity abhyavapātaḥ,

kāryākārya-hitāhita-śubhāśubheṣu viparītābhīniveśo vipratyayaḥ,

jñājñayoḥ prakṛti-vikārayoḥ pravṛtti-nivṛttyoś ca sāmānya-darśanam aviśeṣaḥ,

prokṣaṇānaśanāgnihotra-triṣavaṇābhyyukṣaṇāvāhana-yājana-yajana-yācana-salila-hutāśanapraveśādayaḥ samārambhāḥ procyante hy anupāyāḥ. ...

「このうち自我意識は、『私はこのような生まれ・容姿・富・行ない・知性・習慣・学識・氏族・年齢・体力・威光をそなえている』と〔考えること〕であり、

終結（解脱）のためでなく、マナス・言葉・身体の行為をもつこと、それが執着であり、行為の果報・解脱・人間の来世の存在などが存在するのがあるいは存在しないのかと〔疑うこと〕が、懷疑であり、

「私はあらゆる状態において他とは異なったものであり、私は創造者であり、私は生まれつき完成されたものであり、私は身体・感覚器官・ブッディ・記憶の特別の集合体である」というとらえかたが増長であり、

母・父・兄弟・妻・子・親族・友人・召し使いの集団は私のものであり、また私は、集団のものであるということが、墮落であり、

為されるべきこと・為されるべきでないこと、有益なこと・無益なこと、良いこと・悪いことに対して逆に固執することが、逆行であり、

知る主体と知る主体でないもの、質料因と派生物、生起（流転）と止滅が同様に見えることが無差別であり、

灌水・断食・アグニホートラ・〔1日に〕3回〔ソーマを〕搾ること・灌頂・〔祭場に〕招き入れること・〔人におこなってもらう〕祭式・〔自分でおこなう〕祭式・勧請・水と火に入ることなどが企てられることがまさに、〔解脱のための〕手段ではないことであると言われる」

YājñS 3.151-154 は、この CS Śā 5.10 の説明の順序と内容にほぼ一致している。

YājñS 3.151ab: *jātirūpavayovṛttavidyādibhir ahaṅkṛtaḥ /*

YājñS 3.151cd: *śabdādiviśayodyogaṃ karmaṇā manasā girā //*

「自我意識は、〔私は、このような〕生まれ・容姿・年齢・行い・学識などを有している〔と考えること〕である。行い、マナス、語と、言葉などの対象との結合が〔ある〕。」

YājñS 3.152ab: *sa samdigdhamatiḥ karmaphalaṃ asti na veti vā /*

YājñS 3.152cd: *vipṛuṭaḥ siddham ātmānam asiddho 'pi hi manyate //*

「行為の果報があるのかないのかと疑いを抱くものは、混乱したものであり、〔アートマンを〕完成した者でないのに、アートマンを完成したと考えている。」

YājñS 3.153ab: *mama dārāḥ sutāmātyā aham eṣām iti sthitiḥ /*

YājñS 3.153cd: *hitāhiteṣu bhāveṣu viparītamatiḥ sadā //*

「妻、息子、親族たちは、私のものであり、私はこれらのもの達のものであると確信し、有益なもの、有益でないものについて、常に逆転した考えをもっている。」

YājñS 3.154ab: *jñe 'jñe⁴² ca prakṛtau caiva vikāre cāviśeṣavān /*

YājñS 3.154cd: *anāśakānalāghātajalaprapatanodiyamī //*

「知る主体と知る主体でないものと、質料因と派生物とに関して無差別であり、断食しようとし、火に入ろうとし、水に飛び込もうとする。」

これで明らかなように、YājñS 3.151abはCS Śā 5.10の自我意識に、YājñS 3.151cdはおなじく執着に、YājñS 3.152abは懐疑に、YājñS 3.152cdは増長に、YājñS 3.153abは墮落に、YājñS 3.153cdは逆行に、YājñS 3.154abは無差別に、YājñS 3.154cdは〔解脱のための〕手段ではないことについての説明を典拠としたものであろう⁴³。

そして、次のYājñS 3.155の記述は、CS Śā 5.10冒頭の、「生起（流転）は、迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為を根本としているものである。」(*moheccādvēṣakarmamūlā pravṛttiḥ*)という語句に対応している。

YājñS 3.155ab: *evamvṛtto 'vinītātma vitathābhīniveśavān /*

YājñS 3.155cd: *karmanā dveṣamohābhyām icchayā caiva badhyate //*

「このような行いをし、自律せず、不実に執着した者は、まさに、行為、嫌悪・迷妄、欲望によって束縛されている。」

YājñS 3.163: 胎児の奇形について

YājñS 3.163ab: *kālakarmātmabījānām doṣair mātus tathāiva ca /*

YājñS 3.163cd: *garbhasya vaikṛtaṃ dṛṣṭam aṅgahīnādi janmanaḥ //*

「時間・行為・アートマン・ बीージャの欠陥によって、また、同様に母親の〔欠陥によって〕、生まれてくる胎児に、手足が欠けているなどといった奇形が見られる。」

⁴² 注釈者 Viśvarūpa によるテキスト。

⁴³ 本論文第1部1章でも触れたように、このCS Śā 5.10とYājñS 3.151-154の内容はBC 12.23-32の内容に近い。

これは次のCS Śā 2.29の医学的な記述を典拠にしたものと見ることができる。

CS Śā 2.29ab: *bījātmakarmāśayakāladōṣair mātus tathā "hāravihāradoṣaiḥ /*

CS Śā 2.29cd: *kurvanti doṣā vividhāni duṣṭāḥ samsthānavarṇendriyavaikṛtāni //*

「 बीージャ・自己の行為・場（子宮）(*āśaya*)⁴⁴・時間の欠陥によって、同様に母親の食物・休息の欠陥によって、汚された諸病素(*doṣa*)が、〔胎児の身体の〕組成・色・感覚器官の様々な異常をもたらす。」

YājñS 3.174-176: *paramātman*の徴表

YājñS 3.174ab: *ahaṃkāraḥ smṛtir medhā dveṣo buddhiḥ sukhaṃ dhṛtiḥ /*

YājñS 3.174cd: *indriyāntarasamcāra icchā dhāraṇajīvite //*

「自我意識、記憶〔力〕、知恵、嫌悪、理性、楽、堅固さ、別の感覚器官への移動、欲求、支えること、生氣、」

YājñS 3.175ab: *svargaḥ svapnaś ca bhāvānām preraṇaṃ manaso gatiḥ /*

YājñS 3.175cd: *nimeṣaś cetanā yatna ādānaṃ pāñcabhautikam //*

「天界、様々なものの夢、促すこと、思考器官の動き、まばたき、精神性、努力、5〔大〕元素からなるものを受取ること、」

YājñS 3.176ab: *yata etāni dṛśyante līṅgāni paramātmanaḥ /*

YājñS 3.176cd: *tasmād asti paro dehād ātmā sarvaga īśvaraḥ //*

「これらの最高のアートマンの徴表が見られる。

このことから、身体を超越し、遍在の、主宰者であるアートマンが存在する。」

最高のアートマン(*paramātman*)の徴表(*līṅga*)については、CS Śā 1.70-72に、ほぼ同様の記述がある。

CS Śā 1.70ab: *prāṇāpānau nimeṣādyā jīvanaṃ manaso gatiḥ /*

CS Śā 1.70cd: *indriyāntarasamcāraḥ preraṇaṃ dhāraṇaṃ ca yat //*

「吸気と呼気、まばたきなど、生命活動、思考器官の動き、別の感覚器官への移動、促すこと、支えること、」

CS Śā 1.71ab: *deśāntaragatiḥ svapne pañcatvagrahaṇaṃ tathā /*

CS Śā 1.71cd: *dṛṣṭasya dakṣiṇenākṣṇā savyenāvagamas tathā //*

「夢の中で他の場所へ行くこと、また、5〔元素への帰滅〕を捉えること、右の目によって見られたものを左の目によっても同様に認めること、」

CS Śā 1.72ab: *icchā dveṣaḥ sukhaṃ duḥkhaṃ prayatnaś cetanā dhṛtiḥ /*

CS Śā 1.72cd: *buddhiḥ smṛtir ahaṃkāro līṅgāni paramātmanaḥ //*

「欲求、嫌悪、楽、苦、努力、精神性、堅固さ、

⁴⁴ 注釈者 CP はここで、*āśaya* = 「子宮」(*garbhāśaya*)とする。

理性、記憶〔力〕、自我意識は、最高のアートマンの徴表である。」

CS Śā 1.73ab: *yasmāt samupalabhyante liṅgāny etāni jīvataḥ* /

CS Śā 1.73cd: *na mṛtasyātmaliṅgāni tasmād āhur maharṣayaḥ* //

「これらの徴表は生きている者に認められ、死んだ者には〔認められ〕ない。

このことから偉大な聖仙たちは、アートマンの徴表であると言う。」

YājñS 3.175a の *svarga* についてはCS に対応する語がなく、この文脈における意味も理解しづらい。CS Śā 1.71cd の「右の目によって見られたものを左の目によっても同様に認めること」を、YājñS はここでは挙げていないが、YājñS 3.149 にはこれに近い表現が見られる。

YājñS 3.149ab: *mahābhūtāni satyāni yathātmāpi tathaiva hi* /

3.149cd: *ko 'nyathaikena netreṇa dr̥ṣṭam anyena paśyati* //

「実に、〔5〕大元素が実在であるように、まさに同様にアートマンも〔実在である〕。

そうでなければ、誰が一方の目で見られたものを、他方の〔目〕で見るであろうか。」

これらのアートマンの徴表については、VS と NyāS に同様の記述が見られる。

VS 3.2.4: *prāṇāpāna-nimeṣonmeṣa-jīvana-manogatīndriyāntaravikārāḥ sukhaduḥkhe icchā-dveṣau prayatnaś cety ātmaliṅgāni*.

「吸気・呼気・まぶたを閉じること・まぶたを開けること・生命活動・思考器官の動き・別の感覚器官の変化、楽・苦、欲・嫌悪、努力。以上がアートマンの徴表である。」

NyāS 3.1.7: *savyadr̥ṣṭasyetareṇa pratyabhiññānāt*

「左〔目〕で見られたものを反対の〔目〕によって、認識することから〔アートマンは存在する〕。」

YājñS 3.177-179: *kṣetrajña, avyakta, ātman*

YājñS 3.177ab: *buddhīndriyāṇi sārthāni manaḥ karmendriyāṇi ca* /

YājñS 3.177cd: *ahaṁkāraś ca buddhiś ca pṛthivyādīni caiva hi* //

「感覚器官と対象、思考器官、そして運動器官、

そして自我意識、そして理性、そして地など〔の5大元素〕。〔これらが土地である。〕」

YājñS 3.178ab: *avyaktam ātmā kṣetrajñaḥ kṣetrasyāśya nigadyate* /

YājñS 3.178cd: *īśvaraḥ sarvabhūtasthaḥ sann asan sad asac ca yaḥ* //

「未展開のものであるアートマンは、土地にとっての土地を知るものであると言われる。

主宰者であり、あらゆる生物にあり、実在にして実在でないものであり、実在にして実在でないものである。」

YājñS 3.179ab: *buddher utpattir avyaktāt tato 'haṁkārasambhavaḥ* /

YājñS 3.179cd: *tanmātrādīny ahaṁkārad ekottaraḡuṇāni ca* //

「未展開から理性の発生があり、そこ（理性）から自我意識の発生がある。

自我意識から一つづつ性質が増加する素粒子（唯）が〔生じる〕。」

アートマンを「土地を知るもの」(*kṣetrajña*) と呼び、その他の存在を「土地」(*kṣetra*) と呼ぶ例は、ウパニシャッド以来見られ、また ManS 8.96 にも見られるものである⁴⁵。上に示した通り YājñS 3.177 では、この「土地」に相当するものが列挙され、YājñS 3.178 で「土地を知るもの」としてのアートマンが示されている。これに続く YājñS 3.179 では、これらの展開の順序が明らかにされる。このような表現は、明らかにサーンキヤ哲学的ではあるが、アートマンを *avyakta* とする点は特異的であり、また「原質」としての *prakṛti* には言及されていない。このような展開説は、次に示すように、CS Śā 第1章に見られるプルシャの24要素説とほとんど変らないものである。

CS Śā 1.63ab: *khādīni buddhir avyaktam ahaṁkāras tathā 'ṣṭamaḥ* /

CS Śā 1.63cd: *bhūtaprakṛtir uddiṣṭā vikārāś caiva ṣoḍaśa* //

「空をはじめとするもの（5大元素）、理性、未展開のもの、また第8番目の自我意識。

これらは、存在するものの質料因であると示された。さらに、実に〔以下の〕16の派生物がある。」

CS Śā 1.64ab: *buddhīndriyāṇi pañcaiva pañca karmendriyāṇi ca* /

CS Śā 1.64cd: *samanaskāś ca pañcārthā vikārā iti samjñitāḥ* //

「5つの感覚器官と、5つの運動器官、

また、思考器官とともに、5つの〔感覚器官の〕対象〔という16のもの〕が派生物と呼ばれる。」

CS Śā 1.65ab: *iti kṣetram samuddiṣṭam sarvam avyaktavarjitaṁ* /

CS Śā 1.6cd: *avyaktam asya kṣetrasya kṣetrajñam ṛṣayo viduḥ* //

「以上のように未展開のものを除くすべてが土地であると、示された。

未展開のものはこの土地にとっての土地を知るものであると、聖仙達は知っている。」

CS Śā 1.66ab: *jāyate buddhir avyaktād buddhyā 'ham iti manyate* /

CS Śā 1.66cd: *paraṁ khādīny ahaṁkārad utpadyante yathākramam* //

⁴⁵ その主な例は次の通り。Śvetāśvatara upaniṣad 6.16; Maitry upaniṣad 2.5; BC 12.20; BhG 13.1-6; MBh 12.180 章 etc.; ManS 8.96.

「未開展のものから理性が生じる。理性によって「私」というふうに考えられる（自我意識）。さらに、空をはじめとするものが、自我意識から順に発生する。」

YājñS 3.179c では、*tanmātra* が示されているが、これは CS Śā 第1章の開展説の中には見られないものである。

YājñS 3.182: 輪廻

CS では、輪廻の原因として *rajas* と *tamas* を挙げることが多い。

CS Śā 1.68ab: *avyaktād vyaktatām yāti vyaktād avyaktatām punaḥ /*

CS Śā 1.68cd: *rajastamobhyām āviṣṭaś cakravat parivartate //*

「未開展から開展した状態に行き、また、開展から未開展の状態に〔行く〕。激質と翳質とに入り込まれたものが、輪のように回転する。」

YājñS 3.182 は、この CS の内容に一致している。

YājñS 3.182ab: *sattvaṃ rajas tamaś caiva guṇās tasyaiva kīrtitāḥ /*

YājñS 3.182cd: *rajastamobhyām āviṣṭaś cakravat bhrāmyate hy asau //*

「純質、激質、そしてまさに翳質は、実にその〔アートマンの〕性質であると言われている。激質と翳質とに入り込まれたそれが、輪のように、まさに回るのである。」

以上のように、YājñS 3.108-205 のアートマンの諸相についての部分は、この項の最初に表 3-1,2 でその概略を示した通り、全体としてひとつのまとまりをもつアートマン論と見ることができるのであるが、その中のかなりの部分が CS Śā の内容にほぼ一致するものであると言える。

2.5 Carakasamhitā, Śārīrasthāna と Yājñavalkyasmṛti 3.67-205 について

これまでに見てきたように、YājñS 3.67-205 のうちに含まれる胎生学的な記述(3.75-83)と身体各部位についての記述(3.84-107)が、CS Śā の内容をほぼそのまま取り込んだものであることは明らかである。また、アートマンの誕生に関する部分(3.67-74)およびアートマンの諸相に関する部分(3.108-205)にも、CS Śā の内容に一致する部分が多く見られた。

このような YājñS 3.67-205 の記述は、CS Śā 以外の典拠からの引用を交えながらも、CS Śā をモデルとして、医学的な知識を（部分的には未消化ながらも）取り込んだ形の、ひとつのま

とまりのあるアートマン（個体）論として構想されたものと見ることも可能であろう。そうであれば、これは CS Śā の個体論が、アーユルヴェーダ以外の領域に与えた影響と見なすことができるであろう。

一方、CS においても、例えば CS Śā 5.12 では、解脱の方法のひとつとして法典(*dharmaśāstra*)に従うことが挙げられているように、アーユルヴェーダ文献と法典の作者たちとはもともと近しい関係にあったのかも知れない。

第3章 Śārīrasthānaに見られる解剖学的知識

インド伝統医学(*āyurveda*)には伝説的な人物であるアートレーヤ(Ātreya)とダンヴァンタリ(Dhanvantari)をそれぞれの主導者とする2つの系統があったことが知られている。このうちアートレーヤの医学派は、インド西北部で起こり、薬物療法、養生法など主に非観血的な治療を専らとしていたものであり、これに対してインド中東部で成立したダンヴァンタリの医学派は、観血的な、いわゆる外科治療に重きを置いていたものである。

長い時間と様々な発展経過をたどって体系化された古代インドの医学・医術は、それ自体極めて複雑な構造を持っており、仮説的な、あるいはほとんど観念的とさえ言えるいわゆる3病素(*tridoṣa*)説と呼ばれる独特な病理学説を発展させ、これを最も重要な基礎理論として奉じる一方、他方では病の場である人体の構造を実証的に認識するために、ダンヴァンタリ学派では屍体解剖という手段をも取り入れていたのである。また臨床面では、それぞれの専門分野に長じた医者達が存在しており、それぞれの流儀による医療活動を展開していたと考えられる。

現存するサンスクリット医学文献のうち、アートレーヤ学派を代表する最も古く、まとまった文献は *Carakasamhitā* (CS) である。ダンヴァンタリ学派のそれは *Suśrutasamhitā* (SS) である。また、アートレーヤ学派には *Bhelasamhitā* (BhS) という文献が不完全な形ながら現存している。

ここでは、これら3文献それぞれの *Śārīrasthāna* のうちの「身体の数」(*śarīrasamkhyā*) の章について、特にCSを中心にその内容を紹介しながら、アートレーヤ学派とダンヴァンタリ学派の医学文献に見られる解剖学的知識の特徴を比較、検討することにしたい。

3.1 「身体の数」の章の概要

CS Śā 第7章「身体の数」(*śarīrasaṃkhyā*)の章は、CSにおける解剖学的知識のいわば総まとめの章である。この章は全20節から成り、解剖学的名称と各数量についての記述が大部分を占め、CSの全巻に現われる解剖学的名称を、わずかな例外を除いて、ほとんど網羅的に列挙したものである。この章の構成と内容の概要は以下の通りである。

CS Śā 第7章 (全20節)

(冒頭の数字は節の番号、「」内は原文の翻訳。)

- 1-3. 序, アグニヴェーシャの問い
- 4. アートレーヤの教え
 - 6層の皮膚それぞれの説明
- 5. 身体の6区分について
- 6. 360の骨の名称列挙
- 7. 感覚器官と運動器官の名称列挙
- 8. 心臓(*hṛdaya*)について
- 9. 10種の氣息(*prāṇa*)の基体の名称列挙
- 10. 15種の内臓の名称列挙
- 11. 56種の身体小部分(*pratyaṅga*)の名称と各々の数
- 12. 9種の孔(*chidra*)について
- 13. 「以上〔に述べた〕ものは見えるもの、指摘することもできるものである。」
- 14. 「これ以下〔に述べる〕ものは指摘されず、推量されるにすぎないものである。」
 - 靱帯(*snāyu*), 脈管類(*sirā, dhamanī*), 急所(*marman*), 関節(*saṃdhi*),
 - 脈管類の微小な末端部, 髪(*keśa*), 髭(*śmaśru*), 体毛(*loma*)の数
- 15. 掌の容量によって計られるものについて
- 16-18. 5大元素(*mahābhūta*), 解脱などについて
- 19-20. まとめ

この章全体の構成は、序と問い(第1～3節)、解剖学についての本論(第4～15節)、補足的事項(第16～18節)、まとめ(第19～20節)の4つの部分から成っている。ここに見られる解剖学的記述は、素朴なものではあるがそれなりによく整理されている。また、この章は「全ての身体〔各部分の〕数と量の知識を得る」(CS Śā 7.3)ことを目的としており、身体各器官の形態・構造・機能について具体的にはあまり触れていない。身体の構造や機能についてのまとまった記述は、CSのこの他の章においても意外なほど少なく、臨床医学的な記述の中に散見されるにすぎない。このことは、実証的な解剖・生理学説よりも、仮説的な病理学説である3病素説に大きく依存しているアートレーヤ学派の医学の特質によるものと考えられる。しかし、この章の内容に関してまず注目すべきことは、身体構造の各数についての記述の中で、第4節から第12節までに述べられたものは「見えるもの、指摘することもできるもの」(CS Śā 7.13: *etāvad dṛśyaṃ śakyam api nirdeṣṭum.*)であり、一方、その後の節で述べるものについては、「これより〔述べるものは〕指摘されず、推量されるにすぎないもの」(CS Śā 7.14: *anirdeśyam ataḥ paraṃ tarkyam eva.*)であるとしている点である。つまりCSは人体構造のうちに、完全に認識、識別することができず、「推量」に頼るしかない部分が残っていることを認めているのである。このような記述は次に見るように、同じアートレーヤ学派のBhSにも、またダンヴァンタリ学派のSSにも見られないCS独自のものである。

次にBhS Śāの同名の章の構成を示す。

BhS Śā 第7章 (全9節)

- 1. 序
 - アートレーヤの教え
 - 6種の皮膚それぞれの説明
- 2. 360の骨の名称列挙
- 3. 心臓(*hṛdaya*)について
 - 10種の氣息(*prāṇa*)の座の各々の数
- 4. 15種の内臓の名称列挙

5. 56種の身体小部分 (*pratyaṅga*) の名称と各数列举
6. 掌の容量によって計られるものについて
- 7-8. 霊魂 (*jīva*) 等
9. まとめ

このように BhS の記述は CS よりもはるかに簡略である。しかし、序文 (第1節)、解剖学についての本論 (第1節途中から第6節)、補足的事項 (第7～8節)、まとめ (第9節) といった全体の構成は CS と全く同じである。本論部分について見ると、CS にのみ見られ、BhS には見られない節 (CS Śā 7. 第5,7,12～14節) があるが、これらを除けば CS と BhS の各節の事項と記述の順序は同じになる。また CS と BhS とに共通して見られる節の記述内容は、表現のわずかな違いやテキストの明らかな乱れを除けばほぼ同じものであり、両者が同一の伝承に由来するものであることは疑問の余地がない。また、BhS のほうが CS よりもアートルーヤの教説の原型に近いという説が正しいとすれば、CS にあつて BhS にはない記述は、本来の教説には含まれていなかったものであり、CS のテキストが成立する過程で新たに挿入された要素であると考えられるであろう。このことについては後に検討することにする。

ダンヴァンタリ学派を代表する SS は全6巻から成り、このうち第3巻が *Śārīrasthāna* であり、その第5章が上記 CS, BhS と同名の「身体の数」(*śārīrasaṃkhyā*) の章である。ここでもやはり解剖学的名称と各数量の列举が記述の中心となっており、次のような内容である。

SS Śā 第5章 (全51節)

- 1-2. 序
3. 胎児の定義、胎児と5大元素 (*mahābhūta*)、身体の定義、
6つの身体区分の名称列举
4. 身体小部分 (*pratyaṅga*) の名称とその各数
5. その他の身体構成要素の名称列举
皮膚 (*tvac*)、基質 (*kalā*)、身体要素 (*dhātu*)、老廃物 (*mala*)、病素 (*doṣa*)、
内臓類 (*yakṛt*, *plīhan*, *phupphusa*, *uṇḍuka*, *hṛdaya*, *āśaya*, *antra*, *vṛkka*),

孔 (*srotas*)、腱 (*kaṇḍarā*)、網状組織 (*jāla*)、束状組織 (*kūrca*)、腱索 (*rajjū*)、
縫合 (*sevanī*)、(骨) 集合体 (*saṃghāta*)、分界線 (*sīmanta*)、骨 (*asthi*)、関節 (*saṃdhi*)、
靱帯 (*snāyu*)、筋 (*peśi*)、急所 (*marman*)、脈管類 (*sirā*, *dhamanī*, *yogavahasrotas*)

6. 各数

皮膚は7、基質は7、臓器 (*āśaya*) は7、身体要素は7、シラーは700、
筋は500、靱帯は900、骨は300、関節は210、急所は107、ダマニーは24、
病素は3、老廃物は3、孔は9、腱は16、網状組織は16、束状組織は6、
腱索は4、縫合は7、(骨) 集合体は14、分界線は14、*yogavaha-srotas* は22

7. 「皮膚, 基質, 身体要素, 老廃物, 病素, 内臓類は〔前章で〕述べられた。」

8. 臓器 (*āśaya*) の名称列举

9. 男女の腸 (*antra*) の長さ

10. 男性9種、女性12種の孔の列举

11. 16種の腱の位置と説明

12. 16種の網状組織の分類と説明

13. 6種の束状組織の位置

14. 4種の肉腱索の位置と説明

15. 7種の縫合の位置と説明

16. 14種の骨集合の位置

17. 14種の分界線の説明、骨集合を18種とする異説の紹介

18. 300の骨のそれぞれの身体部位における各数、

骨は360であるとする異説の紹介

19. 身体各部分の骨の各数と名称の列举

20. 骨の形態による分類

21-23. 骨について

24-25. 関節の機能による分類

26. 身体各部分の関節の各数

- 27. 関節の形態による分類
- 28. 関節の補足説明
- 29. 身体各部分の靱帯の各数
- 30-36. 靱帯の形態による分類について
- 37. 身体各部分の筋の各数
- 38. 筋の機能について
- 39. 女性の筋、子宮 (*garbhaśayyā*) の位置
- 40. 筋の状態
- 41. 男性と女性の筋について
- 42. 「急所, 脈管類 (*sirā, dhamanī, srotas*) の分類は他の〔章〕で〔述べる〕。」
- 43. 母胎 (*yonī*) と子宮について
- 44. 子宮の形態について
- 45. 子宮内にある胎児の状態、出産時の胎児の状態について
- 46-48. 身体の知識について
- 49. 解剖の実際
- 50. 見ることでできないものについて
- 51. 治療を行うべき人について

アートレーヤ学派の2文献に比べて、SSは内容がより豊富で、荒削りではあるものの、全体として系統的な解剖学的知識を所有していたことがわかる。さらにSSでは本章の前後5つの章にわたって各器官の形態・構造・機能についてのまとまった記述も見られ、身体を生理学的側面からも系統的に理解しようとしていた様子がうかがわれる。この点もアートレーヤ学派の医学書とは際立っており、ダンヴァンタリ学派の医学の特質の1つと言えよう。さらに、SSの決定的とも言える特異性は、この章の第49節に「人体解剖」について次のような記述が見られることである。

「それゆえ、完全な身体を備え、毒によって害せられていず、長い病によって苦し

められず、100歳に達せず、腸における便が取り除かれている、結わえられており、簞に入っている、ムンジャ草 (*muñja*)、樹皮、クシャ草 (*kuśa*)、麻 (*śaṇa*) 等のうちの一つで身体部分と身体小部分が覆われた人間を、流れている河の中で、隠れた場所で、腐敗させるべきである。そして7夜後に、完全に腐敗した身体を引き上げて、ウシーラ草 (*uśīra*)、動物の尾の毛 (*bāla*)、竹 (*veṇu*)、樹皮、草束のうちの一つで、徐々に擦りながら、上に述べられた皮膚等の、内部と外部の身体部分と身体小部分の差異の全体を眼によって、確かめるべきである。」(SS Śā 5.49)¹

ダンヴァンタリ系の医学においては、人体構造を研究する上で、人体解剖の重要性が自覚されていただけでなく、既にここに見られるような屍体解剖²の具体的な方法が確立されていたのである。人体構造のうちに「推量」の余地を残すCSと、人体解剖を実際に行って身体の各部位をくまなく観察し、それを実証的に記述しようとしていたSSとの意識上の違いは極めて大きい。また、このような屍体解剖についての記述とその実行を容認し得るような、ダンヴァンタリ学派の社会的・宗教的背景についても今後検討されるべきであろう。

3.2 解剖学的知識の内容

SSの解剖学的知識の詳細については Jolly 1901, Hoernle 1907, Kutumbiah 1969, 大地原 1971, Zysk 1986 に譲り、ここでは主にCSの解剖学的知識の内容を、SSとの違いに注意しつつ翻訳³を交えながら見ていくことにする。

¹SS Śā 5.49: *tasmāt samastagātram aṣṭopahatam adīrghavyādhīpīḍitam avarṣaśatikam niḥsṛṣṭa-antrapurīṣam puruṣam avahantyām āpagāyām nibaddham pañjarastham muñjavalkala kuśa-śaṇādīnām anyatamenāveṣṭitāṅgapratyaṅgam aprakāśe deśe kothayet, samyak prakuthitam coddhṛtya tato deham saptarātrād uśīrabālaveṇuvalkalakūrcānām anyatamena śanaiḥ śanair avagharṣayaṃs tvagādīn sarvān eva bāhyābhyantarān aṅgapratyaṅgaviśeṣān yathoktān lakṣayec cakṣuṣā.*

²SSの人体解剖についてのこの記述とほぼ同じ記述が AS Sū 34.39-40 に、さらに AHS Sū 26.33-34 に対する Hemādriによる注釈 *Āyurveda-rasāyana* (A.D. 13-14世紀頃) にも見られる。Kenneth G.Zysk はこれらインド医学に見られる解剖に関する記述とギリシャ医学におけるそれとの関連を示唆している。Zysk 1986 pp.693-696.

³サンスクリットの医学用語、特に病名や解剖学的名称を翻訳する際に、古代ギリシャ医学や中国伝統医学さらには現代医学など、他の医学体系の専門用語をそのまま流用することは、概念上の混乱を防ぐためにもなる

3.2.1 皮膚

CS, BhSは皮膚(*tvac*)を6層に分類し、それぞれについて説明している。

「身体には、6つの皮膚がある。すなわち、外側にある皮膚は「水を保持するもの」(*udakadharā*)であり、第2の〔皮膚〕は「血を保持するもの」(*asṛgdharā*)であり、第3の〔皮膚〕はシドマ(*sidhma*)、キラーサ(*kilāsa*)〔という白斑病変〕が生じる場所であり、第4の〔皮膚〕はダドルー(*dadrū*)、クシュタ(*kuṣṭha*)〔という重篤な皮膚病〕が生じる場所であり、第5の〔皮膚〕はアラジー(*alajī*)、ヴィドラディ(*vidradhī*)〔という腫瘍〕が生じる場所であり、第6の〔皮膚〕はそれが切断されると〔その人は〕窒息し、盲人のように暗黒に入る。また、黒い血をもち粗大な根を有する最も治療困難なアルス(*arus*)〔という疾患〕がこの(第6の皮膚)に位置し、関節において生じる。以上が6つの皮膚である。」(CS Śā 7.4)⁴ (BhS Śā 7.1 もほぼ同じ)

SSは、次に示すように、皮膚を7層に分類し、それぞれを説明している。

「7つの皮膚が存在する。これらのうちの第1の〔皮膚〕は、「輝くもの」(*avabhāsini*)という名で、全ての色を表わし、また5種の影を現わす。それは米粒の1/18の量(厚さ)であり、シドマ(*sidhma*)〔という白斑病変〕、蓮華状突起病変(*padmakāṇṭaka*)の場所である。第2の〔皮膚〕は「赤いもの」(*lohitā*)という名であり、米粒の1/16の量で

べく避けるべきである。とりわけ内臓類や脈管類の名称に関しては、解剖学的な認識と生理、病理学的な概念とが密接に関連しているものであるだけに、翻訳に際しても十分な配慮が必要となる。ただし、たとえばサンスクリットの *hṛdaya*, *yakṛt*, *plīhan* のように、語源的に、あるいは位置や形態についての記述内容から判断して、それぞれ現代医学の心臓、肝(臓)、脾(臓)にちかいものと考えられるものもある。しかし、インド伝統医学におけるこれらの器官の特にその機能についての概念と、他の医学体系におけるそれとが完全に一致するものでないことは言うまでもない。本稿では Filliozat 1949 pp.121-128.; Meulenbeld 1974 pp.457-458.; 大地原 1971; Zysk 1986 による訳語を参考にしつつ、なるべくサンスクリットの原語本来の意味を生かすように努めたが、どうしても意味が不明確なものには? 印を付した。脈管類の名称に関してはあえて、原語をそのまま用いることにした。

⁴CS Śā 7.4: ...*śarīre ṣaṭ tvacaḥ ;tadyathā — udakadharā tvagbāhyā, dvitīyā tu asṛgdharā, tṛtīyā sidhmakilāsasambhavādhiṣṭhānā, caturthī dadrūkuṣṭhasambhavādhiṣṭhānā, pañcamī tu alajīvidradhī-sambhavādhiṣṭhānā, ṣaṣṭhī tu yasyāṃ chinnāyāṃ tāmtyaty andha iva ca tamaḥ pravīṣati yāṃ cāpy adhiṣṭhāyārūṃṣi jāyante parvasu kṛṣṇarakṭāni sthūlamūlāni duścikitsyatamāni ca; iti ṣaṭ tvacaḥ ...*

あり、ティラカーラカ(*tilakālaka*)、ニヤッチャ(*nyaccha*)、ヴィアンガ(*vyariga*)〔という黒色・褐色病変〕の場所である。第3の〔皮膚〕は、「白いもの」(*śvetā*)という名であり、米粒の1/12の量であり、小膿疱(*carmadala*)、アジャガッリー(*ajagallī*)、マシヤカ(*maśaka*)〔という疣状病変〕の場所である。第4の〔皮膚〕は、「暗赤色のもの」(*tāmrā*)という名であり、米粒の1/8の量であり、様々なキラーサ(*kilāsa*)〔という白斑病変〕、クシュタ(*kuṣṭha*)〔という重篤な皮膚病〕の場所である。第5の〔皮膚〕は、「ヴェーディニー」(*vedinī*)という名であり、米粒の1/5の量であり、クシュタ(*kuṣṭha*)、ヴィサルパ(*visarpa*)〔という重篤な皮膚病〕の場所である。第6の〔皮膚〕は、「ローヒニー」(*rohiṇī*)という名であり、米粒の量であり、グランティ(*granthī*)、アパチー(*apacī*)、アルブダ(*arbuda*)、シュリーパダ(*ślīpada*)、ガラガンダ(*galagaṇḍa*)〔という結節性の病変〕の場所である。第7の〔皮膚〕は、「肉を保持するもの」(*māṃsadharā*)という名であり、2つの米粒の量であり、痔瘻(*bhagandara*)、ヴィドラディ(*vidradhī*)〔という腫瘍〕、痔疾(*arśas*)の場所である。このように示されたところの〔皮膚の〕量(厚さ)は、肉付のよい部分におけるものであって、額、小指などにおけるものではない。」(SS Śā 4.4)⁵

CS, SSともに特定の疾病(または症状)の発生箇所と、各皮膚層とを関連付けて述べている。しかも、その疾病(または症状)が重篤なものほど、皮膚の深い層で発生するとしており、臨床上の観察をもとに分類がなされている点が注目される。このようにCSとSSの各皮膚層の分類、記述の形式はよく似ている。しかし、SSでは各皮膚層の厚さをそれぞれ米粒の大きさとの対比によって示し、また疾病(または症状)の種類や皮膚層の名称も多く挙げるなど、CSの記述に比べると、より詳細でよく整理された記述となっている。

⁵SS Śā 4.4: ...*sapta tvaco bhavanti. tāsāṃ prathamā 'vabhāsini nāma, yā sarvavarṇān avabhāsayati pañcavidhāṃ ca chāyāṃ prakāśayati, sā vrīher aṣṭādaśabhāgapramāṇā, sidhma-padma-kaṇṭakādhi-ṣṭhānā; dvitīyā lohitā nāma, vrīhi-ṣoḍaśa-bhāga-pramāṇā, tilakālaka-nyaccha-vyarigādhiṣṭhānā; tṛtīyā śvetā nāma, vrīhi-dvādaśa-bhāga-pramāṇā, carmadalājagallī-maśakādhiṣṭhānā; caturthī tāmrā nāma vrīher aṣṭabhāgapramāṇā, vividhakulāsakuṣṭhādhiṣṭhānā; pañcamī vedinī nāma, vrīhipañcabhāgapramāṇā, kuṣṭhavisarpādhiṣṭhānā; ṣaṣṭhī rohiṇī nāma, vrīhipramāṇā, granthyapacyarbudaslīpadagalagaṇḍādhiṣṭhānā; saptamī māṃsadharā nāma, vrīhidvayapramāṇā, bhagandaravidradhyarśo 'dhiṣṭhānā. yad etat pramāṇaṃ nirdiṣṭaṃ tan māṃsaleṣu avakāśeṣu, na lalāṭe sūkṣmāṅguly-ādiṣu. ...*

3.2.2 身体6区分と身体小部分

CS,SSともに身体(*aṅga*)を両上肢、両下肢、胴、頭の大きな6つの区分にわけ、さらに各局所の小部分(*pratyāṅga*)を区分している。身体小部分(*pratyāṅga*)とは、身体6区分にそれぞれ付属している局部のことである(CS Śā 7.11)。その種類についてはCSとSSで相違が見られる。以下にCSとSSに見られる身体小部分(*pratyāṅga*)の全名称を記述の順序に従って示す。(各小部分の名称の前の()内の数字は、便宜上付したもの。各名称の後の数字はテキストに示されているそれぞれの数である。)

pratyāṅga (CS Śā 7.11)	pratyāṅga (SS Śā 5.4)
(BhS Śā 7.5 もほぼ同様)	
(1) ふくらはぎ (<i>jaṅghāpiṇḍika</i>),2	(1) 頭蓋 (<i>mastaka</i>),1
(2) 腿の盛り上り (<i>ūrupiṇḍika</i>),2	(2) 腹 (<i>udara</i>),1
(3) 臀部 (<i>sphic</i>),2	(3) 背中 (<i>pr̥sthā</i>),1
(4) 辜丸 (<i>vr̥ṣaṇa</i>),2	(4) 臍 (<i>nābhī</i>),1
(5) 陰茎 (<i>śeṣha</i>),1	(5) 額 (<i>lalāṭa</i>),1
(6) 腋 (<i>ukha</i>),2	(6) 鼻 (<i>nāsā</i>),1
(7) 鼠蹊部 (<i>vaṅghaṇa</i>),2	(7) おとがい (<i>cibuka</i>),1
(8) 腰部のくぼみ (<i>kukundara</i>),2	(8) 膀胱部 (<i>basti</i>),1
(9) 下腹部 (<i>bastiśīrṣa</i>),1	(9) 首 (<i>grīvā</i>),1
(10) 腹 (<i>udara</i>),1	(10) 耳 (<i>karṇa</i>),2
(11) 乳 (<i>stana</i>),2	(11) 目 (<i>netra</i>),2
(12) 口蓋扁桃? (<i>śleṣmabhū</i>),2	(12) 眉 (<i>bhrū</i>),2
(13) 腕の肉の盛り上り (<i>bāhupiṇḍika</i>),2	(13) こめかみ (<i>śanikha</i>),2
(14) おとがい (<i>cibuka</i>),1	(14) 肩 (<i>aṃsa</i>),2
(15) 口唇 (<i>oṣṭhā</i>),2	(15) 頬 (<i>gaṇḍa</i>),2
(16) 口角 (<i>śṛṅgaṇī</i>),2	(16) 脇 (<i>kakṣa</i>),2
(17) 歯ぐき (<i>dantaveṣṭaka</i>),2	(17) 乳 (<i>stana</i>),2
(18) 口蓋 (<i>tālū</i>),1	(18) 辜丸 (<i>vr̥ṣaṇa</i>),2
(19) 口蓋垂 (<i>galaśuṇḍikā</i>),1	(19) 肋部 (<i>pārśva</i>),2
(20) 舌下部? (<i>upajihvikā</i>),2	(20) 臀部 (<i>sphic</i>),2
(21) 軟口蓋? (<i>gojihvikā</i>),1	(21) 顎 (<i>jānu</i>),2
(22) 頬 (<i>gaṇḍa</i>),2	(22) 腕 (<i>bāhu</i>),2
(23) 耳の孔 (中耳) (<i>karṇaśaṣkulika</i>),2	(23) 腿 (<i>ūru</i>),2
(24) 耳たぶ (<i>karṇaputraka</i>),2	(24) 指 (<i>aṅgulī</i>),20
(25) 眼窩縁 (<i>akṣikūṭa</i>),2	(25) 孔 (<i>srotas</i>),9
(26) 眼瞼 (<i>akṣivartman</i>),4	
(27) 瞳 (<i>akṣikanīnika</i>),2	
(28) 眉 (<i>bhrū</i>),2	
(29) うなじ (<i>avaṭu</i>),1	
(30) 手掌・足掌 (<i>pāṇipādahr̥daya</i>),4	

CS⁶では、ふくらはぎ (*janghāpiṇḍika*)、腿の肉の盛り上り (*ūrupiṇḍika*)、腕の肉の盛り上り (*bāhupiṇḍika*) のようにピンディカ (*piṇḍika*) という語によって筋肉の盛り上がった部分を表わしている。このような表現はSSにはない。SSでは後述するように、全身のいわゆる「筋(肉)」部分についてはペーシー (*peśī*) という語をあてており、CSよりも系統的にこれを理解しようとしていた様子がうかがえる⁷。

3.2.3 骨 (*asthi*)

CSとBhSは骨 (*asthi*) の総数は360であるとする。

「歯槽 (*dantolūkhala*) と爪 (*nakha*) とともに、360の骨 (*asthi*) がある。すなわち、歯 (*danta*) は32、歯槽は32、爪は20、手と足の指の骨 (*pāṇipādāṅgulyasthi*) は60、手と足の棒状骨 (*pāṇipādaśalāka*) は20、手と足の棒状骨の基部 (*pāṇipāda śalākādhiṣṭhāna*) は4、両かかと (*pārṣṇī*) にある骨は2、両足にあるくるぶし (*gulpha*) は4、両手にある手首 (*maṇika*) は2、両肘 (*aratni*) にある骨は4、両脛 (*janigha*) にある〔骨は〕4、両膝 (*jānu*) は2、両膝蓋 (*jānukapālaka*) は2、両大腿の長骨 (*ūrunalaka*) は2、両腕の長骨 (*bāhunalaka*) は2、両肩 (*aṃsa*) は2、肩甲 (*aṃsaphalaka*) は2、鎖骨 (*akṣaka*) は2、頸の基部? (*jatru*) は1、口蓋 (*tāluka*) は2、腰部 (*śroniphalaka*) は2、陰部の骨 (*bhagāsthi*) は1、背中 (*prṣṭha*) にある骨は45、首 (*grīva*) にある〔骨は〕15、胸 (*uras*) にある〔骨は〕14、両肋部 (*pārśva*) には24の肋骨 (*parśuka*)、背部の骨 (*sthāla*) は同数 (24)、また背部の骨の突起 (*sthālakārbuda*) も同数 (24) のみ、顎骨 (*hanvasthi*) は1、顎の根元の結合 (*hanumūlabandhana*) は2、鼻 (*nāsikā*)・頬 (*gaṇḍa*)・頬の突出 (*kūṭa*)・額 (*lalāṭa*) は1つの骨、こめかみ (*śarikha*) は2、頭蓋 (*śiraḥkapāla*) は4である。歯槽と爪を含め、以上が360の骨である。」(CS Śā 7.6)⁸

⁶CSの注釈者CPは、*śleṣmabhū*について「喉の両わきに位置する堅い部分」、*upajihvikā*については「舌の上部にある舌と、下部にある舌。」、*gojihvikā*については「発声器官」と注釈している。

⁷cf. Kutumbiah 1969 pp.18-23.

⁸CS Śā 7.6: *trīṇi saśaṣṭīni śatāny asthnām saha dantolūkhalanakhena. tadyathā — dvātriṃśad dantāḥ, dvātriṃśad dantolūkhalāni, viṃśatir nakhāḥ, ṣaṣṭiḥ pāṇipādāṅgulyasthīni, viṃśatiḥ pāṇipādaśalākāḥ, catvāri pāṇipādaśalākādhiṣṭhānāni, dve pārṣṇyor asthīni, catvāraḥ pādāyor gulphāḥ, dvau maṇikau has-*

(BhS Śā 7.2 も一部を除いてほぼ同じ。)

骨の突起部をも数に入れているところから見ると、死体の骨を1つずつ分割しながら詳細に数えたわけではなく、生体の体表面と死体の骨格とを比較しながら観察して、骨の数を大まかに列挙したもの、という印象を受ける。人間の全身の骨の総数は360であるという説は、ヴェーダ文献 (*Śatapathabrāhmaṇa* 10.5.4.12; 12.3.2.3-4 など) にも見られ、CSのこの記述は権威あるヴェーダ文献の説との数あわせとも考えられる。

一方、骨総数300説をとるSSは、まず自派の見解と他との相違を明確にしている。

「ヴェーダを語る人々は、360の骨が〔あると〕言う。しかし外科の論書 (*salyatantra*) においては、300のみである。これらのうち120の骨は四肢にあり、117は腰・脇・背・胸にあり、頸より上には63、このようにして、骨〔の総数〕は300となる。」(SS Śā 5.18)⁹

SSがヴェーダ文献以来の骨総数360説を知りながらも、あえて骨総数300説をとり、自己の立場を強調している点は注目に値する。さらに続けて個別の骨について詳しく述べる。

「1本ずつの足の指には3つずつ〔骨が〕あり、それらは〔全部で〕15、足掌 (*tala*)・盛り上り (*kūrca*)・くるぶし (*gulpha*) に繋がった〔骨は〕10、かかと (*pārṣṇī*) には1、下腿 (*janigha*) には2、膝 (*jānu*) には1、上腿 (*ūru*) には1であると〔言われる〕。このように1つの下肢 (*sakthi*) には30〔の骨が〕ある。これによって、他の下肢と両上肢 (*bāhu*) とが説明された。腰部 (*śroni*) には5、これらのうち肛門部 (*guda*)・陰部 (*bhaga*)・

tayoḥ, catvāry aratnyor asthīni, catvāri janighayoḥ, dve jānunī, dve jānukapālīke, dvāv ūrunalakau, dvau bāhunalakau, dvāv aṃsau, dve aṃsaphalake, dvāv akṣakau, ekaṃ jatru, dve tāluke, dve śroniphalake, ekaṃ bhagāsthi, pañcacatvāriṃśat prṣṭhagatāny asthīni, pañcadaśa grīvāyām, caturdaśorasi, dvayoḥ pārśvayoś caturviṃśatiḥ parśukāḥ, tāvanti sthālakāni, tāvanti caiva sthālakārbudāni, ekaṃ hanvasthi, dve hanumūlabandhane, ekāsthi nāsikāgaṇḍakūṭalalāṭaṃ, dvau śarikhau, catvāri śiraḥkapālānīti; evaṃ trīṇi saśaṣṭīni śatāny asthnām saha dantolūkhalanakhneti.

⁹SS Śā 5.18: *trīṇi saśaṣṭīny asthisatāni vedavādino bhāṣante; salyatantra tu trīṇy eva śatāni. teṣāṃ savimśam asthisatam śākhāsu, saptaśaśottaram śatam śronipārśvapṛṣṭhorāḥsu, grīvāṃ pratyūrdhvaṃ triṣaṣṭiḥ, evam asthnām trīṇi śatāni pūryante.*

尻部(*nitamba*)には4、[これらの] 3つの部分に繋がった[骨は] 1、片側の肋部(*pārśva*)には36、2つめの[片側の肋部に] も同様、背中(*pr̥ṣṭha*)には30、胸(*uras*)には8、肩甲(*aṃsaphalaka*)には2、首(*grīva*)には9、咽喉(*kaṇṭhanāḍī*)には4、顎(*hanu*)には2、歯(*danta*)は32、鼻(*nāsā*)には3、口蓋(*tālu*)には1、頬(*gaṇḍa*)・耳(*karṇa*)・こめかみ(*śaṅkha*)には1ずつ、頭(*śiras*)には6である。」(SS Śā 5.19)¹⁰

SSでは歯槽(*dantolūkhala*)32と、爪(*nakha*)20と、背部の骨の突起(*sthālakārbuda*)24が骨のうちに数えられていないことから、アートルーヤ学派とダンヴァンタリ学派の骨の総数の違いが生じている。また、SSには骨の形状について、次のような記述が見られる。

「これらの[骨]は、5種類である。すなわち、「鉢状のもの」(*kapāla*)、「光沢のあるもの」(*rucaka*)、「軟らかなもの」(軟骨) (*taruṇa*)、「環状のもの」(*valaya*)、「長いもの」(*nalaka*)と呼ばれるものである。これらのうち、膝、尻、肩、頬、口蓋、こめかみ、頭には「鉢状のもの」があり、一方、歯は「光沢のあるもの」であり、鼻、耳、首、眼窩には「軟らかなもの」があり、肋部、背中、胸には「環状のもの」があり、のこりは「長いもの」と呼ばれるものである。」(SS Śā 5.20)¹¹

このような骨の形状についてのまとまった記述はアートルーヤ系の文献には見られない。

¹⁰SS Śā 5.19: *ekaikasyāṃ tu pādāṅgulyāṃ trīṇi trīṇi tāni pañcadaśa, talakūrcagulphasamśritāni daśa, pārṣṇyāṃ ekam, jaṅghāyāṃ dve, jānuny ekam, ekam ūrāv iti, triṃśad evam ekasmin sakthni bhavanti, etenetasakthi bāhū ca vyākhyātau; śroṇyāṃ pañca, teṣāṃ gudabhaganitambeṣu catvāri, trikasamśritam ekam, pārśve ṣaṭtriṃśad ekasmin, dviṭiye 'py evam, pr̥ṣṭhe triṃśat, aṣṭāv urasi, dve aṃsaphalake, grīvāyāṃ nava, kaṇṭhanāḍyāṃ catvāri, dve hanvoḥ, dantā dvātriṃśat, nāsāyāṃ trīṇi, ekam tāluni, gaṇḍakarṇaśaṅkheṣu ekaikam, ṣaṭ śirasīti.*

¹¹SS Śā 5.20: *etāni pañcavidhāni bhavanti; tadyathā — kapāla-rucaka-taruṇa-valaya-nalaka-samjñāni. teṣāṃ jānu-nitambāṃsa-gaṇḍa-tālu-śaṅkha-śiraḥsu kapālāni, daśanās tu rucakāni, ghrāṇa-karṇa- grīvākṣikoṣeṣu taruṇāni, pārśva-pr̥ṣṭhoruḥsu valayāni, śeṣāṇi nalaka-samjñāni.*

3.2.4 感覚器官と運動器官

CSはŚā 7.7で感覚器官(*buddhīndriya*)として、触覚器官(*sparsana*)・味覚器官(*rasana*)・嗅覚器官(*ghrāṇa*)・視覚器官(*darśana*)・聴覚器官(*śrotra*)の5種を挙げ、運動器官(*karmendriya*)としては、両手(*hastau*)・両足(*pādu*)・肛門(*pāyu*)・生殖器(*upastha*)・舌(*jihvā*)の5種を挙げている。さらに感覚器官の基体(*indriyādhiṣṭhāna*)は、皮膚(*tvac*)・舌(*jihvā*)・鼻(*nāsikā*)・両目(*akṣiṇi*)・両耳(*karṇau*)であるとしている。このような分類・列挙は、医学文献以外に、哲学の文献などにおいても見られ、これらの中には、思考器官(*manas*)をも含めて合計11器官とするものもある¹²。CSのこの部分の記述には思考器官は含まれておらず、器官は合計10となっている。(CS Sū 第8章でも同様。)

BhSの同名の章は、感覚、運動器官についての項目を欠いている。SSは、SS Śā 1.4で、思考器官を含めた11の感覚、運動器官に言及している。

3.2.5 心臓

CS Śā 7.8は、「心臓は唯一の意識の拠り所である。」(*hṛdayaṃ cetanādhiṣṭhānam ekam*)とし、BhS Śā 7.3にもほぼ同内容の記述がある。(*hṛdayam ekam cetanāyatanam*) さらにSS Śā 4.34にも「心臓は意識の場であると言われている。」(*hṛdayaṃ cetanāsthānam uktaṃ*)(cf. SS Śā 4.31)とあり、意識は心臓に宿るものであるという認識ではこの3文献は一致している。またCSには他の章に「6区分をもつ身体・認識・器官・5感覚器官の対象・属性を伴うアートマン・意識・思考の対象は心臓に依拠しているものである。」(CS Sū 30.4)¹³という記述が見られ、身体的にも精神的にも心臓が中心的な存在であると見なしている。

¹²たとえばSK 26-27など

¹³CS Sū 30.4: *ṣaḍaṅgam aṅgaṃ vijñānam indriyāṇy arthapañcakam ātmā ca saguṇaś cetaś cintyaṃ ca hṛdi samśritam.*

3.2.5 氣息の場所

氣息(*prāṇa*)という言葉は、ヴェーダ文献以来、単に呼気・吸気だけではなく、生命力そのものをも意味する言葉として広く用いられているが、医学文献においても同様である。CS Śā 7.9 と BhS Śā 7.3 は共に、この氣息の在所(*prāṇāyatana*)として、頭(*mūrdhā*)、喉(*kaṇṭha*)、心臓(*hṛdaya*)、臍(*nābhi*)、腸(*guda*)、膀胱(*basti*)、オージャス(*ojas*)¹⁴、精液(*śukra*)、血(*śoṇita*)、肉(*māṃsa*)の10種を挙げる。CSはこれらの場所のうち最初の6つは急所(*marman*)であるとする。一方、SSは、この章では氣息の在所について記述していないが、急所(*marman*)に関する章で、急所には氣息があると述べており(SS Śā 6.15)、CSと同様に、氣息(*prāṇa*)と急所(*marman*)を関係付けて理解しようとしているようである。また、氣息については(身体内の)風(*vāyu*)の5種(*udāna*, *prāṇa*, *samāna*, *apāna*, *vyāna*)の内の1種であるとする記述も各文献の他の章には見られる(CS Sū 12.8, Ci 28.5-11; BhS Sū 16,12-22; SS Ni.1.12-21)。

3.2.6 内臓

CS, BhSともに、内臓(*koṣṭha*)は15種であるとする。これに対して、SSの場合は内臓(*koṣṭha*)という言葉で一括せず、臓器(*āsaya*)とその他のものに分類しているが、やはり15種を挙げている。()内の数字は記述の順序に従って便宜上付したものである。

¹⁴CS Sū 17.74-75 にオージャスについての説明がある。それによるとオージャスとは心臓にある、赤黄色のものであり、全ての身体諸要素の中で最初に発生するものであり、これがなくなると人間は死ぬものであるとされている。

koṣṭha (CS Śā 7.10)	koṣṭha (SS Śā 5.5,7)
(1) 臍(<i>nābhi</i>)	(1) 肝(<i>yakṛt</i>)
(2) 心臓(<i>hṛdaya</i>)	(2) 脾(<i>plīhan</i>)
(3) 肺(<i>kloman</i>)	(3) 肺(<i>phupphusa</i>)
(4) 肝(<i>yakṛt</i>)	(4) 小囊?(<i>uṇḍuka</i>)
(5) 脾(<i>plīhan</i>)	(5) 心臓(<i>hṛdaya</i>)
(6) 腎(両数)(<i>vṛkka</i>)	(6) 腸(複数)(<i>antra</i>)
(7) 膀胱(<i>basti</i>)	(7) 腎(両数)(<i>vṛkka</i>)
(8) 便臓器(<i>purīṣādhāra</i>)	
(9) 未消化物臓器(<i>āmāśaya</i>)	āsaya (SS Śā 5.8)
(10) 消化物臓器(<i>pakvāśaya</i>)	(8) ヴァータ臓器(<i>vātāśaya</i>)
(11) 上腸(<i>uttaraguda</i>)	(9) ピッタ臓器(胆嚢?)(<i>pittāśaya</i>)
(12) 下腸(<i>adharaguda</i>)	(10) シュレーシュマン臓器(<i>śleṣmāśaya</i>)
(13) 小腸(<i>kṣudrāntra</i>)	(11) 血臓器(<i>raktāśaya</i>)
(14) 大腸(<i>sthūlāntra</i>)	(12) 未消化物臓器(<i>āmāśaya</i>)
(15) 大網(<i>vapāvahana</i>)	(13) 消化物臓器(<i>pakvāśaya</i>)
	(14) 尿臓器(<i>mūtrāśaya</i>)
	(15) 胎児臓器(子宮)(<i>garbhāśaya</i>)

これらの内臓の名称には(SSが示しているように)2種類あることがわかる。器官そのものの実体を表わす名称と、その器官の内容、機能を示している名称とである。前者は心臓(*hṛdaya*)、肺(*kloman*)、肝(*yakṛt*)、脾(*plīhan*)、腎(*vṛkka*)などであり、これらは既にヴェーダ文献にも用例が見られるものである。後者は未消化物臓器(*āmāśaya*)、消化物臓器(*pakvāśaya*)、便臓器(*purīṣādhāra*)、尿臓器(*mūtrāśaya*)、胎児臓器(子宮)(*garbhāśaya*)などのいわゆる臓器(*āsaya*)類であり、これらは医学上の専門用語とも言えるものである。これらの専門用語に属するものとして、SSはさらに、ヴァータ臓器(*vātāśaya*)、ピッタ臓器(*pittāśaya*)、シュレーシュマン臓器(*śleṣmāśaya*)という臓器も記述している。これら3臓器はいわゆる3病素説を反映したものであろうが、3病素説に関して、SSではこれら3つの病素(*doṣa*)に血を加えて、病素を4とすることがある。血臓器(*raktāśaya*)をSSが記しているのはこのような事情によるものと考えられる。ピッタ臓器については、ピッタ(*pitta*)を「胆汁」と考えれば、「胆嚢」と解釈できなくはないが、いずれにしてもこれら4つの臓器の記載は、3ないし4病素説の理論上の要請によると考えられるものであって、本来実証的な

解剖学を重視するSSでさえもやはり、仮説的な病素説を理論的基盤としていたことの例証と言えよう。CSはこれら4つの臓器をこの章では挙げていないが、シュレーシュマン臓器 (*śleṣmāśaya* または *kaphāśaya*) については、CS Ci 8.58; 20.34; 21.39 に用例が見られる。

CS¹⁵は、臍 (*nābhi*) と大網 (*vapāvahana*) を挙げているが、SSは挙げていない。腸について、CSはグダ (*guda*) とアントラ (*antra*) という2種類を記し、さらにこれを上腸 (*uttaraguda*)、下腸 (*adharaguda*)、小腸 (*kṣudrāntṛa*)、大腸 (*sthūlāntṛa*) に区分している。SSはアントラ (*antra*) のみを挙げている。SSでグダ (*guda*) という時は、肛門および直腸部分を指すようである (SS Vi 2.4)。CSにおけるグダ (*guda*) もこれとほぼ同様のものと考えてよいであろう。胎児臓器 (子宮) (*garbhāśaya*) についてCSはこの章には記していないが、他の章には用例が多い。肺に関して、SS Śā 4.31 の心臓についての記述の中に、「この〔心臓〕の下方左に脾 (*plīhan*) とプップサ (*phupphusa*) があり、右には肝 (*yakṛt*) とクローマン (*kloman*) がある。」 (*tasyādho vāmataḥ plīhā phupphusaśca, dakṣiṇato yakṛt kloma ca*) という表現がある。このことから、クローマンは右肺、プップサは左肺を意味するものと考えられる。しかしこの章では、CSはクローマンのみ単数で、SSはプップサのみを単数で記している。小囊 (*uṇḍuka*) はSSにのみ見られる。SS Śā 4.25 に、「小囊は血の滓から生じるものである。」 (*śoṇitakiṭṭaprabhava uṇḍukaḥ*) とあるが、ここに述べられる小囊 (*uṇḍuka*) の実体は不明である。

3.2.7 孔

CSは、「大きな孔は9つである。頭部に7つ、下〔半身〕に2つである。」 (CS Śā 7.12)¹⁶とするだけであるが、SSはこれよりやや詳しく、「男性の外側に開いた9の孔は、耳・目・口・鼻・肛門・秘処であり、女性にはこれら同じものと、他の3つ〔すなわち〕乳にある2つと、下方に血を運ぶ〔孔〕とがある。」 (SS Śā 5.10)¹⁷としている。また、身体にある「(大きな) 孔」のこと

¹⁵CSの注釈者CPは、肺 (*kloman*) は「渴きの場」 (*pipāsāsthāna*)、膀胱 (*basti*) は「尿臓器」 (*mūtrāśaya*)、上腸 (*uttaraguda*) はそこに便が降下してくるところ、下腸 (*adharaguda*) は便を排泄させるもの、大網 (*vapāvahana*) は「脂肪の場」 (*medaḥsthāna*) であるとしている。

¹⁶CS Śā 7.12: *nava mahanti chidrāṇi — sapta śīrasi, dve cādhaḥ.*

¹⁷SS Śā 5.10: *śravaṇanayanavanadanaghrāṇagudamedhṛāṇi nava srotāṃsi narāṇāṃ bahirmukhāni, etāny*

を、この章ではCSは *chidra* とし、他の章では *kha* (CS Sū 7.42) とともに記している。一方、SSはこれを *srotas* と記し、身体小部分 (*pratyaṅga*) に含めている。CSにおいて *srotas* という時には、後述するように脈管類の総称を意味している。ただしSSでも脈管類のうちの1種として *srotas* という語を用いることもあり、この章では「(大きな) 孔」の意味である *srotas* と区別するために、この脈管のことを *yogavaha-srotas* と記して区別している。

3.2.8 「推量されるにすぎないもの」

CSは靱帯 (*snāyu*)、脈管類 (シラー (*sirā*), ダマニー (*dhamanī*))、筋 (*peśī*)、急所 (*marman*)、関節 (*saṃdhi*) の各総数は頭髮、髭、体毛の数と同様に「推量されるにすぎないもの」とする。BhSには前に見た通り、これらの総数についての記述は見られない。SSはこの章でやはり、これらの総数を記しており、それをCSが挙げる総数と比較すると以下のようなになる。

	CS	SS
靱帯 (<i>snāyu</i>)	900	900
シラー (<i>sirā</i>)	700	700
ダマニー (<i>dhamanī</i>)	200	24
筋 (<i>peśī</i>)	400	500 (女性は520)
急所 (<i>marman</i>)	107	107
関節 (<i>saṃdhi</i>)	200	210

ダマニーを除いてCS¹⁸とSSが、ほぼ同様の数字を挙げていることは注目に値する。しかしSSは、後続の章 (SS Śā 第6～9章) で、これらの機能、形態、身体各部位における各数等についてさらに詳細に記述しているが、CSおよびBhSには、このSSの記述に匹敵するような詳細な説明は他章にもあまり見られず、この点に関して両学派の違いは大きい。

eva strīṇām aparāṇi ca trīṇi dve stanayor adhaśtād raktavahaṇi ca.

¹⁸CSには、SSと同様に筋を500とする異読もある。cf. CS text(2)

脈管類

CS はシラー、ダマニーを含む脈管類をスロータス (*srotas*) と総称して、第3巻 Vi の第5章をその説明に充てている。

「すなわち〔脈管 (*srotas*) は〕、氣息 (*prāṇa*)・水・食物・血・滋味 (*rasa*)・肉・脂肪・骨・髓・精液・尿・便・汗を運ぶものである。また全身に行き渡るヴァータ・ピッタ・シュレーシュマンにとっては全ての脈管 (*srotas*) がその運び手である。…」

このように身体は脈管 (*srotas*) が正常な状態であることによって病気によって苦しめられることはない。」 (CS Vi 5.7)¹⁹

「脈管 (*srotas*)、シラー (*sirā*)、ダマニー (*dhamanī*)、滋味の通路 (*rasāyanī*)、滋味の流路 (*rasavāhinī*)、管 (*nāḍī*)、道 (*pathin*)、通路 (*mārga*)、身体孔 (*śarīra- cchidra*)、開閉するもの (*saṃvṛtāsaṃvṛta*)、場 (*sthāna*)、臓器 (*āsaya*)、処 (*niketa*) とは、知覚されるあるいは知覚されない、身体要素の空洞の名称である。」 (CS Vi 5.9)²⁰

このように CS のいう脈管 (*srotas*) とは、身体の中で空洞になっている部分であり、これを通路として生命維持に必要な様々ものが運ばれていくものである。そして、このなかにはシラー、ダマニーをはじめとする多様な種類が含まれることになる。しかし、CS は各脈管の違いについてはあまり明確には述べておらず、たとえば、「これら〔脈管類〕は、果実をもたらすごとくなので、偉大な果をもつもの〔と呼ばれ〕、膨れることからダマニー、流すことからスロータス、流動することからシラー〔と呼ばれる〕」 (CS Sū 30.12)²¹、「未消化物臓器に至った食べ物だけが消化され、消化されたものはその後で、ダマニーを通して全臓器に達する」 (CS Vi 2.18)²²、

¹⁹CS Vi 5.7: ... *tadyathā — prāṇodakānnarasarudhiramāṃsamedosthimajjāsukramūtra- purīṣa-sveda- vahānīti; vātapittasleṣmaṇām punaḥ sarvaśarīracarāṇām sarvāṇi srotāṃsy ayanabhūtāni, ... tadetat srotasāṃ prakṛtibhūtātuvān na vikārair upasṛjyate śarīram.*

²⁰CS Vi 5.9: *srotāṃsi, sirāḥ, dhamanyaḥ, rasāyanyaḥ, rasavāhinyaḥ, nāḍyaḥ, panthānaḥ, mārgāḥ, śarīracchidrāṇi, saṃvṛtāsaṃvṛtāni, sthānāni, āsayāḥ, niketās ceti śarīradhātuvavakāśānām lakṣyālakṣyāṇām nāmāni bhavanti.*

²¹CS Sū 30.12: ... *tāḥ phalantīva mahāphalāḥ. dhmanād dhamanyaḥ sraṇāt srotāṃsi saraṇāt sirāḥ.*

²²CS Vi 2.18: *āmāśayagataḥ pākam āhāraḥ prāpya kevalam. pakvaḥ sarvāśayaṃ paścāt dhamanībhiḥ prapadyate.*

「滋味を運ぶ脈管の根は心臓と10のダマニーである」 (CS Vi 5.8)²³、「心臓には10のダマニーがある」 (CS Si 9.4)²⁴ (cf. CS Sū 30.8)、「この〔胎児の〕母親の心臓はその後産 (胎盤) を、流れているシラーによって浸している」 (CS Śā 6.23)²⁵といった記述が散発的に見られるのみであり、ダマニーを200、シラーを700とする各数の「推量」の根拠は示されていない。

一方、SS はスロータス (*yogavaḥasrotas*) も脈管の1種であるとし、それぞれの脈管の違いについても記述している。それによると、シラーは臍を基点として、ヴァータ・ピッタ・カパ・血を運ぶそれぞれ10づつ合計40の根本のシラー (*mūlasirā*) があり、さらにそれぞれが175ずつに分かれ、総数は700である (SS Śā 7.5-6)。また、四肢には400、内臓には136、頭には164のシラーがそれぞれ分布している (SS Śā 7.20)。

ダマニーは臍を基点として、上行するもの10、下行するもの10、横行するもの4の合計24である (SS Śā 9.4)。上行するダマニーは、音声・触覚・色・滋味・香・吸気・呼気・欠伸・飢え・笑い・話・泣き等を運びつつ身体を保持し (SS Śā 9.5)、下行するダマニーはヴァータ・尿・便・精液・血等を運ぶ (SS Śā 9.7)。横行するダマニーはそれぞれがさらに多数に分岐している。これらのダマニーの先端は毛孔に繋がっている (SS Śā 9.9)。

スロータスもやはり臍を基点として、氣息・食物・水・滋味・血 (*rakta*)・肉・脂肪・尿・便・精液・経血 (*ārtava*) をそれぞれ輸送するものが2本ずつあり、合計22となり、ダマニーとも連絡している (SS Śā 9.12-13)。

このように SS は各脈管の相違やそれぞれの機能を述べるだけでなく、シラー、ダマニー、スロータスの総数の内訳についても言及しており、CS の記述とは異なっている。

²³CS Vi 5.8: ... *rasavahānām srotasām hṛdayaṃ mūlaṃ daśa ca dhamanyaḥ.*

²⁴CS Si 9.4: ... *hṛdaye daśa dhamanyaḥ ...*

²⁵CS Śā 6.23: ... *mātṛhṛdayaṃ hy asya tām aparān abhisamplavate sirābhiḥ syandamānābhiḥ, ...*

急所 (marman)

急所 (*marman*) は、インド伝統医学に独特の概念であり、特定の器官を指す名称ではなく、上に見たように氣息 (*prāṇa*) が宿るとされる身体中の部位の総称である。従って、急所に何らかの損害をこうむれば、その人は生命の危機に陥るとされる。これは外傷等についての多くの臨床経験を通じて得られた、言わば臨床解剖学的な概念である。

CS Śā 7.9 では前述のとおり、頭・喉・心臓・臍・腸・膀胱の「6つが急所に数えられる。」としている。また、CS Sū 11.48; 29.3; Si 9.3 には「3つの急所」(心臓・膀胱・頭) という言葉が見られる。このようにCSは、急所の総数については107と「推量」しながらも、具体的には3~6箇所の名を挙げるに留まり、この「推量」の根拠については明らかにしていない。あるいは本来のアートレーヤ学派の教説では、これら3~6箇所のみを急所として認識していたのかも知れない。

CS Ci 第26章には、このような急所についての異説をあたかも折衷するかのような次の記述が見られる。「身体の〔各部分の〕数に関して、107の急所 (*marman*) [が存在すると] 述べられたこと、このことを知る者達は、これら急所のうちの主要なものは、膀胱・心臓・頭であると言う。」(CS Ci 26.3)²⁶(cf. CS Si 9.3)

一方、SSはŚā 第6章を「個々の急所に関する説明」(*pratyekamarmanirdeśa*) に充てている。この章では、やはり総数を107とする急所の体表面上の位置、損傷を受けた場合の予後による分類などについて、臨床経験によって裏付けされた極めて詳細な記述が見られ、SSの解剖学的記述中の白眉とも言い得る内容である。そのなかに次のような急所の定義についての記述がある。「肉・シラー・靱帯・骨・関節の集合したものが急所である。これら〔急所〕には、まさに生まれつき、特に氣息がある。これにより、諸々の急所に障害を受けた者たちは、それぞれの状態に陥る。」(SS Śā 6.15)²⁷

さらにこの章においては、体表面上にある107の急所のそれぞれの名称が列挙されている。たとえば頭部に関しては、頭頂 (*adhipati*)、眉間 (*sthapanī*)、(左右の) 渦巻部 (眉上

²⁶CS Ci 26.3: *saptottaram marmasatam yaduktam śarīrasaṅkhyām adhikṛtya tebhyaḥ.*

marmāṇi bastiṃ hṛdayaṃ śīraś ca pradhānabhūtāni vadanti tajjñāḥ.

²⁷SS Śā 6.15: *marmāṇi nāma māmśasirāsānāyavasthisamdhisannipātāḥ; teṣu svabhāvata eva viśeṣeṇa prāṇās tiṣṭhanti; tasmān marmasv abhihatās tāmstān bhāvān āpadyante.*

部) (*āvarta*)、(左右の) 外眼角 (*apāṅga*)、(左右の) こめかみ上部 (*utkṣepa*)、(左右の) こめかみ (*śaṅkha*) といった部位が急所であるとされている (SS Śā 6.6)²⁸。そしてこのような各急所についての知識と、実際の患者の創傷部位とを照らし合わせることによって患者の予後を診断し、また治療の際にはこれらの急所の部位を避けることによって、外科的な侵襲を予防しようとしていたことは明らかである。上に見たように、単に「頭」そのものを急所であるとするCSとは、その認識の精度の点で極めて大きな差があるとしなくてはならない。

靱帯・関節・筋

CSは靱帯 (*snāyu*)・関節 (*saṃdhi*) について他章でたとえば、「骨関節とは骨の結合部であり、そこには靱帯と腱がある。」(CS Sū 11.48)²⁹といった説明をしているが、それぞれの総数を900、200とする「推量」の根拠は示していない。また、CSでは「筋(肉)」という意味でのペーシー (*peśi*) という言葉は、この章以外ではほとんど見られず、筋(肉)については前述したように、「肉の盛り上り」(*piṇḍa*) あるいは単に「肉」(*māṃsa*) という表現のみを用いていたようである³⁰。

一方、SSは靱帯 (*snāyu*) についてはŚā 5.29-36で、関節 (*saṃdhi*) についてはŚā 5.24-28で、筋 (*peśi*) についてはŚā 5.37-41で、身体局所における各数・形態・機能などを詳細に記述している。

以上のように、脈管類 (シラー、ダマニー)、急所、靱帯、関節、筋についてCSは、それぞれの総数を推量するのみで、その推量の根拠は明確にしておらず、CSの他章におけるこれらのものについての記述内容と矛盾する部分も少なくない。また、前述したようにCSが推量したそれぞれの総数は、SSが示す数とほとんど同じである。さらにCSの「見えるもの、指摘することもできるもの」と「指摘されず、推量されるにすぎないもの」という分類は、同じ

²⁸cf. Roṣu 1981

²⁹CS Sū 11.48: ... *asthisandhayo asthisamṃyogās tatropanibaddhās ca snāyukaṇḍarāḥ*,...

³⁰Kutumbiah 1969 pp.18-23.

アートレーヤ系のBhSには見られない。これらのことから、このCS Śā 7.13-14の記述内容は、本来のアートレーヤの教説とは異質なものであり、CSの編纂のいずれかの過程で、新たに挿入された可能性が高いものである。また、古代インドの法典YājñS.3.84-107には本論文でも触れたように、CS Śā 第7章からの引用が見られ、そこには脈管類、急所、靱帯、関節、筋の総数についての記述も含まれている。したがって、この部分のCSへの挿入は、かなり古い時代に行われたものと考えられる。

3.2.10 掌の容量によって計られるもの

CSとBhSは一人の身体中に存在する液状のものの量について、(その人自身の)両掌ですくった容量(*añjali*)を単位として記述している(CS Śā 7.15; BhS Śā 7.6)。それによると、身体の中にある水(*udaka*)は10*añjali*、滋味(*rasa*)は9*añjali*、血(*śoṇita*)は8*añjali*、便(*purīṣa*)は7*añjali*、シュレーシュマンは6*añjali*、ピッタは5*añjali*、尿(*mūtra*)は4*añjali*、肉中の脂肪(*vasā*)は3*añjali*、脂肪(*medas*)は2*añjali*、髄(*majjā*)は1*añjali*、脳?(*mastiṣka*)、精液(*śukra*)、粘液性のオージャスはともに半*añjali*である³¹。

このような記述はSSには見られない。CSはこれについても「推量されるのみ」として

いる。

滋味(*rasa*)とは、ここでは摂取された食物が消化された状態となったものを指している。シュレーシュマン(*śleṣman*)は身体中の様々な「粘液」、ピッタ(*pitta*)は「胆汁」とする解釈が一般的である。いずれにしても3病素(*doṣa*)の内に含まれるシュレーシュマンとピッタが、ともに液状の実体として挙げられている点は注目に値する。粘液性のオージャス(*ślaiṣmikasya ojas*)については、実体は不明である。

³¹CSの注釈者CPはここで*vasā*とは「肉の〔中の〕あぶら」。 *mastiṣka*とは「頭にあるあぶら」としている。

3.3 まとめ

以上のように、アートレーヤ学派とダンヴァンタリ学派の解剖学的知識を比較すると、身体を大きな部分(*aṅga*)と、さらに局所的な小部分(*pratyāṅga*)とに区分すること、皮膚を表層から順に各層に区分すること、骨の数をそれぞれの部位ごとに数え上げること、といった知識の枠組みそのものにはそれほど大きな違いは見られず、共通する部分も多いのであるが、個々の事項について見ると以下のような様々な相違が認められる。

(1) 皮膚をアートレーヤ学派は6層とし、ダンヴァンタリ学派は7層とする。

(2) 骨をアートレーヤ学派は360とし、ダンヴァンタリ学派は300とする。

(3) 靱帯(*snāyu*)、脈管類(*sirā, dhamanī*)、急所(*marman*)、筋(*peśī*)、関節(*saṃdhi*)についてCSはその総数を「推量されるのみ」とするのに対して、ダンヴァンタリ学派ではこれらに関する詳しく具体的な記述が見られる。

(4) 身体中に存在する液状のものについてアートレーヤ学派は掌(*añjali*)の容量を単位として記述するが、ダンヴァンタリ学派にはそのような記述は見られない。

(5) 人体解剖についての具体的な記述がSSには見られるが、アートレーヤ学派には見られない。

(6) 身体小部分(*pratyāṅga*)、内臓についてもその認識に差が認められる。

ダンヴァンタリ系のSSは自らを「外科の論書」(*śalyatantra*)と規定する通り、特に第1巻Sūや第4巻Ciで、外傷や腫瘍などに対する、切開、切除、縫合といったような外科的な治療法(*śāstrakarman*)についての具体的で詳細な記述が目立つが、一方、アートレーヤ系では一部(たとえばBhS Ci 27; CS Ci 25など)を除いて、外科的な治療法についての言及はあまり見られない。以上に見たような解剖学的知識における両学派の相違は、このような臨床的側面における両学派の特徴をそのまま反映するものと考えられる。すなわちインドの医学においては、解剖学的知識は固定的なものであったのではなく、臨床経験が蓄積されるにつれて、解剖学的知識も質、量ともに向上し、それがこのような形で記述され保存されたものと考えられる。それが最も顕著に現われているのは靱帯、脈管類、筋、関節に関しての両派の違いである。ダンヴァンタリ系の医者達は、これらの部位についてはアートレーヤ

系よりもはるかに多くの臨床的な経験があり、またこれらの部位の損傷を治療するために、実際に屍体を解剖して各部位について正確に認識することが、彼らには必要だったのであろう。そしてこのような治療経験を通じて急所(*marman*)についての独特の、詳細な説を生むに至ったと考えられる。これに対してアートレーヤ系の医者達は、これらの部位についての直接的な臨床経験はあまり多くはなく、また、これら各部位についての詳細な知識を必要としないような治療方法を主に用いていたのではないかと考えられる。

古代インドにおいては、既にヴェーダ文献中に身体部位や骨、内臓についての記述が見られ、また初期仏教文献中にも解剖学的な記述がまとまって現われる部分があることから、人体の解剖学的知識についてはかなりの蓄積が古くからあったことがわかる。これらの知識は、たとえば病を追い払うための呪術的なものや、ヴェーダ祭式のなかの供儀に伴うもの、また宗教的な教説に関わるものなどがほとんどである。このような記述と、以上に見たような医学書の解剖学的記述とを比較すると、その語彙には共通の多いことなどの理由から、医学書がこれらの伝統に負っている部分も少なくはないとされている³²。しかし、体系化された医学文献中のこれらの身体についての記述は、それが病や傷を癒し、長寿を得ることを目的とする医学・医術にとって不可欠な基礎的知識、すなわちいわゆる「解剖学」として自覚されていたという点を見落としてはならない。

³²cf. Dasgupta 1922 II pp.273-301, Filliozat 1949 pp.121-128, Zysk 1991 pp.34-37.

Carakasamhitā, Śārīrasthāna 和訳¹

『チャラカ・サンヒター』 第4巻 「シャーリーラスターナ」

第1章

1/ athātaḥ katidhāpuruṣīyaṃ śārīraṃ vyākhyāsyāmaḥ /

2/ iti ha smāha bhagavān ātreyaḥ /

さてこれより、「プルシャはいくつの部分に」[という言葉ではじまる²] シャーリーラ[の巻のうちの第1章]を述べようと、尊いアートレーヤは言った³。

3ab/ katidhā puruṣo dhīman dhātubhedena bhidyate /

3cd/ puruṣaḥ kāraṇaṃ kasmāt prabhavaḥ puruṣasya kaḥ //

プルシャ⁴はいくつの部分に、要素の区分によって分けられるのか?⁵ 賢者よ。

プルシャはどうして原因であるのか?⁶ プルシャの起源は何か?⁷

¹底本としてはCS (1)を用いたが、部分的にはCS (2)も参照した。翻訳については、Sharma & Dash 1977、金倉 1978、Sharma 1981を参考にした。なお第1章のみテキストと訳文を併記する。植物名の翻訳については主に、Dutt 1922; Singh & Chunekar 1972; Meulenbeld 1974 pp.520-611; 大地原誠玄訳『スシュルタ本集 索引』; 『廣川 薬用植物大事典』を参照した。

[] は翻訳を補うための語句。() は説明的語句。しばしばサンスクリットの名詞を()内に示した。()内の数字は節番号。

²CSの章のタイトルの命名法には、章全体の内容には関わりなく、その章の冒頭の言葉をとってタイトルとしたものと、その章全体の内容を示す言葉をもってタイトルとしたものの2種がある。この章のタイトルは明らかに前者である。

³CP: 「完全に、個々に、身体が確かめられなければ、身体の認識に基づく治療は効果的なものにならないから、このために、身体を原因・発生・存続・成長等の特殊性によって説明するために、シャーリーラの巻が述べられる。」

⁴CPは、アトマンから身体を除いたものをプルシャと言うとしている(*ātmaiva śārīrasthānaḥ puruṣaśabdārthatvena vācyaḥ*)。またCPは本章第39-42節の注では、この章では、*puruṣa*は*ātman*を意味する(*puruṣa iha prakaraṇe ātmābhipretaḥ*)、と述べている。

⁵答えは本章第16-38節。

⁶答えは本章第39-52節。CP: 「プルシャはどうして原因であるのか? とは、どのような理由によって、プルシャは輪廻における主因(*pradhāna*)であり存続の原因であるのか? という意味である。」

⁷答えは本章第53節。

4ab/ kim ajño jñāḥ sa nityaḥ kiṃ kim anityo nidarśitaḥ /

4cd/ prakṛtiḥ kā vikārāḥ ke kiṃ līṅgaṃ puruṣasya ca //

〔プルシャは〕知る主体でないものなのか? 知る主体なのか?⁸ この〔プルシャは〕恒常的なのか? 恒常的でないと示されているのか?⁹

質料因とは何か? 派生物とは何か?¹⁰ またプルシャの徴表は何か?¹¹

5ab/ niṣkriyaṃ ca svatantraṃ ca vaśinaṃ sarvagaṃ vibhum /

5cd/ vadanty ātmānam ātmajñāḥ kṣetrajñāṃ sākṣiṇāṃ tathā //

アートマンを知る人々は、アートマンを活動しないもの、独立のもの、自らを支配するもの、遍在するもの、自在なもの、土地を知るもの、また証人であると言う¹²。

6ab/ niṣkriyasya kriyā tasya bhagavan vidyate katham /

6cd/ svatantraś ced anīṣṭāsu katham yoniṣu jāyate //

その活動しないものの活動はどうして存在するのか?¹³ 尊い者よ。

独立のものであるとするならば、どうして望ましくない母胎に生まれるのか?¹⁴

7ab/ vaśi yady asukhaiḥ kasmād bhāvair ākramyate balāt /

7cd/ sarvāḥ sarvagatatvāc ca vedanāḥ kiṃ na veti saḥ //

もし自らを支配するものであるならば、どうして快くない状態に力づくで捕らわれるのか?¹⁵

また、この〔アートマン〕は、遍在性であるのに、なぜあらゆる感覚¹⁶を感じることはないのか?¹⁷

8ab/ na paśyati vibhuḥ kasmāc chailakuḍyatiraskṛtam /

⁸答えは本章第54-58節。

⁹答えは本章第59-60節。

¹⁰答えは本章第61-69節。

¹¹答えは本章第70-74節。

¹²cf. SK 19: *tasmāc ca viparyāsāt siddham sākṣitvam asya puruṣasya / kaivalyaṃ mādhyasthyaṃ draṣṭṛtvam akartṛbhāvaś ca* // 「〔精神原理は〕その反対であるから、この精神原理は証人であること、独存していること、中立であること、観察する者であること、非作者であることが成立する。」このSK 19の *sākṣitva, kaivalya, akartṛbhāva* は、それぞれCSのこの節の *sākṣiṇa, svatantra, niṣkriya* に対応している。

¹³答えは本章第75-76節。

¹⁴答えは本章第77節 (cf. 本章第81cd節)。

¹⁵答えは本章第78節。

¹⁶CP: 「他人の〔感覚〕をも〔感ずることはないのか〕という意味である。」

¹⁷答えは本章第79-80ab節。

8cd/ kṣetrajñāḥ kṣetram atha vā kiṃ pūrvam iti saṃśayaḥ //

自在なものがどうして岩や壁に隔てられたものを見ないのか?¹⁸

またあるいは、〔アートマンが〕土地を知るもの〔であるとするならば〕、なぜ土地が先〔に存在するの〕かという疑いが〔生じる〕¹⁹。

9ab/ jñeyaṃ kṣetram vinā pūrvam kṣetrajñāḥ hi na yujyate /

9cd/ kṣetram ca yadi pūrvam syāt kṣetrajñāḥ syād aśāsvataḥ //

なぜなら知られるべき土地がないのに、土地を知るものが先にあるのは適當ではないからである。そして、もし土地が先に存在するならば、土地を知るものは、不変ではないものになる。

10ab/ sākṣibhūtaś ca kasyāyaṃ kartā hy anyo na vidyate /

10cd/ syāt katham cāvikārasya viśeṣo vedanākṛtaḥ //

また、何に対して証人であるのか?²⁰ なぜなら他に行為者は存在しないからである。

また、派生物ではないものにとって感覚に基づく特殊性²¹がどうしてあるのか?²²

11ab/ atha cārtasya bhagavaṃs tiṣṇāṃ kām cikitsati /

11cd/ atitāṃ vedanāṃ vaidyo vartamānāṃ bhaviṣyatīm //

さて、尊い者よ。医師は、苦しむ者の過去・現在・未来の3つの苦痛のどれを癒すのか?²³

12ab/ bhaviṣyantyā asaṃprāptir atitāyā anāgamaḥ /

12cd/ sāṃpratikyā api sthānaṃ nāsty arteḥ saṃśayo hy ataḥ //

未来のものは至らず²⁴、過去のものは戻らず、

現在のものにもまた持続がない²⁴。このために、まさに苦しみについての疑いがある。

13ab/ kāraṇaṃ vedanānāṃ kiṃ kim adhiṣṭhānam ucyate /

13cd/ kva caitā vedanāḥ sarvā nivṛtṭim yānty aśeṣataḥ //

¹⁸答えは本章第80-81節。

¹⁹答えは本章第82節 (cf. 本章第65節)。

²⁰答えは本章第83節。

²¹CP: 「感覚に基づく特殊性とは、息子などの認識の形相の知覚によって生じた喜び等の特殊性という意味である。」

²²答えは本章第84-85節。

²³答えは本章第86-97節。

²⁴CP: 「〔持続がない〕とは、瞬時であることによって、治療〔効果〕の現れに適する時間の持続がない〔という意味である〕。」

苦痛の原因は何か?²⁵ 何が〔その〕拠り所であると言われるのか?²⁶

また、これらあらゆる感覚はどこで完全に消滅するのか?²⁷

14ab/ sarvavit sarvasaṃnyāsī sarvasaṃyoganiḥśṛtaḥ /

14cd/ ekaḥ praśānto bhūtātmā kair liṅgair upalabhyate //

すべてを知る、すべてを捨てる、すべての束縛を離れた、

唯一の寂静な個体のアートマン（元素我）は、どのような徴表によって知覚されるのか?²⁸

15ab/ ity agniveśasya vacaḥ śrutvā matimatām varaḥ /

15cd/ sarvaṃ yathāvat provāca praśāntātmā punarvasuḥ //

というアグニヴェーシャの言葉を聞いて、賢明な人々のうちの最高の方、

平静な心をもつ²⁹ プナルヴァス（アートレーヤ）はすべてを適切に述べた。

16ab/ khādayaś cetanāṣaṣṭā dhātavaḥ puruṣaḥ smṛtaḥ /

16cd/ cetanādhātur apy ekaḥ smṛtaḥ puruṣasaṃjñakaḥ //

プルシャは、空をはじめとし精神性（意識）を第6番目とする要素であると教えられている³⁰。

²⁵ 答えは本章第98-135節。

²⁶ 答えは本章第136節。

²⁷ 答えは本章第137-154節。

²⁸ 答えは本章第155節。

²⁹ BhG に *praśāntātman* の用例がある。BhG 6.14: *praśāntātmā vigatabhīr brahmacāriṃ vrate sthitāḥ/ manaḥ saṃyamya maccitto yukta āsīta matparaḥ* // 「自己（心）を静め、恐怖を離れ、梵行（禁欲）の誓いを守り、意を制御して、私に心を向け、私に専念し、専心して座すべきである。」（上村訳）。

³⁰・CP: 「またこの〔6要素からなる〕プルシャは、ヴァイシェシカ哲学に認められたものであり、治療の論書の対象である。」

・プルシャが6つの要素からなるという説は、CSの他の箇所でも言及されている。

CS Sū 25.15: 「(Hiraṇyākṣa の発言) しかし、人間は6つの要素から生じるものであり、病気も同様に6つの要素から生じるものである。この〔人間という〕かたまりは、実に6つの要素から生じるものである〔と〕サーンキヤ論者をはじめとする者達によって述べられている。」

CS Śā 4.6: 「一方、実に、胎児は、空・風・火・水・地の変異であり、精神性（意識）の拠り所であるものである。」

CS Śā 5.4 (cf. BhS. Śā 5.11): 「6つの要素の集合したものが、人間という言葉を得る。すなわち、地、水、火、風、空、未開展のブラフマンである。」

CS Śā 6.4: 「ここで、身体というのは精神性（意識）の拠り所であるものであり、5大元素が変化したものの集合からなるものであり、均衡のとれた結合 (*samayoga*) をもたらすものである。」

・SSには次のような記述が見られる。

SS Sū 1.22 (cf. SS Śā 1.16): 「この〔アーユルヴェーダの〕論書においては、5大元素と身体をもつ者 (*śarīrin*) との集合

精神性（意識）〔という〕要素1つだけでもプルシャという名前で教えられている³¹。

17ab/ punaś ca dhātubhedena caturviṃśatikaḥ smṛtaḥ /

17cd/ mano daśendriyāṇy arthāḥ prakṛtiś cāṣṭadhātukī //

またさらに、要素の区分によって24種であると教えられている。

〔その24種とは〕思考器官（マナス）、10の〔感覚・運動〕器官、〔感覚器官の5つの〕対象、8つの要素からなる質料因³²とである。

18ab/ lakṣaṇaṃ manaso jñānasyābhāvo bhāva eva ca /

18cd/ sati hy ātmendriyārthānāṃ sannikarṣe na vartate //

19ab/ vaivṛtṭyān manaso jñānaṃ sānnidhyāt tac ca vartate /

思考器官の徴表は、まさに、認識の存在と非存在とである。

なぜなら、アートマンと感覚器官と対象が接触していても、思考器官が〔感覚器官と〕分離していれば、認識は現れず、また、〔思考器官が感覚器官と〕近接していることによってそれ（認識）が現れるからである³³。

19cd/ aṇutvam atha caikatvaṃ dvau guṇau manasaḥ smṛtau //

がプルシャであると言われる。」

³¹CPは、プルシャは6つの要素からなるとする説のほうが、アーユルヴェーダ本来の立場であるとする。CP: 「ここで *puruṣa* とすべきところを、「プルシャという名前」 *pruṣasaṃjñaka* としているのは、それによって、治療〔の論書〕においては、プルシャは *cetanādhātu* からなると意図されることはないが、しかし、他の論書の表現を認めることによって、ここでも、これがプルシャという語で呼ばれていることを示す。しかし、治療の対象は、まさに6つの要素からなるプルシャである。」

・ *puruṣa/puṃs* が精神性 (*cetana*) であることについては、SK 20,55. また CS Sū 1.47 参照。 cf. Dasgupta 1922 II p.472.

・ *cetanādhātu* は、CS Sū 25.9; Śā 2.32; 4.8 に用例があり、いずれもアートマンの同義語として用いられている。 eg. CS Śā 4.8: 「ここで（胎児の受胎の際に）、最初に、意識要素 (*cetanādhātu*) であり、サットヴァ（マナス）を器官としてもつものが、属性 (*guṇa*) の把握のために現れる。…」

・ SS Śā 3.18 にも *cetanādhātu* という語が見られるが、そこでは〔妊娠〕4か月目に現われる胎児の「意識作用」の意味である。

³²CP: 「〔8つの要素からなる〕とは、空などの5〔大元素〕、*buddhi*、*avyakta*、*aharikāra*。」 cf. 本章第63ab節

・ *prakṛti* は、ここでは現象世界の根源をなす物質原理としての「原質」とは異なるので、「質料因」と訳す。 cf. Johnston 1937 pp.25-30.

本章第35,61-66節参照。

³³A. Comba は第18節は、VS 3.2.1: *ātmendriyārthasannikarṣe jñānasyābhāvo bhāvaś ca manaso liṅgam*. の引用であると指摘している。 cf. Comba 1987 p.47.

さて、微細であることと1つであることが、思考器官の2つの性質であると教えられている³⁴。

20ab/ cintyaṃ vicāryaṃ ūhyaṃ ca dhyeyaṃ saṃkalpyaṃ eva ca /

20cd/ yat kiṃcin manaso jñeyaṃ tat sarvaṃ hy arthasaṃjñakam //

思考されるもの、熟慮されるもの、また、推測されるもの、瞑想されるもの、また実に分別されるものの³⁵。

このような思考器官から知られるべきものは何であれ、そのすべてがまさに〔思考器官の〕対象という名をもつものである。

21ab/ indriyābhigrahaḥ karma manasaḥ svasya nigrahaḥ /

21cd/ ūho vicāraś ca tataḥ paraṃ buddhiḥ pravartate //

感覚器官を掌握することは、思考器官の行いである。自己の抑制、推測、熟慮もまた〔思考器官の行いである〕。これ以降は理性（ブッディ）が働き出す。

22ab/ indriyeṇendriyārtho hi samanaskena grhyate /

22cd/ kalpyate manasā tūrdhvaṃ guṇato doṣato 'tha vā //

思考器官を伴う感覚器官によって、まさに、感覚器官の対象が把握される³⁶。

しかし、この後には思考器官によって、〔把握された対象はそれぞれ〕良い性質をもつものとして、あるいは欠点のあるものとして分別される。

³⁴・VSにこれに近い表現がある。VS 3.2.3: *prayatnāyugapadyāj jñānāyugapadyāc caikaṃ manaḥ*.

VS 7.1.30: *tad abhāvād aṇu manaḥ*.

cf.Candrānanda on VS 7.1.30: *vibhavasāyābhāvād manaso 'ṇutvaṃ jñānāyugapadyāc ca*.

・CS Sūにはマナスに関して次のような記述がある。

CS Sū 8.5: 「〔思考器官〕自体の対象も、感覚器官の対象も、〔思考器官による〕概念的判断も多様であるから、また〔思考器官は〕激質・翳質・純質の〔いずれの〕性質とも結合するから、一人の人間に多種の精神状態がある〔かのように思われるかも知れない〕。しかし実際は〔思考器官が〕多種〔存在するの〕ではない。なぜなら〔もし思考器官が〕一つでないのであれば、一つの時間に多くの〔対象に〕向かっていくであろう〔が、そういうことはない〕。それ故に五感のすべてが一時に発動するというものもないのである。」（矢野訳）

³⁵・SKにはマナスは、感覚器官と行為器官の対象を「思惟するもの」であるという表現が見られる。

SK 27ab: *ubhayātmakam atra manaḥ saṃkalpakam indriyaṃ ca sādharṇyāt*.

・CS Sū 8.16には、*manasas tu cintyaṃ artham*. 「マナスの対象は思考されるものである。」という表現がある。

・cf.Ḍalhaṇa on SS Sū 1.27: *dhyeya-cintya-saṃkalpādi mānasam*. cf. Roṣu 1978 pp.213-214.

³⁶cf.CS Sū 8.7: *manaḥpuraḥsarāṇīndriyāṇy arthagrahaṇasamarthāni bavanti*. 「思考器官に付き添われた諸感覚器官は、対象を捉えることができるものである。」

23ab/ jāyate viṣaye tatra yā buddhir niścayātmikā /

23cd/ vyavasyati tayā vaktuṃ kartuṃ vā buddhipūrvakam //

その際、対象に対して判断を本性とするところの理性が生ずる。

それによって、〔人は〕理性に基づいて言うことあるいは行うことを決定する³⁷。

24ab/ ekaikādhikayuktāni khādīnām indriyāṇi tu /

24cd/ pañca karmānumeyāni yebhyo buddhiḥ pravartate //

一方、空などの1つずつ増加するもの（元素）に結合している感覚器官は³⁸、

5つの行い（感覚器官による知覚）によって〔その存在が〕推理されるべきものである³⁹。これら〔5つの感覚器官〕から知覚が生じる。

25ab/ hastau pāḍau gudopasthaṃ vāgindriyaṃ athāpi ca /

25cd/ karmendriyāṇi pañcaiva pāḍau gamanakarmaṇi //

両手、両足、肛門、生殖器および発声器官。

行為器官は〔これら〕5つのみである⁴⁰。両足は移動行為のためにある。

26ab/ pāyūpasthaṃ visargārthaṃ hastau grahaṇadhāraṇe /

26cd/ jihvā vāgindriyaṃ vāk ca satyā jyotistamo 'nṛtā //

肛門と生殖器は排泄のためにある。両手は捕捉と保持のためにある。

発声器官は舌である。そして、真実の言葉は光明であり、虚偽〔の言葉〕は闇である。

27ab/ mahābhūtāni khaṃ vāyur agnir āpaḥ kṣitis tathā /

27cd/ śabdaḥ sparśaś ca rūpaṃ ca raso gandhaś ca tadguṇāḥ //

大元素⁴¹は空・風・火・水・地である。

音声⁴²・触・色・味・香はその性質である。

³⁷cf.SK 23a: *adhyavasāyo buddhir* ... 「理性は決断〔の作用をなすもの〕である。…」（服部訳）

³⁸耳は空と、触覚器官（皮膚）は空・風と、眼は空・風・火と、味覚器官は空・風・火・水と、鼻は空・風・火・水・地と、というように順次1つずつ増加する元素との結合を示す。

³⁹CS Sū 8にも同様の記述があるが、いわゆる元素の積重説をとっていない。CS Sū 8.14: 「この場合、感覚器官は5大元素が変異したものの集合からなっており、〔その存在は〕推理によって確認されるものであるが、眼には火が、耳には空が、鼻には地が、味覚器官には水が、触覚器官には風が特に対応している。」

⁴⁰cf.SK 26cd: *vāk-pāṇi-pāda-pāyūpasthāni karmendriyāṇy āhuḥ*.

⁴¹SK 22,38は、5元素(*pañcabhūta*)は、微細な要素（唯）(*tanmātra*)から開展すると述べるが、CSの本章では*tanmātra*については触れられていない。

⁴²音声(*śabda*)は、ヴァイシェシカ学派においてVSの段階ではまだ性質(*guṇa*)とはされず、

28ab/ teṣām ekaguṇaḥ pūrvo guṇavṛddhiḥ pare pare /

28cd/ pūrvaḥ pūrvaguṇaś caiva kramaśo guṇiṣu smṛtaḥ //

これらのうちで最初のもの（元素）は1つの性質をもつ。後にあるもの（元素）ほど、順に性質の〔数の〕増加がある。

先にあるもの（元素）と先にある性質とは、順次、〔次の〕性質をもつもの（元素）のうちに存在すると教えられている。

29ab/ kharadravacaloṣṇatvaṃ bhūjalānilatejasām /

29cd/ ākāśasyāpratīghāto dṛṣṭaṃ liṅgaṃ yathākramam //

地、水、風、火にはそれぞれ順に、堅固性、流動性⁴³、動性、熱性〔という徴表〕がある。

空の徴表は無抵抗⁴⁴であると経験的に知られている。

30ab/ lakṣaṇaṃ sarvaṃ evaitat sparśanendriyagocaram /

30cd/ sparśanendriyavijñeyaḥ sparśo hi saviparyayaḥ //

実にこのすべての証相は、触覚器官の領域である⁴⁵。

なぜなら触覚は、反対の状態（触覚のないこと）とともに、触覚器官によって認識されるからである。

31ab/ guṇāḥ śārīre guṇināṃ nirdiṣṭāś cihnam eva ca /

31cd/ arthāḥ śabdādayo jñeyā gocarā viṣayā guṇāḥ //

身体における諸性質は、性質をもつもの（元素）のまさにしるしであると示されている。

声を始めとする〔触・色・味・香〕は〔感覚器官の〕対象であり、領域であり、範囲であり、性質であると知られるべきである。

32ab/ yā yad indriyamāśritya jantor buddhiḥ pravartate /

32cd/ yāti sā tena nirdeśaṃ manasā ca manobhavā //

Prāśastapādaによって性質の一つに数えられたのであるが、ここでは音声は、空の性質であると明らかに規定されている。cf. VS 2.1.1-5,26; 2.2.25-42. cf. PDhS *Uddeśaprakaraṇa* (D.ed.pp.8-15), *Śabdaprakaraṇa* (D.ed.pp.287)

⁴³PDhS *Dravativaprakaraṇa* (D.ed.p.264) では流動性(*dravatva*)は、地・水・火の性質(*guṇa*)であるとされている。

⁴⁴MBh 12.247.8 では無抵抗(*apratīghātātā*)は音声(*śabda*)とともに空の性質(*guṇa*)であるとされている。

⁴⁵cf. CS Sū 11.38: 「これに関して、諸感覚器官のうちの1つの触覚器官は、感覚器官〔すべてに〕遍満しているものであり、チェータスに付随するものである。…」

感覚器官に基づいて人の知覚が生じるところの、

その〔知覚〕は、その〔感覚器官〕によって表現される⁴⁶。そして、思考器官によって生じるものは、思考器官によって〔表現される〕。

33ab/ bhedāt kāryendriyārthānāṃ bahvyo vai buddhayaḥ smṛtāḥ /

33cd/ ātmendriyamanorthānāṃ ekaikā sannikarṣajā //

結果と感覚器官と対象の違いから、実に多くの知覚⁴⁷が教えられている。

〔それらは〕アートマン・感覚器官・思考器官・対象の1つ1つの接触によって生じるものである。

34ab/ aṅgulyaṅguṣṭhatalajas tantrīvīṇānakhodbhavaḥ /

34cd/ dṛṣṭaḥ śabda yathā buddhir dṛṣṭā saṃyogajā tathā //

音声は、指・親指・掌から生じ、弦・ヴィーナー・爪から発生するものであると、

経験上認められているように、同様に、知覚は結合から生じるものであると経験上認められている⁴⁸。

35ab/ buddhīndriyamanorthānāṃ vidyād yogadharaṃ param /

35cd/ caturvīṃśatiko hy eṣa rāṣiḥ puruṣasaṃjñakaḥ //

理性・〔感覚〕器官⁴⁹・思考器官・対象とは別の、〔これらの〕結合を保持しているものを知るべきである。

なぜなら、この24のものから成る集合体⁵⁰は、プルシャと呼ばれるものであるからである。

⁴⁶cf. CS Sū 8.12: *pañcendriyabuddhayaḥ cakṣurbuddhyādikāḥ tāḥ punar indriyendriyārthasattvātma-sannikarṣajāḥ kṣaṇikā niścayātmikāś ca ity etat pañcapañcakam*. 「5つの感覚器官の知覚は、眼による知覚などである。また、それらは感覚器官と感覚器官の対象とサットヴァ（マナス）とアートマンの接触によって生じるものであり、瞬間的なものであり、決定を本質とするものである。以上これが5つの5つずつからなるものである。」

⁴⁷*buddhi*は1つなのか多なのかについては、サーンキヤ学派においては確定的ではないが、ヴァイシェーシカ学派においては、アートマンの*guṇa*である*buddhi*は多であるとされる。cf. VS 1.1.5; PDhS *Buddhiprakaraṇa* (D.ed.p.172); Comba 1987 pp.53-54.

⁴⁸*buddhi*は、本章ではヴァイシェーシカ的に「知覚」「認識」を意味する場合と、サーンキヤ的に「理性」を意味する場合がある。Antonella Combaは、本章第32-34,72節の*buddhi*はヴァイシェーシカ的であり、本章第63,66,99,109節の*buddhi*はサーンキヤ的であり、本章第132,146節の*buddhi*は曖昧ながらもヴァイシェーシカ的であると述べている(Comba 1987 p.53)。

⁴⁹*buddhīndriya*は、「理性・〔感覚〕器官」あるいは単に「感覚器官」とも読めるが、ここではCPの注に従って前者の解釈をとる。

⁵⁰・本章17,61-66節参照。

・*rāṣi*についてはCS Sū 25.4,15; Śā 5.10および本章第53節に用例があり、いずれも諸要素の集合体（かたまり）としての*puruṣa*を示す。

36ab/ rajastamobhyāṃ yuktasya saṃyogo 'yam anantavān /

36cd/ tābhyāṃ nirakṛtābhyāṃ tu sattvavṛddhyā nirvartate //

激質と翳質とに結び付いたものにとって、この〔集合体の〕結合は終りのないものである。

一方、この両者が排除されることにより、純質の増大によって、〔この結合は〕停止する。

37ab/ atra karma phalaṃ cātra jñānaṃ cātra pratiṣṭhitam /

37cd/ atra mohaḥ sukhaṃ duḥkhaṃ jīvitam maraṇam svatā //

ここ（プルシャ）に、行為があり、またここに〔その行為の〕果報があり、またここに、知が確立する。

ここに、迷妄、楽、苦、生、死、自己〔の意識〕がある。

38ab/ evaṃ yo veda tattvena sa veda pralayodayau /

38cd/ pāramparyam cikitsāṃ ca jñātavyam yac ca kiṃcana //

このように正しく知る人、その人は、消滅と出生とを知る。

連続性と、治療⁵¹と、何であれ認識すべきこととを〔知る〕。

（38cd/ variant: 連続性と、治療と、ここ（プルシャ）において、何であれ知るべきこととを〔知る〕。）

39ab/ bhāsa tamah satyam anṛtam vedāḥ karma śubhāśubham /

39cd/ na syuḥ kartā ca boddhā ca puruṣo na bhaved yadi //

光明、闇、真実、虚偽、ヴェーダ〔聖典〕、行為の浄・不浄は、

存在しないであろう。もし、プルシャが行為者⁵²でも、自覚者でもないのならば。

40ab/ nāśrayo na sukhaṃ nārtir na gatiḥ nāgatiḥ na vāk /

40cd/ na vijñānaṃ na śāstrāṇi na janma maraṇam na ca //

41ab/ na bandho na ca mokṣaḥ syāt puruṣo na bhaved yadi /

拠り所なく、楽なく、痛みなく、行くことなく、来ることなく、言葉なく、

認識なく、諸論書なく、生なく、死もなく、

束縛なく、解脱もないであろう。もし、プルシャが存在しないのならば。

⁵¹CP: 「消滅と出生 (*pralayodayau*) とは生と死。連続性 (*pāramparyā*) とは身体の連続性。治療 (*cikitsā*) とは継続する苦しみの最終的な治療であり、解脱を達成するものである。」

⁵²・ヴァイシェシカ学派では（解脱していない状態の）アートマンは行為者であるとし、サーンキヤ学派ではアートマンは行為者ではないとする。cf. SK 19-20. cf. Comba 1987 p.52.

・A.Comba は、CS でアートマンが行為者であるとするのは仏教の説（本章第47節）に対するものであり、ヴァイシェシカ的な傾向にあるものであるとする。Comba 1987 p.53.

41cd/ kāraṇam puruṣas tasmāt kāraṇajñair udāhṛtaḥ //

このことから、プルシャは原因であると、原因を知る者たちによって言われている。

42ab/ na cet kāraṇam ātmā syād bhādayaḥ syur ahetukāḥ /

42cd/ na caiṣu sambhavej jñānaṃ na ca taiḥ syāt prayojanam //

もしアートマンが原因でなければ⁵³、光明をはじめとするもの⁵⁴は、原因のないものとなるであろう。

そしてこれらについての知識は生ずることなく、それらによって〔達成されるべき〕目的もまた、ないであろう⁵⁵。

43ab/ kṛtam mṛdḍaṇḍacakraiś ca kumbhakārādṛte ghaṭam /

43cd/ kṛtam mṛtṛṇakāṣṭhaiś ca gṛhakārād vinā gṛham //

壺を作る人がいなくても、壺は、土と棒と轆轤によって作られる。

家を作る人がいなくても、家は、土と草と木によって作られる。

44ab/ yo vadet sa vaded dehaṃ sambhūya karaṇaiḥ kṛtam /

44cd/ vinā kartāram ajñānād yuktyāgamabahiṣkṛtaḥ //

〔このように〕言う人、その人は、行為者がいなくても、身体は、行為手段（器官）が結びついて作られると言うであろう。

〔そのような人は〕無知であることから、道理⁵⁶と伝承から退けられる。

45ab/ kāraṇam puruṣaḥ sarvaiḥ pramāṇair upalabhyate /

45cd/ yebhyaḥ prameyaṃ sarvebhya āgamebhyaḥ pramīyate //

認識されるべきものが、それらによって認識されることのすべての伝承、これらすべての認識手段によって、プルシャは原因であると理解される。

⁵³前節では「プルシャは原因である」と述べるが、ここではプルシャとは言わずに「アートマンが原因」とする。CP は、この章では *puruṣa* と *ātman* は同義であると言う。

⁵⁴本章第39ab節で列挙されたものを指す。

⁵⁵CP: 「光明などがアートマンの対象であることによって、アートマンが存在しなければ、光明などが生じる目的がなくなってしまうであろう。また目的がないことによって〔それらが〕生じることもないであろう。」

⁵⁶CS は、いわゆる認識手段 (*pramāṇa*) として一般的な、1. *āpta* (*āgama, upadeśa*) 2. *pratyakṣa* 3. *anumāna* の3つに、第4の認識手段として *yukti* を含めるとする記述がある (CS Sū 11.17)。 (ただし CS Vi 4.3 では *yukti* は *anumāna* のうちに含める。) その *yukti* の定義として次のような記述が見られる。CS Sū 11.25: 「多くの原因の結合から生ずる状態を〔正しく〕見るような、〔過去・現在・未来の〕三時にわたる認識が、理 (*yukti*) であると知るべきである。それによって〔法・財・愛〕の三目的は達成される。」 (矢野訳) cf. Filliozat 1990.

46ab/ na te tatsadṛśās tv anye pāraṃparyasamutthitāḥ /

46cd/ sārūpyād ye ta eveti nirdiśyante navā navāḥ //

連続して生じるもの、それらは、それ（先行するもの）と同じものではなく、他のものである。
次々に生じる新しいもの、それらは、似ていることから同一のものであると見なされる〔だけである〕。

47ab/ bhāvās teṣāṃ samudayo nirīśaḥ sattvasaṃjñakaḥ /

47cd/ kartā bhoktā na sa pumān iti kecid vyavasthitāḥ //

そのような〔状態〕にある存在物は、支配を欠いた集合体であり、生き物⁵⁷と名付けられるものである。

この人間（プルシャ）⁵⁸は、行為者、享受者ではないとある人々⁵⁹は確定している。

48ab/ teṣāṃ anyaiḥ kṛtasyānye bhāvā bhāvair navāḥ phalam /

48cd/ bhuñjate sadṛśāḥ prāptaṃ yair ātmā nopadiśyate //

このような、アートマンを示さないその人々にとっては、他の存在によって為された果報を、別の新しい類似の存在が享受する〔ということになる〕。

49ab/ karaṇānyānyatā dṛṣṭā kartuḥ kartā sa eva tu /

49cd/ kartā hi karaṇair yuktaḥ karaṇaṃ sarvakarmaṇām //

行為者の行為手段はそれぞれ異なっていると経験的に知られている。しかし、行為者はその同じ者である。

なぜなら、行為手段と結び付いた行為者は、すべての行為の原因であるからである。

50ab/ nimeṣakālād bhāvānām kālaḥ śīghrataro 'tyaye /

50cd/ bhagnānām na punarbhāvaḥ kṛtaṃ nānyam upaiti ca //

存在するもの⁶⁰にとって、時間は、過ぎ去ることに関しては、まばたきの時間よりも速やかである。
破壊されたものにとって、再生はない。また、為されたものごと〔の果報〕は、他の者に移行することはない。

51ab/ mataṃ tattvaividāṃ etad yasmāt tasmāt sa karaṇaṃ /

⁵⁷ここでCPは、*sattva*を*prāṇin*と解釈する。

⁵⁸ここで*puruṣa*でも*ātman*でもなく、*pums*という語を用いているのは、対論者の用語をそのまま用いたことによるものか。

⁵⁹CP:「ある人々とは仏教徒(*bauddha*)である。なぜなら、仏教徒たちは、アートマンのない、瞬時の認識などの集合のみを身体とみなすからである。…」 cf. Roṣu 1978 p.190

⁶⁰CPは、身体などの存在(*śarīrādibhāva*)とする。

51cd/ kriyopabhoge bhūtānām nityaḥ puruṣasaṃjñakaḥ //

これが真理を知る人達の見解である。まさにこのことから、プルシャと呼ばれる恒常のこのものは、存在する者たちの行いと〔その果報の〕享受についての原因である〔ことが理解される〕。

52ab/ ahaṅkāraḥ phalaṃ karma dehāntaragatiḥ smṛtiḥ /

52cd/ vidyate sati bhūtānām kāraṇe dehamantarā //

自我意識、果報、行為、他の身体へ行くこと、記憶は、
存在する者たちの身体以外の原因がある際に、存在する。

53ab/ prabhavo na hy anāditvād vidyate paramātmanaḥ /

53cd/ puruṣo rāśisaṃjñas tu mohecchādveṣakarmajaḥ //

最高のアートマンは、始まりのないもの⁶¹であることから、まさに〔その〕起源は存在しない。
集合体と呼ばれるプルシャは、しかし、迷妄・欲望・嫌悪・行為から生じるもの⁶²である。

54ab/ ātmā jñāḥ karaṇair yogāj jñānaṃ tv asya pravartate /

54cd/ karaṇānām avaimalyād ayogād vā na vartate //

アートマンは知る主体である。行為手段（器官）との結合からこの〔アートマンの〕認識が働き出す。
行為手段（器官）が清浄でないことから、あるいは非結合から、〔アートマンの認識は〕生じない⁶³。

55ab/ paśyato 'pi yathā "darśe saṃkliṣṭe nāsti darśanam /

55cd/ tattvaṃ jale vā kaluṣe cetasy upahate tathā //

鏡が曇っているときには〔それを〕見る人にも映像が〔認められ〕ないように、

⁶¹*paramātman*という語は、本章第72節にも用いられる。

cf.BhG 112: *anāditvān nirguṇatvāt paramātmāyam avyayaḥ /*

śarīrastho 'pi kaunteya na karoti na lipyate //

「この最高の自己は、無始であるから、要素を持たないから、不変であって、身体のうちに存在しても、行為せず、汚されることもない。」（上村訳）

⁶²CPは「迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為」と解釈する。

cf.VS 6.2.17: *icchādveṣapūrvikā dharmādharmayoḥ pravṛttiḥ.*

cf.CS Śā 5.10: *mohecchādveṣakarmamūlā pravṛttiḥ.*

「生起（流転）は、迷妄・欲望・嫌悪・行為を根本としているものである。」

⁶³第54節の内容に関連して、CS Śā 第3章には次のような記述がある。

CS Śā 3.18:「また、アートマンは、諸感覚器官が存在していれば知る主体であり、存在していなければ、知る主体でないものであるわけではない。なぜなら、アートマンは決してサットヴァ（マナス）をもたないものではなく、個々の知識は、個々のサットヴァ（マナス）によって、知覚されるからである。」

同じように、精神（チエータス）⁶⁴が鈍いとき、あるいは汚れているとき、傷ついたときには真理は〔認められない〕。

56ab/ karaṇāni mano buddhir buddhikarmendriyāṇi ca /

56cd/ kartuḥ saṃyogajaṃ karma vedanā buddhir eva ca //

器官とは、思考器官、理性、感覚器官と行為器官とである⁶⁵。

行為は、行為者の〔器官との〕結合から生じるものであり、感覚と知覚⁶⁶もまさに同じである。

57ab/ naikaḥ pravartate kartuḥ bhūtātmā nāśnute phalam /

57cd/ saṃyogād vartate sarvaṃ tamṛte nāsti kiñcana //

個体のアートマン（元素我）は、単独では行為に対して働かず、果報を得ることはない。

あらゆるものは、結合によって活動する。それ（結合）がなければ、いかなるものも存在しない。

58ab/ na hy eko vartate bhāvo vartate nāpy ahetukaḥ /

58cd/ śīghragatvāt svabhāvāt tv abhāvo na vyativartate //

なぜなら、存在物は単独では活動しないからであり、また原因のないものも活動しないからである。しかし、〔存在物の〕速やかに行くという自らの性質から、非存在〔となること〕は免れない⁶⁷。

59ab/ anādiḥ puruṣo nityo viparītas tu hetujaḥ /

59cd/ sad akāraṇavan nityaṃ dṛṣṭaṃ hetujam anyathā //

始まりのないもの⁶⁸であるプルシャは恒常のものである。一方、原因から生じたものは〔この〕反対である。

原因のない実在物は、恒常のものである⁶⁹と経験的に知られている。原因から生じたものは〔これとは〕異なっている。

⁶⁴CS Sū 8.4 では *cetas* は *manas* と同義であるとされている。

⁶⁵SK 32-33 では、器官 (*karaṇa*) は13種 (思考器官、自我意識、理性という3内器官と、5感覚器官と5行為器官) であるとされている。しかし、この節では自我意識が欠けている。ただし、本章第63,66節では器官としての自我意識が挙げられている。

⁶⁶この詩節の a *pāda* の *buddhi* と、b および d *pāda* の *buddhi* の意味は、明らかに異なっている。

⁶⁷第58cd節のテキストには次のような異読がある。

58cd: *śīghragatvāt svabhāvāt tu bhāvo na vyativartate*. 「しかし、存在物は、速やかに行くという自らの性質から免れることはない。」

⁶⁸本章第53節では始まりのないもの (*anādi*) は、*paramātman* であるとされている。

⁶⁹第59c節は、VS 4.1.1: *sad akāraṇavat tan nityam*. とほぼ同じである。cf. Comba 1987 p.47.

60ab/ tad eva bhāvād agrāhyaṃ nityatva na kutaścana /

60cd/ bhāvāj jñeyaṃ tad avyaktam acintyaṃ vyaktam anyathā //

まさにこの恒常性は、存在物からは決して捉えられないものである。

それは、存在物からは知られないものであり、思惟されない未展開のものであり、展開したものとは異なったものである。

61ab/ avyaktam ātmā kṣetrajñāḥ śāsvato vibhur avyayaḥ /

61cd/ tasmād yad anyat tad vyaktaṃ vaksyate cāparaṃ dvayaṃ //

アートマンは未展開のものであり、土地を知るもの⁷⁰であり、永遠であり、自在なもの、不変のものである。

それとは異なったもの、それが展開したものである。そして次に、〔この〕2つのもの（未展開のものと展開したもの）が述べられるであろう。

62ab/ vyaktam aindriyakaṃ caiva gṛhyate tad yad indriyaiḥ /

62cd/ ato 'nyat punar avyaktaṃ liṅgagrāhyaṃ atīndriyam //

展開したものは感覚器官に関わるものであり、また、まさにそれは諸感覚器官によって捉えられるものである。

さらに、これとは異なったものが未展開のものであり、徴表〔のみ〕によって捉えられるものであり、感覚器官を越えたものである。

63ab/ khādīni buddhir avyaktam ahaṅkāras tathā 'ṣṭamaḥ /

63cd/ bhūtaprakṛtir uddiṣṭā vikārās caiva ṣoḍaśa //

空をはじめとするもの（空・風・火・水・地）、理性、未展開のもの、また第8番目の自我意識。これらは、存在するものの質料因⁷¹であると示された。さらに実に〔以下の〕16の派生物がある。

⁷⁰・「土地を知るもの」(*kṣetrajña*) は、Śvetāśvatara upaniṣad 6.16. Maitry upaniṣad 2.5. BC 12.20. BhG 13.1-6. MBh 12.180; 12.187; 12.211. ManS 8.96 などでもプルシャあるいはアートマンを意味する。(ManS 12.12,14 ではマナスを意味する。) cf. Johnston 1937 pp.51-55.

・SS では、*kṣetrajña* のうちに、さらに常住の *puruṣa* が存在するとしている。

cf. SS Śā 1.16: *na cāyurvedaśāstreṣūpadiśyante sarvagatāḥ kṣetrajñā nityāś ca, asarvagateṣu ca kṣetrajñeṣu nityapuruṣakhyāpakān hetūn udāharanti* ...

「また、アーユルヴェーダの論書においては、土地を知るものは、遍在であるものではなく、恒常のものであると説かれる。また、遍在ではない土地を知るもののうちに、恒常のプルシャと称する原因〔があること〕を述べる。」

⁷¹・BC 12.18cd でも *prakṛti* は、*pañcabhūtāny ahaṅkāraṃ buddhim avyaktaṃ eva ca*. とされている。

・MBh 12.203.26; 294.29; 298.10 でも *prakṛti* を8種としている。cf. Johnston 1937 pp.26-27.

・SK 3,22 では質料因としての *prakṛti* は、理性、自我意識、5 *tanmātra* の7種である。

64ab/ buddhīndriyāṇi pañcaiva pañca karmendriyāṇi ca /

64cd/ samanaskāś ca pañcārthā vikārā iti samjñitāḥ //

5つの感覚器官と、5つの運動器官、
また、思考器官とともに、5つの〔感覚器官の〕対象〔の合計16のもの〕が派生物⁷²と呼ばれる。

65ab/ iti kṣetram samuddiṣṭam sarvam avyaktavarjitam /

65cd/ avyaktam asya kṣetrasya kṣetrājñam ṛṣayo viduḥ //

以上のように未開展のものを除くすべてが土地であると、示された。

未開展のものはこの土地についての土地を知るものであると、聖仙達は知っている。

66ab/ jāyate buddhir avyaktād buddhyā 'ham iti manyate /

66cd/ param khādīny ahaṅkārād utpadyante yathākramam //

未開展のものから理性が生じる。理性によって「私」というふうと考えられる（自我意識）。

さらに、空をはじめとするものが、自我意識から順に発生する⁷³。

67ab/ tataḥ sampūrṇasarvāṅgo jāto 'bhyudita ucyate /

67cd/ puruṣaḥ pralaye ceṣṭaiḥ punar bhāvair viyujyate //

そして、すべての部分を完全に満たして生じたものが、出生したと言われる。

プルシャは、滅びる際に、再び望ましい諸状態から切りはなされる。

68ab/ avyaktād vyaktatām yāti vyaktād avyaktatām punaḥ /

⁷²・BC 12.19 も *vikāra* は、CS と同じ 16 であるとしている。

・MBh 12.203.31; 294.29; 298.10 でも *vikāra* は、16 とする。

⁷³本章第17,27,35,61-66節の内容をまとめると、CSの24原理とは、未開展のもの(*avyakta*)、理性(*buddhi*)、自我意識(*ahaṅkāra*)、5大元素(*mahābhūta*) (以上が8質料因(*prakṛti*)。以下は16派生物(*vikāra*)) 5感覚器官(*buddhīndriya*)、5運動器官(*karmendriya*)、思考器官(*manas*)、5〔感覚器官の〕対象(*artha*)である。ここではSKに見られるサーンキヤ学派の25原理のうちの5*tanmātra*を欠き、その代わりに5感覚器官の対象を入れている(ただし、5大元素の性質(*guṇa*)と5感覚器官の対象を関係付けてはいる(第27節))。そして、アートマンは、土地を知るもの(*kṣetrājñā*)であり、それ以外のすべてが土地であるとして2元の区別を説くものの、アートマンは未開展のもの(*avyakta*)であり、そこから各原理が順次派生してくるとする点では、明らかに1元論的な説とみなすことができる。

Dasguptaは、CSの1元論的な24原理をMBh 12.211に見られるPañcasikhaの説に一致するものであるとする(Dasgupta 1922 II pp.216-217)。たしかにMBh 12.211.11には*puruṣāvastham avyaktam*という表現が見られるが、村上1987 p.133は、これは、未開展のものはプルシャそのものではなく、プルシャが依るところのものと解するべきであって、必ずしもCSに見られるような1元論的な説というわけではないとしている。

68cd/ rajastamobhyām āviṣṭaś cakravat parivartate //

未開展から開展した状態に行き、また、開展から未開展の状態に〔行く〕。
激質と翳質とに入り込まれたものが、輪のように回転する。

69ab/ yeṣāṃ dvandve parā saktir ahaṅkāraparāś ca ye /

69cd/ udayapralayau teṣāṃ na teṣāṃ ye tv ato 'nyathā //

一対のもの(激質と翳質)に最高に執着をもつ人々、また、自我意識⁷⁴を専らとする人々、
そのような彼らには、生起と消滅がある。しかし、これと異なった人々には〔生起と消滅は〕ない。

70ab/ prāṇāpānau nimeṣādyā jīvanam manaso gatiḥ /

70cd/ indriyāntarasamcāraḥ preraṇam dhāraṇam ca yat //

吸気と呼気、まばたきなど、生命活動、思考器官の動き、
別の感覚器官への移動、促すこと、支えること、

71ab/ deśāntaragatiḥ svapne pañcatvagrahaṇam tathā /

71cd/ dr̥ṣṭasya dakṣiṇenākṣṇā savyenāvagamas tathā //

夢の中で他の場所へ行くこと、また、5〔大元素〕を捉えること、
右目で見られたものを左目によっても同様に認めること、

72ab/ icchā dveṣaḥ sukhaṃ duḥkhaṃ prayatnaś cetanā dhṛtiḥ /

72cd/ buddhiḥ smṛtir ahaṅkāro līṅgāni paramātmanaḥ //

欲、嫌悪、楽、苦、努力、精神性、堅固さ、

知覚、記憶、自我意識は、最高のアートマンの徴表である⁷⁵。

⁷⁴この*ahaṅkāra*は、CS Śā 5.10で述べられる輪廻の原因となる欠陥(*doṣa*)としての*ahaṅkāra*であろう。本章第153節参照。

CS Śā 5.10:「…このうち自我意識は、「私はこのような生まれ・容姿・富・行ない・知性・習慣・学識・氏族・年齢・体力・威光をそなえている」と〔考えること〕であり、…このような自我意識をはじめとする欠陥(*doṣa*)によって、つき動かされつつあるものは、生起(流転)(*pravṛtti*)を越えて行くことはない。」

⁷⁵・第70,72節は、VS 3.2.4に近い。cf. Comba 1987 pp.54-57.

VS 3.2.4: *prāṇāpāna-nimeṣonmeṣa-jīvana-manogatīndriyāntaravikārāḥ sukhaduḥkhe icchādvēṣau prayatnaś cety ātmalīṅgāni*. 「吸気・呼気・まぶたを閉じること・まぶたを開けること・生命活動・思考器官の動き・別の感覚器官の変化、楽・苦、欲・嫌悪、努力。以上がアートマンの徴表である。」

・第71cd節は、NyāS 3.1.7の内容に近い。

NyāS 3.1.7: *savyadr̥ṣṭasyetareṇa pratyabhijñānāt*. 「左〔目〕で見られたものを反対の〔目〕によって、認識することから〔アートマンは存在する〕」

73ab/ yasmāt samupalabhyante liṅgāny etāni jīvataḥ /

73cd/ na mṛtasyātmalingāni tasmād āhur maharṣayaḥ //

これらの徴表は生きている者に認められ、死んだ者には〔認められ〕ない。

このことから偉大な聖仙たちは、アートマンの徴表であると言う。

74ab/ śārīraṃ hi gate tasmiñ śūnyāgāraṃ acetanam /

74cd/ pañcabhūtāvaśeṣatvāt pañcatvaṃ gatam ucyate //

なぜなら、それ（アートマン）が去ってしまうと、身体は精神性のない空き家であるから。

5元素〔だけ〕は残っていることから、5〔元素への帰滅〕に至ったと言われる。

75ab/ acetanaṃ kriyāvac ca manaś cetayitā paraḥ /

75cd/ yuktasya manasā tasya nirdiśyante vibhoḥ kriyāḥ //

思考器官は、精神性のないものであり、活動を有するものである。そして、精神性を有するものは別のものである。

思考器官と結び付いたその自在なものには、活動が示される。

76ab/ cetanāvān yataś cātmā tataḥ kartā nirucyate /

76cd/ acetanatvāc ca manaḥ kriyāvad api nocyate //

そして、アートマンは、精神性をもつものであること、このことから行為者であると説明される。

また、思考器官は、精神性をもたないものであることから、活動を有するものではあっても、〔行為者とは〕言われない。

77ab/ yathāsvenātmanā "ātmānaṃ sarvaḥ sarvāsu yoniṣu /

77cd/ prāṇais tantrayate prāṇī na hy anyo 'sty asya tantrakaḥ //

すべての生物は、各自、自分で自分をあらゆる母胎に〔導くように〕生氣によって操作する。

なぜなら、彼を操るものは他には存在しないからである。

78ab/ vaśī tat kurute karma yat kṛtvā phalam aśnute /

78cd/ vaśī cetaḥ samādhatte vaśī sarvaṃ nirasyati //

自らを支配するものは、それを行って果報を得るところの、その行いを為す。

自らを支配するものは、精神を集中する。自らを支配するものはすべてを斥ける。

79ab/ dehī sarvagato 'py ātmā sve sve saṃsparśanendriye /

79cd/ sarvāḥ sarvāśrayasthās tu nātmā 'to vetti vedanāḥ //

身体を有するアートマンは、遍在のものではあっても、各自の接触器官のうちに〔あるものである〕。

このことから、アートマンは、あらゆる拠り所にある⁷⁶、あらゆる感覚を感じることはないのである。

80ab/ vibhutam ata evāśya yasmāt sarvagato mahān /

80cd/ manasaś ca samādhānāt paśyaty ātmā tiraskṛtam //

まさにこの〔アートマン〕には自在性⁷⁷がある。遍在する偉大なものであるから。

そして、思考器官を集中することによって、アートマンは隠されたものを見る。

81ab/ nityānubandhaṃ manasā dehakarmānupātinā /

81cd/ sarvayonigataṃ vidyād ekayonāv api sthitam //

身体の行ないに随伴している思考器官と常に結合しているもの（アートマン）は、ひとつの母胎に定置していても、〔本来は〕あらゆる母胎にあるものと知るべきである。

82ab/ ādir nāsty ātmanaḥ kṣetrapāraṃparyam anādikam /

82cd/ atas taylor anāditvāt kiṃ pūrvam iti nocyate //

アートマンに始まりはない。土地の継続は始まりのないものである。

この両者が始まりをもたないということから、何が先か、と言われることはない。

83ab/ jñāḥ sākṣīty ucyate nājñāḥ sākṣī tv ātmā yataḥ smṛtaḥ /

83cd/ sarve bhāvā hi sarveṣāṃ bhūtānām ātmasākṣikāḥ //

知る主体は、証人であると言われている。一方、アートマンは知る主体でないものではない。このことから〔アートマンは〕証人であると教えられている。

実にすべての存在は、すべての存在物のアートマンを証人としている。

84ab/ naikaḥ kadācid bhūtātmā lakṣaṇair upalabhyate /

84cd/ viśeṣo 'nupalabhyasya tasya naikasya vidyate //

唯一の個体のアートマンは、いかなる場合も証相によっては捉えられることはない。

この唯一の捉えられないものの特殊性は存在しない。

⁷⁶CP:sarvāśrayasthā iti sarvaparaśarivagatāḥ. 「「あらゆる拠り所にある」とは、「あらゆる他人の身体にある」[という意味である。]」

⁷⁷SK 42cdには原質(*prakṛti*)の自在性(*vibhūta*)についての記述がある。

SK 42cd:prakṛter vibhūtvayogān naṭavad vyavatiṣṭhate liṅgam. 「微細な有機体は、原質の自在性と結び付くことによって、あたかも役者のようにふるまう。」

85ab/ saṃyogapuruṣasyeṣṭo viśeṣo vedanākṛtaḥ /

85cd/ vedanā yatra niyatā viśeṣas tatra tatkr̥taḥ //

結合〔から成る〕プルシヤには感覚に基づく特殊性が認められる。

感覚が確定しているところ、そこではそれ（感覚）に基づく特殊性がある。

86ab/ cikitsati bhiṣak sarvās trikālā vedanā iti /

86cd/ yayā yuktyā vadanty eke sā yuktir upadhāryatām //

医師は、3つの時の苦痛すべてを治療すると、

ある人々が、ある道理によって言う。その道理が理解されるべきである。

87ab/ punas tac chiraṣaḥ śūlaṃ jvaraḥ sa punarāgataḥ /

87cd/ punaḥ sa kāso balavāṃś chardiḥ sā punarāgatā //

また、〔現在の〕頭のその痛みや、その熱は、〔過去に経験したものが〕再び来たものである。

また、〔現在の〕激しいその咳や、その吐き気は、〔過去に経験したものが〕再び来たものである。

88ab/ ebhiḥ prasiddhavadacanair atītāgamaṇaṃ matam /

88cd/ kālas cāyam atītānām artīnām punarāgataḥ //

これらよく知られた言葉によって、過去の再来が考えられる。

また、この〔痛みの〕時は、過去の痛みが、再び来たものである。

89ab/ tam artikālam uddīśya bheṣajaṃ yat prayujyate /

89cd/ atītānām praśamaṇaṃ vedanānām tad ucyate //

その痛みの時に関して、それに対して医療が適用される。

その〔医療は〕、過去の苦痛の鎮静であると言われる。

90ab/ āpas tāḥ punar āgur mā yābhiḥ śasyaṃ purā hatam /

90cd/ yathā prakriyate setuḥ pratikarma tathā "śraye //

それによって以前に穀物が損害を受けた、その水が、再び来てはならない〔として〕、

堤防が作られるように、同様に、〔病気の〕拠り所⁷⁸に対して対策（治療）が〔為される〕。

91ab/ pūrvarūpaṃ vikārāṇāṃ dr̥ṣṭvā prādur bhaviṣyatām /

⁷⁸CS では、病気の拠り所(*āśraya*)は、身体とサットヴァ（マナス）であるとされている。

CS Sū 1.55abc:*śarīraṃ sattvasaṃjñāṃ ca vyādhīnām āśraya mataḥ. tathā sukhānām* ... 「病気の拠り所は、身体とサットヴァ（マナス）であると理解されており、同様に安楽の〔拠り所でもある〕。」

91cd/ yā kriyā kriyate sā ca vedanāṃ hantya anāgatām //

あきらかになりつつある病気の前徴を見て、

行われるその治療は、未来の苦痛を滅ぼすものである。

92ab/ pārāṃparyānubandhas tu duḥkhānām vinivartate /

92cd/ sukhahetūpacāreṇa sukhaṃ cāpi pravartate //

しかし、安楽の原因である手当てによって、苦しみの連続した結び付きが、停止する。安楽もまた現れる⁷⁹。

93ab/ na samā yānti vaiśamyam viśamāḥ samatām na ca /

93cd/ hetubhiḥ sadṛśā nityam jāyante dehadhātavaḥ //

均衡している〔身体の諸要素は、原因なく〕不均衡な状態に至ることはなく、また、不均衡な〔身体
の諸要素は、原因なく〕均衡な状態に〔至ることは〕ない。

〔均衡・不均衡をもたらす〕原因と同等の〔性質をもつ〕身体の諸要素は常に生じる〔からである〕⁸⁰。

94ab/ yuktim etāṃ puraskṛtya trikālāṃ vedanāṃ bhiṣak /

94cd/ hantīty uktaṃ cikitsā tu naiṣṭhikī yā vinopadhām //

医師は、このような道理をもって、3つの時にわたる苦痛を、

滅ぼすと言われている。しかし、最終的な治療、それは、欲望⁸¹をなくすことである。

⁷⁹cf. CS Sū 9.4cd: *sukhasaṃjñakam ārogyaṃ vikāro duḥkham eva ca.*

「無病は安楽と呼ばれ、病気は苦しみに他ならない。」

⁸⁰cf. CS Sū 16.27: *jāyante hetuvaiśamyād viśamā dehadhātavaḥ /*

hetusāmyāt samās teṣāṃ svabhāvoparamaḥ sadā //

「原因たるものの不均衡によって、〔結果たる〕身体諸要素の不均衡が生ずる。原因たるものが平衡を保っておれば、身体要素も平衡状態になる。これら〔身体諸要素〕は絶えず自然消滅している。」（矢野訳）

cf. CS Sū 16.35: *kathaṃ śarīre dhātūnāṃ vaiśamyam na bhaved iti / samānāṃ cānubandhaḥ syād ity arthaṃ*

kriyate kriyā // 「どうすれば身体に不均衡な身体要素を生じさせないですむか、またどうすれば平衡なる身体要素を生じ

させることができるかと〔考えて〕その目的のために治療行為は行われる。」（矢野訳）

⁸¹・CP: *vinopadhām iti tṛṣṇāṃ vinā, tṛṣṇāśūnyā pravṛttir mokṣaphalā bhavatīty arthaḥ.* 「*vinopadhā*とは、欲望のないこと。欲望のない行為は解脱という結果をもつものである。」

・*upadhā*の本来の意味は「詐欺」「欺瞞」であり、「欲望」という意味はない。しかし、本章第96d節では「欲望」（*tṛṣṇā*）という語が*upadhā*の同義語としてあらわれていることもあり、ここではCPの解釈にしたがって*upadhā*を「欲望」と訳す。

・A. Comba は、CS のこの *upadhā* を、*upadhā* の定義についての VS 6.2.3-5 の記述と、*upadhā* を欲 (*icchā*) の下位分類の1つとして挙げる PDhS *Ichhāprakarana* (D.ed.p.261) の記述と関係しているものと見ている。cf.

95ab/ upadhā hi paro hetur duḥkhaduḥkhāśrayapradaḥ /

95cd/ tyāgaḥ sarvopadhānām ca sarvaduḥkhavyapohakaḥ //

欲望は、苦と苦の拠り所を与える最高の原因であるからである。
そして、あらゆる欲望を捨てることは、あらゆる苦の除去である。

96ab/ koṣakāro yathā hy aṃśūn upādatte vadhapradān /

96cd/ upādatte tathā ’rthebhyas tṛṣṇām ajñāḥ sadā ”āturaḥ //

あたかも蚕が、〔自らに〕死を与えるものである繊維を受け取るように、
同様に、常に苦しんでいる知る主体でないものは、欲望を諸対象から受け取る。

97ab/ yas tv agnikalpān arthāñ jño jñātvā tebhyo nivartate /

97cd/ anārambhād asaṃyogāt taṃ duḥkhaṃ nopatiṣṭhate //

しかし、火に等しい対象を知って、そこから逃れるものである知る主体、
始まりがないことから、また結合がないことから、その〔知る主体〕に苦は近付かない。

98ab/ dhīdhṛtismṛtīvibhramśaḥ saṃprāptiḥ kālakarmanām /

98cd/ asātmyārthāgamaś ceti jñātavyā duḥkhahetavaḥ //

思考（理性）・堅固さ・記憶の停止、時・行為に達すること、
また、〔その人に〕ふさわしくない対象に向かうこと、以上は苦しみの原因であるとするべきである。

99ab/ viṣamābhiniveśo yo nityānitye hitāhite /

99cd/ jñeyaḥ sa buddhivibhramśaḥ samaṃ buddhir hi paśyati //

恒常なものと恒常でないもの、良いことと良くないことへの不均衡な執着、
それは理性の停止であるとするべきである。理性は均衡を見るからである。

100ab/ viśayapravaṇaṃ sattvaṃ dhṛtibhramśān na śakyate /

100cd/ niyantum ahitād arthād dhṛtir hi niyamātmikā //

対象に惹かれているサットヴァ（思考器官）⁸²は、堅固さが停止していることから、良くない対象から抑制することはできない。抑制を本性とするものが、堅固さであるからである。

Comba 1987 pp.57-58.

⁸²CS では、*sattva* と *manas* は、ほぼ同義語として用いられることが多い。

cf. CS Sū 8.4ab: *atīndriyaṃ punar manaḥ sattvasaṃjñakaḥ cetaḥ ity āhur eke* ... 「一方思考器官（マナス）は〔五つの〕感覚機能を越えたものであり、「サットヴァ」とも呼ばれ、またある人々は「チェータス」とも呼ぶ。」（矢野訳）

101ab/ tattvajñāne smṛtir yasya rajomohāvṛtātmanaḥ /

101cd/ bhraśyate sa smṛtibhramśaḥ smartavyaṃ hi smṛtau sthitam //

激質と迷妄に覆われたアートマンをもつ人、その人の真理についての認識に対する記憶は、
停止する。この人は、記憶の停止した人⁸³である。記憶されるべきことは、記憶に留まっているからである。

102ab/ dhīdhṛtismṛtīvibhraṣṭaḥ karma yat kurute ’śubham /

102cd/ prajñāparādhaṃ taṃ vidyāt sarvadoṣaparakopaṇam //

思考（理性）・堅固さ・記憶を停止した者は、良くない行いをなす。
その〔行い〕を、すべてのドーシャを激発させる知恵の過ちであるとするべきである。

103ab/ udīraṇaṃ gatimatām udīrṇānām ca nigrahaḥ /

103cd/ sevanaṃ sāhasānām ca nārīṇām cātisevanam //

〔自然に〕出て行くものを〔過度に〕排泄すること、排泄すべきものの抑制、
無謀なことに耽けること、また、女性に過度に耽けること、

104ab/ karmakālātipātaś ca mithyārambhaś ca karmaṇām /

104cd/ vinayācāralopaś ca pūjyānām cābhidharṣaṇam //

また、行い〔にふさわしい〕時の無視、また、行いの不正な開始、
礼儀正しい行いを損なうこと、敬うべき人々に逆らうこと、

105ab/ jñātānām svayam arthānām ahitānām niṣevaṇam /

105cd/ paramaunmādikānām ca pratyayānām niṣevaṇam //

自分にとって良くないと知られたことに耽けること、
そして、最高に狂気じみた考えに耽けること、

106ab/ akālādeśasaṃcārau maitrī saṃkliṣṭakarmabhiḥ /

106cd/ indriyopakramoktasya sadvṛttasya ca varjanam //

不適當な時と場所にさまようこと、良くない行いをなす人々との友好、
「感覚器官の検討」〔という名の CS Sū 第8章において〕述べられた、正しい行いを放棄すること、

107ab/ īrṣyāmānabhayaḥkrodhalobhamohamadabhramāḥ /

⁸³CS Ci 9.78 には、精神的な疾患 (*unmāda*) の症状のひとつとしての *matismṛtibhramśa* についての記述がある。

107cd/ tajjaṃ vā karma yat kliṣṭaṃ kliṣṭaṃ yad dehakarma ca //

嫉妬・高慢・恐怖・怒り・貧欲・迷妄・放縱・過誤、
あるいはそれから生じた汚れた行い、また、汚れた身体の行い、

108ab/ yac cānyadīdṛṣaṃ karma rajomohasamutthitam /

108cd/ prajñāparādhaṃ taṃ śiṣṭā bruvate vyādhikāraṇam //

さらに、激質と迷妄によってひきおこされた他の同様の行い、
この知恵の過ちを、学識ある者たちは、病気の原因であると言う⁸⁴。

109ab/ buddhyā viṣamavijñānaṃ viṣamaṃ ca pravartanam /

109cd/ prajñāparādhaṃ jānīyān manaso gocaraṃ hi tat //

理性による不均衡な認識と不均衡な活動は、
知恵の過ちであると知るべきである。実にそれは、思考器官の範囲である。

110ab/ nirdiṣṭā kālasaṃprāptir vyādhīnāṃ vyādhisaṃgrahe /

110cd/ cayaprakopaprasāmaḥ pittādīnāṃ yathā purā //

病気のまとめ〔の章 CS Sū 17～20 章〕において、病気の時が到来することが示された。
ピッタ等の蓄積・激発・鎮静が以前に〔述べられた〕ように。

111ab/ mithyātihīnalingāś ca varṣāntā rogahetavaḥ /

111cd/ jīrṇabhuktaprajīrṇānnakālākālasthanitīś ca yā //

また、過誤・過度・過少を特徴とする雨季は、病気の原因である。
消化されたもの・食べられたもの・消化されたばかりのものについての適当な時間と不適当な時間の条件、

112ab/ pūrvamadhyāparāhṇāś ca rātryā yāmās trayaś ca ye /

112cd/ eṣu kāleṣu niyatā ye rogās te ca kālajāḥ //

また、午前・正午・午後と、夜の3つの時間の区分、
これらの時に定められた病気、これらも時によって生じるものである。

113ab/ anyedyuṣko dvyahagrāhī tṛtīyakacaturthakau /

⁸⁴知恵の過ち(*prajñāparādha*)は、CS では一貫して病気（特に精神的な病気）の原因とされている。
cf.CS Ni 1.3: ... *tat trividham, asātmyendriyārthasaṃyogaḥ, prajñāparādhaḥ, pariṇāmaś ceti*. 「それ（病気の原因）は、3種である。自分にふさわしくない感覚器官の対象との結合、知恵の過ち、〔経時的な〕変化、以上であると〔されている〕。」 cf.CS Sū 20.5;28.39.

113cd/ sve sve kāle pravartante kāle hy eṣāṃ balāgamaḥ //

毎日の発熱、2日間の発熱、3日目ごとの発熱（隔日熱）と4日目ごとの発熱⁸⁵。
〔これらは〕それぞれの時に現れる。それらの時に、〔熱病の〕力が到来するからである。

114ab/ ete cānye ca ye kecit kālajā vividhā gadāḥ /

114cd/ anāgate cikitsyās te balakālau vijānatā //

これら、および他の何らかの、時間によって生じる様々な病気。
それらは〔患者の体〕力と時間とを知る者によって、まだ到来していない時に治療される。

115ab/ kālasya pariṇāmena jarāmṛtyunimittajāḥ /

115cd/ rogāḥ svābhāvikā dṛṣṭāḥ svabhāvo niṣpratikriyaḥ //

時の推移による老いと死とを期成因として生じた
病気は、本性的なものと経験的に知られている。本性は治療できないものである。

116ab/ nirdiṣṭaṃ daivaśabdena karma yat paurvadehikam /

116cd/ hetus tad api kālena rogāṇām upalabhyate //

天命という語によって示された前〔世〕の身体による行い、
それもまた時による病気の原因と認められる。

117ab/ na hi karma mahat kiñcit phalaṃ yasya na bhujyate /

117cd/ kriyāghnāḥ karmajā rogāḥ praśamaṃ yānti tatkṣayāt //

何らかの大きな行いで、その果報が享受されないものは決してない。
行いから生じた病気は、行為（治療）によって滅せられるものである。その〔行いの〕消滅から鎮静に至る。

118ab/ atyugraśabdaśravaṇāc chravaṇāt sarvaśo na ca /

118cd/ śabdānāṃ cātihīnānāṃ bhavanti śravaṇāj jaḍāḥ //

非常に強い音を聞くことによって、また、完全に聞かないことによって、
また、非常に弱い音を聞くことによって、〔人は〕聴覚を失ったものとなる。

⁸⁵発熱日を○で、平熱日を×で示すと、次のようになる。
「2日間の発熱」(*dvyahagrāhin*): ○○×○○×○○
「3日目ごとの発熱（隔日熱）」(*tṛtīyaka*): ○×○×○×○
「4日目ごとの発熱」(*caturthaka*): ○××○××○
cf.CS Ci 3.34, SS Ut 39.67-68, Filliozat 1949 pp.96-98, Meulenbeld 1974 p.178.

119ab/ paruṣodbhīṣaṇāśastāpriyavyasanasūcakaiḥ /

119cd/ śabdaiḥ śravaṇasaṃyogo mithyāsaṃyoga ucyate //

荒々しい・恐ろしい・不吉な・好ましくない・不幸を暗示する言葉と聴覚との結合は、過誤の結合と言われる。

120ab/ asaṃsparśo 'tisaṃsparśo hīnasaṃsparśa eva ca /

120cd/ sprśyānāṃ saṃgrahēṇoktaḥ sparśanendriyabādhakaḥ //

無接触と、過剰な接触と、過少な接触とは実に、
触覚器官の障害であると、接触についてのまとめ(CS Sū 第8章)で述べられた。

121ab/ yo bhūtaṣaṇavātānām akālenāgataś ca yaḥ /

121cd/ snehaśītoṣṇasaṃsparśo mithyāyogaḥ sa ucyate //

魔物・毒・風との時ならぬ出会い、
油性のもの・冷・熱との〔時ならぬ〕接触、それは過誤の結合であると言われる。

122ab/ rūpāṇām bhāsvatām dṛṣṭir vinaśyaty atidarśanāt /

122cd/ darśanāc cātisūkṣmāṇām sarvaśaś cāpy adarśanāt //

輝くものを過度に見ることによって、視覚が減する。
また、極めて微小なものを見ることによって、また、全く見ないことによって〔視覚が減する〕。

123ab/ dviṣṭabhairavabībhatsadūrātīśliṣṭadarśanāt /

123cd/ tāmasānām ca rūpāṇām mithyāsaṃyoga ucyate //

厭わしいもの・恐ろしいもの・嫌悪を感じさせるもの・遠いもの・近すぎるものを見ることによって、
また、暗いものを〔見ることによって〕、過誤の結合と言われる。

124ab/ atyādānam anādānam okasātmyādibhiś ca yat /

124cd/ rasānām viṣamādānam alpādānam ca dūṣaṇam //

体に良いものなどの、過剰な摂取、また、摂取しないこと、
滋味の不均衡な摂取、また、わずかしき摂取しないこと、これらは良くないことである。

125ab/ atimṛdvatitīkṣṇānām gandhānām upasevanam /

125cd/ asevanam sarvaśaś ca ghrāpendriyavināśanam//

非常に弱い、〔あるいは〕非常に強い香りをしばしば用いること、

また、全く用いないことは、嗅覚器官の破滅を〔もたらす〕。

126ab/ pūtibhūtaṣadviṣṭā gandhā ye cāpy anārtavāḥ /

126cd/ tair gandhair ghrāṇasaṃyogo mithyāyogaḥ sa ucyate //

悪臭、毒である臭い、厭わしい臭い、また、季節はずれの〔臭い〕、
それらの臭いと嗅覚との結合、それは過誤の結合であると言われる。

127ab/ ity asātmyārthasaṃyogas trividho doṣakopanaḥ /

127cd/ asātmyam iti tad vidyād yan na yāti sahātmatām //

以上のような、〔その人に〕ふさわしくない対象との〔過誤・過度・過少という〕3種の結合は、ドー
シャの激発となる。

〔その人に〕ふさわしくないこととは、自分本来の状態に至らないことであると知るべきである。

128ab/ mithyātihīnayogebhyo yo vyādhir upajāyate /

128cd/ śabdādīnām sa vijñeyo vyādhir aindriyako budhaiḥ //

過誤・過剰・過少な結合⁸⁶によって病気は生じる。

これは音声等に対する感覚器官に関係した病気である、と智者によって認識されるべきである。

129ab/ vedanānām aśāntānām ity ete hetavaḥ smṛtāḥ /

129cd/ sukhahetuḥ samas tv ekaḥ samayogaḥ sudurlabhaḥ //

これらは〔そのままでは〕鎮静されない苦痛の原因であると教えられている。

一方、正常な安楽の原因は、均衡のとれた結合、1つ〔だけ〕であり、大変得難いものである。

130ab/ nendriyāṇi na caivārthāḥ sukhaduḥkhasya hetavaḥ /

130cd/ hetus tu sukhaduḥkhasya yogo dṛṣṭaś caturvidhaḥ //

感覚器官も、また〔その〕対象も、楽・苦の原因ではない。

一方、楽・苦の原因は、〔感覚器官とその対象との〕4種の結合⁸⁷であると経験的に知られている。

131ab/ santīndriyāṇi santy arthā yogo na ca na cāsti ruk /

⁸⁶CS Sū 11.37 では、「過少な結合」(*atihīnayoga*)の代わりに「結合の欠如」(*ayoga*)を挙げている。

CS Sū 11.37: *trīṇy āyatanānīti, arthānām karmaṇaḥ kālasya cātiyogāyogamithyāyogāḥ*.

「三種の〔病気の〕原因とは、対象・行為・時の、過度の結合、結合の欠如、誤った結合である。」(矢野訳)

⁸⁷「4種の結合」とは、第128節で述べられた苦(病気)の原因である「過誤・過剰・過少な結合」と、第129節で述べられた安楽(健康)の原因である「均衡のとれた結合」のことである。

131cd/ na sukhaṃ kāraṇaṃ tasmād yoga eva caturvidhaḥ //

感覚器官が存在し、対象が存在しても、結合がなければ痛みはなく、安楽もない。このことから、4種の結合こそが原因である。

132ab/ nātmendriyaṃ mano buddhiṃ gocaraṃ karma vā vinā /

132cd/ sukhaduḥkhaṃ yathā yac ca boddhavyaṃ tat tathocyate //

アートマン、感覚器官、思考器官、理性、対象、あるいは行為がなければ、楽・苦はない。またそれがいかにして知られるべきか、それがそのように〔以下で〕述べられる。

133ab/ sparśanendriyasaṃsparśaḥ sparśo mānasa eva ca /

133cd/ dvidvidhaḥ sukhaduḥkhānāṃ vedanānāṃ pravartakaḥ //

触覚器官の接触と、思考器官の接触こそは、楽・苦の感覚を引き起こす2種のものである。

134ab/ icchādveṣātmikā tṛṣṇā sukhaduḥkhāt pravartate /

134cd/ tṛṣṇā ca sukhaduḥkhānāṃ kāraṇaṃ punar ucyate //

願望と嫌悪を本質とする欲望というものは、楽・苦から現れる。また、さらに欲望は、楽・苦の原因であるとも言われる。

135ab/ upādatte hi sā bhāvān vedanāśrayasaṃjñakān /

135cd/ sprīsyate nānupādāne nāsprīṣto vetti vedanāḥ //

なぜなら、それ（欲望）は、感覚の拠り所と呼ばれる存在を得るからである。得ることがなければ接触されず、接触していないものは感覚を感じることはない。

136ab/ vedanānām adhiṣṭhānaṃ mano dehaś ca sendriyaḥ /

136cd/ keśalomanakhāgrāṇnamaladravaguṇair vinā //

感覚の拠り所は、感覚器官をとまなう思考器官と身体である。〔ただし〕頭髮・体毛・爪の先・便・尿・〔音声等の〕性質を除いて。

137ab/ yoge mokṣe ca sarvāsāṃ vedanānām avartanam /

137cd/ mokṣe nivṛttir niḥśeṣā yogo mokṣappravartakaḥ //

ヨーガと解脱においては、あらゆる感覚の現れはない。解脱における〔感覚の〕消失は完全である。ヨーガは、解脱を引き起こすものである。

138ab/ ātmendriyamanorthānāṃ sannikarṣāt pravartate /

138cd/ sukhaduḥkham anārambhād ātmasthe manasi sthire //

139ab/ nivartate tadubhayaṃ vaśitvaṃ copajāyate /

139cd/ saśarīrasya yogajñās taṃ yogam ṛṣayo viduḥ //

アートマンと感覚器官と思考器官と対象の接触から、楽・苦が現れる。〔この接触が〕始まらないことから、思考器官がアートマンに位置し、安定すると、この〔楽・苦の〕両者は停止する。そして身体をとまなうものに支配者性が生じる。ヨーガを知る聖仙たちは、これをヨーガと知る⁸⁸。

140ab/ āveśaś cetaso jñānam arthānāṃ chandataḥ kriyā /

140cd/ dṛṣṭiḥ śrotraṃ smṛtiḥ kāntir iṣṭataś cāpy adarśanam //

侵入すること、心を知ること、ものを意のままにすること。視力、聴力、記憶力、美しさ、希望するままに〔身体を〕見えないようにすること⁸⁹。

141ab/ ity aṣṭavidham ākhyātaṃ yogināṃ balam aiśvaram /

141cd/ śuddhasattvasamādhānāt tat sarvaṃ upajāyate //

というのは、ヨーガ行者の8種の超自然的な力であると言われる。清浄なサットヴァ（思考器官）⁹⁰の集中から、そのすべてが生じる。

⁸⁸第138-139節は、VS 5.2.16-17に近い。

VS 5.2.16: *ātmendriyamanorthasannikarṣāt sukhaduḥkhe tad anārambhaḥ*. 「アートマン・感覚器官・思考器官・対象の接触から、楽・苦がある。それは始まりのないものである。」 VS 5.2.17: *ātmasthe manasi saśarīrasya sukhaduḥkhābhāvaḥ sa yogaḥ*. 「思考器官がアートマンに位置していると、身体をとまなうものの楽・苦は存在しない。それがヨーガである。」 cf. Comba 1987 p.48.

⁸⁹ここで挙げられている8種の超自然的な力については、YogS 第3章にそれぞれ対応する記述が見られる。

- ・「侵入すること」：「他人の身体へ侵入すること」(*praśarīrāveśa*)(YogS 3.38)。
- ・「心を知ること」：「他人の心を知ること」(*paracittajñāna*)(YogS 3.19)。
- ・「ものを意のままにすること」：「望み通りになること」(*prākāmya*)、「随意性」(*yatrakāmāvasāyitva*)(Vyāsa on YogS 3.45)。
- ・「視力」「聴力」：「〔超自然的な〕聴覚・触覚・視覚・味覚・嗅覚」(YogS 3.36)。
- ・「記憶力」：「前生の知」(*pūrvajātijñāna*)(YogS 3.18)。
- ・「美しさ」：「身体の完全さ」(*kāyasampat*)(YogS 3.46)。
- ・「〔身体を〕見えないようにすること」：「〔身体を〕隠すこと」(*antardhāna*)(YogS 3.21)。

⁹⁰CS ではサットヴァという語が、思考器官(*manas*)と同義で用いられることが多く(本章第100節訳注参照)、またそのサットヴァには3種あるとされ(cf. CS Śā 4.36: 「実に、サットヴァは、清浄なもの(*śuddha*)、ラジヤス的なもの(*rājasa*)、タマス的なもの(*tāmasa*)の3種類である。」)、各個人の性格の違いなどはこの3種の思考器官の状態の違いによるものであるとされている。

142ab/ mokṣo rajastamo 'bhāvāt balavat karmasamkṣayāt /

142cd/ viyogaḥ sarvasamyogair apunarbhava ucyate //

解脱は激質と翳質の非存在から、行いの完全な消滅から〔生じる〕。

あらゆる結合からの分離が非再生と言われる⁹¹。

143ab/ satām upāsanaṃ samyag asatām parivarjanam /

143cd/ vratacaryopavāsau ca niyamāś ca prthagvidhāḥ //

善い人への正しい奉仕、善くない人避けること、

誓戒の実践と断食、また、様々な種類の抑制、

144ab/ dhāraṇaṃ darmaśāstrāṇāṃ vijñānaṃ vijane ratiḥ /

144cd/ viṣayeṣv aratir mokṣe vyavasāyaḥ parā dhṛtiḥ //

法典を堅持すること、〔対象の〕識別、人から離れたところにおいて喜び〔を見出すこと〕、

対象に関して喜びのないこと、解脱を決意すること、最高の堅固さ。

145ab/ karmaṇām asamārambhaḥ kṛtānām ca parikṣayaḥ /

145cd/ naiṣkramyam anahaṅkāraḥ samyoge bhayadarśanam //

行為を開始しないこと、なされたことを滅すること、

隠遁⁹²、自我意識のないこと、結合に恐れを見ること、

146ab/ manobuddhisamādhānam arthatattvapariṅkṣaṇam /

146cd/ tattvasmṛter upasthānāt sarvam etat pravartate //

思考器官と理性を集中すること、対象の真理を熟慮すること、

これらすべては、真理についての記憶のもとにあることによって現れる。

147ab/ smṛtiḥ satsevanādyaiś ca dhṛtyantair upajāyate /

147cd/ smṛtvā svabhāvaṃ bhāvānām smaran duḥkhāt pramucyate //

〔真理についての〕記憶は、〔前述の〕善い人に仕えることをはじめとし、堅固さを最後とすること

⁹¹・第142節は、VS 5.2.20の内容に近い。

VS 5.2.20: *tadabhāve samyogābhāvo 'prādurbhāvaḥ sa mokṣaḥ*. 「それ〔*adṛṣṭa*〕が存在しないとき、〔アートマンとマナスとの〕結合の非存在、現われないこと、それが解脱である。」〔〕内は Candrānanda の注による） cf. Comba 1987 pp.60-61.

⁹²「隠遁」(*naiṣkramya*)を「活動の放棄」(*naiṣkarmya*)とする異読もある。*naiṣkramya*は、Jātakamālāなど主に仏教文献に用例があり、*naiṣkarmya*は、BhG 3.4; 18.49に用例がある。

によって生じる。

諸存在の本性を想起し、想起しつつあるものは苦から解放される。

148ab/ vakṣyante kāraṇāṇy aṣṭau smṛtir yair upajāyate /

148cd/ nimittarūpagrahaṇāt sādṛśyāt saviparyayāt //

それによって〔真理についての〕記憶が生じるところの、〔その〕8種の原因が〔以下に〕述べられる。

原因と色形の把握によって、類似によって、反対のものを伴うものによって、

149ab/ sattvānubandhād abhyāsāj jñānayogāt punaḥ śrutāt /

149cd/ dṛṣṭaśrutānubhūtānām smaraṇāt smṛtir ucyate //

サットヴァ（思考器官）と〔アートマンとの〕結合から⁹³、習熟によって、〔真理についての〕知識との結合によって、再び聞いたことによって、

見られ・聞かれ・理解されたことの記憶によって、〔真理についての〕記憶が〔生じる〕と言われる⁹⁴。

150ab/ etat tad ekam ayaṇaṃ muktair mokṣasya darśitam /

150cd/ tattvasmṛtibalaṃ yena gatā na punarāgatāḥ //

この真理についての記憶の力、それが解脱の唯一の道であると、解脱した人々によって示された。

それによって、〔解脱に〕赴いた人々は、再び戻ってこない。

151ab/ ayaṇaṃ punar ākhyātam etad yogasya yogibhiḥ /

151cd/ samkhyātadharmaṃ samkhyaiś ca muktair mokṣasya cāyanam //

また、これはヨーガの道であるとヨーガ行者たちによって述べられた。

そして、諸性質を数えている解脱したサーンキヤ派の人々によっては、解脱の道であると〔述べられた〕。

152ab/ sarvaṃ kāraṇavad duḥkham asvaṃ cānityam eva ca /

152cd/ na cātmakṛtaṃ tad dhi tatra cotpadyate svatā //

すべて原因をもつものは苦であり、自分のものでないものであり、またまさに恒常でないものである

⁹³記憶(*smṛti*)に関して VS 9.22 では次のように言われる。

ātmanamanasoḥ samyogaviśeṣāt saṃskārāc ca smṛti. 「アートマンとマナスの特殊な結合から、また潜勢力から、記憶が〔生じる〕。」

⁹⁴〔真理についての〕記憶の生じかたには、大別すると第143-147節のものと、第148-149節のものの2種あることになる。あるいは記憶の種類に違いがあるのかも知れないが、それについてはここでは述べられていない。

⁹⁵。
なぜならそれはアートマンによって作られたものでないから、そこには自己〔の意識〕が生ずる〔だけである〕。

153ab/ yāvan notpadyate satyā buddhir naitad ahaṃ yayā /
153cd/ naitan mameti vijñāya jñāḥ sarvam ativartate //
これは私ではない、という真実の認識が生じない限り〔そのままである〕。その〔真実の認識〕によって、
これは私のものではないと識別して、知る主体は、すべてを越えるのである⁹⁶。

154ab/ tasmiṃś caramasaṃnyāse samūlāḥ sarvavedanāḥ /
154cd/ asaṃjñājñānavijñānā nivṛttiṃ yānty aśeṣataḥ //
この最終的な放棄において、あらゆる感覚は根こそぎに、
理解・認識・識別を伴って、残らず停止に至る⁹⁷。

155ab/ ataḥ paraṃ brahmabhūto bhūtātmā nopalabhyate /
155cd/ niḥsṛtaḥ sarvabhāvebhyaś cihnaṃ yasya na vidyate //
これ以降、個体のアートマンはブラフマンとなり、捉えられることはない。
すべての状態（存在）から抜け出たもの、そのもののしるしは存在しない。

155ef⁹⁸/ gatiḥ brahmaavidāṃ brahma tac cākṣaram alakṣaṇam /
155gh/ jñānaṃ brahmaavidāṃ cātra nājñas taj jñātum arhati //
ブラフマンを知る者たちにとっての進路は、ブラフマンであり、またそれは不滅のものであり、証相

⁹⁵ 本章第59節にも同様の表現が見られる。
⁹⁶ 第153節に関連する表現が、CS Śā 5.10、さらにBC 12.23に見られる。
CS Śā 5.10: . . . *yair abhibhūto na sattām ativartate*. 「それら（自我意識(*aharikāra*) など）によって圧倒された者は、〔輪廻における〕存在(*sattā*)〔であること〕を超えることはない。」
BC 12.23: *ajñānaṃ karma tṛṣṇā ca jñeyāḥ saṃsārahetavaḥ / sthito 'smiṃs tritaye jantus tatsattvaṃ nāativartate //* 「無知と行為と渴望とは、輪廻の原因であると知られるべきである。この3つのものに留まっている生類は、その存在性をを超えることはない。」 cf. Johnston 1937 p.51.
⁹⁷ 第154cd節には次のような異読がある。
154cd: *samagrajñeyavijñānān nivṛttiṃ yānty aśeṣataḥ*. 「すべての知られるべきことを識別することにより、残らず停止に至る。」
⁹⁸ CS (1) のテキストではこの第155ef節は脱落しているが、CPの注によってこの部分が存在していたことは明らかであるので、CS (2) のテキストによって補う。

をもたないものである。
ブラフマンを知る者たちには知識がある。また、これに関して無知な者は、それ（ブラフマン）を知ることはいかなることもできない。

tatra ślokaḥ—
156ab/ praśnāḥ puruṣam āśritya trayaviṃśatir uttamāḥ /
156cd/ katidhāpuruṣīye 'smin nirṇītās tattvadarśinā //
ここに〔まとめの〕詩節がある。
プルシャはいくつの部分に〔というという言葉ではじまる〕この〔章〕において、プルシャに関して
2 3の優れた質問がなされ、真理を知る者たちによって、〔その答えが〕確定された。

ity agniveśakṛte tantre carakapratisaṃskṛte śārīrasthāne
katidhāpuruṣīyaṃ śārīraṃ nāma prathamo 'dhyāyaḥ //1//
以上が、アグニヴェーシャが作り、チャラカが編纂した論書にあるシャーリーラの巻における、
「プルシャはいくつの部分に〔という言葉ではじまる〕シャーリーラ」という名の第1章である。

第2章

さてこれより、「異なった親族（ゴートラ）の」[という言葉ではじまる] シャーリーラ [の章] を述べようと、尊いアートレーヤは言った。(1-2)

月経が終った後⁹⁹に、[ある女性と] 一体となった、[その女性とは] 異なった家系（ゴートラ）¹⁰⁰に属する男性が、秘かに放出したもの、

4つの部分と、6つのものから生じた、女性達 [の体内] において胎児の状態になるもの。それはなにか？(3)

胎児を発生させるために [女性達の体内に] 置かれるもの、それを賢者たちは、彼の精液 (*śukra*) であると言う。

それは風・火・土・水の性質¹⁰¹を4つの部分としてもつものであり、また、6つの滋味 (*rasa*) から生じたものである。(4)

どのようにして、また、何によって、満ち足りた身体をもつ胎児が、適切な時に、楽に生まれるのか？

女性が、妊娠可能 (*saprajā*)¹⁰²ではあっても、長い時間を経た後に胎児を得る [ことがある] のは [何によってか？]

あるいは、胎児ができて、亡くなる [ことがある] のは何によってか？(5)

精液・血・アートマン・場（子宮）・時が完全にそなわり、健全な食物による世話¹⁰³がなされた、[そのような] 胎児は、完全に満ち足りた身体をもって、[適切な] 時¹⁰⁴に、健やかに、楽に生まれる。(6)

母胎 (*yoni*) の障害 (*pradoṣa*) によって、マナスの苦痛によって、精液・血・食事・休養 (*vihāra*) の欠陥によって、

適切ではない時¹⁰⁵の交わりによって、体力が消耗することによって、妊娠可能ではあっても、長い

⁹⁹いわゆる「妊娠適時」 (*ṛtu*) を指す。cf. ManS 3.45-47.
¹⁰⁰CP: 「同じゴートラの者の結婚は、罪 (*adharmā*) であり、法典において禁止されている。」 cf. ManS 3.5.
¹⁰¹CP: 「[5大元素のうち] 空は遍在であるから、他の4つの大元素と共に、男性から胎児へと移動するわけではない。」
¹⁰²CP: 「不妊でない女性 *avandhyā*」
¹⁰³CP: 「妊婦の世話」
¹⁰⁴CP: 「9あるいは10か月目に」
¹⁰⁵CP: 「妊娠適時でない時の交わり」

時間を経た後に胎児を得るのである。(7)

風 (*pavana*) によって、女性の血の滞りがあると、時によっては、愚かな者たちは、[その滞りが] 胎児であると判断する。

なぜなら、その女性の流失しない血が増大して、胎児の形をなすからである。(8)

火・太陽・疲労・悲しみ・病によって、あるいは熱い食物・飲物によって、それ（滞っていた血）が流出してしまうと、

胎児と呼ばれたもの（血の滞り）がないのを見て、ある人々は、[胎児が] 魔物 (*bhūta*) に奪われたのだと言う。(9)

オージャス (*ojas*)¹⁰⁶を食べ、夜にさまよう [魔物] たちの食物のためには、身体は求められない。もし、彼ら（魔物たち）が、胎児 [の身体] を奪うとするならば、[体内に入り込む] 余地をみつけた [魔物たち] が、母親のオージャスを奪わないことはないであろう。[それゆえに、胎児は魔物に奪われたわけではないのである]。(10)

どうして、ひとりの女子を、あるいはひとりの男子を、あるいは [男女] ひとりずつの双子を、あるいは男の双子を、あるいは女の双子を、あるいは多くの子を生む [ことがある] のか？

どうして、大変長くかかって胎児を生むのか？ また、どうして双子のうちの一人 [だけ] が成長する [ことがある] のか？(11)

血が優勢であることによって女子を、精液が [優勢であることによって] 男子を、その बीज्या (*bīja*) が2つになることによって女子と男子とを生む。それぞれの बीज्या の [精液と血の] いずれかが優勢であることによって [男か女かが決まる]。(12)

ある女性の、精液の優勢な बीज्या が2つにわかれると、その女性は男の双子を生む。あるいはもし、[ある女性の] 血の優勢な [बीज्याが] 2つにわかれると、その女性は女の双子を生む(13)。

非常に増大し、精液・血 (*śukrārtava*, Sg.)¹⁰⁷ [の結合] に達した風 (*vāyu*) が、多数に分割する。その分割にしたがって、その数だけの、行為を本性としてもつ子供たちを 自己の意志によらずに [その女性は] 生む。(14)

¹⁰⁶*ojas* については CS Śā 4.24;7.15 およびそれぞれの箇所の訳注参照。
¹⁰⁷*bīja* の意味か？

もし、胎児が食物を得ることがなければ、乾燥あるいは流出する。
〔胎児が〕何年もかかって、〔胎内で〕養われると、女性はその胎児を、大変長くかかって生む。(15)

行為を本性とすることによって、精液と血との均等でない分割によって、〔母親の〕腹の中で、一人の〔胎児は〕より大きく、二人目はより小さく成長する。
このように、双子であっても、優劣の相違がある。(16)

どうして、両性具有のもの(*dviretā*)、あるいは風を精力としてもつもの(*pavanendriya*)、〔風の〕作用により〔精液が〕流出するもの(*saṃskāravāhin*)、男性と女性の性的不能(*naranārīṣaṇḍau*)、ゆがんだ者(*vakrin*)が生まれるのか？
同様に、どうして、嫉妬による喜びをもつもの(*īrṣyābhirati*)、あるいは風による性的不能者(*vātikaṣaṇḍaka*)が生まれるのか？(17)

बीजाが等しい割合であることによって、बीजाが熱に冒されることによって、女性と男性との特徴をもった両性具有のものとなる。
風(*vāyu*)が、胎児となったものの精液の場(*śukrāśaya*)を冒して、風が精力である状態(*pavanendriyatva*)¹⁰⁸を作る。(18)

また風(*anila*)が、精液の場の入口を打ち破ることによって、〔風の〕作用による〔精液の〕流出(*saṃskāravāha*)をもたらす。
弱く小さい両〔親〕のबीजाと、力のない、喜びのない両〔親〕、性的不能な(*klība*)両〔親〕が、2種の異常（男性と女性の性的不能）の原因である。(19)

母親の性交への抵抗によって、また父親のबीजाの力の弱いことによって、ゆがんだ者(*vakrin*)となる。
嫉妬に苦しめられた両〔親〕、またわずかな喜び〔のみ〕をもつ両〔親〕が、嫉妬による喜びをもつもの(*īrṣyāratī*)の原因であると〔人々は〕言う。(20)

一方、ある人の睪丸が、風・火の欠陥によって破壊されると、その人は、風による性的不能者(*vātikaṣaṇḍaka*)である。
このように、〔前世の〕行為を本性とする者たちの8種の異常が特徴づけられた。(21)

¹⁰⁸CP: 「ここでは精液(*śukra*)は、精力(*indriya*)と言われる」

腹の中に、突然、胎児が入ったことの〔しるしは何か？〕 女性・男性・中性〔の胎児〕の腹の位置による特徴はどのようなものか？ また、それによって子供が〔あるものに〕似た者となる原因であると認められるものはなにか？(22)

唾液の流出、鈍重感、四肢の疲労、倦怠感と喜びのないこと、胸部の苦痛、満足感、बीजाを受けとめること。〔これらが〕母胎に、突然、胎児が入ったことのしるしである。(23)

体の左側を動かす女性、男性を求める女性、女性的な夢・飲物・食物・習慣・行動をもつ女性、〔腹の〕左側に胎児を得る女性、また、丸くない胎児をもつ女性、左〔胸から〕乳がでる女性は、まさに、女子を生む。(24)

一方、これらとは反対の特徴があれば、〔その女性は〕男子を〔生む〕。混合した特徴をもつ（女性）は、第3の性の〔子供〕を〔生む〕。
一方、胎児を孕んでいるときに、〔その〕女性のマナスが、あるものに向けられていると、〔その女性は〕そのものに似た子供を生む。(25)

胎児の4〔大〕元素は、〔それぞれ〕4種のものをもつ。
母、父から生じたもの、食物から生じたもの、アートマンによってなされたものである。〔4大元素〕全てのうちの、〔ここで述べた4種の〕全てのものが身体に存在する。(26)

それらのうち、特に力をもつものは、母と父の行為から生じるものであり、それらが、〔親子が〕似ることの原因であると判断すべきであり、
また、〔それぞれの〕種(*anūka*)¹⁰⁹に応じたサットヴァも〔その原因であると〕判断すべきである。(27)

何によって女性は、異形(*vikṛta*)の、不足あるいは余分な部分をもつ、あるいは不完全な感覚器官をもつ子供を生むのか？
アートマンは、どのようにして〔ある〕身体からほかの身体に入るのか？ また、〔アートマンは〕常にどのようなものと結びついているのか？(28)

बीजा・自己の行為・場（子宮）(*āśaya*)¹¹⁰・時間の欠陥によって、同様に母親の食物・休息の欠陥によって、汚された諸病素(*doṣa*)が、〔胎児の身体の〕組成・色・感覚器官の様々な異常をもたらす。(29)

¹⁰⁹cf. CS Śā 4.36-40.

¹¹⁰CP: 「子宮(*garbhāśaya*)」

雨季に、木片・石のかたまり・水の流れが、川の流れの中に立っている木に異変をもたらすように、まさにそのように、諸病素は、腹中に留まっている胎児に〔異変をもたらす〕。(30)

4種の極めて微細な元素をそなえ、マナスの〔ような〕速さをもつものは、〔ある〕身体から、〔他の〕身体に入る。

一方、行為を本性とすることから、その姿は、超自然の(*divya*) 目¹¹¹がなくては見ることができない。(31)

それは遍在するもの(*sarvaga*)であり、また、全身を担うもの(*sarvasārīrabhṛt*)であり、それはあらゆる行為をもつもの(*viśvakarman*)であり、また、それはあらゆる形態をもつもの(*viśvarūpa*)であり、それは意識要素(*cetanādhātu*)であり、また、感覚器官を超えたもの(*atīndriya*)であり、それは常に結び付いているもの(*nityayuj*)¹¹²であり、それは密着しているもの(*anusāya*)にほかならない。(32)

身体における、滋味(*rasa*)・自己・母・父から生ずる元素(*bhūta*)は、16種¹¹³であると知るべきである。

その〔胎児の〕アートマンにおいて、〔滋味・自己・母・父から生ずる〕4つの〔元素〕は結合しており、また同様に、アートマンは、これら4つの〔元素〕に位置している。(33)

母・父から生じた元素は、胎児においては、血と精液であると〔人々は〕言う。 精液と血が、それによって充満させられるその元素は、滋味から生じるものである。(34)

一方、行為から生じ、アートマンに結合している4つの元素、それらが胎児に入る。アートマンが、別の身体に次々に行くときには、まさに बीजाとしての性質をもつそれが行く。(35)

形相(*rūpa*)から、形相の発生がある〔ということは〕確立しているから、 行為を本性としてもつもの達にとって、マナスの〔発生は〕マナスからである。

しかし、外観(*ākṛti*)とブッディの差異が存在しているところ、そこでは、ラジャス・タマスと行為が〔差異の〕原因である。(36)

アートマンは、かの感覚器官を超えた極めて微細な形相をもつものと、分離した形相をもつものでは決してない。

¹¹¹CP: 「ヨーガ行者の目」
¹¹²CP: 「常にブッディなどに結び付いている」
¹¹³4大元素×4つのものから生じるもの=16

行為と、実に、マナス・思考(*manomati*, du.)と、また自我意識・病・病素とも〔分離した形相をもつものでは決して〕ない¹¹⁴。(37)

マナスはラジャスとタマスとに結び付いているから、知識(*jñāna*)がなければ、そこ（マナス）には全ての欠陥がある。

一方、〔アートマンの〕進行(*gati*)と活動(*pravṛtti*)との原因は、欠陥を伴うマナスと、強力な行為であると言われる。(38)

病はどこから〔来るのか〕？ これら（病気）の鎮静とは何か？ 喜びと悲しみの原因は何か？ 身体とサットヴァに生じる病(*vikāra*)は、どうして、鎮まって、再び生じることがない〔場合があるのか〕？(39)

知恵の過ち(*prajñāparādha*)、同様に、不均衡な〔感覚器官の〕対象〔と感覚器官の結合〕、第3に、転変としての時間が〔病気の〕原因である。

全ての病気の鎮静〔の原因〕も3種であり、均衡のとれた結合を得た知恵・〔感覚器官の〕対象・時間である。(40)

善い行いは喜びの原因であるといわれる。それとは異なった〔行ない〕は、悲しみに従うことに導く。

一方、身体とサットヴァ（マナス）に生じる病は、この両者の停止(*avṛtti*)によって、それ以上は存在しない。(41)

形相とサットヴァ（マナス）との存続、その始まりは述べられていない。その（始まり）は決して存在しないからである。

この両者の停止は、最高の堅固さ(*dhṛti*)と記憶(*smṛti*)とによって、また最高の思惟(*dhi*)によってなされる。(42)

以前に述べられた通りに、〔病には〕2種の拠り所（身体とサットヴァ（マナス））があるが、常に病に対処し、感覚器官を制御したものには、病はふりかからない。

もし、その（病が生じる）時に結び付いた天命(*daiva*)がない場合には。(43)

¹¹⁴31,32,33cd,35,37に見られる記述は、サーンキヤ哲学において、輪廻の主体とされる「微細身」(*sūkṣmasārīra*もしくは *liṅga*)、さらに「元素我」(*bhūtātman*)の意味に近い。ただしCSには「唯」(*tanmātra*)という語は用いられず、元素(*bhūta*)についても、ここでは、空を除いた4元素のみを問題としている。cf.SK 39-42

前の〔生に〕為されたこと、それが天命であると言われ、一方、この〔生での〕行い、それが人為(*pauruṣa*)であると経験的に知られている。

不均衡なそれ(天命と人為)が、活動(*pravṛtti*)の原因であると経験的に知られ、均衡のとれたそれこそが、止滅(*nivṛtti*)の原因であると〔経験的に知られている。〕(44)

冬の病素の蓄積を春に、夏〔の病素の蓄積を〕雨季に、雨季〔の病素の蓄積を〕秋に、速やかに正しく除去する者は、季節により生じる病を決して得ることはない。(45)

有益な食物・安息な行いを習慣としている人、考慮して行動する人、対象に執着しない人、心が平静である人、真実をもっぱらとしている人、忍耐力のある人、信頼すべき人に仕える人は、無病(*aroga*)である。(46)

幸福に結び付いた知恵・言葉・行為、従順なサットヴァ、清らかな理性、知識、苦行とヨーガに専心する人、その人には病はふりかからない。(47)

ここに詩節がある。

ここで、アグニヴェーシャの大きな内容をもつ36の質問を、尊い偉大な聖仙(アートレーヤ)が、「異なった家系(ゴートラ)」「という言葉ではじまる」シャーリーラ〔の章〕において、適切に確定した。知識の増大のために。(48)

以上が、アグニヴェーシャが作り、チャラカが改訂したシャーリーラスターナにおける、「異なった親族(ゴートラ)の」〔という言葉ではじまる〕シャーリーラの第2章である。

第3章

さてこれより、「胎児の降下」(*garbhaāvakraṇṭi*)〔についての〕シャーリーラの小さい(*khudḍikā*)¹¹⁵〔章〕を述べようと、尊いアートレーヤは言った。(1-2)

損なわれていない精液(*retas*)をもつ男性と、汚されていない母胎(*yonī*)・血・子宮(*garbhāśaya*)をもつ女性との交わりが、妊娠適時になされ、また、この両者にふさわしい交わりにおいて、子宮内部に至った精液と血が結合したものに、サットヴァ(*sattva*)との結びつきから、ジーヴァ(*jīva*)¹¹⁶が降下すると、その時、胎児が〔その結果として〕発生する。

その(胎児)は、〔習慣的な食事や行いのうち〕自分に合ったもの(*sātmya*)・〔食物の栄養素としての〕滋味(*rasa*)を享受することによって、また、正しい手当てがなされると、病を得ることなく成長する。

そして、時が満ちると、全ての感覚器官をそなえ、満ち足りた身体をもち、優れた体力・体色・サットヴァ・堅固さを完全にそなえたものが、これら〔以上述べた〕諸々のもの¹¹⁷の総合(*samudaya*)から、楽に生まれる。

また、この胎児は、母親から生じるものであり、父親から生じるものであり、アートマンから生じるものであり、自分に合ったもの(*sātmya*)から生じるものであり、滋味から生じるものである。

また、実に、サットヴァは、自然に発生するもの(*aupapādika*)¹¹⁸であると、実に、尊いアートレーヤは言った。(3)

「そうではない」と、バラドヴァージャは〔言った〕。何が〔胎児が生ずる〕原因なのか？ 実に、母親が、父親が、アートマンが、自分に合ったもの(*sātmya*)が、飲み物・食べ物・噛むもの・嘗めるものの享受が、胎児を生むのではなく、また、他の世界(*paraloka*)から、サットヴァがやってきて、胎児に降下するのでもない。(4-(1))

もし、実に、母親と父親が、胎児を生じさせるのだとすれば、息子を望むより多くの女性と男性、そのような人々すべてが息子の誕生を目的として交わることになれば、まさしく息子を生むであろう。

¹¹⁵*kṣudraka*のブラークリット形*khudḍikā*(第27節では*khudḍikā*)が用いられている。CSでは他に、Sū 第9章の章名(*khudḍākacatuṣpāda*)および、油剤の名称の1つ(*khudḍākapadmaka taila* Ci 29.115)に、*kṣudraka*のブラークリット形が用いられているが、これら以外の部分ではすべて*kṣudraka*または*kṣudra*という語形である。

¹¹⁶CPによれば、ここでサットヴァはマナス、ジーヴァは意識要素としてのアートマンを意味し、本来、すべてに遍満し運動をもたないアートマンが、運動をもつサットヴァ(=マナス)と結びつくことによって、降下〔という運動を〕するのであると解釈している。

¹¹⁷CP:「以上に述べられた、精液・血・ジーヴァ・サットヴァ・自分に合ったもの(*sātmya*)・滋味・正しい手当て」

¹¹⁸CP:「アートマンにとっての、他の身体との結合を生じさせるもの」(*ātmanah śarīrāntara-sambandhopapādakam*)

あるいは、娘を望む〔人々は〕娘を〔生むであろう〕。

また、子供を望んでいるどのような女性、あるいはどのような男性も、子供をもたないということはなく、また嘆くこともないであろう。(4-(2))

また、アートマンがアートマンを生むのではない。

もし、実に、アートマンが、アートマンを生むのだとすれば、〔すでに〕生まれている〔アートマン〕がアートマンを生むのか、あるいは、〔まだ〕生まれていない〔アートマン〕が、アートマンを生むのかということになってしまうが、このどちらも正しくない。

〔すでに〕生まれている〔アートマンがアートマンを〕生むことはない。〔すでに〕存在しているからである。また、〔まだ〕生まれていない〔アートマンがアートマンを〕生むことはない。存在していないからである。このことから、どちらも成り立たない。

このことは、このままにしておこう。もし、このアートマンが、アートマンを生むことが出来るとするならば、どうして、〔アートマンは〕望ましい母胎に、自らを支配する(*vaśin*)、運動を阻害されていない、望みの姿をもつ、テージャス・体力・速さ・体色・サットヴァ・堅固さを備えた、不老の、無病の、不死のものを生まないのか？ アートマンは、このような種の、あるいは、さらに優れたものを望むものであるからである。(4-(3))

この胎児は、自分に合ったもの(*sātmya*)から生まれるものではない。

もし自分に合ったものから生まれるものであるのならば、そうであれば、自分に合ったものを習慣的に摂る人々には決まって子供があることになり、自分に合わないものを習慣的に摂る人々には決まって子供はないことになる。しかし、この両者は両様に見られる。(4-(4))

また、この胎児は滋味(*rasa*)から生まれるものでもない。

もし滋味から生まれるものであるとするならば、女性、男性のうちで、子供がいないものはないことになるからである。というのは、滋味を摂らない人、そのような人は、だれ一人としていないからである。

もし、優れた滋味を〔そなえた食物を〕摂る人々に〔のみ〕、胎児が生じるという意味であるとしても、そうであっても、山羊・羊・羚羊・孔雀・牛乳・凝乳(*dadhi*)・ギー(*ghṛta*)・蜂蜜・胡麻・岩塩・さとうきび・小豆・シャーリ米を摂る人々には必ず子供がいることになり、ひえ(*śyāmāka*)・ヴァラカ米(*varaka*=*baraka*)・スズメノコビエの変種(*uddālaka*)・スズメノコビエ(*koradūṣka*)・大根の一種(*kandamūla*)を食べる人々には必ず子供がないことになる。しかしこの両者は両様に見られる。(4-(5))

実に、サットヴァが、他の世界(*paraloka*)からやってきて、胎児に降下するのでもない。もし、〔サットヴァが〕この〔胎児〕に降下するのだとすると、この〔胎児〕の前の身体に属するもので、知られていないもの、あるいは聞かれていないもの、あるいは見られていないものは何もないことになる。

しかし、この〔胎児〕は、それ（前の身体に属すること）を何も覚えてはいない。(4-(6))

以上のことから、私はこのように言う。

この胎児は、母親から生じるものではなく、父親から生じるものではなく、アートマンから生じるものではなく、自分に合ったものから生じるものではなく、ラサから生じるものではない。また、サットヴァは、自然に生じるもの(*aupapāduka*)ではない。実に〔このように〕、バラドヴァージャは言った。(4)

「そうではない」と、尊いアートレーヤは〔言った。〕

これら全ての存在物の総合から、〔その結果として〕胎児は発生する。(5)

この胎児は、母親から生じるものである。

母親がいなければ、胎児の出生はなく、また胎生のものの誕生もないからである。

実に、この胎児の母親から生じるもの、また、この〔胎児〕の母親から生じるものから〔さらにまた〕生じるもの、それらを述べよう。

すなわち、皮膚(*tvac*)・血(*lohita*)・肉(*māṃsa*)・脂肪(*medas*)・臍(*nābhi*)・心臓(*hṛdaya*)・肺(*klo-man*)・肝(*yakṛt*)・脾(*plīhan*)・腎(*vṛkkau*, *du.*)・膀胱(*basti*)・便臓器(*purīṣādhāna*)・未消化物臓器(*āmāśaya*)・消化物臓器(*pakvāśaya*)・上腸(*uttaraguda*)・下腸(*adharaguda*)・小腸(*kṣudrāntṛa*)・大腸(*sthūlāntṛa*)・網状膜（大網）(*vapā*)・網状膜（小網）(*vapāvahana*)である。(6)

この胎児は、父親から生じるものである。

父親がいなければ、胎児の出生はなく、また胎生のものの誕生もないからである。

実に、この胎児の父親から生じるもの、また、この〔胎児の〕父親から生じるものから〔さらにまた〕生じるもの、それらを述べよう。

すなわち、髪(*keśa*)・髭(*śmaśru*)・爪(*nakha*)・体毛(*loma*)・歯(*danta*)・骨(*asthi*)・シラー管(*sirā*)・臍(*snāyu*)・ダマニー管(*dhamanī*)、精液(*śukra*)である。〔以上が〕父親から生じるものである。(7)

この胎児は、アートマンから生じるものである。

実に、胎児のアートマンであり、内なるアートマン(*antarātman*)であるもの、それを〔人は〕「ジーヴァ」と名付け、永遠のもの、無病のもの、不老のもの、不死のもの、不滅のもの、分割されないもの、分離されないもの、刺激されないもの、あらゆる形態をもつもの、あらゆる行為をもつもの、未開展のもの、始まりをもたないもの、終わりのないもの、不壊のもの〔であると人は見る〕。

その〔アートマン〕は、子宮(*garbhāśaya*)に入り、精液と血との結合に至り、胎児として、自分で自分を(*ātmanā ātmānam*)生じさせる。なぜなら、胎児について、アートマン（自己）と呼ばれる〔ことがある〕からである。また、そのアートマンには、始まりがないことから、誕生はない。

このことから、その生まれた〔アートマン〕が、まさに〔まだ〕生まれていない胎児を生じさせることはない。

なぜなら、その生まれていない〔アートマン〕が、生まれていない胎児を生じさせるからである。その同じ胎児が、時を隔てて、子供・青年・壮年の状態となる。

その〔胎児〕が、それぞれの状態において存在する、そのそれぞれの状態において、生まれたものとなるのである。

一方、この〔胎児〕にとって、〔存在〕以前〔の状態〕であるところ、そこにおいては〔この胎児は〕、生まれるであろうものである。このことから、その同じ〔胎児〕は、同時に、〔すでに〕生まれているものであり、また、〔まだ〕生まれていないものでもあるのである。

また、この2つのこと（すでに生まれていることとまだ生まれていないこと）が〔ともに〕成立している時点では、〔すでに〕生まれているそのものが、〔すでに〕生まれた状態と、〔やがて〕生まれるであろう状態とを〔ともに〕生じさせるのである。

また、その同じ〔まだ〕生まれていないものが、未来の別の状態においては、自分で自分を生じさせるのである。

なぜなら、存在物にとっては、まさに別の状態に行くことこそが、それぞれの状態の年齢における、その時その時の「誕生」(janma)であると言われるからである。

存在物にとっては、精液と血とジーヴァが結合する以前には、胎児であることはない。しかし、その結合によって〔胎児であることが〕あるように。

また、その存在している（人）にとっては、子供〔ができる〕以前には父であることはない。しかし、その子供〔ができること〕によって、〔父であることが〕あるように。

そのように、その存在する胎児は、それぞれの状態において、生まれているとも生まれていないとも言われるのである。(8)

実に、胎児にとって、母親にとって、父親にとって、アートマンにとって、あらゆる状態における望み通りの行いというものは存在しない。

それら（胎児、母親、父親、アートマン）は、あることは、自身の力によって為し、〔また〕あることは、カルマの力によって〔為すのである〕。また、ある場合には、これらにとって、行為手段(karṇa)としての力があり、ある場合にはない。

サットヴァをはじめとする行為手段（器官）が完全であるところ、そこでは、力に応じて、望み通りの行いがある。そうでなければその逆である。

また、胎児を生むことにおいて、アートマンは、行為手段の欠陥によって、行為手段のないものになるのではない。

アートマンを知る人々によって、望ましい母胎、独立性(aiśvarya)、解脱(mokṣa)は、アートマンに依存しているものであると、経験的に知られている。

なぜならば、楽と苦とを作る者は、〔アートマンとは〕異なったものではないからである。

また、生まれつつある胎児は、〔アートマンとは〕異なったものからは生まれない。種子でないものから、芽がでることはない〔ように〕。(9)

一方、実に、この胎児のアートマンから生じるもの、この〔胎児の〕アートマンから生じるものから〔さらにまた〕生じるもの、これらを述べよう。

すなわち、それぞれの母胎における発生(utpatti)、生命(āyus)、自己に関する知識(ātmaññāna)、マナス、感覚器官(indriya)、呼吸・吸気(prāṇāpāna)、促進(prerāṇa)、保持(dhāraṇa)、形態(ākṛti)・声・体色の違い、楽と苦、欲求と嫌悪、意識(cetanā)、堅持(dhṛti)、理性(buddhi)、記憶(smṛti)、自我意識(ahaṅkāra)、努力(prayatna)、以上がアートマンから生じるものである。(10)

この胎児は、自分に合ったもの(sātmya)から生まれるものである。

なぜなら、自分に合わないものを習慣とすること以外には、男女の不妊はなく、あるいはまた、胎児に関しても、望ましくない状態はないからである。

自分に合わないものを習慣としている女性・男性の身体に、激発した3つの病素(doṣa)が拡がっていても、精液・血・子宮が障害を受けるに至らなければ、その限りにおいては、胎児出産のための能力はある。

しかし、自分に合ったものを習慣としている、障害を受けていない精液・血・子宮を持つ女性・男性が、妊娠適時に交わっても、ジーヴァが降下することがなければ、胎児が現れてくることはない。

なぜなら、この胎児は、単に自分に合ったものから生じるだけのものではなく、ここ（アーユルヴェーダ）では、〔様々なものの〕集合(samudaya)が、〔胎児の発生の〕原因であると言われるからである。

実に、この胎児の自分に合ったものから生じるもの、また、この〔胎児の〕自分に合ったものから生じるものから〔さらにまた〕生じるもの、それを述べよう。

すなわち、無病(ārogya)、無気力でないこと(anālasya)、食欲でないこと(alolupatva)、感覚器官が清浄であること、声・体色・ピージャが完全であること、喜びが大きいこと。

以上が自分に合ったものから生じるものである。(11)

また、この胎児は、滋味(rasa)から生じるものである。

なぜなら、滋味がなければ、母親の生命の持続(prāṇayātrā)もないであろうし、まして、胎児の誕生は〔ないであろう〕からである。

また、不正確に摂取される滋味は、胎児を発生させない。

また単に、滋味の正しい摂取のみによって、胎児の発生があるのではない。ここ（アーユルヴェーダ）では、〔様々なものの〕集合が、〔胎児の発生の〕原因であると言われる〔からである〕。

さて実に、この胎児の滋味から生じるもの、また、この滋味から生じるものから〔さらにまた〕生じ

るもの、それらを述べよう。

すなわち、身体の発生 (*abhinirvṛtti*)・成長 (*abhiṛddhi*)、生命の継続 (*prāṇānubandha*)、満足 (*tr̥pti*)、肥えること (*puṣṭi*)、力 (*utsāha*)。

以上が、滋味から生じるものである。(12)

サットヴァは実に、自然に発生するもの (*aupapāduka*) である。

ジーヴァに接し、身体と結び付くもの。それが離れて行くと、その〔人の〕性向 (*śīla*) が離れ、嗜好 (*bhakti*)¹¹⁹は変化させられ、全ての感覚器官は損なわれ、体力は失われ、病気が増大する、そのようなもの。それが欠けている者は、生命 (*prāṇa*) をなくす、そのようなもの。諸感覚器官を掌握するものであり、「マナス」と呼ばれるもの¹²⁰。それは、3種類であると言われる。

清浄なもの (*śuddha*)、激質的なもの (*rājasa*)、翳質的なもの (*tāmasa*) である。

実に、この〔胎児〕のマナスは、それ (サットヴァ) が優勢であるものであり、それとの結合 (*saṃprayoga*) (マナスとサットヴァとの結合) は、二度目の生において〔も〕、存在する。

そして、もし、清浄な (*śuddha*) それ (サットヴァ) と結合されるならば、その時には、〔その人は〕過ぎ去った生をも記憶している。

なぜなら、その〔サットヴァの〕継続していることに関して、人が、「〔前〕生の記憶をもつもの」 (*jātismara*) であると言われる、まさにその〔サットヴァ〕の、アートマンの記憶についての認識は、マナスの連続 (*anubandha*) に依存するからである。

実に、この胎児のサットヴァから生じるもの、サットヴァから生じるものから〔さらにまた〕生じるもの、それらを述べよう。

すなわち、嗜好 (*bhakti*)、性向 (*śīla*)、清浄さ (*śauca*)、嫌悪 (*dveṣa*)、記憶 (*smṛti*)、迷妄 (*moha*)、放棄 (*tyāga*)、妬み (*mātsarya*)、勇気 (*śaurya*)、恐れ (*bhaya*)、怒り (*krodha*)、倦怠 (*tandrā*)、力 (*utsāha*)、鋭さ (*taikṣṇya*)、穏やかさ (*mārdava*)、威厳 (*gāmbhīrya*)、落ち着きのなさ (*anavasthitatva*)。

以上、これらをはじめとするものと、その他の、サットヴァの分類を主題として、後に述べるであろう、サットヴァの変異 (*vikāra*) とである。

実に、様々な種類のサットヴァがある。

これら全て〔のサットヴァ〕は、一人の人のなかに、存在する。しかし、同時に存在するのではない。一方、〔サットヴァの〕主要な性質については、1つであると、(人は) 言う。(13)

このように、この胎児は、これら様々な種類の胎児の原因であるものの集合から、〔その結果として〕発生する。

たとえば、重なり合った部屋 (*kūṭāgāra*) は、様々な物体の集合から〔できるものであり〕、

あるいはたとえば、車 (*ratha*) は、様々な車の部分が集合して〔できるものである〕。

このことから、次のように、わたしは述べたのである。

「この胎児は、母親から生じるものであり、父親から生じるものであり、アートマンから生じるものであり、自分に合ったものから生じるものであり、ラサから生じるものである。また、サットヴァは、自然に生じるもの (*aupapāduka*) である。」と。このように尊いアートレーヤは言った。(14)

バラドヴァージャが言った。

もし、この胎児は、これら様々な種類の、胎児の原因であるものの集合から、〔その結果として〕発生するのならば、この〔胎児〕は、どのようにして、構成されるのか？

またもし、構成されるとすれば、なぜ、集合を起源とする胎児が、人間の形態をもつものとして生じ、そして、人間は、人間を起源とするものであると言われるのか？

これに関して、もしそうであるならば、人間は、人間を起源とするものであるから、まさにそのことから、人間の形態をもつものとして生じるのである。牛は、牛を起源とするものであるように。また、馬は、馬を起源とするものであるように。このように〔答えるとする〕ならば、〔そうであれば〕前に述べられた、〔人間は〕集合よりなるものであるということ、それは正しくない。

しかし、もし、人間は、人間を起源とするものであるとするならば、なぜ、愚かな・盲目の・背中の曲がった・口のきけない・小さな・鼻声の・欠けた身体をもつ・狂気の・クシュタ¹²¹の (*kuṣṭhin*)・キラーサ¹²²の (*kilāsin*) の者から生れたものたちは、親と同じような者とはならないのか？

さて、この場合、以下のような見解があるとする。

このアートマンが、まさに自分の目によって色形を知り、聴覚器官によって音を、嗅覚器官によって匂いを、味覚器官によって味を、触覚によって感触を〔知り〕、理性 (*buddhā*) によって知るべきものを〔知る〕というように、このような原因によって、愚かな者等から生まれた者たちは、親と同じような者とはならないのであると。

この〔見解の〕場合も、主張の放棄〔という論理上の〕欠陥 (*pratiṣṭhānidoṣa*)¹²³ となってしまう。なぜなら、このように言うと、アートマンは、諸感覚器官が存在するところでは、知る主体 (*jñā*) であり、存在しないところでは、知る主体ではないものということになってしまう。

その場合、知る主体であることと、知る主体でないものであることの、この両方が可能となり、そしてアートマンは、変異 (*vikāra*) を伴ったものとなってしまうからである。

¹²¹皮膚病の一種

¹²²皮膚に白斑を生じる皮膚病の一種

¹²³CP: 「自己の実例のなかに反喩を認めること」、CS Vi 8.61: 「主張の放棄 (*pratiṣṭhānā*) と言われるもの、それは、先に主張された見解を、質問された側が、捨てることである。たとえば、先に、「プルシャは常住である」と主張しておいて、〔これに関して〕質問された側が、「〔プルシャは〕無常である」と述べるような場合である。」 cf. NyāS 5.2.2

¹¹⁹CP: 「好み」 (*icchā*)

¹²⁰CS Sū 8.4

またもし、視覚などによって、アートマンが対象を知るのであるとするならば、感覚器官をもたないものは、視覚などがないことによって、知る主体ではないものであり、知る主体でないものであることによって、原因(*kāraṇa*)ではなく、また、原因でないことによって、アートマンではないということになってしまう¹²⁴。

このような言説は、言葉だけのものであり、意味のないものであろう。と、バラドヴァージャは言った。(15)

アートレーヤは言った。

この(以下の)ことは以前に¹²⁵認められた。

サットヴァは、ジーヴァを、触をもつ身体に結び付ける。

一方、あるものから、集合を起源とするこの胎児が、人間の形態をもつものとして生じ、[そして]人間は、人間を起源とするものであると言われる、そのあるものについて述べよう。

生類の母胎は、4種である。胎盤、卵、湿気、芽である。

実に、これらの母胎は、4種類ではあっても、一つ一つの母胎は、数えきれない差異をもつものである。生類の外観の相違は、数えきれないものであるからである。

このうち、胎生と、卵生の生物のうち、これらの胎児をつくる[原因となる]ものは、それぞれの母胎に達する。[そして]それぞれの母胎において、それぞれの色形をもつものとなるのである。

例えば、それぞれの蜜蠟[で作られた]型に流し込まれる、金・銀・銅・錫・鉛、それらがもし、人間の鋳型に達すると、そのときには、人間の形態をもつものとして生じるように。そのように、集合を起源とするその胎児は、人間の形態をもつものとして生じるのである。

そして、人間は、人間を起源とするものであると言われるのである。その母胎であることによって。(16)

また、このように言われた。

もし人間は、人間を起源とするものであるならば、なぜ、愚かな者等から生れたものたちは、親と同じような者とはならないのか? と。

これに関して、[次のように]言われる。

ビージャにおいて、それぞれの身体部分の[それぞれに対応する]ビージャの部分が、障害されると、そのそれぞれの身体部分の変異(*vikṛti*)が生じる。また、障害されないことによって、[変異は]生じない。このことから、ここでは、両方の可能性があるのである。

また、全ての感覚器官は、アートマンから生じるものである。これら[諸感覚器官]の、存在・非存在の原因は、天命(*daiva*)である。

このことから、愚かな者等から生まれた者たちは、必ずしも親と似たものとなるわけではないのであ

る。(17)

また、アートマンは、諸感覚器官が存在していれば知る主体であり、存在していなければ、知る主体でないものであるわけではない。

なぜなら、アートマンは決してサットヴァ(マナス)をもたないものではなく、個々の知識は、個々のサットヴァ(マナス)によって、知覚されるからである。(18)

ここに(シュローカが)ある。行為者にとって、感覚器官が存在しないことによって、行なうべきことに関する知識は生じない。

ある条件によって存在しているその行為は、そのある条件がなければ存在しない。(19)

[たとえば]壺をつくる陶工は、[作り方を]知っていても、粘土が存在しないことによって、[行為を]発動しない[ように]。

また、この大いなるアートマンを知る力をもつ、最高のアートマン(*adhyātman*)が、聞かれねばならない。(20)

また、感覚器官を制御し、動きやすいマナスを制御して、

アートマンを知る者は、最高のアートマンに到達して、自身の知識において、確固としたものとなる。(21)

あらゆるところに置かれた知識をもつ者は、あらゆるものごとを見る。

バラドヴァージャよ。これと、他の[問いの]解決を理解しなさい。(22)

感覚器官と言葉と動きが止まっている眠っている人が、夢を見た時、

[感覚器官の]対象と苦・楽を知覚する。このことから、[アートマンは]知る主体でないものではないと教えられている。(23)

アートマンについての知識がなければ、1つの知識も決して発動しない。

なぜなら、1つの存在がなければ、原因がないということもないからである。(24)

これによって、知る主体、プラクリティ、アートマン、観察者、原因、

この全てが吟味された。バラドヴァージャよ、疑いをなくしなさい。(25)

ここに2つの詩節がある。

胎児の、発生、成長、誕生の原因。

プナルヴァス(アートレーヤ)の見解と、バラドヴァージャの見解。(26)

主張と反論、明白なアートマンについての結論。

胎児の降下に関しての小さい[章]、それが明示された。(27)

以上が、アグニヴェーシャが作ったタントラの、チャラカが改訂したシャーリーラスターナにおける、「胎児の降下」[についての]シャーリーラの小さい[章]という第3章である。

¹²⁴cf. CS Śā 1.3,4,39-52,54-58.

¹²⁵CS Śā 3.13

第4章

さてこれより、「胎児の降下」(*garbhāvākṛānti*) [についての] シャーリーラスターナの、大きな[章]を述べようと、尊いアートレーヤは言った。(1-2)

あるものから胎児が生じること。また、「胎児」と呼ばれるあるもの。また、胎児は、あるものの変異(*vikāra*)であること。また、あるものによって、[母親の]腹中で[胎児が]次第に発生すること。また、この[胎児の]成長の原因であるもの。また、あるものからこの[胎児の]誕生があること。また、あるものによって腹中で生まれようとしている[胎児]が死に至ること。そして、あるものによって完全には破滅してはいない[胎児]が、異常に至ること。その[それぞれの]あるものについて説明しよう。(3)

母親からのもの、父親からのもの、アートマンからのもの、自分に合ったもの(*sātmnya*)からのもの、滋味(*rasa*)からのもの、サットヴァ(マナス)からのもの、これらのものが集合したものから、胎児は生じる。

この[胎児の]それぞれの部分、それぞれから生じたものから[さらにまた]生じるもの、これらを分けて、母親から生じたもの等の部分については、それぞれ別々に以前に¹²⁶述べられた。(4)

一方、実に、腹の中にある、精液・血・ジーヴァ(*jīva*)の結合について、「胎児」と呼ばれる。(5)

一方、実に、胎児は、空・風・火・水・地の変異(*vikāra*)であり、精神性(*cetanā*)の拠り所であるものである。

このように、この道理(*yukti*)によって、5大元素の変異の集合よりなるものが、胎児であり、精神性の拠り所であるものである。

なぜなら、この[胎児]にとっての、これ(精神性)は、第6番目の要素(*dhātu*)であると言われる¹²⁷からである。(6)

さて、あるものによって、[母親の]腹中で[胎児が]次第に、[結果として]発生する、そのあるものについて述べよう。

古い[月経の]血がなくなり、そして、新しい状態(月経周期)にあり、清浄に沐浴し、損なわれていないない母胎・血・子宮を持つ女性を、妊娠適時の女性(*ṛtumati*)であると言う。

もし、このような女性と、損なわれていないピージャを持つ男性が交わると、その時には、興奮に

第4章

よって駆り立てられた、この男性の最後[の段階]の身体要素であり、精液であるものが、それぞれの身体[各]部分から生じる¹²⁸。

このように、興奮状態となったアートマンによって駆り立てられ、また、[アートマンによって]支配された、ピージャの形をとる[身体]要素が、男性の身体から出て、しかるべき道筋を通過して、子宮に入り、血と結合する。(7)

ここで、最初に、精神性要素(*cetanādhātu*)であり、サットヴァ(マナス)を器官としてもつものが、性質(*guṇa*)の把握のために現れる。

それは、原因(*hetu*)、質料因(*kāraṇa*)、期成因(*nimitta*)、不滅のもの(*akṣara*)、行為者(*kartr*)、思考するもの(*mantr*)、知るもの(*veditr*)、知覚するもの(*bodhtr*)、見るもの(*draṣṭr*)、保持するもの(*dhāttr*)、ブラフマン(*brahman*)、あらゆる行為をもつもの(*viśvakarman*)、あらゆる形態をもつもの(*viśvarūpa*)、プルシャ(*puruṣa*)、起源(*prabhava*)、不変のもの(*avyaya*)、永遠のもの(*nitya*)、性質をもつもの(*guṇin*)、把握(*grahaṇa*)、主要なもの(*pradhāna*)、未開展のもの(*avyakta*)、ジーヴァ(*jīva*)、知る主体(*jñā*)、ブドガラ(*pudgala*)、精神性をもつもの(*cetanāvat*)、遍在のもの(*vibhu*)、元素のアートマン(*bhūtātman*)、感官のアートマン(*indriyātman*)、内なるアートマン(*antarātman*)である。このものは、性質を得る際に、他の性質よりも先に、空を受け取る。

あたかも、世界の破滅の終わり(*pralayātyaya*)に、存在物を創造しようとする、不滅のものであり、サットヴァ(マナス)を質料因とする(*sattvopādāna*)アートマンが、まずはじめに空を創造し、そして次第に、より明瞭な性質(*vyaktataraguṇa*)をもつ風をはじめとする4つの要素(元素)(*dhātu*)を[創造する]ように。

そのように、身体を把握する時にもまた、現われつつあるものが、まずはじめに、まさに空を受け取る。そして次第により明瞭な性質をもつ風をはじめとする4つの要素(元素)を[受け取る]。しかしまた、実に、このすべての性質を得ることは、わずかな時間によるものである。(8)

その、すべての性質をもち、胎児となったものは、最初の月においては、凝結したもの(*saṃmūrcchita*)、すべての要素が[まだ]明らかではないもの(*sarvadhātukaluṣīkṛtaḥ*)、粘液であるもの(*kheṭabhūta*)、明瞭ではない形態をもつもの(*avyaktavigraha*)、[すでに]存在する身体部分と[まだ]存在しない部分とをもつもの(*sadasadbhūtāṅgāvayava*)である。(9)

¹²⁸ 身体要素(*dhātu*)は、滋味(*rasa*)、血(*rakta*)、肉(*māṃsa*)、脂肪(*medas*)、骨(*asthi*)、髄(*majjā*)、精液(*śukra*)の7種類であり、各要素はこの順番で、先のものから後のものへと次第に変化していくとされている。精液(*śukra*)は、7要素の最後の段階のものであり、身体の7要素すべてが、つながりをもっているという意味においては、この部分の本文の通り「それぞれの身体各部分から生じる」ものである。cf.Meulenbeld 1974 p.470f. cf.CS Ci 2.4.46: *sarvatrānugataṃ dehe śukraṃ*...

¹²⁶ CS Śā 3.6-7,10-11,12-13.

¹²⁷ CS Sū 25.15; CS Śā 1.16; 2.32; 5.4; 6.4.

2 か月目には、丸い塊(*piṇḍa*)である、ガナ(*ghana*)、あるいはペーシー(*peśī*)、あるいはアルブダ(*arbuda*)となる。

このうち、ガナは男性、ペーシーは女性、アルブダは中性(*napuṃsaka*)である。(10)

3 か月目には、すべての感覚器官と、すべての身体部分とが同時に発生する。(11)

これに関して、この〔胎児の〕どの身体部分が、母親から生じる部分等であるかについては、以前に¹²⁹、分けて、適切に述べられた。

一方、今、大元素の変異による分類によって、この〔胎児〕のその同じ身体部分についてと、他〔の身体部分〕について、別の言い替えによって説明しよう。

この〔胎児の〕母親から生じたもの等も、まさに大元素の変異である。

このうち、この〔胎児の〕空(*ākāśa*)の性質を持つものは、音声(*śabda*)、聴覚器官(*śrotra*)、軽さ(*lāghava*)、微小さ(*saukṣmya*)、識別〔能力〕(*viveka*)であり、

風(*vāyu*)の性質を持つものは、触覚(*sparsa*)、触覚器官(*sparsana*)、荒さ(*rauṣya*)、動作(*preraṇa*)、〔身体〕要素を形成すること(*dhātuvyūhana*)、身体の活動(*ceṣṭā*)であり、

火(*agni*)の性質を持つものは、色形(*rūpa*)、視覚器官(*darśana*)、光(*prakāśa*)、消化(*pakti*)、熱(*auṣṇya*)であり、

水(*ap*)の性質を持つものは、滋味(*rasa*)、味覚器官(*rasana*)、冷たさ(*śaitya*)、柔らかさ(*mārdava*)、滑らかさ(*sneha*)、潤い(*kleda*)であり、

地(*pṛthivī*)の性質を持つものは、香り(*gandha*)、嗅覚器官(*ghrāṇa*)、重さ(*gaurava*)、安定性(*sthairya*)、物質的形態(*mūrti*)である。(12)

このように、この人間(*puruṣa*)は、世界に相応したもの(*lokasaṃmita*)である。なぜなら、世界において物質的形態をもつ(*mūrtimat*)存在の差異があるように、人間においても同様である。〔また、〕人間においてそうであるように、世界においても同様であるからと、このように賢者たちは見ようとする。(13)

このように、この〔胎児のすべての〕感覚器官と身体部分とは、同時に発生する¹³⁰。この〔胎児の〕出生の後に生じるところのものを除いて。

すなわち、歯、性徴(*vyañjana*)¹³¹、性的器官(*vyaktibhāva*)¹³²、また同様に、〔出生の〕後に、そな

わるもの¹³³である。

これらは正常なもの(*prakṛti*)であり、また、これと異なったものは異常なもの(*vikṛti*)¹³⁴である。実に、この胎児において、あるものは生まれつきあるもの¹³⁵であり、またあるものは生まれつきあるものではないもの¹³⁶である。

その〔胎児〕の、まさに身体部分として完成したもの、それらは実に、女性のしるし、あるいは男性のしるし、あるいは中性のしるしをそなえたものである。

このうち、女性と男性の差異であるものは、本質によるもの(*pradhānasamśraya*)¹³⁷と、性質によるもの(*guṇasamśraya*)とであり、それらのもののうちの優勢であるもの、それによって、〔この胎児は〕その(男性・女性の)うちのどれかひとつのもの〔となる〕。

すなわち、弱いこと(*klaibya*)、臆病であること(*bhīrutva*)、明晰でないこと(*vaiśāradya*)、迷妄(*moha*)、不安定であること(*anavasthāna*)¹³⁸、下部が重いこと(*adhogurutva*)、忍耐強くないこと(*asahana*)、弛緩(*śaithilya*)、脆弱(*mārdava*)、子宮〔となる〕ピージャの部分をもっていること、また同様に、〔出生の〕後に、そなわるものは、女性をつくるものであり、この反対であるものは、男性をつくるものであり、この両者の部分をもつ〔身体〕部分は、中性をつくるものである。(14)

その〔胎児の〕感覚器官が完成するその時、まさにその時に、チェータス(*cetas*)に、知覚(*vedanā*)が、定着する。このことから、その時、胎児は動く。

そして、他の生で経験された、あるものを欲する。その〔状態を〕長老達は、「2つの心臓をもつ状態」(*dvaiḥṛdayya*)¹³⁹であるという。

また、母親から生じたものである¹⁴⁰、この〔胎児の〕心臓(*hṛdaya*)は、母親の心臓と、滋味(*rasa*)を運ぶ導管によって、繋がれている。このことから、この〔胎児と母親の〕両者の欲望(*bhakti*)¹⁴¹は、それら〔の導管〕を通じて、共に動く。

また、まさにこの原因を熟慮する人々は、2つの心臓をもつ状態の胎児を、ないがしろにしようとはしない。

なぜなら、ないがしろにしていれば、この〔胎児の〕破滅、あるいは異常が見られるからである。

¹³³CP:「*buddhi*など」

¹³⁴CP:「歯をとまって生まれるものなど」

¹³⁵CP:「手足など」

¹³⁶CP:「歯など」

¹³⁷CP:「*ātmāsamśraya*」

¹³⁸CP:「弱いことから不安定であることまでは本質によるもの(*pradhānasamśraya*)であり、その他は性質によるもの(*guṇasamśraya*)」

¹³⁹cf. SS Śā 3.18:「*dvihṛdaya*」.

¹⁴⁰cf. CS Śā 3.6.

¹⁴¹CP:「*icchā*」.

¹²⁹CS Śā 3.6-7,10-13.

¹³⁰cf. CS Śā 6.21.

¹³¹CP:「髭、乳房など」

¹³²CP:「精液、月経があらわれること」

この時、母親は、胎児と共に、どのようなものごとに関しても、同一の結合に安住しているものである。

このことから、よい人々は、妊婦を、好みのものと有益なものによって、特に、世話をするのである。(15)

その〔女性の〕、胎児を身ごもっていることと、2つのフリダヤをもつ状態とのしるしを、認識するために、まとめて示そう。

なぜなら、この知識があれば、〔それにふさわしい〕世話ができるからであり、また、知識は、しるしによって〔得られるもの〕だからである。このことから、しるしの教示が望まれるのである。

すなわち、月経(*ārtava*)が見られなくなること、口からの〔唾液の〕流出、食物への欲求がなくなること、吐き気(*chardi*)、食欲がないこと、酸味のものを欲求すること、特に、様々なものに欲求を向けること、身体が重くなること、両目の疲れ、両胸から乳が出ること、両唇と両乳首が過度に黒いこと、両足のわずかなむくみ、胸から臍へ、すじ(*lomarāji*)があらわれること、母胎(腹部)の拡張。以上が、胎児が〔母胎中で〕過ごしているときの特徴である。(16)

その〔妊婦〕が欲するそれぞれのもの、そのそれぞれのものを、この〔妊婦〕に与えるべきである。胎児に障害をおよぼすもの以外は。(17)

一方、これら〔以下の〕ものが、胎児に障害をおよぼすものである。

すなわち、過度に重く・熱く・刺激のあるすべてのもの、激しい動作である。

また、長老たちは、これら以外のことも示している。

〔すなわち〕神格・羅刹(*rakṣas*)・〔それらの〕随従者から守るために、赤い着物を身につけるべきではないこと。酩酊させる飲み物を飲むべきではないこと。乗り物に乗るべきではないのと。肉を食べるべきではないこと。全感覚器官にとって良くないものを遠ざけるべきであること。

また、女性たちは、この他のことも知るべきである。(18)

一方、実に、望みが強いものであるならば、好ましくない欲求であっても、その妊婦のために、好ましいものと一緒にして与えるべきである。〔その〕望みを取り除くために。

なぜなら、望みを抑えることによって激発した風が、身体内を動いて、形成されつつある胎児の、破滅、あるいは奇形(*vairūpya*)をもたらすことがあるからである。(19)

4か月目には、胎児は安定性を得る。

そのために、この時期には、妊婦は特に身体がより重くなる。(20)

5か月目には、胎児の肉と血の増加は、他の月よりも多くなる。

そのために、この時期には、妊婦は特に痩せる。(21)

6か月目には、胎児の力と〔体の〕色の増加が、他の月よりも多くなる。

そのために、この時期には、妊婦は、力と〔体の〕色を特に消耗する。(22)

7か月目には、胎児はすべてのもの¹⁴²で、充満される。

そのために、この時期には、妊婦はすべての点で最も疲労する。(23)

8か月目には、胎児は母親から、また、母親は胎児から、滋味(*rasa*)を運ぶ導管¹⁴³によって、たびたびオージャス(*ojas*)¹⁴⁴を互いに受け取る。胎児が充足していないからである。

そのために、この時期には、妊婦はたびたび喜びに満たされ、またたびたび疲労する。胎児も同様である。

そのために、この時期の胎児の誕生は、死を伴うものである。オージャスが、不安定であるからである。

このことを考慮して、よい人々は、8か月目を数えられるべきではないと言う¹⁴⁵。(24)

この時期を1日でも過ぎると、9か月目となり、10か月目までは、出産の時期であると言われる。この間が出産の時期であり、その後の胎児の腹中での滞留は、異常である。(25)

このような経過によって、〔胎児は〕腹の中で発生する。(26)

¹⁴²CP: 「肉・血など」

¹⁴³cf. CS Śā 4.15.

¹⁴⁴cf. CS Sū 17.74-75: 「心臓にあり、少し赤味と黄色味をおびたきれいなものが身体のオージャスと呼ばれるもので、これがなくなると人間は死ぬ(74)。なぜならオージャスは、すべての生物の身体諸要素のなかで最初に発生するものであるから、その色はちょうどギーのようであり、味は蜜のようで、においは炒り米のごとくである(75)。」(矢野訳) cf. CS Sū 30.9-11: 「あらゆる生物はオージャスによって活動し栄養を授けられる。このオージャスがなければすべての生物の生命はありえない(9)。オージャスは〔発生の〕第一段階では胎児のエッセンス(*sāra*)であり、胎児のエッセンスからラサ〔が生ずる〕。そして形成されつつある〔胎児の〕心臓に、早い段階で入っていく(10)。その〔オージャスが〕なくなると〔生命の〕消滅が起こる。それは心臓に位置して生命を支えるものとなっている。それは身体のエッセンスであり、氣息(*prāṇa*)(もそこにある(11))。」(矢野訳)

¹⁴⁵CP: 「妊婦に対して、〔8か月目を〕数えたことを知らせるべきではない。なぜなら、もし妊婦が胎児の誕生を損なう〔おそれのある〕8か月目を数えたことを聞くと、それによって恐れが生じ、その恐れによって胎児のヴァータが激発して、〔胎児の〕破滅となるであろうからである。」

実に、母親をはじめとする胎児を形成するもの（条件）が、完全であることによって、同様に、母親の行ないが良いことによって、また、粘着 (*upasneha*)¹⁴⁶と湿潤 (*upasveda*)¹⁴⁷によって、また、時が満ちることによって、また、生まれつきの性質 (*svabhāva*) の完全さによって、〔胎児は〕腹の中で成長する。(27)

一方、まさに母親をはじめとする、胎児を形成するもの（条件）に、傷害の原因があれば、この〔胎児の〕誕生はない。(28)

なぜなら、腹の中における、この〔胎児〕の成長の原因として述べられたもの、それらが、〔述べられたこととは〕反対の状態であることによって、〔胎児は〕腹の中で亡くなるか、あるいはまた早産 (*acirajāta*) となるであろうからである。(29)

さて、あるものによって、〔胎児が〕完全には破滅せずに、異常なものとなる、そのあるものを説明しよう。

もし、女性が、病素 (*doṣa*) を激発させると言われているものを常用していれば、激発した病素は、身体に入り込み、血と子宮に到達する。しかし、完全には血と子宮とを汚さない。

この時、この女性が胎児を身篋れば、その時、この胎児の、母親から生じる〔身体〕部分¹⁴⁸のうち的一部分、あるいは多くの部分が、異常となる。

なぜなら、〔胎児の〕それぞれの〔身体〕部分の〔元となる〕बीジャ (*bīja*) において、あるいはबीジャの一部分において、病素が激発し、〔胎児の〕それぞれの〔身体〕部分が、異常となるからである。

もし、この女性の血のなかの、〔胎児の〕子宮とबीジャ (血) の〔元となる〕部分が (*garbhāśayabījabhāga*)¹⁴⁹、汚れたもの (*pradoṣa*) となると、その時には、生殖不能の女兒 (*vandhyā*) が生まれる。

また、もしこの女性の血のなかの、〔胎児の〕子宮とबीジャ (血) の〔元となる〕部分の〔うちの〕一部分が、汚れたものとなると、その時には、腐敗した女兒 (*pūtiprajā*) が生まれる。

一方、もしこの女性の血のなかの、〔胎児の〕子宮とबीジャ (血) の〔元となる〕部分の〔うちの〕一部分と、女性化する身体〔部分〕とबीジャ (血) の〔元となる〕部分の〔うちの〕一部が、汚れたものとなると、その時には、ほとんど女性の外観をもつが、女性ではない、ヴァールター (*vārtā*) というものが生まれる。

これを女性の障害であると〔人々は〕言う。(30)

これとまさに同じように、もし男性の精液 (*bīja*)¹⁵⁰のなかの、〔胎児の〕बीジャ (精液) の〔元となる〕部分が、汚れたものとなると、その時には、生殖不能の男児 (*vandhya*) が生まれる。

また、もしこの男性の精液のなかの、〔胎児の〕बीジャ (精液) の〔元となる〕部分の〔うちの〕一部分が、汚れたものとなると、その時には、腐敗した男児 (*pūtipraja*) が生まれる。

一方、もしこの男性の精液のなかの、〔胎児の〕बीジャ (精液) の〔元となる〕部分の〔うちの〕一部分と、男性化する身体〔部分〕とबीジャ (精液) の〔元となる〕部分のうちの一部が、汚れたものとなると、その時には、ほとんど男性の外観をもつが、男性ではない、トリナプトリカ (*trīnaputrika*) というものが生まれる。

これを男性の障害であると〔人々は〕言う。(31)

このような、母親から生じる〔胎児の身体〕部分と、父親から生じる〔胎児の身体〕部分との異常の説明によって、自分に合ったもの (*sātmya*) から生じる、滋味から生じる、サットヴァから生じる〔胎児の身体〕部分の異常も、説明される。(32)

すべての存在物にとって、アートマンは、最高のもの (*para*) であり、変異のないもの (*nirvikāra*) であり、差異のないもの (*nirviśeṣa*) である。

一方、サットヴァ (マナス) と身体との差異に基づいて、個々の知覚 (*viśeṣopalabdhī*) がある。(33)

さて、3つの、身体の病素 (*śarīradoṣa*) は、ヴァータ (*vāta*)・ピッタ (*pitta*)・シュレーシュマン (*śleṣman*) であり、これらが身体を汚させる。

また、2つの、サットヴァ (マナス) の病素 (*sattvadoṣa*) は、ラジヤス (*rajas*) とタマス (*tamas*) であり、この2つがサットヴァ (マナス) を汚させる。

またこれら、汚されたサットヴァ (マナス) と身体の両者によって、異常が生じ、汚されていない両者によっては、異常は生じない。(34)

このうち、身体は、母胎 (*yonī*) の違いによって、4種類であると、以前に¹⁵¹述べられた。(35)

実に、サットヴァは、清浄なもの (*śuddha*)、ラジヤス的なもの (*rājasa*)、タマス的なもの (*tāmasa*) の3種類である¹⁵²。

このうち、清浄なものは、病素 (*doṣa*) ではないと言われる。良い部分であること (*kalyāṇāṃśatva*) に

¹⁵⁰ここでは「बीジャ」(*bīja*)という語は、明らかに「精液」の意味で用いられている。

¹⁵¹CS Śā 3.16.

¹⁵²cf. CS Śā 3.13.

¹⁴⁶CP: 「〔母親と胎児の身体〕要素の流れのつながり」

¹⁴⁷CP: 「身体の熱による、胎児の完全な発汗」

¹⁴⁸cf. CS Śā 3.6.

¹⁴⁹CP は *garbhāśayabījabhāga* について、2通りの解釈を示す: 1. 子宮を生じさせるबीジャの部分。2. 子宮と血の形をとるबीジャとを生じさせる部分。ここでは2の解釈を採る。

よって。

ラジャス的なものは、病素を伴うもの(*sadoṣa*)と言われる。怒りの部分であること(*roṣāṃśatva*)によって。

タマス的なものも病素を伴うものと言われる。迷妄の部分であること(*mohāṃśatva*)によって。

一方、これら3種のサットヴァ(マナス)のひとつひとつの部分の末端は、数えきれないものである。それぞれの程度に結びつくことによって。また、身体と母胎の多様性によって。また、互いに従うことによって。

なぜなら、身体はサットヴァ(マナス)に従って規定され、サットヴァ(マナス)も身体に〔従って規定される〕からである。

そこで、いくつかのサットヴァ(マナス)の相違を、共通性を示すことによって例示するために、説明しよう。(36)

すなわち、高潔なもの(*śuci*)、真実を語るもの(*satyābhisandha*)、自己を制御したもの(*jītatman*)、〔正しく〕分け与えるもの(*saṃvibhāgin*)、知識・識別・論議・反論〔の能力〕がそなわっているもの(*jñāna-vijñāna-vacana-prativacana-saṃpanna*)¹⁵³、記憶〔力〕をもつもの(*smṛtimat*)、愛欲・怒り・食欲・高慢・迷妄・妬み・興奮・忍耐強くないことからはなれているもの、全ての物事に対して公平であるものは、ブラフマン的なもの(*brāhman*)であると知るべきである。(37-(1))

供儀(*ijyā*)・学習(*adhyayana*)・制戒(*vrata*)・献供(*homa*)・梵行(*brahmacarya*)に専心するもの、客人を敬うもの、陶醉・高慢・愛欲・嫌悪・迷妄・食欲・怒りを抑えているもの、直感・論議・識別・思考の能力をそなえているもの(*pratibhā-vacana-vijñānopadhāraṇa-śakti-saṃpanna*)は、聖仙的なもの(*ārṣa*)であると知るべきである。(37-(2))

支配力をもつもの(*aiśvaryavat*)、同意される言葉をもつもの(*ādeyavākya*)、祭式の執行者(*yajvan*)、力強いもの(*śūra*)、オージャスをもつもの(*ojasvin*)、テージヤスを得たもの(*tejasopeta*)、不屈の行いをもつもの(*akliṣṭakarma*)、遠くを見るもの(*dīrghadarśina*)、法・財・愛に専念するものは、インドラ的なもの(*aindra*)と知るべきである。(37-(3))

〔行うべきことと行うべきでないことの〕境界線をわきまえて行動するもの(*lekhāsthavṛtta*)¹⁵⁴、正しいことを行なうもの(*prāptakārin*)、争わないもの(*saṃprakārya*)、活動的なもの(*utthānavat*)、記憶〔力〕をもつもの(*smṛtimat*)、支配力を得たもの(*aiśvaryalambhin*)、愛欲・妬み・嫌悪・食欲さ

¹⁵³cf. CS Vi 8.17: 「友好的な討論(*sandhāyasamḥāṣā*)は、知識・識別・論議・反論の能力をそなえた人(*jñāna-vijñāna-vacana-prativacana-śakti-saṃpanna*)、.... と共に行われるべきである。」

¹⁵⁴CP: 'lekhā kartavyākartavyamaryādā.'

のないものは、ヤマ的なもの(*yāmya*)であると知るべきである。(37-(4))

強いもの(*śūra*)、堅固なもの(*dhīra*)、高潔なもの(*śuci*)、不潔を嫌うもの(*aśucidvešin*)、敬虔なもの(*yajvan*)、水の娯楽を楽しむもの、不屈の行いをもつもの(*akliṣṭakarma*)、ふさわしい時に怒ったり落ち着いたりするもの(*sthānakopaprasāda*)は、ヴァルナのなもの(*vāruṇa*)であると知るべきである。(37-(5))

ふさわしい時に敬意・享樂・従者をともなうもの、法・財・愛に常に専念しているもの、高潔なもの(*śuci*)、快適に暮らすもの(*sukhavihāra*)、明らかに怒ったり落ち着いたりするもの(*vyaktakopaprasāda*)は、クペーラのなもの(*kaubera*)と知るべきである。(37-(6))

楽しい踊り・歌・奏樂・演説・詩節・短い物語・歴史・伝承が巧みなもの、香・花輪・塗油・着物・婦人との楽しみ・愛に常に専念するもの、悪意のないものは、ガンダルヴァ的なもの(*gāndharva*)と知るべきである。(37-(7))

このように、清浄な(*śuddha*)サットヴァ(マナス)の7種の異なった部分を知るべきである。良い部分であること(*kalyāṇāṃśatva*)によって。

また、その〔良い部分との〕結合によって、ブラフマン的なものは、きわめて清浄なものであると見なすべきである。(37)

強いもの(*śūra*)、怒るもの(*caṇḍa*)、不平を言うもの(*asūyaka*)、支配力をもつもの(*aiśvaryavat*)、不実なもの(*aupadhika*)、凶暴なもの(*raudra*)、優しくないもの(*ananukrośa*)、自賛するもの(*ātmapūjaka*)、アスラ的なもの(*āsura*)であると知るべきである。(38-(1))

忍耐力のないもの(*amarṣin*)、連続した怒りをもつもの(*anubandhakopa*)、弱点を攻撃するもの(*chidraprahārin*)、残酷なもの(*krūra*)、食物を過度に好むもの、肉を最も好むもの、睡眠・行動に耽るもの、妬むものは、ラクシャス的なもの(*rākṣasa*)であると知るべきである。(38-(2))

大食のもの、女性に弱いもの(*straiṇa*)、女性と二人きりになることを求めるもの、不潔なもの(*aśuci*)、清潔さを嫌悪するもの、臆病なもの(*bhīru*)、恐れさせるもの(*bhīṣayitr*)、異常な行動・食物を習慣とするものは、ピシャーチャ的なもの(*paśāca*)と知るべきである。(38-(3))

怒ると強く、怒っていないと臆病なもの、厳しいもの(*tikṣṇa*)、過度に苦勞するもの(*āyāsabahula*)、恐るべき〔ところを行動の〕領域とするもの、過度に食物・娯楽に耽るものは、蛇的なもの(*sārpa*)

と知るべきである。(38-(4))

食物を愛着するもの、過度に不快な行いをするもの、不平を言うもの(*asūyaka*)、分け与えないもの(*asaṃvibhāgin*)、過度に欲深いもの、行動しないことを性質とするものは、プレータ的なもの(*praita*)と知るべきである。(38-(5))

愛に執着するもの、絶え間なく食物・娯楽に耽るもの、不安定なもの、忍耐力のないもの、蓄えをしないものは、鳥的なもの(*śākuna*)と知るべきである。(38-(6))

実に、このように、ラジャス的な(*rājasa*)サットヴァの6種の異なった部分を知るべきである。怒りの部分であること(*roṣāṃśatva*)によって。(38)

拒否する癖のあるもの(*nirākariṣṇu*)、知的でないもの(*amedhas*)、嫌悪すべき行い・食物をとるもの(*jugupsitācārāhāra*)、交りに耽るもの、睡眠に耽るものは、家畜的なもの(*pāśava*)と知るべきである。(39-(1))

臆病なもの(*bhīru*)、愚かなもの(*abudha*)、食物を食るもの、不安定なもの(*anavasthita*)、固執した愛・怒りをもつもの、常に動いているもの、水を好むものは、魚的なもの(*mātsya*)と知るべきである。(39-(2))

怠惰なもの(*alasa*)、単に食物のみに耽るもの、すべての知的な部分が欠けているものは、木的なもの(*vānaspatya*)と知るべきである。(39-(3))

このように、タマス的な(*tāmasa*)サットヴァの3種の異なった部分を知るべきである。迷妄の部分であること(*mohāṃśatva*)によって。(39)

このように、3種のサットヴァの数えきれない部分のうちの一部分が説明された。
清浄なサットヴァ(マナス)の7種は、ブラフマン・聖仙・インドラ・ヤマ・ヴァルナ・クベーラ・ガ
ンダルヴァのサットヴァ(マナス)との類似によって。
ラジャス的な〔サットヴァ(マナス)の〕6種は、アスラ・ピシャーチャ・ラクシャス・蛇・プレー
タ・鳥のサットヴァ(マナス)との類似によって。
タマス的な〔サットヴァ(マナス)の〕3種は、家畜・魚・木のサットヴァ(マナス)との類似によっ
て〔説明された〕。
また、〔それぞれの〕サットヴァに応じた行いはどのようなものであるか、ということが〔説明され

た〕。(40)

さて、胎児の降下(*garbāvakrānti*)を主題としたこの〔章の〕教えは、完全に、教示された〔論述
の〕方法に従って示されたものである。また、この内容についての認識があれば、適正に、胎児をつく
る〔原因となる〕ものの成立があり、また、〔胎児に〕障害をなすものの排除があると〔言われる〕。(41)

ここに詩節がある。
原因(*nimitta*)、アートマン、プラクリティ(*prakṛti*)、腹の中で次第に成長すること、成長の原因
(*vrddhihetu*)は、胎児にとっての5種の良いことであると示された。(42)

また、出生しないこと・破滅・異常の原因。これら胎児に障害をもたらすものである3種の良く
ないことを述べた。(43)

良いこと・良くないこととして述べられた8種の条件、これを全てにわたって知る医師(*bhīṣaj*)、
その〔医師〕は、王に全てを施すことができる。(44)

優れた知性をもつものが、このような胎児を得る方法と、胎児に障害をもたらすと言われること、そ
れらを知ることができる。(45)

以上が、アグニヴェーシャが作ったタントラの、チャラカが改訂したシャーリーラスターナにおけ
る、「胎児の降下」〔についての〕シャーリーラの大きい〔章〕という名の第4章である。

第5章

さてこれより、「人間の考察」(*puruṣavicaya*) [についての] シャーリーラ [の章] を述べようと、尊いアートレーヤは言った。(1-2)

「この人間(*puruṣa*)は、世界に相応したもの(*lokasaṃmita*)である。」と、尊いプナルヴァス・アートレーヤは言った¹⁵⁵。なぜなら、世界において物質的形態をもつ(*mūrtimat*)存在の差異があるように、人間においても同様である。〔また、〕人間においてそうであるように、世界においても同様であるからと。

このように述べた尊いアートレーヤに、アグニヴェーシャは言った。

「述べられた言葉の意味を、これだけの言葉によっては、理解することはできません。尊い方の知性(*buddhi*)によって、これよりさらに説明されることを、お聞きしたい。」と。(3)

尊いアートレーヤが彼に言った。

世界の個々の部分(*lokāvayavaviśeṣa*)は数えきれない。人間の個々の部分(*puruṣāvayavaviśeṣa*)もまた数えきれない。これらのうちのいくつかのことの概略を、共通性を念頭において述べよう。正しく述べられるこれらのことを、集中して聞きなさい。アグニヴェーシャよ。

6つの要素(*dhātu*)の集合したものが、人間(*puruṣa*)という言葉を得る。

すなわち、地、水、火、風、空、未展開のブラフマン(*brahman neu.*)である。

また、これら6つの要素が集合したものこそ、人間という言葉を得る。(4)

この人間の物質的形態は地、湿気は水、体熱は火、呼吸(*prāṇa*)は風、空隙(*suṣira*)は空、内なるアートマン(*antarātman*)はブラフマン(*brahman neu.*)である。

実に、世界においてブラーフミー(*brāhmī*)¹⁵⁶が豊饒(*vibhūti*)であるように、同様に、人間においても、内なるアートミキー(*āntarātmiki*)は豊饒である。世界におけるブラフマンの豊饒さは、ブラジャーパティ〔によるもの〕であり、人間における内なるアートマンの偉大さは、サットヴァ〔によるもの〕である。

一方、世界においてインドラであるもの、それは、人間においては自我意識(*ahāṅkāra*)であり、また、アーディトヤ(太陽)(*āditya*)は奪い取るもの(*ādāna*)¹⁵⁷であり、ルドラ(*rudra*)は怒り(*roṣa*)

であり、ソーマ(*soma*)は清澄さ(*prasāda*)であり、ヴァス(*vas*)神群は幸福(*sukha*)であり、アシュヴィン(*aśvin*)双神は光輝さ(*kānti*)であり、マルト(*marut*)は勇猛さ(*utsāha*)であり、ヴィシュヴァデーヴァ(*viśvedeva*)はすべての感覚器官とすべての感覚器官の対象であり、闇(*tamas*)は迷妄(*moha*)であり、光(*jyotis*)は知識(*jñāna*)であり、世界にとっての創造の始まり(*sargādi*)であるものは人間にとっての受胎(*garbhādhāna*)であり、クリタユガ(*kṛtayuga*)であるものは幼年期(*bāl̥ya*)であり、トレーター(*tretā*)〔ユガ〕は青年期(*yauvana*)であり、ドヴァーパラ(*dvāpara*)〔ユガ〕は壮年期(*sthāvirya*)であり、カリ(*kali*)〔ユガ〕であるものは病的な(*āturya*)〔状態〕であり、ユガの終わり(*yugānta*)は死(*maraṇa*)であると。

以上のように、このような類推によって、〔ここで〕述べられなかった世界と人間の個々の部分の共通性(*sāmānya*)も知られるべきである。アグニヴェーシャよ。と〔アートレーヤは言った〕。(5)

このように述べた尊いアートレーヤに、アグニヴェーシャは言った。

世界と人間との共通性(*sāmānya*)は、このように尊い方によって述べられた通りの、全く非難される余地のないものである。では、この共通性の教示の目的は、何であるか？ と。(6)

尊い方は言った。

アグニヴェーシャよ聞きなさい。アートマンのなかにあらゆる世界を、また同じように、あらゆる世界のなかにアートマンを見る人に、真実の知性(*satyā buddhi*)が、生じるのである。

なぜなら、アートマンのなかにあらゆる世界を見る人にとって、アートマンこそが楽・苦を作る者(*katṛ*)であり、他のものではないのであるからと。

また、行為より成ること(*karmātmakatva*)から、原因(*hetu*)等に結びついているあらゆる世界が、「私」であると(*aham iti*)知って、まず、知識(*jñāna*)が、終結(解脱)(*apavarga*)のために生ぜしめられる〔からである〕と。

これに関して、「世界」(*loka*)という言葉は、結合に依存している(*saṃyogāpekṣin*)。

というのも、あらゆる世界は、一般的に、6つの要素の集合(*ṣaḍdhātusamudāya*)であるからである。(7)

それ(世界)は、原因(*hetu*)、発生(*utpatti*)、増大(*vṛddhi*)、災害(*upaplava*)、分離(*viyoga*)をもつ。このうち、原因は〔人間にとっては〕発生の原因(*utpattikāraṇa*)であり、発生は誕生(*janma*)であり、増大は肥えること(*āpyāyana*)であり、災害は苦しみが到来すること(*duḥkhāgama*)であり、分離は6つの要素の分離(*ṣaḍdhātuvibhāga*)であり、それは、ジーヴァが去ること(*jīvāpagama*)であり、それは、呼吸が止まること(*prāṇanīrodha*)であり、それは滅亡(*bhaṅga*)であり、それは世界の本性(*svabhāva*)である。

また、その〔分離の〕根本(*mūla*)は、すべての災害の生起(流転)(*pravṛtti*)であり、また〔その〕

¹⁵⁵CS Śā 4.13.

¹⁵⁶*Brahman*神の女性的勢力(女神)の意か。

¹⁵⁷CS Sū 6.4:「ここでは季節の分け方により、一年が6つの部分からなると知るべきである。このうち、冷季(*śiśira*)にはじまり夏季(*grīṣma*)に終る3つ(冷季・春季(*vasanta*)・夏季)〔の季節〕は、太陽(*āditya*)の北行〔する半年〕であり、「アーダーナ」(*ādāna*)である。…」CP on CS Sū 6.4:「大地の水分を奪い(*ādadāti*)生き物の体力などを減少させるのでアーダーナと〔言われる〕。」

消滅(*upama*)は、[すべての災害の] 止滅(還滅) (*nivṛtti*)である。

「生起(流転)は苦であり、止滅(還滅)は楽である」というふうにあられたその知識(*jñāna*、それは真実(*satya*)である。

その[知識の]原因(*hetu*)は、あらゆる世界[と人間と]の共通性についての知識である。以上が共通性の教示の目的であると[アートレーヤは言った]。(8)

その時、アグニヴェーシャが言った。

生起(流転) (*pravṛtti*)は、どのような根本(*mūla*)をもつものであるのか? 尊者よ。

また、止滅(還滅) (*nivṛtti*)についての方法(*upāya*)とは何か? と。(9)

尊い方は言った。

生起(流転)は、迷妄・欲望・嫌悪・行為を根本としているものである¹⁵⁸。

なぜなら、それ(生起)から生じた、自我意識(*ahaṅkāra*)・執着(*saṅga*)・懷疑(*saṃśaya*)・増長(*abhisamplava*)・墮落(*abhyavapāta*)・逆行(*vipratyaya*)・無差別(*aviśeṣa*)・[解脱のための]¹⁵⁹手段ではないこと(*anupāyā*)が、あたかも、非常に大きな枝をもつ木々が、若木を圧倒するように、人間を圧倒するかのように立っているからである。

それらによって圧倒されたものは、[輪廻における]¹⁶⁰存在(*sattā*) [であること]を超えることはない¹⁶¹。

このうち自我意識(*ahaṅkāra*)は、「私はこのような生まれ・容姿・富・行ない・知性・習慣・学識・氏族・年齢・体力・威光をそなえている」と[考えること]であり、終結(解脱) (*apavarga*)のためでなく、マナス(*manas*)・言葉(*vāc*)・身体(*kāya*)の行為¹⁶²をもつこと、それが執着(*saṅga*)であり、

行為の果報(*karmaphala*)・解脱(*mokṣa*)・人間の来世の存在(*puruṣapretyabhāva*)などが存在するのがあるいは存在しないのかと[疑うこと]が、懷疑(*saṃśaya*)であり、

「私はあらゆる状態において他とは異なったもの(*ananya*)であり、私は創造者(*sraṣṭṛ*)であり、私は生まれつき完成されたもの(*svabhāvasaṃsiddha*)であり、私は身体・感覚器官・ブッディ・記憶の

¹⁵⁸原文は *moheccādvēṣakarmamūlā pravṛttiḥ*. *moheccādvēṣakarma*は、「迷妄から生じる欲望と嫌悪に基づく行為」ともとれる。cf.CP on CS Śā 1.53.

cf.VS 6.2.17:*icchādvēṣapūrvikā dharmādharmayoḥ pravṛttiḥ*.

cf.CS Śā 1.53cd:*puruṣo rāśisaṃjñās tu moheccādvēṣakarmajaḥ*.

¹⁵⁹CPの解釈に従って補う。CP: *anupāyā iti anyopāyāḥ santo 'pi paramapuruṣārthe mokṣe anupāyāḥ*.

¹⁶⁰CPの解釈に従って補う。

¹⁶¹この節の内容、表現は BC 12.23-32 にきわめて近い。cf.Johnston 1937 p.51.

¹⁶²いわゆる「身口意の三業」。cf.CS Sū 39-41.

特別の集合体(*rāśi*)である」というとらえかたが増長(*abhisamplava*)¹⁶³であり、

母・父・兄弟・妻・子・親族・友人・召し使いの集団は私のものであり、また私は、集団のものであるということが、墮落(*abhyavapāta*)¹⁶⁴であり、

為されるべきこと・為されるべきでないこと、有益なこと・無益なこと、良いこと・悪いことに対して逆に固執することが、逆行(*vipratyaya*)であり、

知る主体(*jñā*)と知る主体でないもの(*ajñā*)、原質(質料因) (*prakṛti*)と派生物(*vikāra*)、生起(*pravṛtti*)と止滅(*nivṛtti*)が同様に見えることが無差別(*aviśeṣa*)であり、

灌水(*prokṣaṇa*)・断食・アグニホートラ・[1日に] 3回[ソーマを] 搾ること(*triṣavaṇa*)・灌頂(*abhyukṣaṇa*)・[祭場に] 招き入れること(*āvāhana*)・[人におこなってもらう] 祭式(*yājana*)・[自分でおこなう] 祭式(*yajana*)・勧請(*yācana*)・水と火に入ること(*salilahutāśanapraveśa*)などが企てられることがまさに、[解脱のための] 手段ではないこと(*anupāya*)であると言われる¹⁶⁵。

このように、この知恵(*dhī*)・堅固さ(*dhṛti*)・記憶(*smṛti*)をもたないもの、自我意識にとりつかれているもの、執着するもの、懷疑をもつもの、増長した理性(*buddhi*)をもつもの、墮落したもの、異なった見方をするもの、無差別に理解するもの、誤った道を行くものは、サットヴァ(マナス)と身体(病素(*doṣa*))の根本であるあらゆる苦しみの宿り木である。

このような自我意識をはじめとする欠陥(*doṣa*)によって、つき動かされつつあるものは、生起(流転) (*pravṛtti*)を越えて行くことはない。

また、それ(生起)は罪禍(*agha*)の根本である。(10)

止滅(*nivṛtti*)は終結(*apavarga*)である。それは最高のもの(*para*)であり、それは寂静(*praśānta*)であり、それは不滅のもの(*akṣara*)であり、それはブラフマン(*brahman neu.*)であり、それは解脱(*mokṣa*)である。(11)

ここで、解脱を望むものたちにとっての向上[の方法] (*udayana*)¹⁶⁶を述べよう。

このうちまず最初に、世界の欠陥を見て解脱を望むものにとっては、

先生(*ācārya*)に従うこと、その[先生]の教えを実行すること、

火(*agnī*)に仕えること、

法典(*dharmaśāstra*)に従うこと、その[法典の]内容を理解すること、その[法典の理解]によって[法典を] 堅固なものとすること、そこ(法典)で述べられている通りに行なうこと、

¹⁶³CP: *ātmano 'abhimata anātmany abhisamplavo 'bhisamplavaḥ*.

¹⁶⁴CP: *abhyavapātaḥ paramārthato 'nātmīye mamatā*.

¹⁶⁵ここで、祭式行為を否定するような見解が表明されている点は注目すべきである。

¹⁶⁶CP: *udayanāni hi mokṣopāyā ity arthaḥ*.

Yogīndranāthasena による注: *udayanam ūrdhvagamanamārgaḥ mokṣopāya ity arthaḥ*.

良き人々を崇拝すること、良くない人々を避けること、悪人と接触しないこと、あらゆる生類に有益な荒々しくない真実を、適当な時期に吟味して語ること、
 あらゆる生物に対して、あたかも自分自身に対するかのように配慮すること、
 あらゆる女性を想起しないこと、望まないこと、求めないこと、話しかけないこと、
 あらゆる所有物を放棄すること、
 覆い隠すためには腰布(*kaupīna*)が¹⁶⁷、鉋物性の〔染料で染めた〕赤色の着物が、ぼろを縫うために針と針の容器(*sūcīpippalaka*)¹⁶⁷が〔用いられること〕、
 清潔さを保つために水壺が〔用いられること〕、杖を持つこと、乞食をするために容器が〔用いられること〕、生命(*prāṇa*)を維持するために〔一日に〕一度、調理されていない得られたままの食物をとること、
 疲れをとるために萎れて乾いた葉や草をひろげて置くこと、
 瞑想(*dhyāna*)のために身体を結び付ける布(*kāyanibandhana*)¹⁶⁸が〔用いられること〕、森のなかで家なく住むこと、
 倦怠・睡眠・怠惰等の行為を避けること、感覚器官の対象への愛情や焦燥を抑えること、
 寝ること・立つこと・動くこと・見ること・食事をする事・休養すること・身体部分を動かすこと等の開始に際しては、想起を前提とした活動(*smṛtipūrvikā pravṛtti*)が〔なされるべきこと〕¹⁶⁹、
 もてなし・称賛・非難・侮蔑に寛容であること、 飢え・渇き・苦勞・疲勞・冷たさ・暑さ・風・雨・楽・苦の感覚に耐えること、悲しみ・落胆・自惚れ・不安・興奮・貧欲・愛欲・妬み・恐れ・怒り等によって動揺しないこと、
 自我意識等に対して、災い(*upasarga*)と称すること、世界と人との創造等に共通性を見ること、
 〔解脱のためになすべきことの〕¹⁷⁰なすべき時間が過ぎ去ることを恐れること、ヨーガのはじめには常に無頓着ではないこと(*anirveda*)、生氣と氣力をもつこと(*sattvaotsāha*)、終結(解脱)(*apavarga*)のために知恵・堅固さ・記憶の力を身につけること、
 チェータス(*cetas*)に諸感覚器官を繋ぎ止めること(*niyamana*)、アートマンにチェータスを〔繋ぎ止めること〕、また、アートマンを〔アートマンに繋ぎ止めること〕、
 要素(*dhātu*)の区別によって身体部分を繰返し数えること、
 あらゆる原因をもつものは苦であり、自分のものでないものであり、恒常でないものであると¹⁷¹認めること、

¹⁶⁷CPの解釈に従う。

¹⁶⁸CPの解釈(*kāyanibandhana=yogapaṭṭa*)に従う。

¹⁶⁹CP: 「「想起を前提とした活動」とは、私はだれか、何のために愛欲を捨てることなどの〔行いが〕なされるのか、などとあらゆる点において想起すべきであるという意味。」

¹⁷⁰CPの解釈に従って補う。

¹⁷¹cf. CS Śā 1.152ab: *sarvaṃ kāraṇavad duḥkham asvaṃ cānityam eva ca.*

あらゆる生起(*pravṛtti*)に対して、罪禍(*agha*)¹⁷²と称すること、あらゆる放棄(*saṃnyāsa*)に、楽(*sukha*)があると決定すること、
 これが終結(解脱)(*apavarga*)のための道である。これより他の仕方では、束縛される。
 このように向上の〔方法〕(*udayana*)が述べられた。(12)

また、ここに〔詩節〕がある。

汚れているサットヴァは、これらの清浄な手段によって、清められる。

ゴマ油・布・綿(*kaca*)¹⁷³などによって、拭われる鏡のように¹⁷⁴。(13)

星〔蝕〕(*graha*)¹⁷⁵・雲・埃・煙・霧によって覆われていない太陽の輪が輝くように、そのように、汚れないサットヴァは輝く。(14)

道を閉ざされた(*saṃvṛtāyana*)アートマンに、閉じ込められた、そのサットヴァは輝く。

灯明台における、清浄な安定した輝く光をもった灯火のように。(15)

清浄なサットヴァをもつものには、清浄な真実のブッディ(理性)(*buddhi*)が活動する。その〔ブッディ〕によって、非常な力をもつ大きな迷妄よりなる翳質(*tamas*)が壊れる。(16)

その〔ブッディ〕によって、あらゆる存在の本性を知るものは、欲望から解放されたものとなる。
 その〔ブッディ〕によってヨーガが達成される。その〔ブッディ〕によってサーンキヤ(*sāṃkhya*)が完成する。(17)

その〔ブッディ〕によって、自我意識に至ることはない。その〔ブッディ〕によって、〔楽と苦の〕¹⁷⁶原因に達することはない。

その〔ブッディ〕によって、なにものにも依拠することはない。その〔ブッディ〕によって、あらゆるものを放棄する。(18)

その〔ブッディ〕によって、永遠、不老、寂静、不滅のブラフマン(*brahma neu.*)に至る、
 その〔ブッディ〕は、学識(*vidyā*)、達成(*siddhi*)、思考(*matī*)、知性(*medhā*)、知恵(*prajñā*)、知識(*jñāna*)であると考えられている。(19)

¹⁷²cf. CS Śā 5.10.

¹⁷³*kaca*は「髪」ともとれる。

¹⁷⁴cf. 鏡の比喩: CS Śā 1.55.

¹⁷⁵CPは *graha=rāhu* とする。

¹⁷⁶CPの解釈に従って補う。

世界の中に広がったアートマンを、またアートマンの中に「広がった」世界を見る人にとって、遠いものと近いものを見る人にとって、知識を根本とする寂静(*śānti*)は滅びることはない。(20)

あらゆる存在を、あらゆる状態において、常に見る人にとって、清浄なブラフマンであるものにとって、結合(*saṃyoga*)は生じない。(21)

行為手段(器官)(*karāṇa*)が存在しないことによって、アートマンのしるし(*liṅga*)もまた捉えられることはない。
その「アートマン」は、あらゆる行為手段(器官)と結びついていないことによって、離されたもの(解脱したもの)(*mukta*)と呼ばれる。(22)

寂静(*śānti*)は、罪のないもの(*vipāpa*)、ラジャスのないもの(*virajas*)、静かなもの(*śānta*)、最高のもの(*para*)、不滅のもの(*akṣara*)、不変のもの(*avyaya*)、不死のもの(*amṛta*)、ブラフマン(*brahman neu.*)、完全な解脱(*nirvāṇa*)、[という]同義語(*pariyāya*)によって述べられる。(23)

良き人よ。以上のことが、疑いを離れ、迷妄・激情(*rajas*)・欲望をなくしたムニ達がそれを知って、完全な寂静(*praśama*)に赴くところのその識別知(*viññāna*)である。(24)

ここに詩節がある。
[教示の]目的とともに世界と人間との共通性(*sāmānya*)、生起(*utpatti*)に関する根本と止滅(*nivṛtti*)への手段(*mārga*)とが述べられた。(25)

清浄なサットヴァ(マナス)の集中(*samādhāna*)¹⁷⁷と真実の完全なブッディが、人間の考察[についての章]において、最高の聖仙によって、述べられ、決定された。(26)

以上が、アグニヴェーシャが作ったタントラの、チャラカが改訂したシャーリーラスターナにおける、「人間の考察」[についての]シャーリーラという名の第5章である。

¹⁷⁷cf.CS Śā 1.80,146.

第6章

さてこれより、「身体の考察」(*śarīravicaya*) [についての] シャーリーラ [の第6章] を説明しようと、尊いアートレーヤは言った。(1-2)

身体の考察は、身体の養生(*upakāra*)のために望まれる。なぜなら、身体に関する事実を知ると、身体の養生を行うことに関しての知識(*jñāna*)が生じるのであるから。そのために「アーユルヴェーダの」熟練者たちは、身体の考察を尊重するのである。(3)

ここで、身体というのは精神性(意識)(*cetanā*)の拠り所であるものであり、5大元素が変化したものの集合からなるものであり、均衡のとれた結合(*samayoga*)をもたらすものである。

なぜなら、もしこの身体にある諸要素(*dhātu*)が不均衡(*vaiṣamya*)となると、その時には痛み(*kleśa*)あるいは「身体の」破壊(*vināśa*)をもたらすことになるからである。また、諸要素が不均衡となるということは、部分的に、また生まれつきの性質として、[諸要素が] 増大[あるいは] 減少するということである。(4)

一方、同時に、相反する諸要素の増大・減少がある。なぜなら、ある要素にとっては、増大をもたらすものの、それが、その「要素とは」反対の性質をもつ要素にとっては、減少をもたらすものだからである。(5)

このことから、まさに正しく適用される治療(*bheṣaja*)は、欠乏している[あるいは] 過多の要素を、同時に均衡のとれた状態にするものであり、過剰なものを除き、欠乏しているものを増大させるのである。(6)

治療の適用の際に、また健康的な行い(*svasthavṛtta*)をする際に、[その] 結果として望まれるもの、それは諸要素の均衡(*sāmya*)¹⁷⁸であろう。

実に、健康(*svastha*)ではあっても、熟練者は、まさに諸要素の均衡を得るために、自分に合ったもの(*sātmya*)であると認められている滋味や特質をもつものと、食物を調理したもの(*āhāravikāra*)とを[適切な] 順序で摂ることを望むものである。

また、1種類の「要素」が優勢であるもの(食物)を摂っている人々は、それとは反対の作用をもつと認められている「要素」の働きによって、平衡をとることを望むものである。(7)

¹⁷⁸これについては次のようにも言われる。CS Śā 1.53:「要素の均衡をもたらすことが、このタントラの目的である。」(*dhātusāmyakriyā cokiā tantrasyāśya prayojanam.*)

実に、〔その〕土地(*deśa*)・季節(*kāla*)・自分(*ātman*)の特質に相反する行い¹⁷⁹と、食物を調理したものの作用を正しく適用すること、あらゆるものの過剰な適用を抑制すること、排泄すべきもの(*udīrṇa*)と〔自然に〕出て行くもの(*gatimat*)¹⁸⁰を抑制しないこと、無謀なことを避けること、以上のような健康的な行動(*svasthavṛtta*)が、諸要素の均衡を得るために示される。(8)

また、身体的な諸要素は、〔それぞれの要素と〕同様の性質をもつ、あるいは同様の性質が優勢である食物を調理したものの繰り返し〔の摂取〕によって増大する。

一方、〔それぞれの要素と〕相反する性質をもつ、あるいは相反する性質が優勢である食物の繰り返し〔の摂取〕によって減少する。(9)

ここでは、これら〔以下のもの〕が、数えることのできる身体要素の性質(*śarīradhātuguṇa*)である。すなわち、重(*guru*)・軽(*laghu*)・冷(*śīta*)・熱(*uṣṇa*)・湿(*snigdha*)・乾(*rūkṣa*)・緩(*manda*)・激(*tikṣṇa*)・固(*sthira*)・液(*sara*)・軟(*mṛdu*)・硬(*kāṭhina*)・清(*viśada*)・濁(*picchila*)・滑(*ślakṣṇa*)・荒(*khara*)・微(*sūkṣma*)・粗(*sthūla*)・粘着(*sāndra*)・流動(*drava*)である。

これら〔身体要素の性質〕のうち、重であるもの、それは、重の性質をもつ食物を調理したものの繰り返し〔の摂取〕によって、増大させられ、また、〔身体要素の性質のうちの〕軽であるものは、〔重の性質をもつ食物を調理したものの繰り返しの摂取によって、〕減少する。

一方、〔身体要素の性質のうち〕軽であるものは、軽であるものによって増大させられ、重のものは〔軽であるものによって〕減少する。

まさにこのように、すべての要素の性質は、〔その要素と〕同類の〔要素の〕適用によって増大、〔その要素に〕相反する〔要素の適用〕によって減少となる。

このことから、〔人の身体要素のうちの〕肉(*māṃsa*)は肉〔の摂取〕によって他の身体要素¹⁸¹より以上に増大させられる。同様に、血(*lohita*)は血によって、脂肪(*medas*)は脂肪によって、肉の中の脂肪分(*vasā*)¹⁸²は肉の中の脂肪分によって、骨(*asthi*)は軟骨(*taruṇāsthī*)によって、髄(*majjā*)は髄によって、精液(*śukra*)は精液によって、また、胎児(*garbha*)は未熟な胎児(*āmagarbha*)¹⁸³によって〔増大させられる〕。(10)

¹⁷⁹その人の住んでいる土地・その季節・その人自身が、それぞれもっている特質を緩和し得るような行いの意味であろう。CPは例として、乾燥した土地では睡眠をとること、春には運動すること、太った体をもつ人は運動すること、睡眠をとらないことなどを挙げている。

¹⁸⁰CP: 「便などの〔体の〕外に出て行くもの」、cf. CS Śā 1.103ab.

¹⁸¹CS Śā 4.7 訳注参照。

¹⁸²Meulenbeldは‘muscle-fat’とする。cf. Meulenbeld 1974 p.470.

¹⁸³CPは「未熟な胎児」とは「卵(*aṇḍa*)など」であるとする。

一方、このような同類の特徴を伴う同類性をもつ食物を調理したものが、近くにならないような場合、あるいは近くにあっても不適當であることによって、あるいは嫌悪によって、あるいは他の理由によって、用いられない場合、また、その要素(*dhātu*)がより増大されるべきである場合、また、その〔要素と〕同様の性質をもつ食物を調理したものが、摂取されるべきでない場合、このような場合には、同様の性質が優勢ではあるが、他の本性をもつ食物を調理したものの適用がなされるべきである。

例えば、精液が減少している時には、牛乳(*kṣīra*)とサルピスの、また、甘味(*madhura*)、湿・冷であると知られている他の物の適用が〔なされるべきである〕。

また、尿が減少している時には、砂糖黍の液汁(*ikuṣurasa*)・椰子酒(*vāruṇi*)・重湯(*maṇḍadrava*)、甘味・酸味(*amla*)・鹹味(*lavaṇa*)、湿った(*upakledin*)ものの、

便が減少している時には、酸粥(*kulmāṣa*)・豆(*māṣa*)・クシュクンダ(茸の一種)(*kuṣkuṇḍa*)¹⁸⁴・山羊の胴体部分(内臓)(*ajamadhya*)¹⁸⁵・大麦(*yava*)・野菜(*śāka*)・酸味の米粥(*dhānyāmla*)の、

ヴァータが減少している時には、辛味(*kaṭuka*)・苦味(*tikta*)・渋味(*kaṣāya*、乾・軽・冷の、

ピッタが減少している時には、酸味・鹹味・辛味・収斂味(*kṣāra*)、熱・激の、

シュレーシュマンが減少している時には、湿・重・甘味・粘着・濁のものの〔適用がなされるべきである〕。

もし、この〔人〕の行いも、〔この人のある〕要素(*dhātu*)の増大をもたらすものであるならば、そうであれば、その〔行い〕は、しばしばなされるべきである。

このように〔以上述べたものとは〕異なる身体の諸要素も、同類〔の性質のもの〕と相反〔する性質のもの〕とによって、時に応じて、増大と減少とがなされるべきである。

このように、すべての諸要素の増大と減少が、個々に、また類推によって、述べられた。(11)

一方、全体的に身体を増大をもたらすのは、これらのことである。

すなわち、〔ふさわしい〕時との結びつき(*kālayoga*)¹⁸⁶、生まれつきの性質が完全に確立すること(*svabhāvasaṃsiddhi*)、食物の健全さ(*āhārasauṣṭhava*)、障害のないこと(*avighāta*)¹⁸⁷である。(12)

一方、体力(*bala*)の増大をもたらすのは、これらのことである。

すなわち、体力のある人の〔生まれる〕土地¹⁸⁸に生まれること、および、体力のある人の〔生まれ

¹⁸⁴CSの中では唯一の用例である。CP: 「バララなどの茸」(*palalādicchatrikā*)

¹⁸⁵CP: *chāgāntarādhi*.

¹⁸⁶CP: 「〔身体の〕増大をもたらす青年期等の時と結びつくこと(時を経ること)」

¹⁸⁷CP: 「身体を増大に障害をもたらすもの、〔例えば〕性交、心の障害などを避けること」

¹⁸⁸CP: 「*Sindh*地方など」

る] 季節¹⁸⁹に〔生まれること〕、快適な時（季節）と結びつくこと、精子(*bīja*)と母体(*kṣetra*)¹⁹⁰の性質が完全であること、食物が完全であること、身体が完全であること、自分に合ったもの(*sātmya*)が完全であること、サットヴァ（マナス）が完全であること、生まれつきの性質が完全に確立すること(*svabhāvasaṃsiddhi*)、若いこと、運動(*karman*)¹⁹¹、喜び(*saṃharṣa*)とである。(13)

一方、食物の消化(*pariṇāma*)をもたらすのは、これらのものである。

すなわち、〔身体の〕熱(*ūṣman*)、ヴァーユ(*vāyu*)、湿性(*kleda*)、油性(*sneha*)。時（時間）(*kāla*)¹⁹²、〔以上のものの〕正しい結合(*saṃyoga*)¹⁹³とである。(14)

さて、これに関して、まさにこれらの熱をはじめとする、食物の消化をもたらすものの働きの特性は、これらのことである。

すなわち、熱は消化する。ヴァーユは運び去る¹⁹⁴。湿性は弛緩(*śaithilya*)をもたらす。油性は柔軟性(*mārdava*)を生じさせる。時（時間）は充足(*paryāpti*)を〔結果として〕生じさせる。また、これらのものの正しい結合は、消化〔された〕要素の均衡をもたらすものである¹⁹⁵。(15)

一方、変化しつつある食物の、〔身体の諸性質に〕相反しない諸性質は、それぞれに身体の性質であるものに入る。

〔身体の諸性質に〕相反する〔食物の諸性質〕と、〔相反する食物の諸性質によって〕障害をうけた

¹⁸⁹CP: 「冬(*hemanta*)、春(*śiśira*)など」

¹⁹⁰CPはここで、*bīja*は*śukra*、*kṣetra*は、血(*ārtava*)と子宮(*garbhāśaya*)の意味であるとする。

¹⁹¹CP: 「体操(*vyāyāma*)など」

¹⁹²CP: 「消化〔にかかる〕時間」(*pākakāla*)

¹⁹³CPは「正しい結合」とは、〔CS Vi 1.21で規定されている〕食物に関する8つの規定(1.*prakṛti* 2.*karaṇa* 3.*saṃyoga* 4.*rāśi* 5.*deśa* 6.*kāla* 7.*upayogasamstha* 8.*upayoktṛ*)の「正しい結合」であるとするが、ここでは、この節で述べられた熱以下の「食物の消化をもたらすもの」と食物との「正しい結合」と解釈すべきであろう。(次節も同じ。)

¹⁹⁴CP: 「食物を熱の近くに運び去る」

¹⁹⁵cf.CS Ci 15.6-7: 「取る働きをもつプラーナは、食物を内臓に導く。その〔食物は〕流動によってかたまりがばらばらになり、油性によって軟らかくなる。

サマーナ生氣（プラーナの一種）によっておこされた腹の中の〔消化の〕火は、〔ふさわしい〕時に、均等に摂られた〔食物〕を正しく消化する。生命の増長のために。」

CS Ci 15.6ab: *annam ādādakarmā tu prāṇaḥ koṣṭhaṃ prakarṣati /*

CS Ci 15.6cd: *tad dravair bhinnasaṃghātāṃ snehena mṛdūtāṃ gatam //*

CS Ci 15.7ab: *saṃānenāvadhūto 'gnir udaryaḥ pavanena tu /*

CS Ci 15.7cd: *kāle bhuktaṃ samaṃ samyak pacaty āyurvivṛddhaye //*

〔身体の諸性質〕とは、対立することによって身体に障害を及ぼす。(16)

また、身体の諸性質は、概括すると、不浄なもの(*malabhūta*)と清浄なもの(*prasādashūta*)との2種である。

このうち、不浄なもの、それらは、身体にとっては、苦痛をもたらすもの(*ābādhakara*)である。すなわち、身体の穴を覆い別々に生じる〔体の〕外側に出てくるもの、完全に腐敗した〔身体〕諸要素、激発したヴァータ・ピッタ・シュレーシュマン、また、その他の身体に存在している何らかの物で身体に害を及ぼすもの、これらすべてを不浄と見なす。

一方、〔これらとは〕異なったものを清浄と〔見なす〕。〔すなわち、〕性質の違いによって、重(*guru*)で始まり流動(*drava*)で終るもの¹⁹⁶を、また、物質の違いによって、滋味(*rasa*)で始まり精液(*śukra*)で終るもの¹⁹⁷を〔清浄と見なす〕。(17)

まさにこれらすべての〔身体の諸性質〕にとって、汚れたヴァータ(*vāta*)・ピッタ(*pitta*)・シュレーシュマン(*śleṣman*)は、汚させるもの(*dūṣayitr*)である。病素としての本性によって。 また、異なった〔身体〕要素における、異なった時における、汚れたヴァータをはじめとするものの知識は、「様々な飲食物」の章¹⁹⁸において述べられた。

身体諸要素との接触によって、そこにおいてのみ、汚れた病素のはたらきがある。

一方、実に、本来的な状態にある(*prakṛtibhūta*)ヴァータなどの〔働きの〕結果(*phala*)は、無病(*ārogya*)である¹⁹⁹。

そのために、知恵のある人々によって、これらのものの本来的な状態を〔得るために〕努力すべきであると〔言われている〕。(18)

また、ここに〔詩節が〕ある。

常に、あらゆる方法で、あらゆる身体を知る医師、

その〔医師〕は、世界に幸福をもたらすアーユルヴェーダを完全に知る。(19)

このように述べた尊いアートレーヤに、アグニヴェーシャは言った。尊い方によって述べられたこの言葉が、「身体の〔考察の〕章」において聞かれた。

では胎児のどの部分が、実に最初に腹中で発生するのか？

¹⁹⁶CS Śā 6.10.

¹⁹⁷7種の身体要素(*dhātu*)。

¹⁹⁸CS Sū 第28章

¹⁹⁹ヴァータなどの病素(*doṣa*)であっても、汚れていない「本来的な状態」にある場合には、身体にとって有益な働きをなすという意味であろう。

〔胎児は〕どこを向いて、またいかにして〔母親の腹の〕中に居るのか？

また、どのような食物が〔胎児を〕生存させているのか？

どのような状態のものが出てくるのか？

どのような食物や手当て(*upacāra*)によって、この生まれた〔胎児〕は、すぐに死に至らせられるのか？

どのような〔食物や手当て〕によって、無病のものが成長するのか？

また、どうして、この〔胎児〕に神などの怒りを原因とする病があるのか？ あるいはないのか？

また、この〔胎児〕にとってのふさわしい時(*kāla*)の死と、ふさわしくない時(*akāla*)の死の有無に関して、あなたは確実な見解をおもちでしょうか？

この〔胎児の〕最高の寿命(*paramāyus*)とは何か？

この〔胎児の〕最高の寿命の諸原因とは何か？ と。(20)

このように述べたかのアグニヴェーシャに、尊いプナルヴァス・アートレーヤは言った。

以前に、この〔巻の〕「胎児の降下」〔についての第4章〕で、この〔胎児〕が、〔母親の腹の中〕で〔結果として〕生じること、またその時、この〔胎児〕の身体各部分が整うということが、述べられた²⁰⁰。一方、ここに、すべてのスートラ作者である聖仙達の、多種の論議(*viprativāda*)がある。〔ここで〕述べているこれらのことをも聞きなさい。

「頭(*śiras*)が、最初に腹中で発生する。」と、クマーラシラス・パラドヴァージャ(*Kumārasīrasa Bharadvāja*)は見なす。これ(頭)を全ての感覚器官の拠り所(*adhiṣṭhāna*)であると考えからである。

「心臓(*hṛdaya*)である。」と、パーフリーカの医師、カーンカーヤナ(*Kāṅkāyana*)は〔見なす〕。精神性(意識)(*cetanā*)の拠り所であることによって。

「へそ(*nābhi*)である。」と、バドラカーピヤ(*Bhadrakāpya*)は〔見なす〕。食物の通路であると考えからである。

「腸の一部(*pakvāśayaguda*)²⁰¹である。」と、バドラシャウナカ(*Bhadra'saunka*)は〔見なす〕。風(*māruta*)の拠り所であるからである。

「手足(*hastapāda* sg.)である。」と、バディシャ(*Baḍiśa*)は〔見なす〕。それは人間の行為手段であること(*karaṇatva*)によって。 「諸感覚器官(*indriya* pl.)である。」と、ヴィデーハのジャナカ(*Janaka*)は〔見なす〕。これらはこの〔人間の〕ブッディの拠り所であると考えからである。

「知覚できないこと(*parokṣatva*)から、不可知(*acintya*)である。」と、マーリーチ カシュヤパ(*Mārīci Kaśyapa*)は〔見なす〕。

²⁰⁰CS Śā 4.9-26.

²⁰¹この語の用例はCS ではこの箇所のみ。CP: 「*pakvāśaya*と*guda*のこと。あるいは、*pakvāśaya*の近くにある*guda*すなわち*uttaraguda*のこと。」

「全ての身体の発生は同時である。」と、ダンヴァンタリ(*Dhanvantari*)は〔見なす〕。

これは妥当である。心臓(*hṛdaya*)をはじめとするあらゆる身体部分が同時に発生することによって。なぜなら、この〔胎児〕の心臓(*hṛdaya*)は、あらゆる身体部分にとって、また、どのようなものにとっても、根本の拠り所であるからである。

また、このことから〔心臓を根本の拠り所とする〕これらのものが、〔心臓よりも〕先に発生することはない。

それゆえに心臓(*hṛdaya*)をはじめとするあらゆる身体部分の同時の発生がある。

なぜなら、あらゆるものは相互に結び付いているものであるからである。

それゆえに、あるがままに見ること(*yathābhūtadarśana*)²⁰²が、正しいことなのである。(21)

一方、実に胎児は、母親の背中に顔を向けて(*prṣṭhābhimukha*)、頭を上にして、手足を閉じて、〔母親の〕腹の中に居る。(22)

一方、実に、

〔すでに〕存在する身体部分と〔まだ〕存在しない部分とをもつもの(*sadasadbhūtāṅgāvayava*)²⁰³である胎児は、渇きと飢えのないものであり、他のものに依存して生きるもの(*paratantravṛtti*)であり、母親に頼って、子宮(*garbhāśaya*)における粘着(*upasneha*)と湿潤(*upasveda*)²⁰⁴によって生存している。

この〔状態の〕すぐ後には、この〔胎児〕の粘着の幾分かは、毛穴を通路とすることによって、〔また、〕幾分かは、へその緒(*nābhināḍi*)を通路とすることによって、〔もたらされる〕。

実に、この〔胎児〕のナーディー管(*nāḍi*)はへそに繋がり、また、胎盤(*aparā*)²⁰⁵は、ナーディー管に〔繋がり〕、また、この〔胎児の〕胎盤は、母親の心臓(*hṛdaya*)に〔繋がり〕、実に、この〔胎児の〕母親の心臓は、その胎盤を、流入しているシラー管(*sirā*)によって満たしている。

その〔胎児〕にとっての、滋味(*rasa*)、それは体力と体色をもたらしものとなり、また、そのあらゆる滋味をもつものが、〔胎児の〕食物である。

胎児を身籠っている女性にとって、滋味は3種類である。自身の身体を肥すためと、乳のためと、胎児の成長のためのものとである。

このような食物に支えられている、〔母親の腹の〕中にあるその〔胎児は〕、他のものに依存して生きるものであり、母親に頼って生存している。(23)

²⁰²仏教文献 (eg. *Madhyāntavibhāga* etc.) にもこの語の用例が見られる。cf. 田崎 1997.

²⁰³受胎後最初の月の胎児の状態。cf. CS Śā 4.9.

²⁰⁴cf. CS Śā 4.27.

²⁰⁵CP: 「胎盤は、胎児のへその緒に結合している。世間では〔これを〕‘*amarā*’と言う。」

そして、この〔胎児〕は、誕生が近付いた時に、出産の風(*prasūtimāruta*)と結び付くことによって、頭を下に向けて、産道(*apatyapatha*)を経て出てくる。

これが正常(*prakṛti*)であり、そしてこの他のものは異常(*vikṛti*)である。

さて、これ（誕生）以降は、〔胎児は〕独立して生きるもの(*svatantravṛtti*)となる。(24)

「誕生のストトラについて」(*jātiśūtrīya*)〔という名の第8章〕で示される食物と手当てが、この〔新生児に〕とって無病をもたらし、成長をもたらすものである。(25)

また、不適切に用いられるこの両者（食物と世話）によって、生まれたものは直ちに害される。まるで、根付いていない木が、風と熱によって即座に根絶されるように。(26)

信頼すべき教え(*āptopadeśa*)²⁰⁶によって、驚くべき症状(*adbhutarūpa*)が見られることによって、また、原因(*samutthāna*)²⁰⁷・徴候(*līnga*)・治療(*cikitsita*)が特殊であることによって、病素(*doṣa*)の激発(*prakopa*)に相当しない、神など²⁰⁸の激怒(*prakopa*)を原因とする病(*vikāra*)が知られている。(27)

さて実に、ふさわしい（死ぬべき）時の死とふさわしくない（死ぬべきでない）時の死(*kālākālamṛtyu*)の有無に関しての私の確定した〔見解〕はこのような〔以下の〕ものである²⁰⁹。

「ある者が死ぬ、その者はまさに、時の〔流れの〕なかで死ぬのである。なぜなら、時の〔流れの〕間隙(*kālacchidra*)は存在しないからである。」²¹⁰と、ある者達は言う。

これは正しくない。なぜなら、時にとっては間隙がないということも、あるいは間隙をとまなうということも適当ではないからである。時に特有の本性によって。

これについて、他の者達は言う。「ある者が、ある時死ぬと、その〔時〕は、その者にとっての定められた死の時(*mṛtyukāla*)である。それはあらゆる生物にとっての真実である。〔あらゆる生物に〕一

²⁰⁶CP: 「ここでは *Brahmā* などが著した *Kumāratantra* の教えのこと。そこでは小児の、神などを原因とする病が教えられている。」

²⁰⁷cf. CS Ni 1.3: 「ここ（医学書）では、*hetu*, *nimitta*, *āyatana*, *karṣṇa*, *kaṛaṇa*, *pratyaya*, *samutthāna*, *nidāna* は、意味の異なるものであると〔されている〕。」 cf. Meulenbeld 1974 p.70.

²⁰⁸SS Ut 第60章には、神々、神々の敵(アスラ)、ガンダルヴァ、ヤクシャス、祖霊(*pitr*)、竜(神)(*bhujāṅga*)、ラクシャス、ピシャーチャを原因とする小児の病についての記述がある。

²⁰⁹CP: 「この章においては、*kāla* という語によって、「ふさわしい（適切な）時」(*ucitaḥ kālaḥ*) が、*akāla* という語によって、「ふさわしくない（適切でない）時」(*anucitaḥ akālaḥ*) が示される。」

²¹⁰この主張は、*kālamṛtyu*、*akālamṛtyu* という語を「ふさわしい時の死」、「ふさわしくない時の死」ではなく、「時の〔流れの〕なかでの死」、「時の〔流れの〕なかでではない死」と解釈したものであろう。CP: 「〔時間の間隙は存在しないからである〕とは、時の存在しない隙があり、その時を欠いている時点に関して、*akālamṛtyu* は、「時の〔流れの〕なかでではない死」とする見解である。」

様にあてはまること(*samakriyatva*)だからである。」と。

これもまた、誤った意味の捉え方である。

なぜなら、「死なないものはない」、ということ〔こそ〕が〔あらゆる生物にとって〕一様にあてはまることだからである²¹¹。時（時間）(*kāla*)は、まさに生命の量に関して言われるからである。

また、「ある者が、ある時死ぬと、その〔時〕は、その者にとっての〔定められた〕死の時である。」ということ認める者、その者にとっては、あらゆるものごと²¹²はそれぞれに、定められた時をもつもの(*niyatakāla*)であろう²¹³。

またこれも妥当ではない。なぜなら、明らかに、ふさわしくない時の(*akāla*)食事・言葉・行動の結果は望ましくないものであり、また、その反対のものには、望ましい〔結果〕があるからである。

また実に、それぞれの状態における、ふさわしい時とふさわしくない時の違いは、それぞれの内容を吟味して、明らかに理解される。

たとえば、この〔病人〕の病、食物、薬、治療、排泄にとっては、これがふさわしい時(*kāla*)である。あるいはふさわしくない時(*akāla*)であるというふうに。

また、世間においても、このように〔言われることが〕ある。

ふさわしい時に、神は雨を降らせる。〔あるいは〕ふさわしくない時に、神は雨を降らせる。

ふさわしい時に、寒い。〔あるいは〕ふさわしくない時に、寒い。

ふさわしい時に、暑い。〔あるいは〕ふさわしくない時に、暑い。

ふさわしい時に、花・実ができる。〔あるいは〕ふさわしくない時に、花・実ができるというふうに。

このことから、両者は存在する。ふさわしい時の死と、ふさわしくない時の死とが。

ここで、一つに決められるのではない。

もし、ふさわしくない時の死がないとすると、あらゆる生命は、定められた時間量をもつものになってしまうであろう²¹⁴。

このようであれば、健康・不健康(*hitāhita*)についての知識は、理由のないものになってしまうであろう。

また、全ての論書において、知識手段(*pramāṇa*)であるものであり、これらによって長命であることと長命でないことが理解される直接知覚(*pratyakṣa*)・推量(*anumāna*)・教示(*upadeśa*)は、知識手段ではないことになってしまう。

²¹¹あらゆる生物にとって、「死」は定められているが、「死の時」が定められているわけではないという意味であろう。

²¹²CP: 「食物や言葉など」

²¹³あらゆるものごとは、あらかじめ定められた時に生じるのであり、その時に関して、「ふさわしい時」、「ふさわしくない時」ということはないという意味であろう。

²¹⁴あらゆる生物にはそれぞれに、生きる時間の長さがあらかじめ定められていて、その時間の途中で、「ふさわしくない時に」死ぬということはないということになってしまうという意味であろう。

聖仙達は、「ふさわしくない時の死はない」というこの説を、言葉だけのものと考える²¹⁵。(28)

この時期²¹⁶における生命の量（長さ）(*pramāṇa*)²¹⁷は、実に、100年である。(29)

その〔生命の量を全うする〕原因(*nimitta*)は、〔その人の生まれつきの〕正常さ・性質・アートマンが完全であること(*prakṛtiguṇātmasaṃpad*)²¹⁸と、自分に合ったもの(*sātmya*)を用いることである。(30)

ここに詩節がある。

身体がそのようであるその〔状態〕、それが病(*āmaya*)によって苦しむこと。

²¹⁵CS Vi 3.37-38, 8.43-44、さらにMilindapañho (Trenckner ed. pp.302-309)にもこれと同じテーマに関する議論があり、そこでも「ふさわしい時の死、ふさわしくない時の死のどちらも存在する」という結論が示されている。

cf.CS Vi 3.37: 「(あらゆる生物の生命の時間量（長さ）はあらかじめ定められているという説を否定した後）これに続いて、アグニヴェーシャは言った。尊い方よ。このようであったとしても、時間量の決まっていない生命をもつものたちにとって、どうしてふさわしい時の死(*kālamṛtyu*)あるいはふさわしくない時の死(*akālamṛtyu*)があるのですかと。」

cf.CS Vi 3.38: 「尊いアートレーヤが彼に言った。聞きなさい、アグニヴェーシャよ。乗物に正しく取り付けられ、生まれつきの性質として車軸としての性質をそなえた車軸は、また、あらゆるよい性質をそなえ、動かされつつあるそれは、然るべき時に、自身の〔生命の〕量の尽きることによってのみ停止するように、そのように、身体にそなわった生命は、力強い生まれつきの性質によって、然るべく養生すると、自身の量の尽きることによってのみ停止する。それがふさわしい時における死である。

また、この同じ車軸が、過剰な荷物を載せることによって、平坦でない道〔を通ること〕によって、道がない〔ところを通る〕ことによって、車軸の輪が壊れることによって、運ばれるものと運び手の過ちによって、ねじがはずれることによって、付属物がないことによって、転倒することによって、途中で停止するように、そのように、生命もまた、無理な企てによって、〔消化の〕火にふさわしくない〔食物の〕摂取によって、不規則な〔食物の〕摂取によって、正しくない身体の姿勢によって、過度の交わりによって、よくないことに耽けることによって、排泄を抑えることによって、抑えるべき排泄を抑えないことによって、魔物(*bhūta*)・毒・風(*vāyu*)・火に苦しめられることによって、怪我によって、食物や治療を避けることによって、途中で停止する。これが、ふさわしくない時における死である。同様に、誤った手当てをされた熱病などの病も、ふさわしくない時における死〔の原因〕であるとみなす。」

²¹⁶CP: 「カリユガのこと」

²¹⁷ここでは人間の寿命の上限という意味であらう。

²¹⁸*prakṛtiguṇātmasaṃpad*について、CPは2通りの解釈を示す。CP: 「*prakṛtisaṃpad*は、ヴァータなどの均衡状態である。均衡のとれた*prakṛti*をもつ者は、長寿である。*guṇasaṃpad*は、力、壮健さなど生命のもつ特徴に結び付くことである。..... あるいは、*prakṛtiguṇasaṃpad*ととれば、父母など〔から得たもの〕としての*prakṛti*の性質(*guṇa*)が完全であることである。」

〔身体が〕痛みと破滅に至ること。また、その〔身体の〕諸要素(*dhātu*)であるもの、それらの増減と、減少した〔諸要素〕にとっての薬であるもの。身体を増大をもたらすものと、体力を増大をもたらすもの。(31-32)

消化をもたらすもの、それらの別々の働き。

不浄なもの(*mala*)と言われる、また清浄なもの(*saṃprasāda*)と言われる諸要素(*dhātu*)と、9つの質問とその答が、相応しく、身体の考察〔についての〕シャーリーラにおいて、最高の聖仙によって、真理にしたがって示された。(33-34)

以上が、アグニヴェーシャが作ったタントラの、チャラカが改訂したシャーリーラスターナにおける、「身体の考察」〔についての〕シャーリーラという名の第6章である。

第7章

さてこれより、「身体の数」(*śarīrasaṃkhyā*) [についての] シャーリーラ [の章] を述べようと、尊いアートレーヤは言った。(1-2)

身体の数えを、それぞれの部分に全身を分割して、全ての〔部分の〕身体の数と量の知識〔を得る〕ために、アグニヴェーシャは尊いアートレーヤにたずねた。(3)

尊いアートレーヤは彼に言った。質問に応じて、全ての身体〔の数と量〕について述べる〔わたしの見解を〕集中して、正しく、私から聞きなさい。アグニヴェーシャよ。

身体には6種の皮膚がある。すなわち、外側の皮膚は、水を保つ(*udakadharā*) [皮膚]、2番目は、血を保つ(*asṛgdharā*) [皮膚]、3番目は、シドゥマ(*sidhma*)²¹⁹、キラース(*kilāsa*)²²⁰が生じる場である[皮膚]、

4番目は、ダドルー(*dadrū*)²²¹、クシュタ(*kuṣṭha*)²²²が生じる場である[皮膚]、

5番目は、アラジー(*alajī*)、ヴィドラディ(*vidradhi*)²²³が生じる場である[皮膚]、

6番目の[皮膚]は、それが切れると呼吸困難となり、盲目[の人]のように[視界が]暗黒となる。また、関節(*parva*)に[生じ]黒い血をもち、大きな根をもつ治療困難なできもの(*arus*)²²⁴が、

²¹⁹重篤な皮膚病であるクシュタ(*kuṣṭha*)の1種。CS Ni 5.7.6:「粗く、赤く、外[形]が不明瞭で、小さく、内部は粘性で、白と赤の光沢をもち、[数]多く[あらわれ]、痛みは少なく、かゆみは少なく、灼熱感・膿・浸出液があり、速やかに現われ、割れたり、虫[がつくこと]は少なく、ひょうたん(*alābu*)の花に似るものを *sidhmakuṣṭha*と知るべきである。」cf. CS Ci 7.19, 28.

²²⁰CS Ci 7.173-174:「*kilāsa*には *dāruṇa*, *aruṇa*, *śvitra* という3種の名前がある。この3種が識別されるべきである。主に3つの病素[から生じる]ものである。病素が血にある場合には赤く、肉にある場合には銅色で、脂肪にある場合には白くなり、[この]順に重篤となる。」

²²¹重篤な皮膚病であるクシュタ(*kuṣṭha*)の1種。CS Ci 7.23cd:「かゆみ・赤色を伴った丸い腫れものが現われるものが *dadru* である。」

²²²重篤な皮膚病の総称。CS Ni 第5章では7種、CS Ci 第7章ではこの7種にさらに11種を加えて18種の *kuṣṭha* が分類されている。*dadrū*/*dadru* は、CS Ci 7.23 では *kuṣṭha* の1つに含まれている。従って、ここでは「ダドルー[という]クシュタ」と読むべきかも知れない。

²²³*alajī* と *vidradhi* は、7種の重篤な腫れもの(*piḍakā*)のうちに含まれる。(cf. CS Sū 17.82-83) CS Sū 88:「*alajī* は、生じた際には皮膚を焼き、渴き・失神・熱をおこし、持続して動き回り、苦しみによって、火のような灼熱感をあたえる。」CS Sū 17.90:「*vidradhi* は2種類であると言われる。外部[に生じる]ものと内部[に生じる]ものである。外部[に生じる]ものは、皮膚・韌帯(*snāyu*)・肉に生じ、腱(*kaṇḍarā*)に似て、大きな痛みを生じる。」CS Sū 17.93-95:「身体内部の肉・血に汚物(*mala*)が入って行くと、その時、[身体の]深いところにたいへん恐ろしい結節(*granthī*)が生じ、心臓、肺、肝、脾、腹部、腎、臍部、あるいは鼠蹊部、あるいは膀胱に激しい痛みが[生じる]。汚れた血が大変多いことによって、その[結節]は、速やかに焼かれる。このことから、速やかに燃えることから *vidradhi* と呼ばれるのである。」

²²⁴cf. CS Sū 28.17-18a:「関節の痛み、めまい、失神、視界が暗黒となること、関節に生じ(*parvaja*)、大きな

ここを拠り所として生じる。

以上が6種の皮膚である。これら6つの部分をもつ[皮膚]が身体を覆って存在している。(4)

ここ[アーユルヴェーダ]では、これが[身体]部分の区分である。

すなわち、2本の上肢、2本の下肢、頭と首、間の部位[胴体](*antarādhi*)、以上が6つのそれぞれの部分である。(5)

歯槽(*dantolūkhala*)と爪(*nakha*)とともに、360の骨(*asthi*)がある。すなわち、歯(*danta*)は32、歯槽は32、爪は20、手と足の指の骨(*pāṇipādāṅgulyasthi*)は60、手と足の棒状骨(*pāṇipādaśalāka*)は20、手と足の棒状骨の基部(*pāṇipādaśalākādhiṣṭhāna*)は4、両かかと(*pārṣṇī*)にある骨は2、両足にあるくるぶし(*gulpha*)は4、両手にある手首(*maṇḍika*)は2、両肘(*aratnī*)にある骨は4、両脛(*janigha*)にある[骨は]4、両膝(*jānu*)は2、両膝蓋(*jānukapālika*)は2、両大腿の長骨(*ūrunalaka*)は2、両腕の長骨(*bāhunlaka*)は2、両肩(*aṃsa*)は2、肩甲(*aṃsaphalaka*)は2、鎖骨(*akṣaka*)は2、顎の基部(*jaṭru*)は1、口蓋(*tāluka*)は2、腰部(*śroṇi-phalaka*)は2、陰部の骨(*bhagāsthi*)は1、背中(*prṣṭha*)にある骨は45、首(*grīva*)にある[骨は]15、胸(*uras*)にある[骨は]14、両肋部(*pārśva*)には24の肋骨(*parśuka*)、背部の骨(*sthāla*)は同数(24)、また背部の骨の突起(*sthālakārbuda*)も同数(24)のみ、顎骨(*hanvasthi*)は1、顎の根元の結合(*hanumūlabandhana*)は2、鼻(*nāsikā*)・頬(*gaṇḍa*)・頬の突出(*kūṭa*)・額(*lalāṭa*)は1つの骨、こめかみ(*śarikha*)は2、頭蓋(*śiraḥkapāla*)は4である。歯槽と爪を含め、以上が360の骨である。(6)

5つの感覚器官(*indriya*)の拠り所(*adhiṣṭhāna*)がある。すなわち、皮膚、舌、鼻、両目、両耳である。

5つの知覚器官(*buddhindriya*)がある。すなわち、触覚器官、味覚器官、嗅覚器官、視覚器官、聴覚器官である。

5つの運動器官(*karmendriya*)がある。すなわち、両手、両足、肛門、生殖器、舌である。(7)

心臓(*hṛdaya*)は1つの精神性(意識)(*cetanā*)の拠り所である。(8)

10のプラーナの在所(*prāṇāyatana*)がある。

すなわち、頭部(*mūrdhan*)、喉(*kaṇṭha*)、心臓(*hṛdaya*)、臍(*nābhi*)、腸(*guda*)、膀胱(*basti*)、オージャス(*ojas*)、精液(*śukra*)、血(*śoṇita*)、肉(*māṃsa*)である²²⁵。

根をもつできもの(*arus*)が見られることは、髄の汚れによるものである。」CPは、*arus*すなわち *vraṇa* であるとする。

²²⁵CS Sū 29.3でもプラーナの在所(*āyatana*)は10としているが、それらは両こめかみ(*śankha*)、3つの急所(*marman*) (心臓、膀胱、頭)、喉、血、精液、オージャス、腸であるとしており、ここで挙げられている臍と肉を挙げずに、両こめかみを入れている。

これらのうち、最初の6つは急所(*marman*)に数えられる。(9)

15の内臓(*koṣṭhāṅga*)がある。

すなわち、臍(*nābhi*)、心臓(*hṛdaya*)、肺(*kloman*)²²⁶、肝(*yakṛt*)、脾(*plīhan*)、腎〔2つ〕(*vṛkka du.*)、膀胱(*basti*)²²⁷、便臓器(*purīṣādhāra*)、未消化物臓器(*āmāśaya*)、消化物臓器(*pakvāśaya*)、上腸(*ut-taraguda*)²²⁸、下腸(*adharaguda*)²²⁹、小腸(*kṣudrāntṛa*)、大腸(*sthūlāntṛa*)、大網(*vapāvahana*)²³⁰である。(10)

6つの〔大きな身体〕部分に付属した56の小部分(*pratyāṅga*)がある。

これら、以前に〔大きな身体〕部分が列挙されたところにおいては列挙されなかったもの、それらが、ここで異なった方法によって明らかになる。

すなわち、

2つのふくらはぎ(*janighāpiṇḍika*)、2つの腿の盛り上り(*ūrupiṇḍika*)、2つの臀部(*sphic*)、2つの睾丸(*vṛṣaṇa*)、1つの陰茎(*śepha*)、2つの腋窩(*ukha*)²³¹、2つの鼠蹊部(*varighaṇa*)、2つの腰部のくぼみ(*kukundara*)²³²、1つの下腹部(*bastiśīrṣa*)²³³、1つの腹(*udara*)、2つの乳(*stana*)、2つの口蓋扁桃部(*śleṣmabhū*)²³⁴ 2つの腕の肉の盛り上り(*bāhupiṇḍika*)、1つのおとがい(*cibuka*)、2つの口唇(*oṣṭha*)、2つの口角(*śṛkkaṇṭ*)²³⁵、2つの歯ぐき(*dantaveṣṭaka*)、1つの口蓋(*tālu*)、1つの口蓋垂(*galasūṇḍikā*)、2つの舌下部?(*upajihvikā*)²³⁶、1つの軟口蓋?(*gojihvikā*)²³⁷、2つの頬(*gaṇḍa*)、2つの耳の孔(中耳)(*karṇaśaṣkulika*)²³⁸、2つの耳たぶ(*karṇaputraka*)²³⁹、2つの眼窩縁(*akṣikūṭa*)²⁴⁰、

²²⁶CP: 「*kloma*は、渴きの場 *pīpāsāsthāna* である。」

²²⁷CP: 「*basti*は尿臓器(*mūtrāśaya*)である。」

²²⁸CP: 「*uttaraguda*は、そこに便が降りてくる〔ところ〕。」

²²⁹CP: 「それによって便が排泄されるもの、それが *adharaguda* である。」

²³⁰CP: 「*vapāvahana*は脂肪の場(*medaḥsthāna*)であり、*tailavartikā*と言われる。」

²³¹CP: *ukhe iti kakṣaśiropārśvayor nīmnabhāgau.*

²³²CP: *kukundarau sphicor upari unnatabhāgau.*

²³³CP: *bastiśiro nābher adhaḥ.*

²³⁴CP: *śleṣmabhuvau kaṇṭhasya pārśvayor vyavasthitau kaṭhinau bhāgau.*

²³⁵CP: *śṛkkaṇyau vadanānte.*

²³⁶CP: *dve upajihvike iti jīhvāyā adhogatā jīhvā tathā uparigatā grāhyā.*

²³⁷CP: *ekā gojihviketi gaurvāk, tasyāḥ kāraṇabhūtā jīhvā gojihvā.*

²³⁸CP: *karṇaśaṣkulike karṇagatāvartakau.*

²³⁹CP: *karṇaputrakau tu bāhyakarṇāu eva.*

²⁴⁰CP: *adsikūṭake akṣigolake.*

4つの眼瞼(*akṣivartman*)、2つの瞳(*akṣikanīnika*)²⁴¹、2つの眉(*bhrū*)、1つのうなじ(*avaṭu*)²⁴²、4つの手掌・足掌(*pāṇipādahṛdaya*)²⁴³。(11)

大きな孔(*chidra*)は9つである。7つは頭部にあり、また2つは下〔半身〕にある。(12)

以上〔に述べた〕ものは見えるもの、指摘することもできるものである。(13)

これ以下〔に述べる〕ものは指摘されず(*anirdeśya*)、推量される(*tarkya*)にすぎないものである。

すなわち、

靱帯(*snāyu*)は900、

シラー管(*sirā*)は700、

ダマニー管(*dhamanī*)は200、

筋(*peśi*)は400²⁴⁴、

急所(*marman*)は107、

関節(*saṃdhi*)は200、

微小に分けられているシラー管とダマニー管の末端の数量は29956、

髪(*keśa*)・髭(*śmaśru*)・体毛(*loma*)も同数(29956)である。

このように、皮膚をはじめとする見えるものが、正しく列挙され、さらに、推量されるもの〔も列挙された〕。この兩種とも、変化することはない。身体の生まれつきの状態(*prakṛtibhāva*)であるからである。(14)

さて、掌〔の容量〕(アンジャリ)(*añjali*)によって数えられるべきもの、それを示そう。それは優れた基準量であると認識されるべきである。またそれは増・減と結び付いており、推理されるだけのものである。

すなわち、

身体内には、〔その人〕自身の掌を基準量として、10アンジャリの水(*udaka*)がある。

排出する便に、同様に尿、血、またほかの身体要素に過剰に結び付いているもの、また、外側の皮膚²⁴⁵が保持する全身を移動するもの、また、皮膚の内部にある傷(*vraṇa*)に含まれる、漿液(*lasikā*)²⁴⁶

²⁴¹CP: *dve akṣikanīnike ity atra kanīnikāśabdena nāsāyāḥ samam akṣisandhir abhidhīyate.*

²⁴²CP: *avaṭuḥ ghāṭā.*

²⁴³CP: *catvāri pāṇipādahṛdayānīti pāṇyoḥ pādayoś ca talāni madhyāni catvārīṭy arthaḥ.*

²⁴⁴「筋(*peśi*)は500」とする異読もある。

²⁴⁵本章第4節によれば、「外側の皮膚」は、水を保つ(*udakadharā*)〔皮膚〕である。

²⁴⁶AS Śā 6.65-66 では老廃物(*mala*)の一つとされる。Meulenbeldは‘serous fluid’と訳す。cf.Meulenbeld 1974

という名を得るもの、また、熱と結びついて毛穴から出て行く、汗という名を得るもの、それが10アンジャリ量の水である。

食物が変化したものである最初の〔身体〕要素は9アンジャリ、それを〔人は〕滋味(*rasa*)と称する。

血は8アンジャリ、

便は7アンジャリ、

シュレーシュマン(*śleṣman*)は6アンジャリ、

ピッタ(*pitta*)は5アンジャリ、

尿は4アンジャリ、

〔肉の中の〕脂肪(*vasā*)²⁴⁷は3アンジャリ、

脂肪(*medas*)は2アンジャリ、

髄(*majjā*)は1アンジャリ、

脳(*mastiṣka*)²⁴⁸半アンジャリ、

精液(*śukra*)は同量(半アンジャリ)のみ、

粘液性のオージャス(*ślaiṣmikaṁ*)²⁴⁹は同量(半アンジャリ)のみ。

このように身体そのもの(*śarīratattva*)が述べられた。(15)

この〔身体の〕うち、特に、粗大な(*sthūla*)、堅固な(*sthira*)、物質的形態をもつ(*mūrtimat*)、重い(*guru*)、粗い(*khara*)、固い(*kathina*)部分である、爪、骨、歯、肉、皮膚、便、髪、髭、体毛、腱などと、香り(*gandha*)と嗅覚器官(*ghrāṇa*)とは地性のもの(*pārthiva*)である。

流動性(*drava*)、液状(*sara*)、遅い(*manda*)、粘性(*snigdha*)、柔らかい(*mṛdu*)、粘着性の(*picchila*)、滋味(*rasa*)、血、脂肪、カパ(*kapha*)、ピッタ(*pitta*)、尿、汗など、これらと味(*rasa*)と味覚器官(*rasana*)とは水性のもの(*āpya*)である。

ピッタ(*pitta*)、熱(*ūṣman*)、身体にある光輝(*bhā*)、これら全てと色形(*rūpa*)と視覚器官(*darśana*)とは火性のもの(*āgneya*)である。

p.489.

²⁴⁷CP: *vasā māṁsasnehaḥ*.

²⁴⁸CP: *mastiṣkaḥ śīrogatasnehaḥ*.

²⁴⁹cf. CP on CS Sū 17.73-75: 「…他の学派では次のように言われている。「氣息(*prāṇa*)の拠り処であるオージャスは八滴で心臓に位置する」と。この八滴は究極のオージャスであると知るがよい。しかし掌半分の量のオージャス〔といわれるものがあるが、それ〕は究極のものではない。シャーリーラ〔スターナ〕で、「粘液性のオージャスは同量(半アンジャリ)のみ」と言われるのがそれである。すなわちオージャスに二種類ある。したがって「心臓に根をもつ十の大脈管に関する章」(CS Sū 第30章)において、「それが最も重要なオージャスの位置である」と言われるが、「最も重要な」とは八滴のという意味である。ここで掌半分のオージャスは減するという特徴をもっている。しかし八滴のオージャスの場合はその一滴でも減すれば人は死ぬ。…」(矢野訳) CS Śā 4.24およびその訳注参照。

呼気(*ucchvāsa*)、吸気(*praśvāsa*)、開眼(*unmeṣa*)、閉眼(*nimeṣa*)、屈曲(*ākuñca*)、伸展(*prasāraṇa*)、進行(*gamana*)、発動(*preraṇa*)、把持(*dhāraṇa*)など²⁵⁰、これらと、触(*sparsā*)と触覚器官(*sarśana*)とは風性のもの(*vāyavīya*)である。

空隙(*vivikta*)、大きなまた微小な脈管(*srotas*)といわれるもの、これらと、音声(*śabda*)と聴覚器官(*śrotra*)とは空性のもの(*āntarikṣa*)である。

行為者(*prayoktṛ*)²⁵¹であるもの、これと、ブッディ(*buddhi*)とマナス(*manas*)とは、もつとも重要なもの(*pradhāna*)である。

このように、それぞれの粗大な区分(*sthūlabheda*)によって、各部位の身体部分の数が示された。(16)

一方、身体部分は、極微の区別(*paramāṇubheda*)によっては列挙され得ない。非常に多いことから、また非常に微細であるから、また超感官性であることから。これらの極微の合・離における原因(*kāraṇa*)は、風(*vāyu*)と行為の本性(*karmasvabhāva*)とである。(17)

単一性(*ekatva*)によって見られた、このように多くの部分を列挙された身体は、執着(*saṁga*)であり、別異性(*pr̥thaktva*)によって〔見られた身体は〕、解放(解脱)(*apavarga*)である。このうち執着しない(*asakta*)、もつとも重要なもの(*pradhāna*)は、あらゆる有性の滅(*sarvasattānivṛtti*)において滅すると〔言われる〕。(18)

ここに2つの詩節がある。

身体の数をして各々の部分について知る医師、

その〔医師〕はこの〔身体の数〕の無知を原因とする迷妄によって束縛されることはない。(19)

迷いのないものは、迷妄の根によって、また欠陥(*doṣa*)によって圧倒されない。

欠陥のない、欲のない、静寂な、再び生じないものは静穏となる。(20)

以上が、アグニヴェーシャが作ったタントラの、チャラカが改訂したシャーリーラスターナにおける、「身体の数」〔についての〕シャーリーラという名の第7章である。

²⁵⁰cf. VS 3.2.4: *prāṇāpānanimeṣonmeṣajīvanamanogatīndriyāntaravikārāḥ sukhaduḥkhe icchāduṣṣau prayatnaś cety ātmaliṅgāni*. cf. VS 1.1.6: *utkṣepaṇam avakṣepaṇam ākuñcanaṁ prasāraṇaṁ gamanam iti karmāṇi*.

²⁵¹CP: *prayoktṛ iti yac charīrādiprerakaṁ cetanam*.

第8章

さてこれから、「誕生のストトラについて」のシャーリーラ〔の章〕を述べようと、尊いアートレーヤは言った。(1-2)

優れた子孫(*prajā*)を欲する、損なわれていない精液(*śukra*)、血(*śonita*)、子宮(*garbhāśaya*)をもつ男女の、その目的の達成をもたらす行動を示そう。(3)

さてこの女性と男性のふたりに、油性のもの(*sneha*)と発汗(*sveda*)〔させるもの〕を与え、嘔吐法(*vamana*)、浄化法(*virecana*)によって清め、順に本来の状態(*prakṛti*)に至らせるべきである。そして清められたふたりを水性浣腸(*āsthāpana*)と油性浣腸(*anuvāsana*)²⁵²とによって手当すべきである。また、男性に対しては、甘味のもの²⁵³と薬を混ぜたギー(*ghṛta*)と牛乳(*kṣīra*)によって世話をすべきであり、一方女性に対しては、ゴマ油と豆類(*māṣa*)によって〔世話をすべきである〕。(4)

そして、月経から3日間、梵行にあり、地面に臥し、食物を両手で、欠けていない器から食べた〔女性〕は、決して〔身体各部を、あるいは全身を、〕²⁵⁴清めるべきではない。

そして、4日目にこの〔女性〕と男性とに塗油し(*utsādyā*)、頭から沐浴させ、白い衣服を着せるべきである。

そして、白い衣服を着て、花輪をつけた、安楽な、互いに愛情を抱くふたりは交わるべきである。息子を欲するふたりは沐浴(の日)から〔数えて〕偶数番目の日に。娘を欲するふたりは奇数番目の日に〔交わるべきである〕。(5)

また、〔女性は、〕うつ伏せ(*nyubja*)あるいは側臥(*pārsvagata*)をなすべきではない。

うつ伏せによって、力をもつ、そのヴァータが、母胎(*yonī*)を損なう〔からであり〕、右脇を下にする側臥によって、移動した、そのシュレーシュマンが子宮(*garbhāśaya*)を閉じる〔からであり〕、左脇を下にする側臥によってその彼女の押えつけられた、そのピッタが、血と精液とを焼く〔からである〕。

このことから、仰臥〔をなす女性〕が、精子(*bīja*)を受け入れるべきなのである。なぜなら、〔仰臥であれば〕病素(*doṣa*)は、ふさわしい位置に留まるからである。

そして、〔交わりが〕²⁵⁵終了したときに、この女性に冷水をふりかけるべきである。

ここで、過食の女性、空腹な女性、渴いている女性、恐れている女性、愚かな女性、悲しみに苦しん

²⁵²水性浣腸(*āsthāpana*)と油性浣腸(*anuvāsana*)についてはMeulenbeld 1974 p.481 参照。

²⁵³CP:「甘味ものは特に精液の増進に働くからである。」

²⁵⁴CPに従って補う。

²⁵⁵CPに従って補う。

でいる女性、怒っている女性、また、他の男性を好む女性、交わりを過度に好む女性は、胎児を身籠ることはない。あるいは、美德のない子孫を生じさせる。

非常に若い女性、非常に年老いた女性、永く病気を患っている女性、あるいは、他の病気(*vikāra*)によって²⁵⁶苦しめられている女性を避けるべきである。

男性に関してもこれらはまさに欠陥(*doṣa*)である。

このことから、一切の欠陥のない男女が、交わるべきなのである。(6)

よろこびの生じた、好意をもつふたりは、交わりのときに、心地よい香りの、よく広げられた、快適な心楽しい寝所(*śayana*)を用意し、よい食物を摂り、食べ過ぎずに、男性は右足によって、女性は左足によって〔寝所に〕²⁵⁷上がるべきである。(7)

ここで、マントラを唱えるべきである。

「汝は蛇である。汝は生命である。汝は完全に支えるものである。維持者(*dhātṛ*)は汝に与えよ。分配者(*vidhātṛ*)は汝を定めよ。〔汝は〕神聖さ(*brahmavarcaś*)を具えるべきである。」²⁵⁸と。「ブラフマン、ブリハスパティ、ヴィシュヌ、ソーマ、スーリヤ、同様にアシュヴィン、ヴァガ、そしてミトラヴァルナは、私に勇気ある息子を与えよ。」²⁵⁹と言って、ふたりは交わるべきである。(8)

もしこの女性が、「大きく、清浄な、ライオン〔のような〕オージャス(*ojas*)をもつ、輝かしい性格(*sattva*)をそなえた息子を私は欲する。」と、このように望むとすると、清浄な沐浴から始めて、この女性のために、清浄な大麦のマンタ(*mantha*)²⁶⁰に蜜とサルピスとを混ぜ、同じ色の子牛をもつ白い牛の乳とともに混和し、銅あるいは白銅の器で、7日間時々、続けて、飲用のために与えるべきである。

また、朝には、シャーリ米と大麦の食料を調理したもの(*annavikāra*)に、濃い酸乳(*dadhi*)²⁶¹、蜜、サルピスあるいは牛乳を混ぜて摂るべきである。同様に夕方には、清浄な(*avadāta*)家、寝所、座具、装飾品を〔用いるべきである〕。

朝と夕方には、常に、白く大きな良種の雄牛を、あるいは、白檀の腕輪を見るべきである。

またこの女性に吉祥な心楽しい物語(*kathā*)をすべきである。気持ちのよい姿・言葉・行いの男女を、

²⁵⁶CP:「クシュタなど嫌われる病気によって」

²⁵⁷CPに従って補う。

²⁵⁸原文は次の通り。 *ahir asi āyur asi sarvataḥ pratiṣṭhā 'si dhātā tvā dadatu vidhātā*

tvā dadhātu brahmavarcaśa bhava.

²⁵⁹原文は次の通り。 *brahmā bṛhaspatir viṣṇuḥ somaḥ sūryas tathā 'śvinau/*

bhago 'tha mitrāvaruṇau vīram dadatu me sutam//

²⁶⁰マンタ(*mantha*)は、煎った大麦の粉を混ぜた牛乳。

²⁶¹*dadhi*についてはMeulenbeld 1974 pp.468-469 参照。

また、ほかの清浄な感覚器官の対象を見るべきである。

またこの女性に対して、女友達、同様に夫は、喜ばしいことと有益なことを常になすべきである。

〔この男女〕ふたりは、〔この時期には〕交わるべきではないと〔言われる〕。

この決まりによって7夜を過ごし、8日目に、夫とともに頭から水で沐浴し、新しい清浄な(*avadāta*)²⁶²衣服を着るべきである。また清浄な(*avadāta*)花輪と装飾品とをつけるべきである。(9)

そして祭官(*ṛtvij*)は、東北の方角にある家の、東に傾斜した、あるいは北に傾斜した場を考慮して、牛糞と水とで地面を塗り、そして水を撒いて、この場に祭壇(*vedi*)を置かせるべきである。

その〔祭壇の〕東で、ブラーフマナに〔息子の供儀のために〕²⁶³請じられた〔祭官〕は、新しい衣服を重ねたものに、あるいは白い雄牛の〔皮に〕、あるいはまた、かもしかの皮(*ajina*)に座るべきであり、

また王族によって請じられた〔祭官〕は、虎の皮にあるいは雄牛の〔皮に〕〔座るべきであり〕、

またヴァイシヤ(*vaiśya*)によって請じられた〔祭官〕は、鹿の一種(*ruru*)の〔皮に〕、あるいは山羊の〔皮に〕〔座るべきである〕。

そこに座った者は、パラーシャ(*palāśa*)、あるいはイングディ(*irigudi*)、ウドウンバラ(*udumbara*)、マドゥーカ(*madhūka*)〔という木〕の薪によって火をつけ、クシャ草(*kuśa*)によって覆い、そして、祭火を囲む木片(*paridhi*)²⁶⁴をまわりに置き、清浄な乾燥した穀物(*lāja*)と、香りのよい、花を撒くべきである。

ここに、〔マントラによって〕²⁶⁵清められた水壺をもって行き、アージュヤ(*ājya*)²⁶⁶のためにサルピスを調べ、しかるべく述べられた色の良種の〔馬〕などをまわりに置かせるべきである。(10)

そして息子を望む〔女性〕は、祭火(*agni*)に対して西、ブラーフマナに対して南に座り、望んでいる〔女性は〕夫とともに、望み通りの息子を得るであろう。

そして、この望んでいる女性の母胎(*yonī*)において、祭官はプラジャーパティを示して、この女性の望みを達成するために、望みをかなえる祭式(*kāmyā iṣṭi*)を行うべきである。「ヴィシュヌは母胎を調べよ」²⁶⁷というこの讃歌(*ṛc*)によって。

そしてまた、アージュヤ(*ājya*)を、〔供物として牛乳とともに鍋のなかで煮られた〕大麦または米の料理(*sthālipāka*)にそそぎ、3回捧げるべきである。聖典(*āmnāya*)にしたがって。

²⁶² *avadāta*には、「清浄な」と「白い」の両義がある。

²⁶³ CPに従って補う。

²⁶⁴ CP:「祭火を囲む木片(*paridhi*)とは、4本のパラーシャ(*palāśa*)〔という木の〕大きな棒のこと。」

²⁶⁵ CPに従って補う。

²⁶⁶ CP:「アージュヤ(*ājya*)とはマントラで清められるギー(*ghṛta*)のこと。」

²⁶⁷ 原文は、*viṣṇur yoniṁ kalpayatu*. (Rgveda 10.184の冒頭部分)

マントラを唱えた水壺をこの女性に与えるべきである。「全ての水の儀礼を為せ」と〔言って〕。

そして、〔儀礼の〕行為が終了すれば、まず、右足を持ち上げつつ、右まわりに祭火をまわるべきである。夫とともに。

そして、ブラーフマナたちに宜しく言葉をかけて、アージュヤの残りを食すべきである。はじめに男性が、後に女性が。〔アージュヤの〕残りを残すべきではない。

そしてふたりはともに、8夜をともに過ごすべきであり、ふたりはしかるべき種類の衣類(*paricchada*)をつけるべきである。〔そして〕ふたりは望み通りの息子を生むであろう。(11)

一方、ある女性が、色黒で、赤い目をもち、巾の広い胸をもち、長い腕をもつ息子を望むのであれば、あるいはある女性が、黒く柔らかく長い髪をもち、白い目をもち、白い歯をもち、気力(*tejas*)をそなえ、自制心のある〔息子を望むのであれば〕、このどちら〔の女性〕にとっても、この祭式の規定(*homavidhi*)が〔なされるべきである〕。

ただし、身の回りのもの(*paribarha*)²⁶⁸の色は除いて。望みにしたがって、このふたりの他の身の回りのものは、息子の〔体の〕色に一致したものにすべきである。(12)

一方、シュードラ(*sūdra*)の女性は、神、祭火、バラモン、師匠、苦行者、聖者(*siddha*)に対して、敬礼(*namaskāra*)のみをなすべきである²⁶⁹。(13)

それぞれの女性がそれぞれの種類の息子を望んでいるならば、その各女性の、様々な息子への望みを考慮して、それぞれの〔望みにかなう〕種族(*janapada*)を心(*manas*)で巡礼すべきである。

そして、各女性が、様々な人々の種族のうちで、似た姿の息子を望むならば、その各女性は、そのそれぞれの人々の種族の食事、楽しみ(*vihāra*)、行い、服装に従えと、述べられるべきである。とこのように、この息子を望む者に繁栄をもたらす、全ての行いが述べられた。(14)

しかし、これのみが、〔体の〕色の違いをもたらす行いではない。また一方、〔身体内の〕火(*tejas*)の要素(*dhātu*)も、水(*udaka*)、空(*antarikṣa*)の要素も、主に白い色をもたらすものであり、地(*pṛthivī*)、風(*vāyu*)の要素は、主に黒い色をもたらすものであり、均等なあらゆる要素は、青い(*śyāma*)色をもたらすものである。(15)

性格(*sattva*)の違いをもたらすものは、それぞれの人々の父と母の性格、妊婦が繰り返し聞いたこと、自分にふさわしい行為、性格の特殊性〔による行為〕を繰り返しおこなうことである²⁷⁰。(16)

²⁶⁸ CP:「寝台、椅子、花など」

²⁶⁹ CP:「シュードラの女性に、*homa*と*mantra*は相応しくないからである。」

²⁷⁰ CP:「妊婦が歌などを聞くと、それに応じた性格をもつ子が生まれる。」「〔前世の〕行為〔による〕自分の

述べられた通りの規則によってととのえられた身体をもつ女性と男性が、交わったならば、損なわれていない精液(*śukra*)は、損なわれていない血(*soṇita*)との結合し、損なわれていない母胎(*yonī*)にある汚されていない子宮(*garbhāśaya*)において、完全に、胎児を生じさせる。あたかも、汚れのない、よく調えられた布に、ある特質をそなえた染料が、滴下されることによって、染物を作るように。あるいは、あたかも、濃い酸乳(*dadhi*)と一緒に圧搾された牛乳は、自身の性質を捨てて、濃い酸乳の性質を得るように、精液(*śukra*)も同様である。(17)

このように生まれつつある胎児の、女性〔あるいは〕男性であることについての原因は、以前に²⁷¹述べられた。

実に、損なわれていない、植え付けられた種子が、それぞれ自分の生まれつきの性質(*prakṛti*)に従うように、あるいは、米は米であること(*vrihitva*)に〔従うように〕、あるいは、麦は麦であること(*yavatva*)に〔従うように〕、そのように、女性と男性も、述べられた通りの原因の相違(*hetuvibhāga*)に従う。(18)

この〔男女〕ふたりの〔アーユル〕ヴェーダにおいて述べられた〔なすべき〕行い(*karma*)によって〔もたらされる〕、〔胎児の性が〕あきらかになる以前の、〔胎児の性の〕分化(*vivartana*)が適切に、正しく示される。

なぜなら、適切な場所と時に行われた行為(*karma*)には、常に望ましい果報があり、同様にそれとは異なる〔行為〕には、それとは異なる〔果報がある〕からである。

このことから、胎児を得た(妊娠した)女性を見て、胎児の〔性が〕あきらかになる以前に、彼女のために、男子の出生をもたらす儀礼(*pūṃsavana*)を行わせるべきである。

牛のいるところに生じたニヤグローダ(*nyagrodha*)の北西〔方向に生えた〕枝から、損なわれていない2つのつぼみ(あるいは若葉)(*śunigā*)を取り、2つの良い〔性質を〕そなえた、穀物と豆か、あるいは白芥子(*gaurasarṣapā*)とを濃い酸乳(*dadhi*)に加えて、〔月が〕プシュヤ(*puṣya*)星宿〔にある時〕に飲むべきである。

同様に、他のジューヴァカ(*jīvaka*)、リシャバカ(*ṛṣabhaka*)、アパーマールガ(*apāmārga*)、サハチャラ(*sahacara*)の練物(*kalka*)を望みに応じて、

同時に、あるいは1つずつ、牛乳(*payas*)と混和し、壁の虫(*kuḍyakīṭaka*)あるいは小魚(*matsyaka*)を、1アンジャリの水に加えて、〔月が〕プシュヤ星宿〔にある時〕に飲むべきである。

同様に、金、銀、鉄ででた、火の色をした、非常に小さい人間の形をしたものを、1アンジャリの濃い酸乳、あるいは牛乳(*payas*)、あるいは水に加えて、残らず〔月が〕プシュヤ星宿〔にある時〕に飲むべきである。

果報に応じた性格が、胎児によって得られる。」「人が前世において〔繰返し〕為した、そのような種類の性格、それと同様な性格をもつ者が生まれる。」

²⁷¹CS Śā 2.11

また、まさに〔月が〕プシュヤ星宿〔にある時〕に、調理されているシャーリ米の粉の熱気を嗅いで、そして、その同じ水と混ぜた粉のエッセンス(*rasa*)を戸口に置き、右の鼻の孔に、綿花によって、自分で、灌ぐべきである。

また他にも、バラモンあるいは信頼すべき女性が述べた、望ましい男子の出生をもたらす儀式(*pūṃsavana*)、それもなされるべきである。

以上が、男子の出生をもたらす儀式(*pūṃsavana*)である。(19)

これより、胎児の保持(*garbhassthāpana*)について述べる。アインドリー(*aindri*)、ブラーフミー(*brāhmī*)、シャタヴィーリヤー(*śatavīryā*)、サハスラヴィーリヤー(*sahasravīryā*)、アモーガー(*amoghā*)、アヴィヤター(*avyathā*)、シヴァー(*śivā*)、アリシュター(*ariṣṭā*)、ヴァードヤプシュピー(*vādyapuṣpī*)、ヴィシュヴァクセーヴァカーンター(*viśvakṣevakāntā*)以上これらの薬草を、頭あるいは右手で保つこと。また、これらの〔薬草〕とともに煮られた、牛乳あるいはサルピスを飲むこと。

また、これら同じ〔薬草〕とともに、〔月が〕プシュヤ星宿〔にある時〕ごとに、沐浴すること。また常に、これらの〔薬草〕を〔妊婦は〕塗るべきである。同様に、すべての長寿薬(*jīvanīya*)²⁷²といわれる薬草のそれぞれの適用の規則にしたがった常用。

以上が、胎児の保持(*garbhassthāpana*)であるといわれている。(20)

一方、これら〔以下の〕状態が、胎児の障害をもたらすものである。

すなわち、高く、不安定な、固い椅子を常用している〔妊婦〕の、〔腸の〕ガス(*vāta*)、尿、便の排泄を抑える〔妊婦〕の、激しく、好ましくない運動を常に行っている〔妊婦〕の、刺激性の熱いものを過剰に常に摂っている〔妊婦〕の、僅かな食物〔のみ〕を常に摂っている〔妊婦〕の、胎児は、腹中で死ぬ。あるいは適切でない時に(*akāle*)、墮胎する。あるいは乾死(*śoṣin*)する。

同様に母親(妊婦)が、〔腹部を〕繰返し打つこと、押えつけることによって、あるいは洞穴、井戸、滝の場所を見ることによって、胎児は適切でない時に、墮ちる。同様に、非常に揺れる乗物によって旅をすることによって、あるいは好ましくない〔音声を〕過剰に聞くことによって。

また、〔手足を〕拡げて仰向けに寝る〔妊婦〕の〔場合は〕、胎児の臍にあるナーディー管(*nāḍī*) (臍の緒)が、〔胎児の〕首に巻き付く。

また、保護されていない〔場所で〕寝る〔妊婦〕と、夜にさまよう〔妊婦〕は、狂気の(*unmatta*)〔子供を〕生む。

また、いさかい(*kalī*)、けんか(*kalaha*)をよくする〔妊婦〕は、てんかんのような病の(*apasmārin*)〔子供〕を生む。

交わりに耽ける〔妊婦〕は、容姿の劣った、あるいは恥知らずの、あるいは女性に服従する(*straiṇa*)〔子供を生む〕。

²⁷²CS Sū 4.8 参照。

常に悲しんでいる〔妊婦〕は、恐れている、あるいは弱っている、あるいは寿命の短い〔子供を生む〕。他人が苦しむのを望む〔妊婦〕は、嫉妬深い、あるいは女性的な(*straiṇa*)〔子供を生む〕。一方、泥棒である〔妊婦〕は、苦勞の多い、あるいは過度に〔人を〕傷つける、あるいは怠惰に耽ける〔子供を生む〕。不寛容な〔妊婦〕は、暴力的な、あるいは不正直な、あるいは妬み深い〔子供を生む〕。常に眠りがちな〔妊婦〕は、物憂げな、あるいは愚かな、あるいは〔消化の〕火の小さな〔子供を生む〕。酒類(*madya*)を常用する〔妊婦〕は、喝いた、あるいは記憶力の小さい、あるいは落ち着きのない心を持つ〔子供を生む〕。大とかげ(*godhā*)の肉をしばしば摂る〔妊婦〕は、〔2種の〕結石の病の(*śārkarin, āsmarin*)の、あるいは泌尿の病の(*śanairmehin*)〔子供を生む〕。豚(猪)(*varāha*)の肉をしばしば摂る〔妊婦〕は、赤い目をした、あるいは呼吸困難(*krathana*)の、あるいは非常に固い体毛を持つ〔子供を生む〕。魚の肉を常に摂る〔妊婦〕は、まばたきが緩慢な(*ciranimeṣa*)、あるいは動かない目を持つ〔子供を生む〕。甘味のものを常に摂る〔妊婦〕は、泌尿の病(*prameha*)の、あるいは口をきかない、あるいは非常に大きな〔子を生む〕。酸味のものを常に摂る〔妊婦〕は、ラクタピッタ病(*raktapitta*)の、あるいは皮膚と目の病を持つ〔子供を生む〕。鹹味のものを常に摂る〔妊婦〕は、速やかに皺や白髪となる、あるいは禿頭の病を持つ〔子供を生む〕。辛味のものを常に摂る〔妊婦〕は、力の劣った、あるいは精液の少ない、あるいは〔生殖〕不能の〔子供を生む〕。苦味のものを常に摂る〔妊婦〕は、乾燥した、あるいは力のない、あるいは發育しない〔子供を生む〕。渋味のものを常に摂る〔妊婦〕は、色の濃い、あるいは便秘(*ānāhin*)の、あるいは腸の病を持つ(*udāvartin*)〔子供を生む〕。また、それぞれの病の病因であると言われたもの、そのそれぞれをしばしば用いている妊婦は、それを原因とする病を多く持つ子供を生む。一方、父親からもたらされる精液の欠陥(*śukradoṣa*)〔による子供への影響〕は、母親からもたらされる良くない行いによる〔子供への影響と同様のものであると〕述べられている。以上、胎児に障害をもたらすものが述べられた。このことから、優れた子供を欲する女性は、良くない食物や行いを特に避けるべきなのである。また、優れた行いをする〔妊婦〕は、良い食物と行いによって、自ら養生すべきである。(21)

また、この〔妊婦〕の病氣(*vyādhi*)には、柔らかく、甘味で、冷たく、快く、大変やさしいものを主

とする、薬草、食物、処置によって、手当すべきである。また、この〔妊婦〕に、嘔吐法(*vamana*)、浄化法(*virecana*)、頭部浄化法(*śirovirecana*)を用いるべきではない。血を放出(瀉血)すべきでない。またどんな時でも、〔妊婦には〕水性浣腸(*āsthāpana*)あるいは油性浣腸(*anuvāsana*)を施すべきではない。病氣の緊急時(*ātyayika*)以外は。しかし、〔妊娠〕8か月目に至れば、嘔吐法などによって治療されるべき病氣の緊急時(*ātyayika*)には、穏やかな嘔吐法などによって、あるいはこれと同等の処置によって手当てが施されるべきである。満たされたゴマ油の壺のごとくに、妊婦は、動揺させることなく、扱われるべきものである。(22)

この〔妊婦〕が、良くない手当て(*apacāra*)によって、2あるいは3か月目に、出血(*puṣpa*)を見るならば、この〔妊婦〕の胎児は、〔母胎内に〕留まらないであろうと知るべきである。なぜなら、このときには、胎児は、精髓が生じていない状態のもの(*ajātasāra*)であるからである。(23)

この〔妊婦〕が、4か月目以降に、怒り、悲しみ、妬み、嫉妬、恐れ、恐怖、性交、運動、興奮、〔生理的衝動を〕抑制すること、不安定なところに座ること・寝ること・立つこと、飢え、渇きと過度に結び付くことによって、あるいは悪い食事によって、出血(*puṣpa*)を見る場合、その〔妊婦〕にとっての、胎児を保持する方法を説明しよう。

出血を見てからすぐに、この〔妊婦〕に〔次のように〕言うべきである。

「ただちに、柔らかく、快く、冷たく、掛け布で覆われた、わずかに頭部が傾いている、寝所に入れ。」そして、最高に冷たい水に入れた、甘草(*yaṣṭimadhuka*)とサルピスに浸した、綿花を彼女の秘処近くに置かせるべきである。

同様に、百回澄ませた(*śatadhauta*)サルピスと千回澄ませた(*sahasradhauta*)サルピスによって、臍から下の至るところを塗るべきである。

またこの〔妊婦〕に、臍から下の至るところに良く冷えた牛乳(*payas*)あるいは甘い水(*madhukāmbu*)を、あるいはニヤグロード(*nyagrodha*)などの煎液を灌ぐべきである。あるいは良く冷えた水に浸すべきである。

また、液汁を出す木(*kaṣāyadruma*)の乳液(*kṣīrin*)の混じり気のない液(*svarasa*)に浸した、衣服を着けるべきである。

あるいは、ニヤグロード(*nyagrodha*)などのつぼみ(あるいは若葉)(*śurigā*)によって調えられた牛乳(*kṣīra*)とサルピスに〔浸した〕綿花をつけるべきである。そして、1阿克シャ量(*akṣa*)のみ摂るべきである。あるいは、牛乳とサルピスのみを摂るべきである。

また、この〔妊婦〕に、赤ハス(*padma*)、青ハス(*utpala*)、白ハス(*kumuda*)の繊維(あるいは花粉)(*kiñjalkā*)を甘味のもの(*madhura*)と砂糖(*śarkara*)とともに嘗めるために与えるべきである。

菱(*śṛiṅgāṭaka*)、ハスの種子(*puṣkarabīja*)、カシエールカ(*kaśeruka*)を食べるために〔与えるべきで

ある]。

あるいは、ガンダプリヤング(*gandhapriyaṅgu*)、アシタウトパラ(*asitotpala*)、蓮根(*śālūka*)、ウドゥンバラ(*udumbara*)の未熟な果実(*śalātu*)、ニヤグローダ(*nyagrodha*)のつぼみ(あるいは若葉)(*śuṅgā*)を、山羊の乳とともに彼女に飲ませるべきである。

また、彼女にバラー(*balā*)、アティバラー(*atibalā*)、シャーリ米(*śālī*)、シャシュティカ米(*śaṣṭika*)、砂糖黍(*ikṣu*)の根、カコーリー(*kākoli*)を煮たものとともに、蜜と砂糖を伴う、柔らかく、香りの良い、冷たい、赤シャーリ米(*raktaśālī*)の炊いたもの(*odana*)を食べさせるべきである。

あるいは、ギー(*ghṛta*)をよく混ぜた、うずら(*lāva*)、らいちょうの一種(*kapiñjala*)、羚羊の一種(*kuraṅga*)、鹿の一種(*śamvara*)、うさぎ(*śaśa*)、鹿(*hariṇa*)、羚羊の一種(*eṇa*)、沼に住む動物の一種(*kālapucchaka*)の〔肉の〕液汁(*rasa*)とともに、快く、涼しく、乾いた場所にいる〔妊婦〕に食べさせるべきである。

〔妊婦を〕怒り、悲しみ、疲労、性交、〔過度な〕運動から保護すべきである。

また、この〔妊婦〕に健康によい、心楽しい会話によって、仕えるべきである。

このような〔妊婦〕の胎児は〔母胎内に〕留まる。(24)

また、ある〔妊婦〕が、未消化物(*āma*)にわずらわされることによって、出血(*puṣpa*)が見られるならば、その〔妊婦〕の、その〔出血〕は、胎児を障害するものである。このふたつのもの(未消化物(*āma*)と胎児)は、相反する手当て〔を必要とする〕からである。(25)

また、ある妊婦が、胎児の成長力が大きいときに、熱いもの・刺激性のものを用いることによって、その〔妊婦〕に出血が見られると、

あるいは〔出血とは〕別の、母胎からの流出物(*yonisrāva*)が〔見られると〕、胎児は成長することはない。流失(*niḥsrutatva*)のために。

このような〔胎児〕は、過度に〔長い時間〕、〔母胎内に〕留まる。ある者は、この〔胎児〕を、「固着したもの」(*upaviṣṭaka*)であるという。

また、断食・誓戒の行いに専念する〔妊婦〕の、悪い食物をとる〔妊婦〕の、油性のもの(*sneha*)を嫌う〔妊婦〕の、ヴァータの興奮〔を起こす〕といわれるものに耽っている〔妊婦〕の胎児は、成長することはない。乾燥(あるいは消耗)(*pariśuṣkatva*)のために。

また、この〔胎児〕も、過度に〔長い〕時間、〔母胎内に〕留まる。そして〔この胎児は〕動きのないもの(*aspandana*)である。〔ある者は〕実に、この〔胎児〕を、「ナーガウダラ」(*nāgodara*)であるという。(26)

この両者(固着したもの(*upaviṣṭaka*)とナーガウダラ(*nāgodara*)の)女性の、特殊な治療を説明しよう。パウティカ薬(*bhautika*)、生命力のための薬(*jīvanīya*)、肥えさせるための薬(*bṛṇhaṇīya*)、甘

味のもの(*madhura*)、ヴァータを払う薬(*vātahara*)を調合したもの(*siddha*)と、サルピスと、牛乳(*payas*)と、卵(*āmagarbha*)とを用いると、胎児の成長をもたらす。

同様に、たいへん食欲のある〔妊婦〕にとっての、これら同じ調合薬と、ギー(*ghṛta*)などを伴う食事(*sambhojana*)、〔あるいは〕たびたびの旅行、乗物〔に乘ること〕、浄化法(*apamārjana*)、深呼吸(*avajṛmbhaṇa*)による処置が〔胎児の成長をもたらす〕。(27)

また、ある〔妊婦〕の、不活発な(*prasupta*)胎児が、動かなければ、その〔妊婦〕に、サルピスで調えた、鷹(*śyena*)・魚(*matsya*)・牛の一種(*gavaya*)・孔雀(*śikhi*)・雄鶏(*tāmracūḍa*)・鷓鴣(*tittiri*)のうちの1つの〔肉の〕液汁(*rasa*)とともに、あるいは豆(*māṣa*)のスープ(*yūṣa*)とともに、あるいは多量のサルピスを伴う、大根の一種(*mūlaka*)のスープ(*yūṣa*)とともに、柔らかく、甘く、冷たい赤シャーリ米(*raktaśālī*)の炊いたもの(*odana*)を食べさせるべきである。

また、微温のゴマ油の繰返しの塗油によって、この〔妊婦〕の腹(*udara*)、下腹(*basti*)、鼠蹊部(*vamkṣaṇa*)、大腿部(*ūru*)、腰部(*kaṭi*)、肋部(*pārśva*)、背中(*prṣṭha*)の部位を手当てすべきである。(28)

また、ある〔妊婦〕が、8か月目に腸の病(*udāvarta*)、泌尿の病(*vibandha*)であれば、油性浣腸(*anuvāsana*)によって手当てされるべきものと考えてはならない。

その時には、この〔妊婦〕のこの病の鎮静には、水性浣腸(*nirūha*)を、用いさせるべきである。なぜなら、見過ごされた腸の病(*udāvarta*)は、突然に、胎児とともに〔妊婦〕を、あるいは妊婦の胎児を損なわせるであろうからである。

そこで、ヴィーラナ(*vīraṇa*)、シャーリ米(*śālī*)、シャシュティカ米(*śaṣṭika*)、クシャ(*kuśa*)、カーシャ(*kāśa*)、イクシュヴァーリカー(*ikṣuvālikā*)、ヴェータサ(*vetasa*)、パリヴィヤーダ(*parivyādha*)の根と、ブーティーカ(*bhūtika*)、アナンター(*anantā*)、カーシュマリヤ(*kāśmarya*)、パルーシャカ(*parūṣaka*)、マドウカ(*madhuka*)、ムリドヴィーカ(*mṛdvika*)の液汁(*rasa*)を牛乳(*payas*)と〔その〕半分の水によって抽出させて、プリーヤーラ(*priyāla*)、ビビータカ(*bibhitaka*)の髓(*majja*)、ごま(*tila*)の練物(*kalka*)を混ぜた、わずかに鹹味を持つ、熱すぎない水性浣腸(*nirūha*)を施すべきである。

また、泌尿の病(*vibandha*)が去り、身体に微温の水が灌がれ、落ち着きをもたらす刺激のない食物を食べたこの〔妊婦〕に、夕方に、甘いもの(*madhuraka*)によって調えられたごま油を塗油すべきである。

そして、うつ伏せに寝ているこの〔妊婦〕を、水性浣腸(*āsthāpana*)と、油性浣腸(*anuvāsana*)によって手当てすべきである。(29)

また、ある〔妊婦〕の、過度な病素(*doṣa*)の増加から、あるいは刺激性のもの・熱いものに過度に耽けることから、あるいは〔腸の〕ガス(*vāta*)・尿・便の衝動を抑えることにつて、あるいは不安定な〔場所に〕座ること・寝ること・立つこと、圧迫・傷害によって、あるいは怒り・悲しみ・妬み・

恐れ・恐怖等によって、あるいは他の急激な運動によって、〔母親の〕腹の中で、胎児は死ぬ。
その〔妊婦〕の腹(udara)は、動かず、固く、張りがあり、冷たく、石が中にあるかのようにあり、胎児は動かず、甚だしい鋭い痛み(sūla)が生じ、また、陣痛(āvi)²⁷³は明らかではなく、母胎(yoni)〔からの〕は流出はなく、また、この〔妊婦〕の両目は落ち込んだ状態となり、呼吸が弱くなり、よろめき、ふるえ、あえぎ、不快に満ち、また、この〔妊婦〕の〔生理的〕衝動の現れが適切には知覚されない。

以上、このようなことが、死んだ胎児を持つ女性の徴候であると知るべきである。(30)

この、〔死んだ〕胎児が異物となったもの(garbhasālya)の、胎盤(jarāyu)を墮すことが、〔死んだ胎児を持つ女性の徴候を〕鎮静(saṃśamana)〔させるための〕の行いであると、ある者は言う。
アタルヴァヴェーダに規定された、マントラ等が、〔鎮静の行いである〕と、〔別の〕ある者は言う。
経験を積んだ、異物除去をなす者(sālyahartṛ)²⁷⁴による、〔母胎からの死児の〕除去が、〔鎮静の行いである〕と、〔また別の〕ある者は言う。

一方、未熟な〔死んだ〕胎児を〔異物として〕もっていて、〔その〕胎児が異物となったものが除去された女性には²⁷⁵、まず、スラー(surā)、シードウ(sīdhu)、アリシュタ(arīṣṭa)、マドウ(madhu)、マディラー(madīrā)、アーサヴァ(āsava)²⁷⁶のうちの1つを適切に飲ませるべきである。胎児臓器(子宮)(garbhakoṣṭha)の浄化のためと、痛みを忘れるためと、喜びのために。

その後、病素(doṣa)、〔身体〕要素(dhātu)の湿りが乾燥するまでの時間は、快い・体力を守る・非油性のものを混ぜた、かゆ(yavāgū)などによって、あるいはその季節にふさわしい食物によって養生すべきである。

その後、油性の飲物によって、浣腸(basti)によって、また〔消化の火を〕興奮させるための(dīpanīya)、生命力のための(jīvanīya)、肥えさせるための(bṛṇhaṇīya)、甘味の(madhura)、ヴァータを払う(vātahara)といわれる食物の規定によって手当てすべきである。

また、完全に成熟した〔死んだ〕胎児を異物としてもっていて、〔その〕胎児が異物となったものを放した〔女性〕にとっては²⁷⁷、まさにその日に、油性のものによる養生がなされるべきである。(31)

これより、成長しつつある胎児にとっての、それぞれの月における、無病の〔ための〕行いを述べよう。

最初の月において、もし、懐妊したのではないか〔という〕疑いがあるならば、何も加えていない、

²⁷³ āviの意味、用例についてはDas 1992 pp.31-32参照。

²⁷⁴ 外科的治療を専門に行う者のことか。

²⁷⁵ 胎児が未熟な段階で、腹中で死亡した場合の女性に対しては、という意味であろう。

²⁷⁶ いずれもアルコール性の飲料。

²⁷⁷ 胎児が完全に成熟した段階で、腹中で死亡した場合の女性に対しては、という意味であろう。

冷たい牛乳(kṣīra)を、適量、時々飲むべきである。また、自分に合った(sātmya)食物を夕方と夜明けに食べるべきである。

2か月目においては、甘味の薬草(madhuraśadha)を調合した牛乳(kṣīra)のみを〔飲むべきである〕。

3か月目においては、蜜(madhu)とサルピスとを加えて、牛乳(kṣīra)を〔飲むべきである〕。

4か月目においては、1アクシャ量の、牛乳と新しく搾った乳脂(kṣīranavanīta)を摂るべきである。

5か月目においては、牛乳とサルピスを。

6か月目においては、甘味の薬草を調合した牛乳とサルピスを。

7か月目においては、まさに同じものを。

この時、胎児の生えつつある髪が、母親にとっての焼ける〔ような痛み〕(vidāha)を生じさせると、女性達は言う。

そうではないと、尊いアートレーヤは〔言う〕。

胎児が圧迫することによって、ヴァータ、ピッタ、シュレーシュマンが〔母親の〕胸に達して、焼ける〔ような痛み〕を生じさせるのであり、そしてかゆみ(kaṇḍū)が生じる。

また、皮膚のひび割れ(kikkisa)²⁷⁸を患うことは、かゆみを原因とするものである。

そこで、ナツメ煎液(kolodaka)とともに甘味の薬草を調合した新しく搾った乳脂の、掌の(pāṇitala)量を、時々、この〔妊婦〕に飲むために与えるべきである。

また、白檀(candana)、ハスの繊維(mṛṇāla)の練物(kalka)によって、この〔妊婦〕の胸、腹を擦るべきである。

あるいはシリーシャ(sirīṣa)、ダータキー(dhātakī)、芥子(sarṣapa)、マドウカ(madhuka)の粉末(cūrṇa)によって、あるいはクタジャ(kuṭaja)、アルジャカ(arjaka)の種子によって、あるいはムスタ(musta)、ハリドラー(haridrā)の練物によって、あるいはニムバ(nimba)、ナツメ(kola)、スラサ(surasa)、マンジシュター(mañjiṣṭhā)の練物によって、あるいは羚羊の1種(prṣata)・鹿の1種(hariṇa)・うさぎ(śaśa)の血と3果(triphalā)²⁷⁹によって、〔擦るべきである〕。

〔また、〕カラヴィーラ(karavīra)の葉を調合したゴマ油による塗油(abhyariga)が〔なされるべきである〕。

〔また、〕マーラティー(mālātī)、マドウカ(madhuka)で調えた水による灌水(pariṣeka)が〔なされるべきである〕。

また、かゆみが生じた者は、搔くことを避けるべきである。皮膚の割れや変形を避けるためである。しかし、かゆみが耐えられないときには、摩擦(unmardana)と賦活(uddharṣaṇa)によって〔かゆみを〕除くべきである。

〔また、〕少量の、非油性・鹹味の(asnehalavaṇa)²⁸⁰、甘味の(madhura)、ヴァータを払う(vātahara)

²⁷⁸ CPの注に従って訳す。

²⁷⁹ āmalakī, vibhītakī, haritakīの果実。

²⁸⁰ asnehalavaṇa: 「非油性・鹹味」あるいは「非油性・非鹹味」。

食物類と、少量の水の食後飲料(*anupāna*)とを摂るべきである。

一方、8か月目においては、サルピス入りの、乳粥(*kṣīrayavāgū*)を時々、飲むべきである。

そうではない、とバドラカーピヤは「言う」。

なぜなら、〔8か月目における規定を行うと、〕褐色眼の苦痛(*pañigalyābādha*)が³、この〔妊婦の〕胎児に現れるであろうからである、と「言う」。

ここで、ブナルヴァス・アートレーヤは言う。

〔たとえ〕褐色眼の苦痛があるにせよ、それでも、この〔8か月目における規定を〕行うべきでないわけではない。

なぜなら、このようにした〔妊婦〕は、健康であり、健康的な優れた体力・体色・声・堅固さをそなえた、一族のうちでも最も優れた子供を生むからである。

さて実に、9か月目においては、この〔妊婦に〕甘味の薬草を調合したゴマ油を塗油すべきである。そしてまた、〔ゴマ油に浸した〕綿花をゴマ油から、この母胎(*yonī*)にもって行くべきである。胎児の居場所・産道(*garbhasthāna-mārga*)を油性に（滑らかに）するために。

このように示された行いが、最初の月から9か月目まで行われれば、それによって、出産時には、妊婦の、胎児を支える腹部(*kukṣi*)、腰部(*kaṭi*)、肋部(*pārśva*)、背中(*prṣṭha*)が柔らかくなる。またヴァータは順調となり。尿と便とは自然の状態となり、楽に〔排泄の〕道(*mārga*)に入る。そして皮膚と爪は柔軟になり、また体力と体色とは強くなる。

そしてこの〔妊婦〕は、優秀さをそなえた幸福な望ましい息子を、楽に、適時に生むと「言われる」。(32)

また、この〔妊婦の〕9か月目より以前に、骨・小石・壺〔の破片〕が除去された土地の吉祥な形態・味・香りをもつ大地において、東に戸口のある、あるいは北に戸口のある、ビルヴァ(*bilva*)あるいは、ティンドウカ(*tinduka*)あるいは、イングダ(*inguda*)あるいは、パッラータカ(*bhallātaka*)あるいは、ヴァーラナ(*vāraṇa*)あるいは、カディラ *khadira* の木材製の産室(*sūtikāgāra*)を作らせるべきである。

また、他の、アタルヴァヴェーダを知るバラモン達が称賛するところの〔木材製の産室を作らせるべきである〕。

優れた布・漆喰・敷物・戸板をそなえ、建築学²⁸¹の要諦を適用し(*vāstuvidyā-hṛdaya-yoga*)、火・水・臼・便所・浴場・台所をそなえ、〔その〕季節に快適な〔産室を作らせるべきである〕。(33)

そこ〔その産室〕には、サルピス・ゴマ油・蜜(*madhu*)・塩類(*saindhava*・*sauvarcala*・*kāla-lavaṇa*)・*viḍa-lavaṇa*)・ヴィダンガ(*viḍaṅga*)・クシュタ(*kūṣṭha*)・キリマ(*kilīma*)・ナーガラ(*nāgara*)・ピッパリー(*pippalī*)・ピッパリーの根・ハスティピッパリー(*hastipippalī*)・マンドゥーカパルニー(*maṇḍūkapaṇṇī*)・エーラー(*elā*)・ラーンガリー(*lāṅgalī*)・ヴァチャー(*vacā*)・チャヴィヤ(*cavya*)・チトラカ(*citraka*)・

²⁸¹CS Sū 15.6にも建築学(*vāstuvidyā*)についての記述がある。

チラビルヴァ(*cirabilva*)・ヒング(*hingu*)・芥子(*sarṣapa*)・にんにく(*laśuna*)・カタカ(*kataka*)・カナ(*kaṇa*)²⁸²・小麦粉(*kaṇikā*)・ニーパ(*nīpa*)・アタシー(*ataśī*)・バルヴァジャ(*balvaja*)・ブールジャ(*bhūrja*)・クラッタ(*kulattha*)・アルコール性の飲料(*maireya*・*surā*・*āsava*)が備えられているべきである。

同様に、2つの石、2つの臼と杵、2つの木製の臼、雄のロバ(*kharavṛṣabha*)、また、2つの鋭い金銀製の針とピン、鉄製の用具(*śastra*)、2つのビルヴァ製の寝台、火を起こすティンドウカ(*tinduka*)、イングディ(*ingudī*)の薪。

また、多くの様々な、愛情をそなえ、常に専心し、師を敬い、知識に精通した、生来やさしい、倦怠を捨て、苦痛に耐え、望ましい、子を産んだ女性達。アタルヴァヴェーダを知るバラモン達が。

また他にも、ここに相応しいと考えられるもの、また他に、バラモンと、年長の女性達が言うところの、用いられるべきものが〔備えられるべきである〕。(34)

そして、9か月目が始めると、吉祥な日において、称賛された星宿との合に、称賛された敬うべきよき月が到ったときに、また、善きカラナ(*karāṇa*)において、友好的なムフルタ(*muhūrta*)において、鎮め(*sānti*)を行い、はじめに牛・バラモン・火・水を〔産室に〕入れ、牛達のために、草・水、蜜を混ぜた炒米(*madhulājā*)とを与え、バラモン達のために、殻をとっていない大麦(*akṣata*)、花、ナーンディームカ(*nāndīmukha*)、望ましい果実とを与え、座っているもの達のために、〔手に〕水を〔注ぐことを〕もって始まる〔儀礼〕(*udakapūrva*)を行い、また〔水を〕啜り、祝詞を述べるべきである。

そして、「よき日〔でありますように〕」(*puṇyāha*)〔という〕言葉とともに、牛・バラモンに右側を向けて回る礼(*pradakṣiṇa*)を守りつつ、〔妊婦が〕産室に入るべきである。

そして、〔妊婦〕はそこにいて、出産の時を待つべきである。(35)

一方、実に、この〔妊婦の〕、これらの〔以下の〕ことは、出産の時が近付いた特徴である。

すなわち、身体の疲労、顔（あるいは口）(*ānana*)の倦怠感、両目の弛緩、胸部(*vakṣas*)の結び目が解けたかのようなこと、腹の降下、〔身体〕下部の重さ、鼠蹊部(*vaṃkṣaṇa*)、下腹(*basti*)、腰部(*kaṭi*)、腹部(*kukṣi*)、肋部(*pārśva*)、背中(*prṣṭha*)の刺すような痛み(*nistoda*)、母胎(*yonī*)からの浸出、食欲のないこと。

そして、直ちに陣痛(*āvi*)が現われ、また、羊水(*garbhodaka*)の流出がある。(36)

一方、陣痛が現われるときに、床に、柔らかい布をそなえた寝台を据えるべきである。その〔寝台〕に、この〔妊婦〕は、横たわるべきである。

そして、この〔妊婦〕を、〔前に〕述べられた通りの美德をもつ女性達が、まわりに取り囲み、〔ここ

²⁸²カナー(*kaṇā*)か?

ろを] 引きつける言葉あるいは、慰めの言葉によって元気づけつつ、付き添うべきである。(37)

もし、陣痛によって苦しんでいるこの〔妊婦〕が、出産しないならば、そこで、彼女に〔以下のように〕言うべきである。

「立ちなさい、杵の一つをとりなさい、この〔杵〕によって、この穀物の満ちた臼を何度も何度も打ちなさい。何度も何度も深呼吸をきなさい。また、そちらこちらを歩き回りなさい。」と、このようにある者達は示す。

「そうではない。」と尊いアートレーヤは言う。

なぜなら、妊婦は激しい運動を避けることを常に教えられているからである。

また特に、あらゆる不安定な〔身体〕要素と病素をもつ〔妊婦〕にとって、出産の際に、大変傷つきやすい女性〔妊婦〕による杵の運動によって触発されたヴァータが、機会を見出して、生命(*prāṇa*)を傷害するであろうからである。

〔また、〕この〔出産の〕時においては、妊婦は特に、最も治療が困難なものであるからである。このことから、杵を取ることは、避けるべきことであると聖仙達は考える。

しかし、深呼吸することと、歩き回ることはなされるべきであると〔考えられている〕。

ここで、この〔妊婦〕に、クシュタ(*kuṣṭha*)、エーラー(*elā*)、ラーンガリキー(*lāṅgalikī*)、ヴァチャー(*vacā*)、チトラカ(*citraka*)、チラビルヴァ(*cirabilva*)、チャヴィヤ(*cavya*)の粉末(*cūrṇa*)を、嗅ぐために、与えるべきである。この〔妊婦〕は、それを、何度も何度も嗅ぐべきである。

同様に、ブールジャ(*bhūrja*)の葉の煙、あるいはシンシャパー樹(*śimśapā*)の髓の煙を〔嗅ぐべきである〕。

そして、時々、この〔妊婦〕の腰部(*kaṭi*)、肋部(*pārśva*)、背中(*prṣṭha*)、腿(*sakthi*)の部分に微温のゴマ油によって塗油し、心地よく擦るべきである。この行いによって、胎児は下に降りる。(38)

もし、その〔胎児〕が、心臓の部分(*hṛdaya*)を離れ、この腹(*udara*)に入り、下腹部(*bastiśiras*)に留まり²⁸³、陣痛が強くなり、胎児が下方に現われるというふうはこの〔妊婦に〕感じられ、この〔妊婦〕が〔実際にこのような〕状態にある際には、この〔妊婦〕を寝台にのせ、〔胎児の〕取り上げを始めるべきである。

そして、この〔妊婦〕の耳に、この〔以下の〕マントラを、親身な女性が、唱えるべきである。

「地、水、空、火、風、ヴィシュヌ、ブラジャーパティ。

そのものたちは、あなたを、妊婦を、常に守護せよ。そして痛みからの解放をもたらせ。

傷ついていないあなたは、傷ついていない、カールティケーヤの〔ような〕輝きをもつ、カールティ

²⁸³ 実際に胎児がこのような動きをするというわけではなく、妊婦の身体感覚として、このように感じたならば、という意味であろう。

ケーヤによって守られた息子を産めよ。美しきものよ。」²⁸⁴と。(39)

また、〔前に〕述べられた通りの美德をもつ、かの女性達は、この〔妊婦〕に〔次のように〕教えるべきである。

陣痛が来ていない〔妊婦〕は、いきんではならない²⁸⁵。なぜなら、陣痛が来ていないものがいきんでも、この〔妊婦〕のこの行いは、まさに無駄なものであり、またこの〔妊婦〕の子供は、変異したもの、また変形したもの、あるいは窒息・咳・乾燥・脾の病(*plīhan*)がとりついたものとなるからである。

まるで、〔排泄したい〕時でもないのに、くしゃみ・嘔吐・〔腸の〕ガス・尿・便の排泄に努力している者が、〔排泄に〕苦勞したりあるいは〔排泄〕できないように。

そのように、まだ〔陣痛の〕時が来ていない胎児をいきむ者も同様である。

また、〔これとは逆に〕それらくしゃみなどを〔無理に〕抑えることこそが、〔その人に〕損害をもたらすように、そのように、〔陣痛の〕時が到った胎児にとって、いきまないということも同様である。この〔妊婦〕は、「指示の通りのことをきなさい。」と言われるべきである。

そのようにしている〔妊婦〕は、始めは穏やかにいきむべきであり、そして、すぐ後には、より力強く〔いきむべきである〕。

また、このいきんでいる〔妊婦〕に対して、女性達は、〔次のような〕言葉をかけるべきである。

「誕生。誕生。すこやかな、すこやかな息子が。」²⁸⁶と。

こうしてこの〔妊婦〕の喜びによっても、生命(*prāṇa*)は増大する。(40)

そして、誕生したならば、まさにその時に、この〔産婦〕を調べるべきである。何か、後産(胎盤)(*aparā*)が得られたか、あるいはないかと。

この〔産婦〕の後産がもし得られなければ、その場合、この〔産婦〕を、いずれか一人の女性が、右手で臍の上部から強く押し、左手で背中から抱き、この〔産婦〕をよく揺るべきである。この時、この〔産婦〕の腰から臀部(*śroṇi*)をかかと(*pārṣṇi*)によって押えるべきである。

この〔産婦〕の臀部(*sphic*, du.)を抱き、よく圧迫するべきである。この時、この〔産婦〕の喉(*kaṇṭha*)、

²⁸⁴ 原文(出典は不明)は次の通り。

kṣitir jalaṃ viyat tejo vāyur viṣṇuḥ prajāpatih /
sagarbhām tvām sadā pāntu vaiśalyaṃ ca dīśantu te //
prasūṣva tvam avikṣiṣṭam avikṣiṣṭā śubhānane /
kārtikeyadyutiṃ putraṃ kārtikeyābhirakṣitam //

²⁸⁵ 「いきむ」(*pra-√vāh*)。この語の意味、用例に関しては、Das 1992 pp.33-34 参照。

²⁸⁶ 原文は次の通り。 *prajātā prajātā dhanyaṃ dhanyaṃ putram.*

口蓋(*tālu*)を、子供の髪を編んだもの(*bālavenī*)で触れるべきである。

ブールジャ(*bhūrja*)の葉、水晶(*kācamāṇi*)、蛇の脱けがら(*sarpanirmoka*)で、この〔産婦〕の母胎(*yonī*)をいぶすべきである。

クシュタ(*kuṣṭha*)、ターリーサ(*tālisa*)の練物(*kalka*)を、バルヴァジャ(*balvaja*)のスープ(*yūṣe*)、あるいはアルコール性の飲料(*maireya*、*surā*)の刺激性の上澄み(*maṇḍa*)、あるいはクラッタの(*kaulattha*)スープ、あるいはマンドゥーカパルニー(*maṇḍūkapaṇṇī*)、ピッパリー(*pippalī*)を共に調理したものに混和して、この〔産婦〕に飲ませるべきである。

同様に、スークシュマイラー(*sūkṣmailā*)、キリマ(*kilima*)、クシュタ(*kuṣṭha*)、ナーガラ(*nāgara*)、ヴィダンガ(*viḍaṅga*)、ピッパリー(*pippalī*)、カーラーグル(*kālāguru*)、チャヴィヤ(*cavya*)、チトラカ(*citraka*)、ウパクンチカー(*upakuñcikā*)の練物(*kalka*)、あるいは生きた雄のロバ(*kharavṛṣabha*)の右耳を切り落とし、挽臼用の石(*dr̥ṣad*)で摺り潰し、〔前述の〕バルヴァジャ(*balvaja*)の煎液(*kvātha*)などの浸漬液(*āplāvana*)のうちの一つに入れて潰け、しばらく置いたものを取りだし、その浸漬液をこの〔産婦〕に飲ませるべきである。

また、シャタプシュパー(*śatapušpā*)、クシュタ(*kuṣṭha*)、マダナ(*madana*)、ヒング(*hiṅgu*)を調合したゴマ油に〔浸した〕綿花を、この〔産婦〕につかませるべきである。そして、塗油すべきである。また、これらの浸漬液に、パラ(*phala*)、ジームータ(*jīmūta*)、イクシュヴァーク(*ikṣvāku*)、ダーマールガヴァ(*dhāmārgava*)、クタジャ(*kuṭaja*)、クリタヴェエダナ(*kṛtavedhana*)、ハスティピッパリー(*hastipippalī*)をまぜたものによって浣腸すべきである。

この水性浣腸(*āsthāpana*)が、この〔産婦〕の〔腸の〕ガス(*vāta*)・尿・便と共に、固着した後産を排泄する。まさにヴァーユが逆行しないことによって。なぜなら、〔腸の〕ガス・尿・便と〔身体〕内部から外部への〔排出〕路をもつ他のものとが、後産に付着するからである。(41)

一方、実にこの〔産婦〕の後産をおろすための行いがなされているときに、まさに産まれたばかりの子供にとってはこれら〔次のような〕行いがなされるべきである。

すなわち、両耳の付け根で、2つの石を擦ること。冷水あるいは温水を²⁸⁷顔(あるいは口)(*mukha*)に注ぐこと。

このようにこの〔新生児〕が、苦しみで傷ついた²⁸⁸生命(*prāṇa*)を再び得るように。

またもし、〔新生児〕が、動かなければ、黒い鉢の〔ような〕箕(うちわ)(*kṛṣṇakapālikāśūrpa*)でこの〔新生児〕をあおぐべきである。生命が戻るまでの間、それぞれ全てのことが、なされるべきである。

そして、〔新生児が〕生命を取戻し、本来の状態であること(*prakṛtibhūta*)を見たならば、洗浄と水

²⁸⁷CP:「暑い季節には冷水、寒い季節には温水を」

²⁸⁸CP:「苦しみで傷ついたとは、*yonīyantra*の締め付けなどの苦しみによって打撃を受けた〔という意味〕」(*kleśavihatān iti yonīyantra-pīḍanādi-kleśaparāhatān*)

浴を行わせるべきである。(42)

そして、この〔子供〕の口蓋(*tālu*)、口唇(*oṣṭha*)、喉(*kaṇṭha*)、舌(*jihvā*)の清拭を行うべきである。爪をよくなめらかにし、よく洗った綿の覆い(*upadhāna-kārpāsa*)をつけ、綿花をもった指で。口を清拭されたこの〔新生児〕の泉門?(*śīrastālu*)が、最初に、油性のものを内に含んだ綿花によって、覆われるべきである。

そして、直ちに、この〔新生児〕に対して、塩(*saindhava*)を混ぜたサルピスによって、嘔吐法(*prachardana*)がなされるべきである。(43)

そして、臍の緒(*nāḍī*)の切断が〔なされるべきである〕。

これより、この〔臍の緒の〕切断の方法を示そう。

臍との結合部(*nābhi-bandhana*)から始めて、8アングラ〔のところ〕に、切断の場所の印をつけ、内側の2〔箇所〕をそっとつかみ、鋭い、金・銀・鉄製の切断の道具のうちのいずれかの、片刃のものによって、切断すべきである。

先端で、この〔臍の緒〕を糸で結び、この〔新生児〕の首に緩やかに垂らすべきである。

もし、その〔新生児〕の臍が腫んでいるならば、その〔臍〕に、ロードラ(*lodhra*)、マドゥカ(*madhuka*)、ブリヤング(*priyaṅgu*)、スラダール(*suradāru*)、ハリドラー(*haridrā*)の練物(*kalka*)を調合したゴマ油を塗るべきである。〔そして〕これら同じゴマ油と薬草の粉末を塗布すべきである。

このように、臍の緒の切断の方法が正しく述べられた。(44)

不適切に切断されたときには、臍の緒(*nāḍī*)が、長く・広く腫れたり、丸くなったり、内部で腫れたり、何度も大きくなったり²⁸⁹〔といった〕苦しみの恐れがある。

その際には、〔症状の〕軽重を見て、灼熱感のない(*avidāhin*)、ヴァータ・ピッタを鎮めるサルピスの塗布(*abhyāṅga*)・摩擦(*utsādana*)・散布(*parīṣeka*)とによって処置すべきである。(45)

その後、直ちに子供の誕生式(*jātakarma*)がなされるべきである。

すなわち、最初に、マントラが唱えられているときに、伝承にしたがって、蜜(*madhu*)とサルピスとを、食べるために与えるべきである。

これより後、まさにこの儀軌に従って、始めに、右の乳房(*stana*)を、飲むために与えるべきである。まさにその時、頭に、マントラが唱えられた水壺が置かれるべきである。(46)

さて、この〔子供〕の守護(*rakṣā*)をなすべきである。

アーダーニー(*ādānī*)、カディラ(*khadira*)、カルカンドウ(*karkandhu*)、ピール(*pīlu*)、パルーシャカ

²⁸⁹この節の症状の記述の解釈は、CPに従う。

(*parūṣaka*)の枝によって、この〔産婦〕の家の周囲を覆わせるべきである。また、産室の全面に、芥子(*sarṣapa*)、アタシー(*ataṣī*)、タンドウラ米(*taṇḍula*)、カナカニカー(*kaṇakaṇikā*)を撒くべきである。同様に、タンドウラ米の献供(*balihoma*)が、続けて〔1日に〕2回、命名式(*nāmakarma*)まで〔の間に〕なされるべきである。

また、杵(*musala*)を、戸口に対して、斜めに置くべきである。

ヴァチャー(*vacā*)、クシュタ(*kuṣṭha*)、クシャウマカ(*kṣaumaka*)、ヒング(*hinḡu*)、芥子(*sarṣapa*)、アタシー(*ataṣī*)、にんにく(*laśuna*)、カナカニカー(*kaṇakaṇikā*)と、ラクシャスを打つと言われる薬草の束を結んで、産室の北の戸口²⁹⁰に置くべきである。

同様に、子供と共に、産婦の首に〔置くべきである〕。また、土製の器・水壺・寝台にも〔置くべきである〕。また同様に、2つの戸板に〔置くべきである〕。

カナカ(*kaṇaka*)、カンタカ(*kaṇṭaka*)を燃料とする火、またティンドウカ(*tinduka*)の木を燃料とする火が、産室の内部に常にあるように。

また、この〔産婦〕に、〔前に〕述べた通りの美德をもつ女性達と、友人達が10日あるいは12日間付き添うべきである。

また、この家は、途絶えることのない贈物・吉祥な祝福・称赞・歌・奏楽があり、すばらしい食物・飲物があり、喜ばしい・心楽しい人で満ちたものとすべきである。

また、アタルヴァヴェーダを知るバラモンは、続けて、〔1日に〕2回、鎮め(*sānti*)を行うべきである。子供と同様に母親の祝福のために。

以上が、守護の方法であると言われている。(47)

一方実に、母親に空腹を認めたならば、油性のもの(*sneha*)を飲ませるべきである。

最も効果のあるものとして、サルピスとゴマ油(*sarpistaila*)、あるいは肉に含まれる脂肪(*vasā*)、あるいは髄(*majjan*)を自分にふさわしい状態(*sātmyibhāva*)のものを考慮して、ピッパリー(*pippalī*)、ピッパリーの根(*pippalīmūla*)、チャヴィヤ(*cavya*)、チトラカ(*citraka*)、シュリンガヴェーラ(*śṛṅgavera*)の粉末と共に〔飲ませるべきである〕。

油性のものを飲んだ〔産婦〕の腹部(*udara*)に、サルピスとゴマ油を塗り、大きな清浄な布で覆うべきである。

このように〔すると〕、ヴァーユが、この〔産婦〕の腹部に病(*vikṛti*)を生じさせることはない。〔その〕余地がないことによって。

一方、油性のものが消化されたならば、まさに同じピッパリー(*pippalī*)などが調合された大変柔らかな流動性のかゆ(*yavāgū*)を、適量、飲ませるべきである。また、〔1日に〕2回、温かい水を、〔足

²⁹⁰CP:「戸の上に、またあるものは戸の下の木に、という。」

に〕²⁹¹注ぐべきである。油性のものと、かゆを飲む以前に。

このように、5夜あるいは7夜保ち、次第に、〔本来の状態に〕戻させるべきである。

産婦の健康な状態における行い(*svastha-vṛtta*)は、このようである。(48)

一方、実に、この〔産婦〕にとって、ある病(*vyādhi*)が生じると、その〔病〕は治癒し難いもの、あるいは治癒しないものである。

胎児の成長によって壊されたり弱くなったりしたあらゆる〔身体〕要素の状態によって。また、出産の痛み・浸出・血の流出によって特に空屋(*śūnya*)〔のようになった〕身体のために。このことから、その〔産婦〕を、述べられた通りの方法によって手当すべきである。

また、特に、パウティカ薬(*bhautika*)、生命力のための薬(*jīvanīya*)、肥えさせるための薬(*bṛṇhaṇīya*)、甘味のもの(*madhura*)、ヴァータを払う薬(*vātahara*)を調合したものによる塗布(*abhyariga*)・摩擦(*utsādana*)・散布(*pariṣeka*)・入浴(*avagāhana*)・飲食物の規定によって手当すべきである。

なぜなら特に、出産した女性は、空家〔のような〕身体をもつものであるからである²⁹²。(49)

一方、〔誕生から〕10日目に、息子とともに、あらゆる香りの薬草によって、あるいは白芥子(*gaurasarṣapa*)、ロードラ(*lodhra*)によって沐浴した女性〔産婦〕は、軽く新しい清潔な衣服をつけ、また、清浄な望ましく軽く多彩な飾りをつけた〔女性〕は、護符(*maṇigala*)に触れ、適切な神格を讃え、〔頭に〕髪を房をつけ(*sikhin*)、白い衣服をつけ欠けたところのない身体をもつバラモン達に、吉祥な言葉(*svasti*)を唱えさせ、また子供を、新しい布をまとめたものに、東に頭を〔向けて〕あるいは北に頭を〔向けて〕入れ、「神格にもとずくものが、再生族に敬意を表します。」と、言って、子供の父親が、2つの名前を作らせるべきである。

星宿に関する(*nākṣatrika*)名前と、任意の(*ābhīprāyika*)〔名前〕とを。

このうち任意の〔名前〕は、有声音(*ghoṣavat*)で始まり、半母音(*antastha*)で終るもの、あるいは帯気音(*ūṣmā*)²⁹³で終るものであり、母音の増強のないもの(*avṛddha*)であり、3世代にわたるものであり、新たに決められるものではない(*anavapratīṣṭhita*)。

一方、星宿に関する〔名前〕は、星宿の神格と同様の名をもつものであり、2字(*akṣara*)をもつもの、あるいは4字(*akṣara*)をもつものである。(50)

そして、命名式を終えたならば、子供〔の身体〕を調べることをはじめるべきである。〔その子供の〕生命の量を認識するために。

²⁹¹CPの注によって補う。

²⁹²身体と空屋の比喩は、CS Śā 1.74abにも見られる。

²⁹³CPは、ここで、有声音(*ghoṣavat*)とは gh,jh,dh,dh,bh。半母音(*antastha*)とは y,r,l,v。帯気音(*ūṣmā*)とは ś,s,s,h であるという。

これに関して、これら〔以下のこと〕が、子供の長命の相(*lakṣaṇa*)である。

すなわち、髪(*keśā*)は、1本1本生じ、柔らかく、細く、なめらかな、しっかり付いた根元をもつ、黒いものが称賛される。

皮膚(*tvac*)は、堅く、緊密なもの。

頭(*śīras*)は、生まれつき大変優れた、わずかに標準の大きさを越えたもの²⁹⁴、釣合いのとれた(*anurūpa*)、傘に似た〔形の〕もの。

額(*lālāṭa*)は、広く、堅固で、平坦で、こめかみの部分の関節(*śanikhasaṃdhi*)²⁹⁵にしっかり結合した、上方に(*ūrdhva*)〔向かう〕しるし²⁹⁶をそなえた、肉付きのよい、皺のある、半月形のもの。

両耳(*karṇa*)は、緊密で、大きく、〔左右〕同じ場所にあり、〔左右〕相同で、下方に伸び、後方に曲がり(突き出していない)、耳たぶ(*karṇaputraka*)にしっかり結合し、大きな〔耳〕孔をもつもの。

両眉(*bhruva*)は、わずかに垂れ、〔左右〕繋がっておらず、〔左右〕相同で、しっかりとした、大きいもの。

両目(*cakṣus*)は、〔左右〕相同で、落ち着いて見えるもので、部分部分がはっきりした(*vyaktabhāgavibhāga*)²⁹⁷、光(*tejas*)をもち、美しい目尻をもつもの。

鼻(*nāsikā*)は、まっすぐで、大きな呼吸をなし、鼻梁(*vaṃśa*)が完全で、わずかに湾曲した先端をもつもの。

口(*āśya*)は、大きく、まっすぐで、よく整った歯をもつもの。

舌(*jihvā*)は、長さと幅をそなえ、なめらかで、細く、本来の色をもつもの。

口蓋(*tālu*)は、なめらかで、ふさわしい大きさであり、熱をもち、赤いもの。

声(*svara*)は、大きく、快活で、なめらかで、〔よく〕響き、深い〔ところから〕出てくる〔ような〕、安定しているもの。

〔上下の〕両口唇(*oṣṭha*)は、厚すぎず、痩せすぎず、幅があり、口を〔完全に〕覆う、赤いもの。

両顎(*hanu*)は、大きいもの。

首(*grīvā*)は、丸く、大きすぎないもの。

胸(*uras*)は、広く、肉付きがよいもの。

頸の基部の骨(鎖骨)(*jaṭru*)と背骨(*prṣṭhavaṃśa*)は、〔体表面からは〕見えないもの。

両乳房(*stana*)は、〔左右〕遠く離れているもの。

両肋部(*pārśva*)は、あきらかでなく、堅固なもの。

²⁹⁴人間の身体各部位の標準的な大きさ(*pramāṇa*)については、CS Vi 8.117に記述されている。

²⁹⁵一般に、咀嚼時、特に閉口時に左右側頭部体表面(こめかみの部分)が動くさまが観察される。これは側頭筋の収縮によるものであるが、アーユルヴェーダでは、この動きは、この部分に関節(*saṃdhi*)が存在することによるものと考えられていたようである。

²⁹⁶CP:「上方に〔向かう〕しるしとは、上方に〔向かう〕3条のすじのこと」

²⁹⁷CP:「部分部分がはっきりした、とは白〔目〕と黒〔目〕などの部分が明らかな〔という意味である。〕」

両腕(*bāhu*)と両上腕(*sakthin*)と指(*aṅgulī*)は、丸く、完全で、長いもの。

手足(*pāṇipāda*)は、大きく、肉付きのよいもの。

手の爪(*karaja*)は、堅固で、丸く、なめらかで、赤銅色で、強く、亀の〔甲羅のような〕かたちをもつもの。

臍(*nābhi*)は、右巻きで、深いもの。

腰部(*kaṭi*)は、胸部より3分の1小さく、平坦で、よく肥えた肉付きのもの。

両臀部(*sphic*)は、丸く、堅固で、肥えた肉付きで、突き出しすぎず、突き出さなすぎないもの。

両大腿部(*ūru*)は、〔先から根元へと〕次第に丸みを帯び、肥えたもの。

両脛(*janigha*)は、太すぎず、細すぎず、羚羊(*eṇī*)の足〔のような〕、脈管(*sirā*)・骨(*asthi*)・関節(*sandhi*)を隠しているもの。

両くるぶし(*gulpha*)は、太すぎず、細すぎないもの。

両足(*pāda*)は、前に示した性質をもち、亀の〔甲羅のような〕かたちのもの。

ガス(*vāta*)・尿(*mūtra*)・便(*purīṣa*)・秘処(*guhya*)は、本来の性質をそなえたもの(*prakṛtiyukta*)。

睡眠・覚醒・活動・笑うこと・泣くこと・乳を吸うことも同様に〔本来の性質をそなえたもの〕。

また、ほかの何であれ〔ここでは〕述べられていないもの、それもすべて本来の性質をそなえているものは、望ましいものであり、またその反対のものは、望ましくないものである。

以上が、長命の相(*dīrghāyurlakṣaṇa*)²⁹⁸である。(51)

これより、乳母(*dhātṛi*)の吟味について示そう。

ここで言うべきである。

「同じヴェルナ〔に属し〕、若く、従順で、患いのない、欠けたところのない身体をもち、悪徳からはなれており、醜くなく、嫌悪すべきものでなく、〔その〕土地生まれで、粗暴でなく、粗暴な行いをしない、〔よい〕家系(*kula*)に生まれ、子供を愛し、健康で、子供が存命であり(*jīvadvaṭsā*)、男子をもち(*puṃvaṭsā*)、母乳を与える〔ことのできる〕、注意深く、汚物の上で寝ることのない、低カーस्टのもの(*antyāvasāyin*)でない、看護に長け、清潔で、不潔を嫌い、優れた乳房・母乳をもつ乳母を連れて来なさい。」と。(52)

これに関して、優れた乳房とは、このような〔以下の〕ものである。

高すぎず、垂れすぎず、小さすぎず、大きすぎず、2つの乳首(*pippalaka*)があり、飲みやすいもの。

以上が優れた乳房である。(53)

さて、優れた母乳(*stanya*)とは、本来の色・香り・味・感触をもち、また、水壺のなか〔の水の中〕に搾乳されると、水に拡散するものである。本来の性質の状態にあるものであるから。

²⁹⁸*Bṛhatsamhitā* 第67章にも同様の記述が見られる。

これは成長をもたらすものであり、無病(*ārogya*)をもたらすものである。
以上が優れた母乳である。(54)

これと異なっていれば、損なわれたもの(*vyāpanna*)と知るべきである。
その特性は、暗褐色・赤褐色で、後味は渋く、透明で、香りはなく、粗く、流動性で、泡立ち、軽く、満足を与えず、やせさせるもの(*karśana*)で、ヴァータ性の病をもたらすものは、ヴァータが流れ込んだ母乳であると認識すべきである。
黒・青・黄・赤銅色の見た目であり、後味は苦・酸・辛で、屍体・血の臭いがあり、極めて熱く、ピッタ性の病をもたらすものは、ピッタが流れ込んだ母乳であると認識すべきである。
過度に白く、過度に甘く、後味は鹹味で、ギー(*ghṛta*)、ゴマ油、脂肪(*vasā*)、髄(*majja*)の臭いもち、粘性で、糸を引き、水壺〔のなかの水〕に沈み、シュレーシュマン性の病をもたらすものは、シュレーシュマンが流れ込んだ母乳であると認識すべきである。(55)

一方、これら3種の母乳の病素(*doṣa*)の特性について考慮して、それぞれの病素に個別に、嘔吐法(*vamana*)、浄化法(*virecana*)、水性浣腸(*āsthāpana*)、油性浣腸(*anuvāsana*)が、区別して、鎮静のためになされる²⁹⁹。

一方、汚れた母乳をもつ〔女性〕にとっての、飲食物の規定は、大麦(*yava*)、小麦(*godhūma*)、シャーリ米(*śālī*)、シャシュティカ米(*śaṣṭika*)、豆類(*mudga*, *hareṇuka*, *kulattha*)、アルコール性の飲料類(*surā*, *sauvīraka*, *maireya*, *medaka*)、にんにく(*laśuna*)、カランジヤ(*karañja*)を主とするものとすべきである。

母乳の病素の特性をそれぞれ見て、それぞれの処方がなされるべきである。

パーター(*pāthā*)、マハーオーシャダ(*mahauśadha*)、スラダール(*suradāru*)、ムスタ(*musta*)、ムールヴァー(*mūrvā*)、グドゥーチー(*guḍūcī*)、ヴァトサカ(*vatsaka*)の実、キラータティクタカ(*kirātātiktaka*)、カトゥカローヒニー(*kaṭukarohiṇī*)、サーリヴァー(*sārivā*)の煎液(*kaṣāya*)の飲用が推奨される。
同様に、ほかの苦・渋・辛・甘の薬物(*dravya*)の適用が、母乳の異変(*vikāra*)の特性と、量と時とを考慮して〔なされるべきである〕。

以上が、母乳の浄化(*kṣīravisodhana*)である。(56)

さて、母乳を生ずるものは、シードウ(*sīdhu*)を除くアルコール性飲料類(*madya*)。栽培・飼育された、〔あるいは〕沼地の、〔あるいは〕水辺の野菜・穀物・肉。流動性の甘・酸・鹹味を主とした食物。また、乳液性の薬草。また、乳をのむことと休息。ヴィーラナ(*vīraṇa*)、シャシュティカ米(*śaṣṭika*)、シャーリ米(*śālī*)、イクシュヴァーリカー(*ikṣuvālikā*)、ダルバ草(*darbha*)、クシヤ草(*kuśa*)、カーシャ

²⁹⁹ CP: 「シュレーシュマンには嘔吐法が、ピッタには浄化法が、ヴァータには水性・油性浣腸が〔それぞれ〕なされる。」

草(*kāśa*)、グンドラ(*gundra*)、イトカタ(*itkaṭa*)の根の煎液の飲用。
以上が、母乳を生ずるものである。(57)

一方、もし、乳母が、甘く・多量の・清浄な母乳をもつものであるならば、
その際には、沐浴・塗油した〔乳母〕は、白い衣服を着けて、アインドリー(*aindrī*)あるいはブラーフミー(*brāhmī*)あるいはシャタヴィーリヤー(*śatavīryā*)あるいはサハスラヴィーリヤー(*sahasravīryā*)あるいはアモーガー(*amoghā*)あるいはアヴィヤター(*avyathā*)あるいはシヴァー(*śivā*)あるいはアリシュター(*ariṣṭā*)あるいはヴァーティヤプシュピー(*vāṭyapuṣpī*)あるいはヴィシュヴァクセーナカーンター(*viṣvakṣenakāntā*)〔という〕薬草³⁰⁰を着けて、東に顔を向けた子供に、はじめは右の〔乳房から〕母乳をのませるべきである。
以上が、乳母の行いである。(58)

これより直ちに、子供部屋(*kumārāgāra*)の規定を説明しよう。
建築学(*vāstuvīdyā*)に長けた者が、推奨された、美しい、暗さのない、風を避けた(*nivāta*)、通風の場所をもつ、堅固で、野獣・家畜・牙をもつもの(蛇)・鼠・飛ぶ虫〔のすみか〕からはなれた、水〔場〕・臼・尿の排泄所・浴場・台所がうまく設置された、〔その〕季節に快適な(*ṛtusukha*)、季節に相応しい寝台・椅子・敷物を備えた〔子供部屋を〕作るべきである。
同様に、守護の規定(*rakṣāvidhāna*)、バリ・マンガラ献供(*balimaṅgalahoma*)、苦行(*prāyaścitta*)をよく行った、清潔な・年長の・学識のある・愛情のある人で満ちた〔子供部屋を作るべきである〕。
以上が、子供部屋の規定である。(59)

子供の寝台・椅子・敷物・掛物は柔らかく・軽く・清潔な・よい香りのものであるべきである。汗・汚れ・虫のついたものと、尿・便がついたものは避けるべきである。
他のものがない場合でも、洗浄し乾燥しさせ、よい香りをつけたこれらのものと、よく洗った寝具は、用いられるべきである。(60)

また、衣服と、寝台・敷物・掛物の香料は、ギー(*ghṛta*)を混ぜた大麦(*yava*)、芥子(*sarśapa*)、アタシー(*ataśī*)、ヒング(*hiṅgu*)、グッグル(*guggulu*)、ヴァチャー(*vacā*)、チョーラカ(*coraka*)、ヴァヤスター(*vayaḥsthā*)、ゴーローミー(*golomī*)、ジャティラー(*jaṭilā*)、パランカシヤー(*palanikaṣā*)、アショーカローヒニー(*aśokarohiṇī*)、蛇の脱けがら(*sarpanirmoka*)であるべきである。(61)

また、子供が身につけるべきものは、宝石(*maṇi*, pl.)と、生きている犀(*khaḍga*)、鹿の一種(*ruru*)、
³⁰⁰ これらアインドリーをはじめとする10種の薬草は、CS Sū 4.18で、子孫をもたらすもの(*prajāsthāpana*)とされている。

牛の一種(*gavaya*)、牡牛(*vṛṣabha*)の右の角の先端がとられたものであるべきである。

また、アインドリー(*aindrī*)などの薬草³⁰¹と、ジーヴァカ(*jīvaka*)とリシャバカ(*ṛṣabhaka*)。また、他にも、アタルヴァヴェーダを

実に、子供の遊び道具(*kriḍanaka*)は、多彩な、音を出す、楽しいものであり、また、重くないもの、また、鋭い先端をもたないもの、また、口に入り込まないもの、また、命を奪うものでないもの(*aprāṇahara*)、また、恐ろしくないものであるべきである。(63)

なぜなら、この〔子供〕にとって、恐ろしいものは、よいものではないからである。

このことから、この〔子供〕が、泣いているとき、あるいは食べないとき、また他に、従順でないときに、羅刹、ピシャーチャ、プータナー(*pūtana*)などの名を呼ぶことで、子供の恐ろしさ〔をあげる〕ために、〔それらの〕名を挙げることは、なすべきではない。(64)

一方もし、何かの病(*ātura*)が、子供にとりついたならば、その〔病の〕本性(*prakṛti*)・原因(*nimitta*)・前徴(*pūrvārūpa*)・徴候(*liṅga*)・手当ての特性によって、その状態にしたがって考慮し、病・薬草・土地・季節・〔病の〕拠り所(*āśraya*)³⁰²のあらゆる特性を観察する者が、この〔子供〕に治療を行うべきであり、甘味・柔・軽・香りのよい・冷・吉祥な〔ものを用いて〕手当てをなすべきである。なぜなら、子供たちは、このように〔甘味をはじめとするものを〕自分にふさわしいものとしてもつものであるからである。

このように、かれら〔子供たち〕は、長きにわたって、安寧(*śarma*)を得る。

一方、無病であるものは、〔その〕土地・季節・自己の性質に反対の〔性質をもつ〕ものによって、無病の持続を維持すべきである。次第に、自分にふさわしくないもの(*asātmya*)〔を用いること〕を変え、あらゆるよくないものを排除すべきである。

このように、〔こどもは〕体力・体色・身体・生命の優秀さを得る。と〔言われる〕。(65)

このように、この子供を、青年に至るまで、また、法(*dharma*)・財(*artha*)に対する熟練に至るまで、保護すべきである。(66)

このように、息子を望む者たちにとっての、繁栄をもたらす行いが述べられた。述べられた通りの方法によって、不平を言わずそれを行う者は、望み通りの敬意を得る、と〔言われる〕。(67)

ここに2つの詩節がある。

〔ここで〕述べられた息子を望む者たちにとっての、繁栄をもたらす行い、

³⁰¹本章第58節およびCS Sū 4.18 参照。

³⁰²CP: 「拠り所(*āśraya*)とは身体(*śarīra*)のこと。」

この〔行い〕は、たいへん有益なものである。

規則にしたがって、適切に、不平を言わずそれを行う知者は、望み通りの敬意を得る。(68)

あらゆる身体は、すぐれた天命(*daiva*)と人為(*mānuṣa*)をそなえたものによって、あらゆる状態とともに考察される。そのことから、シャーリーラ(*śārīra*)の巻と言われるのである。(69)

以上が、アグニヴェーシャが作ったタントラの、チャラカが改訂したシャーリーラスターナにおける、「誕生のストトラについて」のシャーリーラという名の第8章である。

シャーリーラスターナ完結。

【第2部】Śārīrasthāna の展開

CS 以外のアーユルヴェーダの古典的なテキストのうち、*Bhelasamhitā* (BhS)、*Suśrutasamhitā* (SS)、*Aṣṭāṅgahrdayasamhitā* (AHS)、*Aṣṭāṅgasamgraha* (AS)、*Kāśyapasamhitā* (KS) という5つの文献にも *Śārīrasthāna* という名称の巻が含まれている。これら5つの Śā には、CS Śā と同様に、人間の身体構造、誕生・成長などについての記述が含まれている。しかし、各 Śā には、それぞれの文献の専門分野の違いや、各テキストの成立事情および成立年代の違いなどが反映されており、必ずしも全ての Śā が CS Śā に見られたような1つのまとまりのある个体論として解釈できるとは限らないようである。以下、本論文第2部では、これら CS 以外の5文献の成立について、今日までに明らかになっている事実を紹介し、各文献の全巻の構成を概観した後、それぞれの Śā の概要を示す。

第1章 Bhelasamhitā, Śārīrasthāna

1.1 Bhelasamhitā について

アーユルヴェーダの成立に関する伝承¹によれば、医学知識を最初に人々に伝えた聖仙 Punarvasu Ātreya には、Agniveśa、Bhela、Jatūkarna、Parāśara、Hārīta、Kṣārapāṇi という6人の弟子があり、彼らはそれぞれに師の教えをもとにして医学教典 (*tantra*) を編纂したことになる。この伝承を裏付けるように、これら弟子たちの名を冠した医学書が、ある時期までは確かに存在していたことが明らかになっており²、内科的な医学 (*kāyacikitsā*) を専門にしていたこれらアートレーヤ学派と呼ばれるべき医師達が、アーユルヴェーダ成立の初期の段階において医学知識の理論化、体系化に際して重要な役割を果たしたものと考えられている。

このうち、アグニヴェーシャの編纂した医学書、*Agniveśatantra* は、幾度か改編の手が加えられた後、その名称を改め、6世紀初頭頃に *Carakasamhitā* として最終的に成立し、現在まで伝えられている。また、Jatūkarna、Parāśara、Hārīta、Kṣārapāṇi の名前を冠した医学教

¹CS Sū 1.30-34; AHS Sū 1.3-4ab.

²cf. Dasgupta 1922 II p.432; Mukhopadhyaya 1922-1929 III pp.519-571; Meulenbeld 1974 p.389f.

典は、Jejjaṭa、Cakrapāṇidatta、Niścalakara といった後世の医学文献の注釈者たちによって断片的にはあるもののさかんに引用されている。そしてさらに、Bhela³が編纂したとされる *Bhelasamhitā* (BhS) については、医学文献の作者や注釈者たちによって引用されただけでなく、不完全ながらその写本が現存している。

〈写本・刊本〉

BhS の写本は、これまでのところ、南インド・タミルナードゥ州 Tanjore (Thanjavur) の Mahārāja Serfoji's Sarasvatī Mahāl Library 所蔵のパームリーフ写本（以下 Tanjore 写本とする。）と、A. von Le Coq によって中央アジア、東トルキスタンで発掘された紙の写本断片（以下中央アジア写本断片とする。）が確認されている⁴。

Tanjore 写本: A.C. Burnell の Index (Burnell 1880) では no.10773、P.P.S. Sastri のカタログ (Sastri 1933) では no.11085。202 葉のテルグ文字で記されたパームリーフ写本。3.8 × 42(cm)。各ページは 2～5 行を含む。板カバーに貼付された紙片にはローマ字で *Bhela-Samhitā*(sic.) とタイトルが表示され、写本番号、葉数および書写年と思われる 1650 A.D. という年号が記されている⁵。

この写本の保存状態は比較的良好であり、文字もかなり鮮明ではあるが、2～3 の葉にやや大きな破損や虫喰いが見られ、また、テキストの冒頭部分と終末部分は失われている。さらに、この写本のもとになった原写本の段階で、既に幾葉かが失われており、また何らかの原因で解読不可能な箇所も多かったようである⁶。

³Bhela は他の文献に引用される際には Bheda と表記されることが多い。しかし後述の Tanjore 写本においては一貫して Bhela と表記されており、本論文でも一応これに従うことにする。

⁴この他に C.C. は Bhēḍasamhitā の項にラホールの Paṇḍit, Rādhākṛishna が所蔵する写本 (Rādh 32) を記載しているが、この写本については既に A.F.R.Hoernle がその存在は確認できないとしている (Hoernle 1907 p.38)。また *New Catalogus Catalogorum* の編集者であるマドラス大学の E.R.Rama Bai によれば、(ラホールが現在パキスタン領であることもあって、) 近々発行される予定の *New Catalogus Catalogorum* の BhS の項ではこの写本については記載しない予定であるという。(Dr. E.R.Rama Bai からの私信による。)

⁵Burnell (Burnell 1880 p.63) はこの写本について、'Written about 1650, and apparently copied from an injured *ōlai* MS.' としているが、この *ōlai* MS. に関しては明らかになっていない。

⁶これについて、この写本の筆写者が注記している部分がある。例えば、第3巻 Vi の末尾と第4巻 Śā の冒頭部分は Tanjore 写本では欠落しているが、その部分で筆写者はテルグ語で「原本の [第]46[葉] がない。」(*māṭṛkalō 46 lēdu.*) と記している。(Sarasvatī Mahāl Library の Telugu Paṇḍit, N.Visvanatham 氏の教示による。)

なお、これまでに Tanjore 写本のかかなりの数のコピー (transcription) が作成され、現在は各地の図書館に所蔵されている⁷。

中央アジア写本断片: A. von Le Coq による中央アジアの学術調査によってもたらされた考古学的資料は Berliner Sammlung として知られているが、これにはかなりの量のサンスクリット写本の断片が含まれている。このうち、東トルキスタンの Tuyuq で発見された 1 葉の紙の写本断片が H. Lüders によって BhS の写本の 1 部 (Ni 第8章の末尾から Vi 第1章冒頭部分まで) であり、Tanjore 写本のテキストともほぼ一致していることが確認された⁸。この紙片は 8.6 × 28.4(cm) で 1 面は 10 行を含む。字体はギルギット書体である。中央部から破り取られた形跡があり、表面の最初の 6 行と裏面の最後の 5 行は損なわれている。Lüders はこの写本断片の材質と字体から、9 世紀頃にインド人によってトルキスタンで書かれたものであろうと推測している。現在この写本断片はベルリンの国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin - Preußischer

⁷その主なものは次の通りである。

〈1〉ロンドンの The British Library, Oriental and India Office Collections 所蔵、IOL 4672, Burnell 404。A4 サイズほどのノート形式の紙にテルグ文字で筆写されたもの。200 ページよりなる。Burnell によれば 1872 年頃に筆写されたものであるらしいが、これまであまり研究資料として用いられたことはなかったようである (Keith & Thomas 1935 p.739)。

〈2〉Bibliothèque Nationale de Paris の Palmyr Cordier Collection に含まれる 3 種の写本: *sanscrit* 1182 (デーヴァナーガリー文字); *sanscrit* 1183 (テルグ文字); *sanscrit* 1184 (ローマ字)。これら一連の写本は、Tanjore 写本をテルグ文字で 1900 年に筆写し (1183)、これをデーヴァナーガリー文字に転写し (1182)、さらにこれを P. Cordier 自身がローマ字に転写したもの (1184) である。これらは P.Cordier によって研究され、A.F.R.Hoernle が BhS Śā の一部の校訂テキストを作成する際に資料の 1 つとして 1184 を使用し (Hoernle 1907 pp.192-194)、さらに J.Filliozat が BhS Sū 14 の校訂テキストを作成する際に 1182,1183 を用いた (Filliozat 1949 pp.170-173)。

〈3〉大谷大学図書館所蔵ヘルンレ文庫の Hr-68-1, Bheda Samhita。この写本は 1905 年に A.F.R.Hoernle が当時のマドラス政府に依頼して入手したもの。A5 サイズ 294 ページよりなり、見開きページの片側にテルグ文字で Tanjore 写本が筆写され、その片側におそらく Hoernle 自身によると思われるデーヴァナーガリー文字による転写とローマ字による注記が随所に見られる。Hoernle はこれを資料の 1 つとして BhS Śā の一部の校訂テキストを作成した (Hoernle 1907 pp.37-39, pp.192-194)。

〈4〉ロンドンの The Wellcome Institute Library 所蔵の写本 α 894。1920 年に M.R.Ācārya によって筆写されたデーヴァナーガリー文字による写本。187 ページよりなる。

〈5〉南インド・ケーララ州 Trivandrum の The Oriental Research Institute & Manuscripts Library 所蔵の写本 T 1446。1920 年にデーヴァナーガリー文字で筆写されたもの。

⁸Lüders 1927 pp.148-162。

Kulturbesitz - Orientabteilung) に所蔵されている⁹。

Lüders はさらに、同じ Tuyuq で発見された同一書体の紙の写本断片¹⁰が、BhS Sū 20 の1部に相当するテキストを含んでいることを示唆しているが、この紙片はわずかに 5.5 × 6.5(cm) のもので、断片的にしかテキストが復元できないものであるため、その当否については、Lüders 自身も保留している¹¹。

これまでに次の3つの刊本が出版されている。

- (1) Asutosh Mookerjee (ed.), “The Bhela Samhita. Sanskrit Text.” *University of Calcutta, Journal of the Department of Letters*. Vol. VI, (1921), pp.1-272.
- (2) Girijādayālu Śukla (ed.), *Bhelasaṃhitā*. Vidyābhavana Āyurveda Granthamālā 25, Varanasi, 1959.
- (3) V.S.Venkatasubramania Sastri & C. Raja Rajeswara Sarma (eds.), *Bhela Saṃhitā*. Central Council for Research in Indian Medicine & Homoeopathy Pub. 31, New Delhi, 1977.

このうち(1),(2)ともに Tanjore 写本そのものではなく、そのコピーをもとにしたものであり、テキストの読み間違いが多く、編集者による emendation にも問題が多い。(3)は Tanjore 写本そのものをもとにした批判版であり、先行する2種の刊本の欠点を、ある程度補うものではある。しかし、Critical apparatus 中の表現に問題があり、写本の読みと編集者による emendation との違いが明確でない箇所が多く、また編集者によって恣意的に挿入されたと思われる語句（各章中のキャプションや章末のコロフォンなど）が多く見られる。このように3種の刊本はいずれも欠陥の多いものであると言わざるを得ない¹²。

〈成立年代・成立地〉

Bower MS. には Bhela によるとされる3種の粥 (*yavāgū*) の名が記されており¹³、7世紀頃の Vāgbhaṭa の AHS Ci 21.70-73ab と AS Ci 16.14; 23.57-60 にも Bhela によるものとされる薬の処方が見られる¹⁴。従って、アートルーヤ学派に属する医師としての Bhela の業績は、かなり

⁹S.H.T. p.287, no.641. Tafel 38.

¹⁰S.H.T. p.288, no.642.

¹¹Lüders 1927 p.155.

¹²本論文では(3)の刊本を底本として用い、章および節の番号もこれに従った。

¹³Bower MS. II p.802.

¹⁴AHS には、*bheḍādyāḥ kiṃ na paṭhyante* (AHS U 40.88c) という記述があり、この頃には BhS はあまり重視されていなかったようである。

古い時代からよく知られていたのではないかと考えられる。

これらより後代の医学文献や注釈文献になると、Bhela に帰される薬の処方や BhS からの引用と見られる記述がしばしば見られるようになるが、現存の BhS の記述と一致するものはあまり多くはない。現存の BhS のものとほぼ一致するテキストを引用している医学文献作者のうち、もっとも古い時代に属するのは10世紀頃の Candrāṭa、12世紀頃の Aruṇadatta¹⁵といったところである。これらのことと、BhS の中央アジア写本断片が9世紀頃のものであるらしいこと、また CS との類似性などを考慮すると、現存の BhS は、9～10世紀頃には既に存在しており、そのテキスト形成の起源は CS とほぼ同時代と考えることができるであろう。なお、BhS に対する注釈文献は知られていない。

BhS には CS には見られない植物名の記載があるが、BhS の刊本(3)の Introduction の中で R.S.Singh は、このうちのいくつかがインド西部に固有の植物であるとしている¹⁶。さらに彼はラジャスタンの Śekhāvadi(sic.) 地方には、著名な Vaidya を多く輩出している Bheḍā という名をもつ Brahmin の一族が居住していることをもとに、BhS とインド西部との関係を重視している¹⁷。

これまでに Palmyr Cordier, A.F.R. Hoernle, Jean Filliozat, R.F.G. Müller といったアーユルヴェーダ研究者たちが BhS の歴史的な重要性に着目し、部分的な校訂テキストや部分訳など¹⁸を発表してきたが、これらはすべて Tanjore 写本のコピーをもとにした研究であり、それぞれに問題点が多い。また、これまでに出版された3種の刊本も信頼に足るものとは言い難い。

そこで、新たな批判本の作成が望まれるのであるが、前述のように現存の BhS の写本資料は不完全であり、これだけで本来の BhS のテキストを完全に復元することは不可能である。しかし、まず Tanjore 写本のテキストを忠実に再現し、CS に多く見られる類似部分と照合すること、さらに他の医学文献、注釈文献に見られる BhS からの引用テキストをもとに Tanjore 写本テキストの欠落部分を類推することなどによって、ある程度までは BhS 本来の姿が再現できるので

¹⁵Candrāṭa on *Cikitsākalikā* 20 = BhS Sū 20.1-2ab; do. 80 = BhS Si 1.5-9;

Aruṇadatta on AHS Śā 5.30-32 = BhS In.7.6. (Dr. G.J.Meulenbeld の教示による。)

¹⁶Singh 1977 pp.vii-viii.

¹⁷Singh 1977 p.viii.

¹⁸Cordier 1903 pp.324-327; Hoernle 1907 pp.37-39, pp.192-194; Filliozat 1949 pp.170-173; Müller 1962.

はないかと考えられる¹⁹。もちろん BhS の新たな写本の発見が望まれるのは言うまでもないことである。

1.2 Bhelasamhitā 全巻の構成

BhS はアーユルヴェーダの師匠アートレーヤとその弟子との問答形式で記述される医学書である。この記述形式は、アートレーヤとアグニヴェーシャの問答を中心とした CS のものと同じである。

BhS Sū 17.7cd-9 は、BhS 全体の構成を示し、各巻名とそれぞれの巻に含まれる章の数を明らかにしている。これによれば、本来の BhS は全8巻120章から成っていたことがわかる。それぞれの巻名と章数は次の通りである。

- 第1巻 *Sūtrasthāna* 全30章
- 第2巻 *Nidānasthāna* 全8章
- 第3巻 *Vimānasthāna* 全8章
- 第4巻 *Śārīrasthāna* 全8章
- 第5巻 *Indriyasthāna* 全12章
- 第6巻 *Cikitsāsthāna* 全30章
- 第7巻 *Kalpasthāna* 全12章
- 第8巻 *Siddhisthāna* 全12章

この本来の BhS 全巻の構成は、巻名、その配列順、および各巻の含む章数に至るまで、現存の CS と全く同じであり、当然ながらその内容にも類似点が多く認められ、完全に一致する表現も見られる。しかし、Tanjore 写本では、本来のテキスト全体の約18%に相当する22章分のテキストが欠落しており²⁰、保存されている章にも部分的なテキストの欠落や乱れが多く見られることから、Tanjore 写本によって復元可能な BhS のテキストは、その量に限って言えば、全体の80%弱ほどであろう。

一方、現存の BhS 全体のテキストの量は CS の約1/3程度であり、欠落部分が多いとしても、CS よりもはるかにその記述は簡略なものである。また各章名とその配列順には、BhS と CS の間に若干の異同が認められ、CS では散文が随所に見られるが、BhS では散文は、Śā のみに見

¹⁹ この方向での筆者自身の試みについては Yamashita 1997 参照。

²⁰ 完全に欠落している章は次の通り。Sū 1,2,3,24,29,30; Ni 1; Vi 2,7,8; Śā 1; Ci 29,30; Ka 2,10,11,12; Si 3,9,10,11,12.

られるだけである。

以上のように、アーユルヴェーダの成立に関する伝承の通りに、BhS は CS と同系のアートレーヤ学派に所属する文献であり、すくなくとも部分的には CS よりも古い内容を保持している可能性があると言える²¹。

一方、BhS には前述の通り CS には見られない薬草名が、多数記載されており²²、これらの調合法等にも独自性が認められる。また、BhS には身体内の火(*kāyāgni*)の働きを重視する記述²³や、マナス(*manas*)についての独特の見解²⁴など、他のアーユルヴェーダの文献には見られない、BhS 独自の記述も散見される。

1.3 Bhelasamhitā, Śārīrasthāna の概要

BhS 全体の構成と内容について言及される BhS Sū 第17章には、「シャーリーラ [スターナの章] は8つであり、そこでは身体部分・小部分が説明された。」(BhS Śā 17.7cd: *śārīrāṇy aṣṭa gātrāṅga-pratyāṅgaṃ yatra varṇitam*.) とあり、BhS Śā は CS Śā と同じく8つの章からなるものであることがわかる。しかし、現存の BhS Śā は、第1章に相当する部分の全てと第2章の冒頭部分、および最終章の第8章の途中からの部分が欠如している。次に現在見ることのできる BhS Śā のテキスト内容の概略を示す。

²¹ Cf. Renou et Filliozat 1953 p.151.

²² Singh 1977 pp.vii-viii 参照。

²³ e.g. Vi 3.5; Śā 4.3-24ab; Ci 11.1.

²⁴ 精神的な病(*unmāda*)に関する記述中に次のような表現が見られる。

śīrastālvantaragatam sarvendriyaparam manaḥ (BhS Ci 8.2cd). Cf. Dasgupta 1922 II pp.340-342.

Bhelasamhitā, 第4巻 Śārīrasthāna

BhS Śā 【第1章】 (欠落)

BhS Śā 【第2章】

1 (冒頭部分欠落)

2-3 精液 (*śukra*) の現われについて

4-5 精液の減衰について

6 血 (*rakta*) 等の身体諸要素の減衰について

7-8 胎児が得られない原因とその治療について

9-13 感覚器官の対象の確定について

BhS Śā 【第3章】 (全20節)

「同じでない親族の」 (*asamānagotrīya* [という言葉葉で始まる] 章

1-3 序、受胎について

4-5 胎児の異常と胎児が存在しない原因について

6-7 胎児の *vāyu* と胎児死亡等の原因について

8 女性・男性・中性の胎児となる原因について

9-11 双子・多数子となる原因、Kṛṣṇātreya の言葉

12-13 ナーガウダラ (*nāgodara*) について

14-16 胎児の障害の原因と治療について

17-20 *sāttvika*, *rājasa*, *tāmasa* である胎児の出生

BhS Śā 【第4章】 (全33節)

「人間の考察」 (*puruṣaṇi(vi?)caya*) の章

1 序、滋味 (*rasa*) から生じる人間と病について

2 食物の消化に関する問いとアートレーヤの答

3-9 身体内の火の5種 (*ālacaka*, *rājaka*, *bhrājaka*, *sādhaka*, *pācaka*) に関する問答

10 身体内の火 (*kāyāgni*) について

11 身体内の *somamaṇḍala* について

12 身体内の *sūryamaṇḍala* について

13-15 身体内の火と太陽との比較について

16-17ab 生物の身体の大きさと

身体内の火の大きさについて

17cd-18ab 衰弱した身体内の火と *Āyurveda*、
医師 (*kāyacikitsaka*) について

18cd-19ab 食物が得られない際の身体内の火と
身体要素について

19cd-20cd 生物と *agni*, *soma* について

21ab 食物が得られない際の身体内の火と
腸 (*antra*) について

21cd-24ab *jāṭharāgni* について

24c-f 病 (*vikāra*) について

25 死と寿命について

26 *alasaka*, *viṣūcika* に関する問答

27 *antarguha*, *hṛdaya* における
dhamanī 等に関する問答

28-29 *apasmāra* に関する問答

30 胎児の初発部位についての聖仙達の論議

31 胎児の食物、胎児と母親の繋がりについて

32 胎児の腹中での状態についての聖仙達の論議

33 *rasajaḥ puruṣaḥ* (?)

BhS Śā 【第5章】 (全25節)

「身体の考察」 (*śarīraṇi(vi?)caya*) の章

1 序、身体における *ojas*, *tejas*、

その12の拠り所について

2 4種の *yoni* (*jarāyuja*, *aṇḍaja*, *udbhiñja*,
svedaja) について

3 植物について

4 胎児の発生の正常・異常について

5 胎児の性差等について

6 血 (*rajas*) が見られない理由について

7 *pradara* (病名?) について

8 妊婦の滋味摂取の3つの目的について

9 胎児の性差による腹中の位置の違いについて

10 胎児の身体は6つのものからなることについて
(*jalakāya*, *vāyukāya*, *tejahkāya*, *prṥthivikāya*,
ākāśakāya, *rasakāya*)

11 プルシャは6つの要素からなる
(*5bhūta*, *brahma*=*avyakta*)

12 身体中の地性のもの (*pārthiva*) について

13 男女の身体について

14 3doṣaによる胎児の異常について

15 胎児の身体に14の *indriyakāya*
(7*divyākāya*, 7*mānuṣakāya*) が入り込む

16-22 *divyākāya* について

23 *mānuṣakāya* について

24 *jalakāya*, *vāyukāya*, *tejahkāya*, *prṥthivikāya*,
ākāśakāya について

25 まとめの詩節, *manas*, *buddhi*, *brahman* について

BhS Śā 【第6章】 (全6節)

「胎児の降下」[についての] 小さい (*kuḍḍikā*
garbhāvakrānti) 章

1 序、

アートレーヤの主張: 「胎児は、*mātrja*, *pitṛja*,
ātmaja, *sātmaja*, *rasaja*、*sattva* は *aupapādaka*。」
バラドヴァージャによる反論

2 *jīva* に関するアートレーヤとバラドヴァージャの
論争

3 様々な存在が1つの胎児を構成する理由につい
ての論争

4 *avyakta*, *vyakta* と *avikāra*, *vikāra* についての論争

5 前生の記憶について

6 まとめの詩節、*dvija* について

BhS Śā 【第7章】 (全9節)

「身体の数」 (*śarīrasamkhyā*) の章

1 序、6種の皮膚 (*tvac*) についてのそれぞれの説明

2 360の骨 (*asthi*) について

3 “*hṛdayam ekaṁ cetanāyatanam*”,
10の *prāṇāyatana* 列挙

4 14の内臓 (*koṣṭha*) 列挙
(CS Śā 7.10の15の内臓のうち *pakvāśaya* を欠く)

5 56の身体小部分 (*pratyaniga*) 列挙

6 *añjali* 量によって計られるものについて

7 どうして *jīva* は他の身体入るのかについての問答

8 プルシャにおける *adhyaत्मadevatā*

(*agni*, *prṥthivī*, *āpas*, *ākāśa*, *vāyu*, *vidyutparjanya*, *indra*,
gandharva, *mṛtyu*, *āditya*, *candramā*, *tvastṛ*, *viṣṇu*,
prajāpati, *brahman*) とその働きについて

9 まとめの詩節

BhS Śā 【第8章】

- 「誕生のスートラの」(*jātisūtrīya*) 章
- 1 序、不妊のものと不妊でないものについて
- 2 胎児と *bīja*について
- 3-4 胎児の体色等について、
シャウナカとアートレーヤの議論
- 5 流産 (*garbhapāta*) と胎児の乾燥 (*garbhaśoṣa*)
- 6 4 か月目以降の妊婦の世話について
- 7 妊婦の世話の効果について
- 8 7 か月目の状態
- 9-10 8 か月目、産室 (*sūtikāgāra*) について
- 11 出産間近の妊婦とその世話について
- 12 後産 (胎盤) (*aparā*) について
- (以下欠落)

以上のように BhS Śā のテキストは、現在のところ、第1章の全てと第2章の冒頭部分および第8章第12節以下は見ることができない。また他にも部分的なテキストの欠落箇所が多くあり、完全にはその意味が理解できない部分も少なくない。しかし、ここで概観したように、BhS Śā の現存の各章の内容は、CS Śā の各章の内容ときわめてよく似ており、部分的にはまったく同じ表現も見られるところから、BhS Śā はCS Śā とほぼ同じ意図のもとに編纂された巻であるとみなすことができるであろう。しかし、CS Śā で、哲学的な文脈においてアートマン論が展開されている第1章に相当する部分が、現存の BhS Śā には欠けている点は惜しまれるところである。

BhS Śā と CS Śā の内容を比較すると、BhS,CS ともに人体の解剖学のおよび胎生学的な論議が展開されているのであるが、このうちの人体構造に関するテキストについて見ると、BhS Śā 第7章の記述は、CS Śā 第7章のそれとほぼ同様に構成されているものの、より簡潔であり、人体構造の認識についてはCSのほうがより詳細であるとの印象を受ける²⁵。また人体の初発

²⁵ 本論文第1部第3章参照。

部位についての論議ではCS Śā 6.21には明らかに他の医学派からの影響が認められるのであるが、BhS Śā 4.30にはそれがなく、この記述に関して言えばBhSは、アートレーヤ学派本来の学説を保持しているものと考えられる²⁶。

BhS Śā の各章の記述内容は、CS Śā の各章に較べるとやや乱雑に配列されているようであり、その文体、表現については、CS Śā のものより古風なものとの印象をうける。しかしこれはテキストの乱れに由来するものであるのかも知れない。また、BhS Śā 4.3-24ab には、「身体内の火」(*kāyāgni*) についてのまとまった記述が見られるが、これはCS Śā には見られないものである。

このように、BhS Śā は、CS Śā のより古い段階の内容を保存している可能性があり、さらに詳細な両文献の比較研究が望まれるのであるが、そのためには、現時点では、テキストの校訂作業の進展を待たなくてはならない。

²⁶ 本論文第1部第1章CS Śā 第6章の項参照。

第2章 Suśrutasaṃhitā, Śārīrasthāna

2.1 Suśrutasaṃhitāについて

Suśrutasaṃhitā(SS)の冒頭の部分(SS Sū 1.1)にも、CSに見られたものと同様のアーユルヴェーダの起源についての神話的な記述が見られる。それによると、アーユルヴェーダは、最初にブラフマー神によって語られ、プラジャーパティ神、アシュヴィン双神を経てインドラ神がこれを受け取ったことになっている。ここまでの過程はCSにおけるものと同じである。これから後の経過はCSとは異なり、SSでは、インドラ神からこれを学んだのはカーシ(Kaśi)地方の王、ディヴォーダーサ ダンヴァンタリ(Divodāsa Dhanvantari)であるとされている。そして彼にはアウパデーナヴァ(Aupadhenava)、ヴァイタラナ(Vaitaraṇa)、アウラブラ(Aurabhra)、パウシュカラヴァタ(Pauṣkalāvata)、カラヴィーリヤ(Karavīrya)、ゴープララクシタ(Gopurarakṣita)、スシュルタ(Suśruta)といった弟子達がおり、そのうちのスシュルタが、師の教えをまとめたものが『スシュルタサンヒター』と呼ばれることになったとされている。したがって、SSにおけるダンヴァンタリは、CSにおけるプナルヴァス アートレーヤと同じく、アーユルヴェーダの主導者としての権威をもち、一方、SSにおけるスシュルタは、CSにおけるアグニヴェーシャと同じくアーユルヴェーダを学ぶ学生であり、SSの作者ということになる。

ただし、この記述の中で名前が挙げられているダンヴァンタリの弟子達の歴史的な事蹟については、ほとんど何も知られていない。スシュルタについても例外ではなく、SS Ci 2.3 および SS Ut 66.4 にヴィシュヴァーミトラ(Viśvāmitra)という人物の息子であるという記述²⁷がある以外、その生存年代についての詳細は不明とする以外にない。

Bower 写本中の記述にSuśrutaという名前が見られ、SSからの引用と見られる部分があることから、現存のSSの原型となる部分は遅くともBower 写本以前の段階から知られていたことになるが²⁸、現存のSSは、CSと同様に後に幾度かの改編を経て完成されたものであり、特に

²⁷SS Ci 2.3: *dhanvantarir dharmabhṛtām varīṣṭho vāgviśāradaḥ /*

viśvāmitrasutām śiṣyam ṛṣim suśrutam anvaśāt // MBh 13.4.54 にも *Suśruta* の名が見える。

²⁸cf. Renou et Filliozat 1953 p.147.

最終巻の *Uttaratantra* と呼ばれる部分は、そのタイトル、内容、文体から見て、後に附加された補遺であることは明らかである。

SSの11～12世紀頃の注釈者Ḍalhaṇaは、SSの改編者としてNāgārjunaという名前を挙げている²⁹。しかし、Nāgārjunaという人物は、アーユルヴェーダの領域に限っても複数人知られており、SSの改編者であるNāgārjunaとその年代を特定することは困難である³⁰。

現存のSSが最終的にはいつ頃成立したのかは、今のところ明確ではないが、CSとSSの内容、特に解剖学的な記述や薬物に関する記述を比較すると、SSのほうがCSのものよりもはるかに詳しく、アーユルヴェーダのより発展した段階の知識を含んでいることはほぼ確実であり、文体についてもSSのほうがより新しいものとの印象を受ける。しかし、現存のこの両文献の成立過程はともに複雑であり、両者の内容にも、古い段階のものと新しい段階のものとが混在していると考えべきであろう。また、この両文献には部分的にはあるが、互いの学説を意識していた形跡が認められる³¹。

2.2 Suśrutasaṃhitā 全巻の構成

SSは次のように全6巻186章からなる。

第1巻 *Sūtrasthāna* 全46章

第2巻 *Nidānasthāna* 全16章

第3巻 *Śārīrasthāna* 全10章

第4巻 *Cikitsāsthāna* 全40章

第5巻 *Kalpasthāna* 全8章

第6巻 *Uttaratantra* 全66章

²⁹Ḍalhaṇa on SS Su.1.1: ... *pratisaṃskṛtā 'pīha nāgārjuna eva*. ...

³⁰Jean Filliozat は、A.D.6世紀頃の医学書 *Yogaśataka* の作者として知られるNāgārjuna か、al-Bīrūnīによって記録されたA.D.10世紀頃の *rasāyana* の権威者であったNāgārjuna のどちらかであろうとしている (Renou et Filliozat 1953 p.147)。

³¹G. Jan Meulenbeld は、CSの改編者Dṛḍhabala が、SS Ut を参照していた可能性があることを根拠として、SSの改編者は、Dṛḍhabala 以前、すなわちA.D.500年以前の人であろうとしている (Meulenbeld 1974 p.432)。これに対して、P.V. Sharma は逆に、SSの改編者Nāgārjuna は、Dṛḍhabala よりも後の人であろうとしている (Sharma 1980 p.ix.)。

SS 全巻の構成は本論文第1部第1章で示したCS 全巻の構成によく似ており、巻名もほぼ共通している。ただしSS にはCS 第3巻 *Vimānasthāna*、CS 第5巻 *Indriyasthāna*、CS 第8巻 *Siddhisthāna*に相当する巻はなく、SS 第6巻として、CS には見られない *Uttaratantra*が附加されている。この *Uttaratantra* は、先に触れたように、後代に付け加えられた補遺篇である。SS 第1～3巻ではアーユルヴェーダの基礎的な理論、解剖学、診断論などが扱われ、第4巻以降は病理、治療の実際、薬物の調合とその適用など臨床的なテーマが中心である。

SS Sū 1.7では、CS Sū 30.28と同様にアーユルヴェーダの8つの部門(*aṅga*)を紹介している。その名称、順番はCSのものとはやや異なる。CSは自らの専門分野である「身体治療」(*kāyacikitsā*)を第1番目に挙げていたが、SSは、まず「外科」(*śalya*)を最初に挙げる。SSが示すアーユルヴェーダの8部門は次の通りである。1. 外科(*śalya*) 2. 特殊外科(*śālākya*) 3. 身体治療(*kāyacikitsā*) 4. 鬼神学(*bhūtavidyā*) 5. 小児科(*kaumārabhṛtya*) 6. 毒物論(*agadatantra*) 7. 不老長生法(*rasāyanatantra*) 8. 強精法(*vājikaraṇatantra*)。SSはこのうちの1. 外科(*śalya*)³²に重きを置く医学書であると自ら規定している(SS Sū 1.9-20)。

2.3 Suśrutasamhitā, Śārīrasthānaの概要

SS Śā は全10章からなる。第1章「あらゆる生類に関する考察」の章では、プルシャに関する哲学的な論議が展開される。第2章「精液と血液の浄化」の章では、妊娠に至るまでの様々な事象が説明される。第3章「胎児の降下」についての章は、妊娠中の胎児および妊婦についての教説が中心である。第4章「胎児についての教説」の章では、胎児の身体、発育について述べられ、また睡眠や精神的な不調についての記述も見られる。第5章「身体の数についての教説」の章では解剖学的な知識が総括される。第6章「個々の急所についての詳述」の章では急所(*marman*)が、第7章「脈管類の分類」の章では主にシラー管(*sirā*)が詳細に解説される。第8章「シラー管穿刺法」の章では瀉血の実際が明らかにされる。第9章「ダマニー管についての教説」の章ではダマニー管(*dhamanī*)が詳細に解説される。第10章「妊婦についての教説」

の章は妊娠、出産、育児に関する実践的な内容である。

以下にSS Śā 全10章の概略を示す。このうち*v.*とした部分は韻文である。

³² 「外科」(*śalya*)について、SSは次のように説明している。「このうち外科というのは、様々な草・木片・石・砂・金属・土・骨・毛・爪・膿汁・分泌物・悪性の腫れ物・〔母胎の〕中で〔死亡し〕異物となった胎児を除去することを目的とし、ヤントラ、シャストラ〔という医療器具〕・腐蝕剤・火の使用、腫れ物の診断のためのものである。」(SS Sū 1.8.1: *tatra ślyañ nāma vividha-tṛṇa-kāṣṭha-pāṣāṇ-pāṇśu-loha-loṣṭāsthī-bāla-nakha-pūyāsrāva-duṣṭavraṇāntargarbhaśalyoddharaṇārthaṃ, yantra-śastra-kṣārāgni-praṇidhāna-vraṇavinīśayārthaṃ ca.*)

SS Śā 【第1章】(全22節)

「あらゆる生類に関する考察」の章
(*sarvabhūtacintā*)

1-2 序

3 *avyakta, kṣetrajña*について

4 〔プルシャ以外の〕24のものについて

5 感覚器官(*indriya*)の対象について

6 質料因(*prakṛti*)と派生物(*vikāra*)について

7 神格等について

8 精神原理としてのプルシャについて

9 原質(*prakṛti*)とプルシャについて

10 *3guṇa*とプルシャについて

11*v.* 医学における*prakṛti*について

12*v.*,13*v.*,14 医学における5大元素からなるもの

15*v.* 感覚器官とその対象について

16 医学におけるプルシャについて

17 人間の*guṇa*について

18 人間のうちの*3guṇa*の性質をもつもの

19 人間のうちの5大元素について

20 *3guṇa*と5大元素の関係について

21*v.* 5大元素と感覚器官の対象, 積重説

22*v.* まとめの詩節

SS Śā 【第2章】(全58節)

「精液と血液の浄化」の章
(*śukraśoṇitasuddhi*)

1-2 序

3-4 精液の異常について

5 血の異常について

6-11*abv.* 精液の浄化について

11*cd*-12*abv.* 健全な精液について

12*cd*-16*v.* 血の浄化について

17*v.* 健全な血について

18-23*v.* 月経の異常について

24 以上のまとめ

25 月経中の養生について

26*v.*,27*v.* 月経後の行いについて

28,29*v.* 男子を欲するものの性交について

30*v.* 女子を欲するものの性交について

31-32 月経中の性交・受胎について

33*v.*,34*v.* 健やかな親子について

35 子の体と目の色について

36*v.* 受精について

37*v.* 双子(*yama*)について

38-52*v.* 性的変異について

53*v.* 腹中の胎児の排泄について

54*v.* 腹中の胎児はなぜ泣かないかについて

55*v.* 腹中の胎児の呼吸・動き・睡眠について

56*v.* 先天性(*svabhāva*)について

57*v.* 前生を記憶している人(*pūrvajātismāra*)

58*v.* 前生の*karman*について

SS Śā 【第3章】(全36節)

「胎児の降下」の章
(*garbhāvakrānti*)

1-2 序

3 精液・血と5大元素について

4 受精、プルシャの同義語、*3guṇa*について

5 性差の決定要因について

6 妊娠適時(*ṛtu*)について

7-12*v.* 月経と妊娠について

13,14*v.*,15*v.* 妊娠の徴候について

16 妊娠後の禁忌事項

17*v.* 妊婦の痛みと胎児の痛みについて

18 妊娠1-4か月目の胎児、妊婦が望むもの

19-29*v.* 妊婦の嗜好・習慣と胎児、*karman*

30 妊娠5-12か月目の胎児について

31 腹中での胎児への栄養について

32 胎児の初発部位についての聖仙達の論議

33 胎児の構成要素(*pitṛja, mātṛja*等)

34 胎児の性・数の予想について

35-36*v.* まとめの詩節

SS Śā 【第4章】(全99節)

「胎児についての教説」の章
(*garbhavyākaraṇa*)

1-2 序

3 生命(*prāṇa*)について

4 胎児の7種の皮膚(*tvac*)について

5-20(奇数節のみ*v.*) 胎児の7種の基質(*kalā*)

21-23*v.* 精液について

24 妊娠、後産(胎盤)(*aparā*)について

25-31(25,30以外は*v.*) 各臓器の発生とその位置

32*v.* 心臓(*hṛdaya*)の形態等について

33-48(33,38以外は*v.*) 睡眠、昼寝について

49*v.* 倦怠(*tandra*)の定義

50*v.* 欠伸(*ṛmbha*)の定義

51*v.* 衰耗(*klama*)の定義

52*v.* 懶惰(*ālasya*)の定義

53*v.* 悪心(*utkleśa*)の定義

54*v.* 衰弱(*glāni*)の定義

55*v.* 鈍重(*gaurava*)の定義

56*v.* 人事不省(*mūrcchā*)の定義

57-59*v.* 胎児の発育と滋味(*rasa*)について

60*v.* 目と毛穴についてのDhanvantariの見解

61*v.* 爪と毛髪について

62-99(64,68,72以外は*v.*) 性格(*prakṛti*)分類

SS Śā 【第5章】(全51節)

「身体の数についての教説」の章
(śarīrasaṃkhyāvyākaraṇa)

1-2 序

3 胎児, 身体の定義, 5大元素について

4 身体小部分 (prayaṇiga) について

5-7 皮膚 (tvac), 基質 (kalā), 身体要素 (dhātu), 内臓
等の名称の列举、それらの数について

8 臓器 (āśaya) について

9 腸 (antra) の長さについて

10 孔 (srotas) について

11 腱 (kaṇḍarā) について

12 網状組織 (jāla) について

13 束状組織 (kūrca) について

14 肉腱索 (māṃsaraṅgu) について

15 縫合部 (sevanī) について

16 骨集合 (asthi-saṃghāta) について

17 分界線 (sīmanta), 骨集合について

18 骨 (asthi) の総数 300 について,
骨の総数 360 とする異説について

19 身体各部分の骨

20 骨の形態による分類

21-22v. asthisāra について

23v. 肉 (māṃsa) について

24-25v. 関節 (saṃdhi) の機能による分類

26 身体各部分の関節, その数について

27 関節の形態による分類について

28v. 関節の補足説明

29 身体各部分の靱帯 (snāyu), その数について

30-36v. 靱帯の形態による分類

37 身体各部分の筋 (peśi), その数について

38v. 筋の機能について

39 女性の筋、子宮 (garbhaśayyā) の位置について

40 筋の状態について

41v. 男・女の筋について

42 「急所, 脈管類の分類は他の〔章〕で〔述べる〕。」

43v. 母胎 (yonī) と子宮 (garbhaśayyā)

44v. 子宮の形態について

45v. 出産時の胎児と子宮について

46-48v. 身体部分の確定と外科的知識 (śalyajñāna)

49 解剖の実際について

50-51v. まとめの詩節

SS Śā 【第6章】(全43節)

「個々の急所についての詳述」の章
(pratyekamarmanirdeśa)

1-2 序

3-4 急所 (marman) の総数、組成による分類

5-6 急所の位置による分類

7 組成による分類の詳説

8-14(9-14v.) 急所損傷の結果による分類

15 急所の定義

16-17 損傷の結果による分類の詳説

18-21(18-20v.) 急所と sirā, vāyu、急所損傷

22 急所周辺部損傷について

23 急所損傷による死について

24 四肢にある急所について

25 腹・胸部にある急所について

26 背部にある急所について

27 頭頸部にある急所について

28-30v. 各急所の範囲について

31-34v. 手足の切断と急所損傷について

35v. 急所に存在するものについて

36-40v. 急所損傷の詳説について

41v. 急所損傷と同等のことについて

42v. 急所損傷をうけた人について

43v. 急所に宿る病について

SS Śā 【第7章】(全23節)

「脈管類の分類」の章
(sirāvarṇavibhakti)

1-2 序

3 シラー管 (sirā) 総説

4-5v. シラー管と臍, 生命について

6-7 シラー管の分類と数について

8-9v. vāyu とシラー管について

10-11v. pitta とシラー管について

12-13v. śleṣman とシラー管について

14-15v. 血とシラー管について

16-17v. sarvavahā-sirā について

18v. シラー管の色について

19-22(19-21v.) 身体各部のシラー管、
損傷を避けるべきシラー管について

23v. 全身に分布するシラー管は蓮の根のごとし

SS Śā 【第8章】(全26節)

「シラー管穿刺法」(瀉血) の章
(sirāvyadhavidhi)

1-2 序

3 シラー管穿刺 (sirāvyadha) の禁忌例について

4-5 シラー管穿刺法の適応例について

6 シラー管穿刺法の方法について

7v. シラー管穿刺法を避けるべき日について

8-9 身体部位毎のシラー管穿刺法の方法について

10v. シラー管穿刺法に適する時について

11-13v. シラー管穿刺法の結果について

14v. シラー管穿刺法の回数について

15v. 過度の血液流出について

16v. 放血量について

17 各病におけるシラー管穿刺法の部位について

18-19 不完全なシラー管穿刺法について

20-21v. シラー管穿刺法に際しての注意

22-23v. シラー管穿刺法の効能

24 各種の療法を施された患者の養生

25-26v. 汚れた血 (duṣṭasaṇṭita) の除去について

SS Śā 【第9章】(全13節)

「ダマニー管についての教説」の章
(dhamanīvyākaraṇa)

1-2 序

3 脈管類 (sirā, dhamanī, srotas) の区別等について

4-9(偶数節はv.) ダマニー管 (dhamanī) 分類, 詳説

10v. ダマニー管中の空隙 (kha) について

11v. ダマニー管と感覚器官について

12 ダマニー管の機能、損傷、治療について

13v. ダマニー管の語義

SS Śā 【第10章】(全70節)

「妊婦についての教説」の章
(*garbhīṇvyākaraṇa*)

1-2 序

3 出産までの妊婦への一般的な注意事項

4 妊娠月別の食事について

5 産室(*sūtikāgāra*)について

6-7 出産の徴候について

8 出産準備について

9 出産について

10 逆子(*pratiloma*)について

11 固着した胎児について

12-13 新生児の手当て, 臍の緒(*nāḍī*)の切断14*v.* 母乳について

15 新生児の飲物について

16-18 産婦の飲食物、養生について

19-20*v.* 産婦の病について21 後産(胎盤)(*aparā*)が降りてこない例

22 乾燥した身体 of 産婦について

23 新生児の保護について

24 命名式について

25 乳母(*dhātri*)の条件、授乳について26-27*v.* 授乳時のマントラ

28-29 不健全な母乳について

30 母乳が出ない際の食物等について

31 母乳の検査, 授乳すべきでない母乳について

32-33*v.* 母乳の質の悪化について34-44(37,38以外は*v.*) 子供の病、薬の与え方

45 子供に無病・力等を与えるものについて

46,47*v.* 子供に関する禁忌事項について48*v.* 母乳に代わるものについて

49 生後6か月目から食物を与えるべきである

50 子供の守護について

51 魔物(*graha*)に憑かれた子供の症状について

52 修学について

53 結婚について

54-65(56,57以外は*v.*) 流産とその際の処置

66 初産後6年目に妊娠した場合について

67 妊婦の病に対する処置について

68-70*v.* 子供の美しさ・知力等を増進するもの

以上 SS Śā 全10章441節

SS Śā と CS Śā の全体の構成、内容はよく似ている。SS Śā 第1章では、CS Śā 第1章と同様にプルシャについての哲学的な論議が展開されているし、SS Śā 第2章の胎生学はCS Śā 第2章およびCS Śā 第6章後半の内容に近い。SS Śā 第3章とCS Śā 第3,4章はいずれも「胎児の降下」(*garbhāvakrānti*)というタイトルの章であり、人間の誕生についての教説である。SS Śā 第5章はCS Śā 第7章と同じく「身体〔各部分〕の数」(*śarīrasaṃkhyā*)についてというタ

イトルであり、解剖学的な知識の集成である。CS Śā の最終章である第8章では出産や育児についての具体的実践的な記述が見られたが、SS Śā の最終章である第10章もほぼ同様の内容である。

しかし、SS Śā 第6～9章の内容は、CS Śā には見られない。すなわち、SS Śā 第6,7,9章では急所(*marman*)、シラー管(*sirā*)、ダマニー管(*dhamanī*)が詳しく解説され、SS Śā 第8章は、シラー管に関連して、瀉血の方法が説明されている。これらの内容は、自らを「外科」(*śalya*)の専門書であると規定するSS Śā に独自のものである。

このようにSS Śā の全体の構成には、CS Śā と共通したものが認められ、CS Śā 全章を通じて表現された个体論としてのŚārīrasthānaの構想はここにも現われていると見られる。しかし、SSの外科学書としての特殊性が反映されて、CS Śā よりもはるかに詳しい内容の解剖学的外科的な知識が盛り込まれたことで、1つの个体論としては、まとまりを欠く結果となっている。

また哲学的な、プルシャについての論議に関しては、SS Śā 第1章だけに限定して見られるものであり、その内容についても古典的なサーンキヤ説のみをそのまま取り入れたものであると解釈³³でき、CS Śā 第1章に見られるような独自性は見られない。

CS Śā 6.21の胎児の初発部位についての議論の中に、SS Śā 3.32のダンヴァンタリの説が引用されていること、また逆に、SS Śā 5.18にはCS Śā 7.6の骨360説を意識した表現が見られることから、両文献相互の、あるいは両文献の属する学派間の影響関係が伺われる。

³³CS Śā 第1章では24要素説が主張されたが、SS Śā 1.3-9では古典サーンキヤ学派のいわゆる「2元25諦」説が説明されている。SS Śā に見られるサーンキヤ説について、E.H. Johnstonは次のように述べている。‘The other old medical work, the *Suśruta*, also contains a Sāṃkhya passage in its *Śārīrasthāna*, but this is much later than the corresponding section of the *Carakasamhitā* ...’. (Johnston 1937 pp.10-11.)

第3章 Aṣṭāṅgahrdayasaṃhitā, Śārīrasthāna

3.1 Aṣṭāṅgahrdayasaṃhitāについて

ヴァーグバタ (Vāgbhaṭa) によって著されたとされる *Aṣṭāṅgahrdayasaṃhitā* (AHS) は、CS、SS とならぶアーユルヴェーダの重要な古典である。ヴァーグバタは、AHS の他に *Aṣṭāṅgasamgraha* (AS) という医学書を著したとされている。AHS の各章末の奥書と、AS U 第50章のテキストにはこのヴァーグバタ自身についての記述がある。それによると、彼は、彼と同名の Vāgbhaṭa の孫であり、Sīṃhagupta の子であり、Sindhu 地方の生まれである。また彼の師匠は Avalokita という人物であった³⁴。

ヴァーグバタの生存年代、すなわち AHS の成立年代については、ほぼ A.D.600 年頃とするのがもっとも妥当なところであるとされている。その根拠は、AHS は CS、SS から多大な影響を受けており、その全巻の構成は、SS の補遺篇 (*Uttaratantra*) を含んだ形のものとはほぼ同じであること、しかも SS の補遺篇と AHS の補遺篇 (*Uttarasthāna*) には多くの類似点があること。また CS から採られたと考えられる部分については、CS の改編者である Dṛḍhabala によって改編を受けた部分からのものが見られること。700 年頃に成立したとされる *Mādhavanidāna* には AHS からの引用が見られること。さらに、672～682 年頃までインドに滞在した義浄による『南海寄歸内法傳』巻第三、二十七で、医学の8部門（八論）が説明された後、ある人物がその8部門を書物にまとめたことが記されている³⁵が、この人物がヴァーグバタである可能性が高いことなどである³⁶。

³⁴AS U 50.203: *bhiṣagvaro vāgbhaṭa ity abhūn me pitāmaho nāmadharo 'smi yasya / suto bhavat tasya ca sīṃhaguptas tasyāpy ahaṃ sindhuṣu labdhajanmā //*
AS U 50.204: *samadhiḡamya guror avalokitāt gurutarāc ca pituḥ pratibhā mayā / subahubheṣajaśāstravilocanāt suvihito 'ṅgavibhāḡavinirṇayaḥ //*

³⁵「斯之八術先為八部。近日有人略為一夾。」『南海寄歸内法傳』巻第三、二十七（大正大藏經第54巻p.223）

³⁶cf. Vogel 1965 pp.1-10; Meulenbeld 1974 pp.423-425; Wujastyk 1985.

3.2 Aṣṭāṅgahrdayasaṃhitā 全巻の構成

AHS は、全6巻120章からなり、すべて韻文である。その巻名は次の通りである。

第1巻 *Sūtrasthāna* 全30章

第2巻 *Śārīrasthāna* 全6章

第3巻 *Nidānasthāna* 全16章

第4巻 *Cikitsasthāna* 全22章

第5巻 *Kalpasiddhisthāna* 全6章

第6巻 *Uttarasthāna* 全40章

この構成は、SS の全巻の構成に大変よく似ている。ただし、SS に較べると、第2巻と第3巻の順序が入れ替わっており、第5,6巻の巻名がやや異なっている。AHS も SS とほぼ同様に第1～3巻³⁷は基礎医学的な内容であり、第4～6巻は臨床医学的な内容である。

3.3 Aṣṭāṅgahrdayasaṃhitā, Śārīrasthāna の概要

AHS Śā は次の全6章からなる。全て韻文である。各章のタイトルは次の通りである。

第1章 「胎児の降下」 (*garbhāvakrānti*) の章 (全100節)

第2章 「胎児損失」 (*garbhavyāpad*) の章 (全62節)

第3章 「身体の区分」 (*aṅgavibhāga*) の章 (全120節)

第4章 「急所の区分」 (*marmavibhāga*) の章 (全69節)

第5章 「異常の識別の」 (*vikṛtivyīñānīya*) 章 (全132節)

第6章 「使者などの識別の」 (*dūtādiviyīñānīya*) 章 (全73節)

以下、AHS Śā の内容の概略を示す。

³⁷AHS 第3巻 Ni の内容が、GP の中にはほぼそのままの形で取り入れられている。cf. Kirfel 1927.

AHS Śā 【第1章】(全100節)

「胎児の降下」(*garbhāvakrānti*)の章

・序

1 *sukra, ārtava*, 胎児の形成について, 木と火の比喻

2 胎児の成長について

3-4 *sattva*が*garbhāśaya*に入ることについて

5 胎児の性差について

5d-6 胎児の数、異常について

7 月経(*rajas*)について

8-9 出産に適した女性の年齢等について

10-16 異常な精液, 月経血とその治療について

18-20b 清浄な精液, 月経血について

20c-25b 女性と月経について

25c-26 月経と性交について

27ab 男, 女子の生まれる日について

27c-28 男子誕生のための儀礼について

29 *rahas*, 悪い子孫について

30 望みの息子を得るために

31-35b 性交について, マントラ

35c-36 懐胎の徴候について

37ab 1 か月目の胎児について

37c-42 *pumsavana*の儀礼等について

43 妊婦の世話について

44-49b 妊婦が避けるべきこと, 胎児の異常等

49c-50a 2 か月目の胎児について

50b-52b 2 か月目の妊婦の状態について

52c-54b 妊婦の欲求について

54c-55 3 か月目の胎児について

56 臍の緒(*nāḍī*)について

57-58b 4～7 か月目の胎児について

58c-62b 7 か月目の妊婦の異常(*kaṇḍū*など)

62c-65 8 か月目の胎児とこの時期の出産について

66 出産の時期について

67-69b 9 か月目以降の妊婦の世話について

69c-72 胎児の性とそれに対応する妊婦の特徴

73-74b 産室(*sūtigr̥ha*)について

74c-76 出産の徴候について

77-82 出産について

83-91 固着した胎児と胎盤の除去法等について

92-93b *makkalla*について

93cd 新生児の世話について

94-99b 産婦の世話について

99c-100 産婦(*gatasūtā*)という名称等について

Colophon

AHS Śā 【第2章】(全62節)

「胎児損失」(*garbhavyāpad*)の章

・序

1-9b 出血, 痛み(流産)の際の妊婦の手当て

9c-13 堕胎の際の妊婦の手当て

14-18b *upaviṣṭaka*と*nāgodara*その手当て

18c-21b *līna garbha*について

21c-22b *udāvarta*について

22c-27c 胎児死亡の徴候とその際の手当て

27d-28 胎児の母胎内での位置異常とその処置

29-38 母胎内の死児を取り出す方法について

39-40 胎盤除去の方法について

41-46 その後の妊婦の手当てについて

47-52 *balā taila*について

53 分娩時の異常について

54-58b 流産の恐れのある7 か月目の妊婦への処方

58c-60 8 か月目の妊婦への処方

61-62 妊娠の間違いと*bhūta*について

Colophon

AHS Śā 第3章(全120節)

「身体の区分」(*aṅgavibhāga*)の章

・序

1 *6aṅga, pratyaṅga*について

2-4b 5大元素と*guṇa*について

4cd 母親から生じる(*mātr̥ja*)身体部分について

5ab 父親からの(*paitṛka*)身体部分について

5cd 精神性の(*caitana*)部分について

6ab *sātmyaja*について

6cd *rasaja*について

7-8c 身体の中の3*guṇa*について

8d-9b 7層の皮膚(*tvac*)について

9c-10c 7*kalā*について

10c-11 7臓器(*āsaya*)について

12 内臓(*koṣṭha*)について

13 10*jīvitadhāna*について

14 *jāla, kaṇḍarā, kūrcā, sīvanī*の数について

15 *māṃsaraṅgu, asthisar̥ghāta, sīmanta*の数

16-17b 骨(*asthi*)360説と300説, 関節(*saṃdhi*)210説と2000説

17c-18b *snāyu, peśī*の数について

18c-20b *mūlasirā*について

20c-34 *sirā*の分布域と各数について

35-38 *sirā*の機能、色などについて

39-40b 24*dhamanī*について

40c-48 *srotas*の分類, 異常等について

49 消化の火(*pācaka pitta*)について

50-54 消化の火と*grahaṇī*等について

55-62b 食物の消化について

62c-63b 身体要素(*dhātu*)について

63c-64b 老廃物(*mala*)について

64c-70b 消化物の身体要素との同化について

70c-76 消化の火(*agni*)について

77-78 3種の体力(*dehabala*)について

79 3種の土地(*jāṅgala, ānūpa, sādharmaṇa*)

80-82 *añjali*量によって計られるものについて

83 体質(*prakṛti*)の7要因について

84-89 ヴァータ性の*prakṛti*

90-95 ピッタ性の*prakṛti*

96-103 シュレーシュマン性の*prakṛti*

104 複合性の*prakṛti*

105 年齢の3区分について

106 望ましい身長について

107-116 望ましい身体の相について

117-118 8種の*sāra*について

119-120 人間と3*guṇa*について

Colophon

AHS Śā 【第4章】(全69節)

「急所の区分」(*marmavibhāga*)の章

・序

1-2b 107の急所(marman)の位置の概説

2c-9 四肢の急所の位置、名称、損傷時の症状

10-26b 胴体部の急所の位置、名称、損傷時の症状

26c-37b 頭頸部の急所の位置、名称、損傷時の症状

37c-46 急所の定義と組成による分類、損傷時の症状

47-59 急所損傷の結果による分類

60-63c 急所の範囲による分類

63d-67 急所と*sirā*について

68-69 急所と急所以外の部位の損傷について

Colophon

AHS Śā 【第5章】(全132節)

「異常の識別の」(*vikṛtivyjñānīya*)章

・序

1-2 死の兆候(*riṣṭa*)の定義

(1-3)(extra) 死の兆候と医師の態度について

3-4b 死の兆候の2大別(*sthāyin, asthāyin*)

4c-5 死の兆候として現われる変化の分類

6-122b 死の兆候の列举と説明

6-21b 色形の変化

21c-38b 感覚の変化

38c-53b 身体の陰翳(*chāyā*)と輝き(*prabhā*)

53c-61b 異常行動

61c-62b 発汗の異常、発熱

62c-64b 意識等の変化

64c-65b *prakṛti*の変化

65c-70b その他の行動、感覚等の変化

70c-71b 死の兆候となる病状について

71c-73 熱病(*jvara*)について

74-76b *raktapitta*について

76cd *kāsa, śvāsa*について

77ab *yakṣman*について

77c-78b 嘔吐(*chardī*)について

78cd 渴き(*tṛṣṇā*)について

79ab 過度の酩酊(*madātyaya*)について

79c-80b 痔疾(*arśas*)について

80c-84b 下痢(*atīsāra*)について

84cd *pravāhika*について

85ab 結石(*aśmari*)について

85c-87b *meha*について

87cd *visarpa*について

88-89b *gulma*について

89c-91b *udara*について

91c-92b *pāṇḍuroga*について

92c-96 *śopha*について

97 *visarpa*について

98 *kuṣṭha*について

99ab *vāyu*について

99c-100b *vātāsra*について

100c-101b 合併症について

101c-102b 「治療を」避けるべき病気について

102c-103b 急性症状について

103c-104b *aṣṭhīlā*について

104c-108 *vāyu*について

109 急性症状について

110 異常な発汗について

111-112 皮膚に現われる異常について

113 *kāmala*などについて

114ab *vighṛṣṭa*について

114c-116 *vraṇa*について

117-118 行動の異常について

119-120b 熱病患者について

120c-121b 身体表面に現われる異常について

121c-122b 医師が治療を避けるべき患者の症状

122c-132 医師と患者について、まとめ

Colophon

AHS Śā 【第6章】

「使者などの識別の」(*dūtādivijñānīya*)章

・序

1 患者からの使者の*varṇa*について

2-16 患者からの使者のふるまいの凶兆について

17-28 患家に至るまでに見られる凶兆について

29 吉凶のしるしに対する医師の態度について

30-39 吉兆について

40-59b 夢の中の凶兆について

59c-65b 凶兆である夢を見る理由と夢の効果について

65c-73b 吉兆である夢について

73c-f *Śārīrasthāna*のまとめ

Colophon

AHS Śā 第1章では正常な妊娠、出産、新生児の状態が説明され、第2章では妊娠時の異常と流産、死産等とその処置について説明される。この第1,2章には、CS Śā 第2,3,4,6章の胎生学と第8章の臨床的な産科学の内容が、多く取り入れられている。AHS Śā 第3,4章は、SS Śā 第5,6章の解剖学的な記述の内容を取り入れたものである。AHS Śā 第5章は、患者の「死の兆候」(*riṣṭa*)についての詳説であり、第6章は、患者から医師へ遣わされる使者の様子や、患者の家に往診するまでに見られる物事、および患者の見る夢などからその患者の容態を占うと、いった、一種の吉凶占いについての章である。このAHS Śā 第5,6章については、CS Śā, SS Śā には対応する部分がない。「死の兆候」(*riṣṭa*)および患者の容態を占うことについては、主にCS 第5巻 *Indriyasthāna* で説明されており、このAHS Śā 第5,6章の内容もCS In の内容を取り入れたものである。なお、AHSには*Indriyasthāna*という名称の独立した巻はない。

以上のように、AHS Śāは、胎生学産科学(第1,2章)、解剖学(第3,4章)、患者の容態を占うこと(第5,6章)の3つの部分に分けることができる。この3つの部分にはCS,SSそれぞれの専門分野の知識がたくみに整理され、韻文化されて取り入れられており、アーユルヴェーダの医師にとって実用的な内容をもつものとなっている。

AHS Śā には、CS Śā のほぼ全ての章、およびSS Śā 第1章で見られたようなアートマンや輪廻と解脱についての内容は、まったく取り入れられておらず、もはや1つの个体論として読むことは不可能である。

第4章 Aṣṭāṅgasamgraha

4.1 Aṣṭāṅgasamgraha について

Aṣṭāṅgasamgraha (AS) は、AS と同様にCS やSS などのアーユルヴェーダの成果を取りまとめることを目的としてできた医学全書である。AH が全巻韻文で簡潔に構成されているのに対して、AHS のテキストには韻文と散文が混在しており、全巻の規模もAHS より大きいものである。AS は、AHS とともにヴァーグバタ (Vāgbhaṭa) の著作であるとされているが、このヴァーグバタが同一の人物なのかどうかについては完全には明らかになっていない³⁸。また、AHS とAS はどちらが古い文献なのかについても、様々な論議があったが、Luise Hilgenberg & Willibald Kirfel, Claus Vogel, G.Jan Meulenbeld, Kenneth G.Zysk らの研究³⁹によって、AS は、韻文のAHS が完成した後で、それを散文によって増補する形で成立したものであろうことがほぼ明らかとなっている⁴⁰。

4.2 Aṣṭāṅgasamgraha 全巻の構成

- Aṣṭāṅgasamgraha 全6巻150章
- 第1巻 *Sūtrasthāna* 全40章
- 第2巻 *Śārīrasthāna* 全12章
- 第3巻 *Nidānasthāna* 全16章
- 第4巻 *Cikitsasthāna* 全24章
- 第5巻 *Kalpasthāna* 全8章
- 第6巻 *Uttarasthāna* 全50章

第5巻の名称がやや違うのみで⁴¹、他はAHS とまったく同じ構成である。ただし、AHS の方

³⁸アーユルヴェーダ文献の注釈者たちは、AHの作者のことをVāgbhaṭaと呼び、ASの作者のことをVṛddhavāgbhaṭaと呼ぶことが多い。しかしこの呼称は、作者の年代の違いを指すのではなく、テキストの規模の大きさの違いを示しているものとも考えられる。cf. Meulenbeld 1974 p.423.

³⁹Hilgenberg & Kirfel 1941; Vogel 1965 pp.1-10; Meulenbeld 1974 pp.423-425; Zysk 1991,1993,1995,1997.

⁴⁰*Madhyavāgbhaṭa*と呼ばれるAHSとASの中間的な性格の著作が存在していたことが知られており、Niścalakaraの*Ratnaprabhā*のなかでしばしば引用されている。cf. Vogel 1965 p.5.

⁴¹AHSの第5巻は*Kalpasiddhisthāna*

が章の数が多く、散文が混じっており全体としてはAHSよりも大部である。

4.3 Aṣṭāṅgasamgraha, Śārīrasthāna の概要

AS Śā は次の全12章からなる。

- 第1章 「息子を望む者の」 (*putrakāmīya*) 章
- 第2章 「胎児の降下」 (*garbhāvakraṇṭi*) の章
- 第3章 「胎児の手当ての」 (*garbhopacaraṇīya*) 章
- 第4章 「胎児損失」 (*garbhavyāpad*) の章
- 第5章 「身体の区分」 (*aṅgavibhāga*) の章
- 第6章 「シラー管の区分」 (*sirāvibhāga*) の章
- 第7章 「急所の区分」 (*marmavibhāga*) の章
- 第8章 「体質の違いの」 (*prakṛtibhedīya*) 章
- 第9章 「異常の識別の」 (*vikṛtivyijñānīya*) 章
- 第10章 「異常行動の識別の」 (*vikṛtehāviññānīya*) 章
- 第11章 「異常な病の識別の」 (*vikṛtavvyādhiviññānīya*) 章
- 第12章 「使者の識別の」 (*dūtādiviññānīya*) 章

次にこれら各章の内容の概略を示す。

AS Śā 【第1章】 (全44節)

「息子を望む者の」 (*putrakāmīya*) 章

- 1 序
- 2 結婚するにふさわしい女性の条件について
- 3 子供をつくるにふさわしい男女の年齢
- 4 正常な精液の性質について
- 5 血 (月経) について
- 6 月経血の滞りと *gulma* について
- 7 *vātodara* について
- 8-9 月経血の滞りと妊娠の取違いについて
- 10 正常な月経血の性質について
- 11 精液と月経の現われる年齢について
- 12 性交にふさわしい男女について
- 13 異常な精液について
- 14 異常な月経血について
- 15-18 異常な精液と月経血の治療について
- 19 妊娠適時 (*ṛtukāla*) について
- 20-22 月経時の女性の特徴について
- 23-24 月経時の手当てについて
- 25-26 性交にふさわしい時期について
- 27-28 子供を得るための儀礼
- 29-30 性交について
- 31-33 妊娠後の *pumsavana karman* について
- 34 胎児の保持 (*garbhashthāpana*) について
- 35 従者、配偶者の妊婦への接し方について
- 36-37 子供の〔体の〕色とその決定要因について
- 38 子供の性格を決定する要因について
- 39-44*v.* 優れた子供を得るために

AS Śā 【第2章】 (全41節)

「胎児の降下」 (*garbhāvakraṇṭi*) の章

- 1 序
- 2 受胎、*jīva* について
- 3 胎児の性・数の決定について
- 4 受胎、妊娠の徴候について
- 5 胎盤 (*aparā, jarāyu*) の形成について
- 6 母乳のできかたについて
- 7 妊娠1〜3か月目の胎児について
- 8 胎児の性差について
- 9 胎児の性別による妊婦の変化について
- 10 妊娠3か月目以降の胎児について
- 11-12 *dauhṛdīnī* について
- 13 4〜7か月目の胎児について
- 14-15 8か月目の胎児、*ojas* について
- 16 母胎内での胎児の状態について
- 17 母胎内での胎児の栄養について
- 18 胎児の排泄物、分娩時の状態について
- 19 胎児の性別による妊婦への影響
- 20-28 異常な胎児の形成について
- 29-35 胎児の発育障害について
- 36-37 妊婦の世話と妊娠異常の原因について
- 38 妊婦の世話と手当てについて
- 39*v.* 緊急 (*ātyayika*) の場合の妊婦の処置
- 40*v.* 妊婦の保護について
- 41*v.* 胎児が母胎内で泣かない理由

AS Śā 【第3章】(全40節)

「胎児の手当ての」(*garbhopacaraṇīya*)章

1 序

2 妊娠1か月目の妊婦の世話, 摂取すべきもの

3-4 妊娠1〜7か月目の妊婦の世話, 摂取すべきもの

5-7 妊娠8か月目の妊婦の世話, 摂取すべきもの

8-10 8か月目以降の妊婦の世話, 摂取すべきもの

11-12 産室(*sūtikāgāra*)、付添い婦

13 出産の徴候について

14-26 出産の準備と出産について

27-36 分娩直後の産婦の処置について

37-39 分娩後の産婦の食事などについて

40,41*v.* 産婦(*sūtikā*)と呼ばれる期間と

その間の食事などについて

AS Śā 【第4章】(全59節)

「胎児損失」(*garbhavyāpad*)の章

1 序

2-10 妊娠中の妊婦の異常について

11-12 流産とその後の妊婦の手当てについて

13-50 胎児の発育異常の種類、原因、処置

14-22 *upaviṣṭaka, upaśuṣṭaka, nāgodara*23-24 *līna garbha*について25-26 *udāvarta*について

27 母胎内での胎児死亡の徴候について

28 *mūḍha garbha*について

29-30 母胎内での胎児の姿勢と妊婦について

31 *garbhaśalya*について

32-33 妊婦の死亡を防ぐために

34-50 母胎内で固着した死児除去方法と後処置

51 *balā taila*について52*v.* その他の処置について53-59*v.* 流産の後処置のための薬について

AS Śā 【第5章】(全68節)

「身体の区分」(*aṅgavibhāga*)の章

1 序

2 身体の6部分(*aṅga*)と小部分(*pratyāṅga*)3-6 身体の3*guṇa*, 5*mahābhūta*, *cetanā*7 母親から生じる(*mātrja*)身体部分について8 父親から生じる(*pitṛja*)身体部分について9 アートマンから生じる(*ātmaja*)身体部分10 自分に合ったものから生じる(*sātmaja*)身体部分11 滋味から生じる(*rasaja*)身体部分について12 身体の*sattva guṇa*について13 身体の*rajas guṇa*について14 身体の*tamas guṇa*について15 3*guṇa*と5*mahābhūta*について16 *pravibhāga*の名称列举17 6層の皮膚(*tvac*)について18 7層の皮膚(*tvac*)について19-24 *kalā*について25 感覚器官(*buddhīndriya*)について26 運動器官(*karmendriya*)について27 *manas*について28 7臓器(女性は8臓器), 内臓(*koṣṭha*)29 *srotas*について

30 眼の構造と機能について

31 *sirā, kaṇḍrā, medas, kapha*と舌(*jihvā*)32 10*prāṇāyatana*について33 腱(*kaṇḍarā*)について34 *jāla*について35 *kūrca*について36 *māṃsaraṅgu*について37 *sīvanī*について38 *asthisarighāta*について39 *sīmanta*について

40-43 360の骨について

44-48 210の*asthisamḍhi*について49-53 900の*snāyu*について54-58 500の*peśī*について59 2900965の*sirā, dhamanī*の微小な末端部

60 髪、髭、体毛について

61 *srotas*について

62 流動性のものについて

63-65 流動性のものの量について

66 *paramāṇu*について67 身体と解脱(*mokṣa*)について68*v.* まとめ

AS Śā 【第6章】(全41節)

「シラー管の区分」(*sirāvibhāga*)の章

1 序

2 10*mūlasirā*とその700の細管について3-6 各*sirā*の分布域について7-8 *sirā*の働き、色について9-13 24*mūladhamanī*の分布、働きについて14-19 *srotas*の数、種類、障害について20-22 *sirā, dhamanī, srotas*の定義、働きについて23 身体内の〔消化の〕火(*agni*)について

24-31 食物の消化・吸収、身体要素との同化

32 〔消化の〕火(*agni*)種類について33-36*v.* *srotas*の特徴、異常について37-38*v.* *śukra*が形成されるまでの時間について39*v.* *mala*について40-41*v.* 〔消化の〕火(*agni*)について

AS Śā 【第7章】(全31節)

「急所の区分」(*marmavibhāga*)の章

1 序

2-10 107の急所(*marman*)の位置と特徴について

11-12 急所損傷による影響について

13 急所の定義について

14 急所の組成による分類

15-22 急所損傷の結果による分類

23 急所の範囲による分類

24*v.* 急所と健康について25*v.* 急所損傷とその治療について26-27*v.* 急所損傷の際の症状について28-29*v.* 急所以外の部位の損傷について30-31*v.* 死を目前にした場合の治療について

AS Śā 【第8章】(全36節)

「体質の違いの」(*prakṛtibhedīya*)章

1 序

2-3 *doṣa*の組み合わせによって7種の体質(*prakṛti*)

が形成されることとその原因について

4-5 *doṣa*と8滴の*ojas*について6-8 *vāta prakṛti*について9-11 *pitta prakṛti*について12-14 *kapha prakṛti*について15 *saṃsarga prakṛti*について16 3*guṇa*による体質について

17-19 その他の体質の決定要因について

20-23 年齢の3区分(*bāla, madhya, vṛddha*)

24-25 寿命について

26 3種の力(*bala*)について27-28 8種の*sāra*について

29-31 身体各部位の大きさについて

32 望ましい身体の相について

33-34*v.* 望ましい身体の発育について35*v.* 3*guṇa*による性格分類36*v.* 望ましい性格について

AS Śā 【第9章】(全23節)

「異常の識別の」(*vikṛtivyijñānīya*) 章

1 序

2 死の兆候(*ṛṣṭa*)の定義

3 身体の色、体質と死の兆候について

4-6 身体の陰翳(*chāyā*)と輝き(*prabhā*)

7-10 死の兆候の列举

11-23*v*. 死を真近にした人の特徴

AS Śā 【第10章】(全35節)

「異常行動の識別の」(*vikṛtehāviññānīya*) 章

(全節韻文)

1 序

2-28 死の兆候の列举と説明

2-4 錯覚

5 視覚異常

6 聴覚異常

7-8 嗅覚・味覚・触覚異常

9-11 身体感覚異常

12-19 異常行動

20 温度感覚異常

21-22 感覚、体色異常

23 体質の変化

24 精神的な能力の減退

25-26 身体的な能力の減退

27-28 睡眠その他の異常

29-30 死を真近にした患者やその家族などに

対する医師の態度について

31-32*a* Caraka説の引用

32*b*-33*b* Suśruta説の引用

33*cd* Kṛṣṇa Ātreya説の引用

34 *ṛṣṭa*と*doṣa*について

35 まとめ

AS Śā 【第11章】(全57節)

「異常な病の識別の」(*vikṛtavyādhivijñānīya*) 章

(第1-2節以外は全て韻文)

1 序

2-57 死に至る病状について

2 死に至る一般的な病状

3-5*b* 熱病(*jvara*)について

5*c*-7 *raktapitta*について

8*ab* *kāsa*, *śvāsa*について

8*cd* *yakṣman*について

9 嘔吐(*chardi*)について

10*ab* 渴き(*trṣṇā*)について

10*cd* 過度の酩酊(*madātyaya*)について

11 痔疾(*arśas*)について

12-15 下痢(*atisāra*)について

16*ab* *pravāhika*について

16*cd* 結石(*aśmari*)について

17-18 *meha*について

19*ab* *visarpa*について

19*c*-20 *gulma*について

21-22 *udara*について

23 *pāṇḍuroga*について

24-28 *śopha*について

29 *udara*と*śopha*の患者について

30 *visarpa*について

31 *kuṣṭha*について

32 *vāyu*について

33 *vātāsra*について

34 合併症について

35 〔治療を〕避けるべき病気について

36 急性症状について

37 *aṣṭhīlā*について

38-42 *vāyu*について

43 急性症状について

44 異常な発汗について

45-46 皮膚に現われる異常について

47 *kāmala*などについて

48-49 *vighṛṣṭa*について

50-52 *vraṇa*について

53-54 行動の異常について

55-56 熱病患者について

57 医師が治療を避けるべき患者の症状について

58-64 医師と患者について、まとめ

AS Śā 【第12章】(全29節)

「使者の識別の」(*dūtādivijñānīya*)の章(第16節以降韻文)

1 序

2 患者からの使者と医師に関することについて

3-4 患者からの使者のふるまいの吉凶について

5-11 患家に至るまでに見られる吉凶のしるしについて

12-26 夢の吉凶について

27-28 吉祥な行動について

29 *Śārīrasthāna*のまとめ

以上のようにAS Śāの内容は、AHS Śāと同様に、胎生学産科学(第1,2,3,4章)、解剖学(第5,6,7,8章)、患者の容態を占うこと(第9,10,11,12章)の3つの部分に分けることができる。また、CS,SSがこれらの記述の主な典拠となっている点もAHS Śāと同じである。特にAHS Śā 第5章とAS Śā 第11章には完全に一致する部分が多い。ただし個々の内容は、AHS Śāに見られたものよりもはるかに詳細であり、第6,8章の内容はAHS Śāには見られなかったものである。

このように実用的な医学書としての性格がより顕著であるAS Śāには、やはりアートマンなどについての記述は見られず⁴²、やはり、一貫した内容をもつ个体論と見ることはできない。

⁴²ただしAS Śā 5.67 は、次のように、解脱に言及している。AS Śā 5.67: *tad etad aṅgam abhedena bhedataś ca gṛhyamāṇaṃ bandhāya mokṣāya ca bhavatīti*.

第5章 Kāśyapasamhitā, Śārīrasthāna

5.1 Kāśyapasamhitāについて

Kāśyapasamhitā (KS) は、別名 *Vṛddhajīvakiyatantra* とも言われ、*Vṛddhajīvaka* という人物に帰せられる医学書である。この文献の写本は、今のところ、1898年に Haraprasād Śāstrīによってネパールで発見されたものだけしか知られていない。この写本は不完全で、欠落箇所が多いものであり、テキストを完全に復元することは困難である。KS 第8巻 *Kalpasthāna* の *Samhitākalpādhya* 18-27 にはこの文献の成立に関する記述がある。それによると、KSは、聖仙 Kāśyapa によって著わされた論書 (*tantra*) を、Rcika の息子で、のちに *Vṛddhajīvaka* と呼ばれることになる Jīvaka が簡潔にまとめたものであり、さらにそれを Jīvaka の子孫の Vātsya という人物が改編したものである。このテキストはアーユルヴェーダの8部門のうちの小児科 (*kaumārabhṛtya*) に重きを置いた内容である⁴³。

小児の病氣治療に用いられる薬の権威者としての Kāśyapa という名は、すでに Bower 写本 (*Nāvanītaka* 2.14.1-30) や、AHS U 37.28に見られることから、かなり古い時代から知られていたようである。またKSは、後代のアーユルヴェーダの注釈者たちによってしばしば引用されているが、その引用部分が現存のKSの内容に一致するものは少なく、現存のKSの成立年代に関しては、今のところあまり明確ではない⁴⁴。

5.2 Kāśyapasamhitā 全巻の構成

現存のKSは欠落部分が多く、本来の構成を再現することは難しいので、ここではKS全巻の構成を解説するKS Ka *Samhitākalpādhya* 5-9 の記述に従って各巻の名称と章数を示す。() 内の数字は各巻の現在見ることのできる章(不完全な章も含む)の数である。

Kāśyapasamhitā 全9巻200章(78)

第1巻 *Sūtrasthāna* 全30章(11)

⁴³cf. Sharma 1992b pp.225-227; Tewari 1997

⁴⁴Prabodh Chandra Bagchi は、A.D.10世紀末の『迦葉仙人説醫女人經』(大正大藏經No.1691)は、現存のKSの一部の漢訳であるとし、仏教徒との関連を示唆している。cf. Bagchi 1942-1943.

第2巻 *Nidānasthāna* 全8章(0)

第3巻 *Vimānasthāna* 全8章(2)

第4巻 *Śārīrasthāna* 全8章(5)

第5巻 *Indriyasthāna* 全12章(1)

第6巻 *Cikitsāsthāna* 全30章(18)

第7巻 *Siddhisthāna* 全12章(8)

第8巻 *Kalpasthāna* 全12章(9)

第9巻 *Khilasthāna* 全80章(24)

このKS全巻のタイトルと構成および章数は、第7,8巻が入れ替わっていることと、第9巻に補遺篇としての *Khilasthāna* が付け加えられていることを除けば、CSのものとまったく同じである。

5.3 Kāśyapasamhitā, Śārīrasthāna の概要

KS Śā は、本来はCS Śā と同じく8章からなっていたようであるが、現在見ることができるのはそのうちの5章のみである。以下その主な内容を示す。(なお現在出版されているテキストのKS Śā には節の番号がない部分が多い。また欠落部分も多いので、ここでは各章の記述内容の概略を順に記す。)

1. (中間部分のみ残存)

季節 (*ṛtu*) について、*yuga* について、身体部位の数について、サーンキヤ説、アートマンの徴表 (*liṅga*) 列挙、身体と5大元素など。(全て韻文)

2.(冒頭部分欠如)

「異なった親族」(*asamānagotrīya*) の章

prāṇa と *bīja* について、3~9か月目の胎児の母胎内での成長過程と妊婦の状態、*ojas* について、*karman* について、前生の記憶について。(全て散文)

3.「胎児の降下」(*garbhāvakrānti*) の章

1-2 序

3 *jīva* が前の身体から他の身体へ入ることについて

4 胎児の身体と5大元素,*puruṣa*と*loka*,母親から生じるもの(*mātrja*),父親から生じるもの(*pitrja*),アートマンから生じるもの(*ātmaja*),自分に合ったものから生じるもの(*sātmyaja*),滋味から生じるもの(*rasaja*),*sattva*は自然に生じるもの(*auṣapāi(du)ka*)であること。

5-9v. 内臓(*koṣṭha*)等についての説明

(以下欠如)

4. (冒頭部分欠如)

「身体の考察」(*śārīravicaya*)の章

骨の名称と数の列挙,10の*prāṇāyatana*,内臓(*koṣṭha*)列挙,身体小部分(*pratyaṅga*)列挙,*hṛdaya*について,脈管類(*srotas*, *sirā*, *dhamanī*)について,小孔(*kūpa*)について, *añjali*量によって計られるもの,*śukra*について,粗大(*sthūla*)と微細(*sūkṣma*)について。(全て韻文)

5. 「誕生のスートラの」(*jātisūtrīya*)章

1-2 序

3 身体の形成などについて

4 精液(*śukra*)と血液(*śoṇita*)について

5 *ṛtukāla*について

6 男女の生み分けについて

7 性交について

8 *putrīyā iṣṭi*の手順,マントラについて

9 子の体色(*varṇa*)等について

10 食物と身体要素(*dhātu*)等について (以上散文)

(途中欠如)

妊婦のなすべきこと,儀礼,出産の徴候,付添い婦,出産,後産,妊婦の手当て等(韻文)

以上のように、KS Śāの内容は断片的にしか見ることはできないが、ほぼCS Śāの内容に沿ったものと言うことができる。また、KS Ka *Samhitākālpādhyāya* 7で、Ka Śāの内容は、*ātmaniścaya*であると述べている点は興味深い。

第6章 Śārīrasthānaの変遷について

CS以外の5種の文献に見られるŚāのうち、BhSとKSのŚāのテキストは、欠落部分が多いものの、ほぼCS Śāと同じ構成をもつものであり、その内容に関しても、ある程度まとまりのある個体論を意図したものであると推測できる。

SS Śāには、CS Śāと同様に、哲学的なプルシャ(アートマン)に関する記述(第1章)、胎生学的な記述(第2,3,4章)、解剖学的な記述(第5,6,7,9章)、出産・育児に関する社会的な慣習を含む具体的実践的な記述(第10章)が見られ、各章の配列の順序もCS Śāによく似ている。しかし、SS Śāには、外科的な医術を専門分野とする医学書としての性格が反映されて、解剖学的内容の解説に重点が置かれており、瀉血に関しての臨床的な内容の章(第8章)も含まれている。したがって、SS Śāの場合も、その内容については、CS Śāのような人間(個体)論を意識したものと見られるものの、全体としては首尾一貫したまとまりをもつものとはなっていない。

AHSとASのŚāは、CSとSSのŚāおよびCS Inの内容を取り入れ、新たな構想のもとに編集された、実用的臨床的な医学書としての性格をもったものである。この両文献のŚāは、純粹に医学的内容の記述だけで構成されており、CSとSSのŚāに見られたようなプルシャ(アートマン)などに関する形而上学的な論議は見られず、もはや個体論としての意図を読み取ることはできない。この両文献においては、Śārīrasthānaとは、単なる「身体論」を意味しているかのようなのである。

参考文献¹

- AHS: *Aṣṭāṅgahṛdayam* (The core of octopartite Āyurveda) composed by Vāgbhaṭa with the Commentaries (Sarvāṅgasundarā) of Aruṇadatta and (Āyurvedarasāyana) of Hemādri. collated by Anṇā Moreśwara Kuṇṭe and Kṛṣṇa Rāmchandra Śāstrī Navare, edited by Bhiṣagāchārya Hariśāstrī Parāḍakara Vaidya, Jaikrishnadas Ayurveda Series no.52. Varanasi, Delhi, 1982.
- AP: *Agni Purāṇa*. Ānandāśrama Sanskrit Series 41. Poona, 1957.
- AS: Vṛddhavāgbhaṭa, *Aṣṭāṅgasanīgrahaḥ, Induvyākhyāsahitaḥ*. Ananta Dāmodara Āṭhavale (ed.), Pune, 1980.
- BC: *The Buddhacarita: or, Acts of the Buddha*. Part I, II. ed. and trans. by E.H. Johnston. Panjab University Oriental Publications No.31. Calcutta, 1935.
- BhG: R.C. Zaehner, *The Bhagavadgītā*, with a commentary based on the original sources. Oxford, 1969.
- BhS: (1) Asutosh Mookerjee (ed.), “The Bhela Samhita. Sanskrit Text.” *University of Calcutta, Journal of the Department of Letters*. Vol. VI (1921). pp.1-272.
- (2) Girijādayālu Śukla (ed.), *Bhelasaṃhitā*. Vidyābhavana Āyurveda Granthamālā 25. Varanasi, 1959.
- (3)* V.S.Venkatasubramania Sastri & C. Raja Rajeswara Sarma (eds.), *Bhela Samhitā*. Central Council for Research in Indian Medicine & Homoeopathy Pub. 31. New Delhi, 1977.
- Bower MS.: A.F.R. Hoernle, *The Bower Manuscript*. Vol.I-III. Calcutta, 1893-1912. (reprint ed.: New Delhi, 1987).
- C.C.: Theodor Aufrecht, *Catalogus Catalogorum. An alphabetical register of Sanskrit works and authors*. Leipzig, 1891.
- Cikitsākalikā: P.V. Sharma (ed.), *Cikitsākalikā of Tīsaṭārya containing Sanskrit commentary of his son Candraṭa*. The Chaukhamba Āyurvijnan Granthamālā 21. Varanasi, 1987.
- CS: (1)* *The Charakasamhitā of Agniveśa revised by Charaka and Dṛidhabala with the Āyurveda-Dīpikā Commentary of Chakrapāṇidatta*. ed. by Vaidya Jādavaji Trikamji Āchārya. Bombay, 1941. (4th ed.: New Dehli, 1981.)

¹* 印のものは、本論文で底本として使用したテキスト。

- (2) *Carakasamhitā, with the commentary Āyurvedadīpikā by Cakrapāṇidatta, and the commentary Japalkpataru by Gaṅgādhara*, ed. by Narendranāth Sengupta and Balaicandra Sengupta. Calcutta, 1927 (Vol.1), 1928 (Vol.2), 1933 (Vol.3). (reprint ed.: 1st-5th part. Varanasi, Delhi, 1991.)

Garbhopaniṣad:

- (1)* "Garbhopaniṣat." *Sāmānya Vedānta Upanishads*. with the commentary of Sri Upanishad-Brahma-yogin. Madras, 1921. pp.168-180.
- (2) *Garbhopaniṣad*. Les Upanishad. Texte et traduction Collection fondée par Louis Renou. XXI. Paris, 1976.

GP: *Garuḍa Purāṇa*. Benares, 1969.

KS: *Kāśyapasamhitā (or Vṛddhajīvaka Tantra) by Vṛddhajīvaka and revised by Vātsyā* with an Introduction by Nepāl Rājguru Paṇḍit Hemrāj Śarmā. ed. by Vaidya Jāḍavji Trikamji Āchārya and Somanāth Śarmā of Nepāl. Nepāl Sanskrit Series No.1. 1938, Bombay.

ManS: *The Manusmṛti with the commentary Manvarthamuktāvalī of Kullūka*, ed. with citical and explanatory notes etc., by Nārāyaṇ Rām Āchārya "Kāvya-tīrtha". Bombay, 1887.

MBh: *The Mahābhārata*. ed. by Vishnu S. Sukthankar and S.K. Belvalkar. Vol.22-24, Poona, 1951.

Milindapañho: *The Milindapañho*, being Dialogues between King Millinda and the Buddhist Sage Nāgasena. The Pali Text, edited by V.Trenckner. London, 1880. (reprint ed.: London, 1962.)

NyāS: *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyatīkā & Viśvanātha's Vṛtti*. Vol.I,II. Kyoto, 1982.

PDhS: *The Prasastapāda Bhāṣya with Commentary Nyāyakandali of Sridhara*. ed. by Vindhyaesvari Prasad Dvivedin. Baranas, 1895. (2nd ed.: New Delhi, 1984.)

PP: *Padma Purāṇa*. Calcutta, 1958.

S.H.T.: Walter Clawiter, Lore Holzmänn and Ernst Waldschmidt (eds.), *Sanskrihandschriften aus den Turfanfunden*. Teil I, Wiesbaden, 1965.

SK: *Sāṃkhyā Kārikā of Īśvara Kṛṣṇa*, with the Commentary of Swami Narayana and Gaudapadacharya and tattwakāumudī of Vachaspati Mishra, with Kiranavali of Krishnavallabhacharya Swami-narayana. Varanasi.

Samyutta Nikāya : *The Samyutta-Nikāya of the Sutta-Piṭaka*, Part 1, ed. by M.L. Feer, Pali Text Society, London, 1960.

SS: *Suśrutasamhitā of Suśruta With the Nibandhasaṅgraha Commentary of Śrī Dalhanāchārya and the Nyāyacandrikā Pañjikā of Śrī Gayadāsachārya on Nidānasthāna*. edited from the Begining to the 9th Adhyāya of Cikitsāsthāna by Vaidya Jāḍavji Trikamji Āchārya and the rest by Nārāyaṇ Rām Āchārya "Kāvya-tīrtha". Bombay, 1938. (5th ed.: Varnasi, Delhi, 1992.)

VDhP: *The Viṣṇudharmottarapurāṇam*. Delhi, 1985 (reprint ed.).

VS: *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda*. critically edited by Muni Śrī Jambuvijayaaji. Baroda, 1961. (reprint ed.: Baroda, 1982.)

YājñS: (1)* *Yājñavalkyasmṛti of Yogīshwara Yājñavalkya with the Mitākṣarā Commentary of Vijñāneshwar edited with The 'Prakash' Hindī Commentary by Umesh Chandra pāndey*. (5th ed.) Varanasi, 1994.

(2) *The Yājñavalkyasmṛti with the Commmentary Bālakṛīda of Viśvarūpachārya*. ed. by Mahamahopadhyaya T.Ganapati Sastri. Trivandrum, 1921-22. (reprint ed.: 1982, New Delhi.)

(3) *Aparārkhāparābhīdhāparādityaviracitaṭīkāsametā Yājñavalkyasmṛtiḥ*. Poona, 1904.

YogS: *Pātāñjalayogasūtrāṇi*. Ānandāśrama-saṃskṛta-granthāvalī 49. Poona, 1919.

Bagchi, Pranbodh Chandra. 1942-1943. "A Fragment of the Kāśyapa-Samhitā in Chinese." *Indian Culture* Vol.IX. pp.53-64.

Barkhuis, R.. 1986. *Kuṣṭha*, Groningen.

Barua, B.M.. 1936. "Bhela-samhitā Its antiquity and importance as a medical treatise." *Indian Culture* 3. pp.190-194.

Bedekar, V.M.. 1957. "Studies in Sāṃkhya: Pañcaśikha and Caraka." *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* Vol.XXXVIII. pp.140-147.

Bronkhorst, Johannes. & Ramseier, Yves. 1994. *Word Index to the Prasastapādabhāṣya*. New Delhi.

Burnell, A.C.. 1880. *A Classified Index to the Sanskrit MSS. in the Palace at Tanjore*. London.

Chattopadhyaya, Debiprasad. 1977. *Science and Society in Ancient India*. Calcutta.

Comba, Antonella. 1987. "Carakasamhitā, Śārīrasthāna I and Vaiśeṣika pholosophy." G.Jan Meulenbeld & Dminik Wujastyk (eds.) *Studies on Indian Medical History*. Groningen. pp.43-61.

Cordier, Palmyr. 1903. "Récentes découvertes de MSS. médicaux sanscrits dans l'Inde (1898-1902)." *Le Muséon*, N.S. 4, pp.321-352.

- Das, R.P.. 1922. "Miscellanea de operibus Ayurvedicis (II)." *Journal of the European Ayurvedic society* Vol.2. pp.6-35.
- Dasgupta, Surendranath. 1922. *A History of Indian Philosophy*. Vol.I-V. Cambridge. (reprint ed.:Delhi, 1975.)
- Dutt, Uday Chand. 1922. *The Materia Medica of Hindus, with a glossary of Indian plants by George King*. revised (2nd) ed., with additions by Kaviraj binod Lall Sen, Kaviraj Ashutosh Sen and Kaviraj Pulin krishna Sen. Calcutta. (reprint ed.: New Delhi, 1989.)
- Filliozat, Jean. 1949. *La Doctrine Classique de la Médecine Indienne, ses origines et ses parallèles grecs*. Paris. (2nd ed.:Paris, 1975.)
- Filliozat, Pierre-Sylvain. 1990. "Yukti, le quatrième pramāṇa des médecins (Carakasamhitā, Sūtrasthāna XI, 25)." *Journal of the European Āyurvedic Society* Vol.1. pp.33-46.
- Hara, Minoru. 1980. "A Note on the Buddha's Birth Story." *Indianisme et Bouddhisme, Mélanges offerts à Mgr Étienne Lamotte*. Publications de l'institut orientaliste de Louvain 23. Louvain, pp.143-157.
- Hilgenberg, Luise & Kirfel, Willibald. 1941. *Vāgbhaṭa's Aṣṭāṅgahṛdayasaṃhitā, ein altindisches Lehrbuch der Heilkunde*. Leiden.
- Hoernle, A.F.R.. 1907. *Studies in the medicine of ancient India. Part I, Osteology or the Bones of the human body*. Oxford. (reprint ed.:New York, 1978.)
- Johnston, E.H.. 1937. *Early Sāṃkhya. An Essay on its Historical Development according to the Texts*. London.
- Jolly, Julius. 1899. "Sanskrit dohada, dvaiḥṛdaya." *Indogermanische Forschungen* 10. pp.213-215.
- 1901. *Medicin*. Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde (Encyclopedia of Indo-Aryan research), III Band, 10 Heft. Strassburg.
- English trans.: by C.G. Kashikar, *Indian Medicine*. Poona, 1951. (2nd ed.: New Delhi, 1977.)
- Keith, A.B. and Thomas, F.W. (eds.). 1935. *Catalogue of the Sanskrit and Prākṛit Manuscripts in the Library of the India Office*. Vol.II. Oxford.
- Kirfel, Willibald. 1927. "Das Nidānasthāna im Garuḍapurāṇa." *Aus Indiens Kultur, Festgabe Richard von Garbe*. Erlangen. pp.102-108.
- Kutumbiah, P..1969. *Ancient Indian Medicine*. (revised ed.) Bombay, Calcutta, Madras, New Delhi.
- Larson, Gerald J.. 1979. *Classical Sāṃkhya*. (2nd revised ed.) Delhi, Varanasi, Patna.

- Lévi, M.Sylvain. 1896. "Notes sur les Indo-Scythes." *Journal Asiatique* 8. pp.444-484.
- Lüders, Heinrich. 1898. "Zwei indische Etymologien, Sanskrit dohada." *Göttingen Nachtrag Phil-Hist.Kl*. pp.1-5.(= *Philologica Indica*. Göttingen, 1940, pp.44-47).
- 1927. "Medizinische Sanskrit-Texte aus Turkestan." *Aus Indiens Kultur, Festschrift für R.Garbe*. Erlangen. pp.148-162.(= *Philologica Indica*. Göttingen, 1940. pp.579-591).
- Meyer, J.J.. 1928. "Über den anatomisch-physiologischen Abschnitt in der Yājñavalkya- und in der Vishṇusmṛiti." *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 35. pp.49-58.
- Mukhopadhyaya, Girindranath. 1922-1929. *History of Indian Medicine, containing notices, biographical and bibliographical, of the Ayurvedic physicians and their works on medicine, from the earliest ages to the present time*. Vol.I-III. Calcutta. (reprint ed.:New Delhi, 1974.)
- Müller, R.F.G.. 1939. "Ueber die Tridoṣa-Lehre in der altindischen Medizin." *Sudhoffs Archiv für Geschichte der Medizin und der Naturwissenschaften* 32. pp.290-314.
- 1955. "Altindische Embryologie." *Nova Acta Leopoldina* (Neue Folge 17-115). pp.5-52.
- 1962. "Eine Wind-Lehre der Bheḷasaṃhitā." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens und Archiv für Indische Philosophie* Band VI. pp.29-39.
- Renou, L. et Filliozat, J. (eds.). 1953. *L'Inde Classique, Manuel d'études indiennes*. Tome 2. Paris.
- Roṣu, Arion. 1978. *Les Conceptions Psychologiques dans les Textes médicaux indiens*. Paris.
- 1981. "Les Marman et les Arts martiaux indiens." *Journal Asiatique* CCLXIX (3-4). pp.417-451.
- Sastri, P.P.S.. 1933. *A descriptive Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tanjore Mahārāja Serfoji's Sarasvatī Mahāl Library Tanjore*. Vol.XVI, Tanjore.
- Sharma, Priya Vrat. 1980. "Introduction." *Suśrutasaṃhitā of Suśruta with the Nibandhasaṅgraha commentary of Śrī Dalhanāchārya and the Nyāyacandrikā pañjikā of Śrī Gayadāsāchārya on Nidānasthāna edited from the Beginning to the 9th Adhyāya of Cikitsāsthāna by Vaidya Jādavji Trikamji Āchārya and the rest by Nārāyaṇ Rām Āchārya "Kāvyaṭīrtha"*. (4th ed..) Varanasi Delhi. (5th ed.:1992.) pp.iii-xvi.
- 1981-1985. *Caraka-Saṃhitā*. Agniveśa's treatise refined and annotated by Caraka and redacted by Dṛḍhabala, text with English translation. Varanasi, Delhi.
- 1992a. "Medical Literature/Authors, Caraka." P.V. Sharma (ed.) *History of Medicine in India*. New Delhi, pp.177-195.

- 1992b. “Medical Literature/Authors, Other Compendia of Bhela, Kāśyapa and Hārīta.” P.V. Sharma (ed.) *History of Medicine in India*. New Delhi, pp.223-227.
- Sharma, Ram Karan & Dash, Bhagwan. 1983-1988. *Agniveśa's Caraka saṃhitā*. Text with English Translation & Critical Exposition based on Cakrapāṇidatta's Āyurveda Dipikā. Varanasi.
- Singh, R.S.. 1977. “Introduction.” *Bhela saṃhitā*, edited by V.S.Venkatasubramania Sastri & C.Raja Rajeswara Sarma. New Delhi. pp.i-xiv.
- Singh, Thakur Balwant & Chuneekar, K.C.. 1972. *Glossary of Vegetable Drugs in Bṛhatrayā*. Varanasi.
- Srikantha Murthy, K.R.. 1991-1995. *Vāgbhaṭa's Aṣṭāṅga Hṛdayam*. Text, English translation, Notes, Appendix and Indices. Vol.I-III. Krishnadas Ayurveda Series 27. Varanasi.
- 1995-1997. *Aṣṭāṅga Samgraha of Vāgbhaṭa*. Text, English translation, Notes, twelve Appendix and Indices etc.. Jaikrishnadas Ayurveda Series 79. Varanasi.
- Suneson, Carl. 1991. “Remarks on some interrelated terms in the ancient indian embryology.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 35. pp.109-121.
- Takakusu, J. 1896. *I-Tsing, A record of the Buddhist religion as practised in India and the Malay archipelago (A.D.671-695)*. Oxford.
- Tewari, P.V.. 1997. *Introduction to Kāśyapa-Saṃhitā*. Haridas Ayurveda Series 5. Varanasi.
- Vogel, Claus. 1965. *Vāgbhaṭa's Aṣṭāṅgaḥṛdayasaṃhitā*. The first five chapters of its Tibetan version. edited and rendered into English along with the original Sanskrit by Claus Vogel. *Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes* XXXVII,2. Wiesbaden.
- Windisch, E.. 1908. *Buddha's Geburt und Die Lehre von Der Seelenwanderung*. Leipzig.
- Wujastyk, Dominik. 1985. “Ravigupta and Vāgbhaṭa.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies University of London* XLVIII Part 1. pp.75-77.
- Yamashita, Tsutomu. 1997. “Towards a Critical Edition of the *Bhelasamhitā*.” *Journal of the European Āyurvedic Society* Vol.5. pp.19-24.
- Zysk, Kenneth G.. 1986. “The evolution of anatomical knowledge in ancient India, with special reference to cross-cultural influences.” *Journal of the American Oriental Society* 106.4. pp.687-705.
- 1991. “Aṣṭāṅgasamgraha, Kalpasthāna I: translation and notes.” Panels of the VIIth World Sanskrit Conference Vol.VIII. G.Jan Meulenbeld (ed.) *Medical literature from India, Sri Lanka and Tibet*. pp.113-136.

- 1993. “Aṣṭāṅgasamgraha, Kalpasthāna II: Translation and Notes.” *Journal of the European Āyurvedic Society* Vol.3. pp.319-351.
- 1995. “Aṣṭāṅgasamgraha, Kalpasthāna III: Translation and Notes.” *Journal of the European Āyurvedic Society* Vol.4. pp.26-54.
- 1997. “Aṣṭāṅgasamgraha, Kalpasthāna IV: Translation and Notes.” *Journal of the European Āyurvedic Society* Vol.5. pp.25-45.
- 安達俊英 1992. 「Vaiśeṣikasūtra 5.2.19 と Carakasamhitā —身体を経巡り輪廻するアートマン—」『印度學佛教學研究』第40巻第2号 pp.91-94.
- 今西順吉 1971. 「『チャラカ本集』の哲学思想(一)」『北海道大学文学部紀要第19巻 pp.3-22.
- 大地原誠玄 1971. 『古典インド医学綱要書スシュルタ本集』臨川書店(複製版 臨川書店,1979; たにぐち書店, 1993)
- 大地原誠玄(訳) 矢野道雄 & 山下勤(編) 1994. 『スシュルタ本集 索引』たにぐち書店
- 金倉圓照 1971. 『インドの自然哲学』平樂寺書店
- 1978. 「チャラカ医典の数論説 —Caraka-Saṃhitā 4,1 の和訳と解題—」『鈴木学術財団研究年報』15 pp.1-15.
- 刈米達夫 & 木村康一(監修) 1991. 『廣川 薬用植物大事典』廣川書店
- 上村勝彦 1992. 『バガヴァッド・ギーター』岩波書店
- 高木諄元 1991. 『古典ヨーガ大系の研究』法藏館
- 田崎國彦 1997. 「〈あるがまま〉を吟味する —原始仏教における yathābhūtaṃ の語義と用法に関する仮説—」『印度學佛教學研究』第45巻第2号 pp.101-105.
- 中村了昭 1982. 『サーンキヤ哲学の研究 インドの二元論』大東出版社
- 服部正明 1979. 「古典サーンキヤ体系概説 サーンキヤ・カーリカー」長尾雅人編『世界の名著 1 パラモン教典 原始仏典』中央公論社 pp.190-208.
- 原実 1974. 『大乘仏典 13 ブッダ・チャリタ』中央公論社
- 1977. 「生苦」『玉城康四郎博士還暦記念論集』pp.667-683.
- 1987. 「Garbha 研究」『高崎直道博士還暦記念論集、インド学仏教学論集』春秋社 pp.816-802.
- 村上真完 1987. 「サーンキヤ・ヨーガ学派の人間観」前田専学編『東洋における人間観』東京大学出版会 pp.123-146.

室屋安孝 1993. 『Carakasamhitā 4.1 の研究史及び和訳 ―その哲学的背景を中心として―』（京都大学文学部卒業論文）

矢野道雄 1988. 『インド医学概論』 朝日出版社

渡瀬信之 1991. 『サンスクリット原典全訳 マヌ法典』 中央公論社